(財) 八尾市文化財調査研究会報告80

久宝寺寺内町遺跡

第1次調査

－「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書－

２００４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

正　誤　表　　財団法人八尾市文化財調査研究会報告８０

頁	行	誤	正
凡例	4	10,000分の1	2,500分の1
凡例	9	…日本色彩研究所票監修	…日本色彩研究所色票監修
図版目次左頁	右列15	図版三四	図版三五
	右列19	図版三五	図版三六
	右列21	図版三四　金属製品・銭貨	図版三三の下段へ
1	13	享保八年(1773)	享保八年(1723)
10	3	～同十四年(1541～46)	～同十四年(1540～45)
10	9	享保八年(1773)	享保八年(1723)
18	9、21、35	「瓦磚」	「瓦□」
18	29	17世紀後半	18世紀後半
23	表1　25段目	ＳＫ2101	ＳＫ2102
23	37	17世紀前半頃	17世紀前半～中頃
24	12～13	17世紀後半頃	17世紀前半
31		表２　第１面　ＳＰ一覧表	表２　第１面　柱穴(ＳＰ)一覧表
33		第15図　第２面(室町時代末)	第15図　第２面(室町時代末期)
34		表３　第２面　ＳＰ一覧表	表３　第２面　柱穴(ＳＰ)一覧表
53	29	ＳＫ1132(67・69)	ＳＫ1132(67～69)
74		第43図　ＳＫ3120(147～251)	第43図　ＳＫ3120(247～251)
82	19	341	341
92		第54図　江戸時代の軒丸瓦Ⅰ	(※表下記参照)
93		第56図　江戸時代の軒丸瓦	第56図　江戸時代の軒平瓦
101		第63図　石製品Ⅱ	第63図　石製品実測図Ⅱ
図版	二八	…／室町時代の	…／室町時代末期の
図版	二九、三〇	室町時代の…	室町時代末期の…

※　92頁　第54図　江戸時代の軒丸瓦Ⅰ
↓
第55図　江戸時代の軒丸瓦Ⅱ(第１区第４層－434、第１区第５層－435、第２区第２～３層－436、第２区第４層－437、第２区第４層－438、第２区第５層－439、第２区第５層－440)

久宝寺寺内町遺跡

第1次調査

－「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書－

２００４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

序　　文

八尾市は大阪府の中央部東寄りに位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた河内平野部に立地します。この河内平野は、かつての旧大和川によって形成された肥沃な土壌を有する土地です。

この地に人々が住むようになるのは縄文時代以降で、現在我々が住んでいる地下には、先人達が残した遺跡、すなわち貴重な文化遺産が数多く眠っています。しかし、このようなかけがえのない文化遺産が、時として都市開発により破壊・消滅していく運命にあるのも事実です。そこで私たち研究会は、失われゆく遺跡の実態を後世永く語り継がれていくことを願い、「発掘調査」を実施、記録保存に努めることが責務であると考えています。

久宝寺寺内町は、15世紀中頃に浄土真宗本願寺第八世宗主蓮如上人が河内久宝寺村に布教に訪れた後、寺院を中心として周囲に環濠や土居を巡らし建設された自治都市であったと伝えられています。今回の調査は、「八尾市まちなみセンター」建設工事に先立って実施された本遺跡では初の本格的な発掘調査です。調査の結果、江戸時代の遺構面よりさらに下層から、室町時代末頃にあたる寺内町形成期のものと見られる建物跡や庭園、排水施設などの遺構が見つかりました。これらの遺構は、絵図や現在の町割りと様相が異なるもので、寺内町の形成を究明する上でたいへん貴重な成果と言えます。

本書が学術研究および文化財保護啓発の一助として、広く活用されることを願います。なお、調査に際し多大な御理解と御援助を賜りました八尾市都市整備部をはじめ多くの関係諸機関および地元の皆様に深く感謝の意を表します。

平成16年10月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　**岩　崎　健　二**

原色図版一　調査地・地層断面

顕証寺（右上）と調査地（北から）

第１区／北西部北壁

原色図版二　出土土器　陶磁器・瓦類

江戸時代の土器・陶磁器

室町時代の土器・陶磁器・瓦類

八尾市
埋蔵文化財分布図

－平成13年度版－

久宝寺内町遺跡

今回の調査地

凡　例

- 周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適用を受ける区域
- 史跡指定地であって、文化財保護法80条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
- 古墳・周溝墓
- 既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

0　100　500　1000m

例　　言

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が、平成10年度に大阪府八尾市久宝寺３丁目269－１他４筆で行った「八尾市まちなみセンター」建設に伴う発掘調査の報告書である。
1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第43号　平成10年４月22日）に基づき、八尾市都市整備部から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成10年11月26日～平成11年２月20日（実働51日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約460㎡を測る。現地調査には、飯塚直世、加茂靖通、辻野優子、西岡千恵子、松本貴匡、横山妙子の参加を得た。
1．整理業務は、平成12年４月１日～平成15年12月20日にかけて実施した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子、岩沢玲子、岩本順子、垣内洋平、川村一吉、北原清子、澤村妙子、永井律子、中村百合、宮崎寛子、村井俊子、村田知子、山内千恵子、図面トレース・図面レイアウト－岡田が行った。
1．本書の執筆・遺物撮影および編集は岡田が行った。
1．銭貨類の銭種鑑定については、嶋谷和彦氏（堺市立埋蔵文化財センター）に御依頼した。
1．第１区北東部北壁面の「地層断面剥ぎ取り転写」作業は、株式会社近畿ウレタン工事に委託した。なお、これについては現在「八尾市まちなみセンター」内に設置し、展示公開している。
1．現地調査および整理業務にあたっては関西近世考古学研究会、土器談話会をはじめ、次の各位より有益なご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表する（順不同、敬称略）。
佐久間貴士（大阪樟蔭女子大学）、金井年（大阪産業大学）、川口宏海（大手前大学）、前川要（中央大学）、仁木宏（大阪市立大学）、難波洋三（京都国立博物館）、大澤研一（大阪歴史博物館）、藤田実（大阪市史編纂所）、乗岡実（岡山市教育委員会）、村上泰樹（兵庫県教育委員会）、稲原昭嘉（明石市立文化博物館）、勝田邦夫・福永信雄（東大阪市教育委員会）、森村健一・嶋谷和彦（堺市立埋蔵文化財センター）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、本多元成（岩出町教育委員会）、前川浩一（貝塚市教育委員会）、細川佳子・渡邉晴香（伊丹市教育委員会）、北條ゆうこ（小田原市教育委員会）、田中一廣（国際航業（株）文化財事業部）、松尾信裕・積山洋（（財）大阪市文化財協会）、金村浩一（（財）東大阪市文化財協会）、下村節子（（財）枚方市文化財研究調査会）、日下正剛（鳴門市立鳴門工業高等学校）、小谷利明（八尾市立歴史民俗資料館）、赤松和佳（大手前大学大学院）
1．発掘調査で得られた出土遺物は八尾市教育委員会、図面・写真（カラースライド含む）資料は当研究会がそれぞれ保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の10,000分の１（平成８年７月編纂・発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）、方位は座標北（国土座標第Ⅵ系）を示している。

1．土色については、『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修を使用した。

1．遺構は下記の略号で示した。
　建物跡－ＳＢ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　柱穴・礎石抜取り穴－ＳＰ
　落ち込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ

1．遺構図面の縮尺は1/20・1/25・1/40・1/50・1/200、遺物図面の縮尺は1/1・1/2・1/4・1/6・1/8である。

1．遺物実測図の断面の表示については、土師器・瓦質土器・瓦器椀・陶磁器・瓦―白、木製品・土製品・石製品・金属製品―斜線とした。

1．遺物の年代と器種分類については主に下記の文献に拠ったが、下記以外の文献に依拠したものについては註ともに各節末に明記した。また、第６節末では遺物本文中の用語について解説を記述した。

【平安～室町時代の土師器・瓦質土器・瓦器椀】
- 中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』
- 財団法人　東大阪市文化財協会1983.3『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺物編』

【輸入陶磁器・国産陶磁器】
- 財団法人　大阪市文化財協会　1992『難波宮址の研究　第九』
- 九州近世陶磁学会　2000.2『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』

本　文　目　次

序文
八尾市埋蔵文化財分布図
例言
凡例
第Ⅰ章　調査に至る経過と方法……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　調査の方法……3
第Ⅱ章　地理・歴史的環境……4
　第１節　遺跡周辺における地理的・歴史的環境……4
　第２節　史料からみた歴史的環境……8
第Ⅲ章　調査の結果……14
　第１節　調査の概要……14
　第２節　層序……15
　第３節　第１面　江戸時代の遺構……18
　第４節　第２面　室町時代末期の遺構……32
　第５節　第１区の下層調査と「背割り排水溝」の確認調査……44
　　１）第１区の下層調査……44
　　２）「背割り排水溝」の確認調査……45
　第６節　遺物……46
　　１）土器・陶磁器（江戸時代）……46
　　２）土器・陶磁器（室町時代末期）……82
　　３）瓦類……89
　　４）金属製品……96
　　５）石製品……97
　　６）ミニチュア土製品……101
　　７）その他の遺物……102
　　【用語解説と参考文献および註記】……105
第Ⅳ章　まとめ……108

あとがき
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　久宝寺村屋敷惣絵図……1
第２図　調査地位置図……1
第３図　調査区地区割り図……3
第４図　近隣における既往の調査地と周辺遺跡の分布図……4
第５図　Ａ－久宝寺屋敷惣絵図とＢ－新検分間正絵図……10
第６図　地層断面模式図……17
第７図　第１面(江戸時代)遺構平面図……19
第８図　ＳＥ1104　平・断面図……20
第９図　ＳＥ3102　平・断面図……22
第10図　ＳＫ1116　平・断面図……24
第11図　ＳＫ3101　平・断面図……25
第12図　ＳＫ3113　平・断面図……26
第13図　ＳＫ3107・ＳＤ3101　部分平・断面図……28
第14図　埋め甕2101～2106　平・断面図……30
第15図　第２面(室町時代末期)遺構平面図……33
第16図　ＳＢ1201(礎石建物)・ＳＢ1202(掘立柱建物)　平・断面図……35
第17図　集石遺構1201　平・断面図……36
第18図　池状遺構2201　平・断面図……37
第19図　木樋3201　平・断面図……38
第20図　石組み溝3201　平・断面図……39
第21図　ＳＤ1202　平・断面図……42
第22図　瓦溜め1201　平・断面図……43
第23図　第１区下層　東壁断面図および畦畔(部分)断面図……44
第24図　高田家絵図による水路網図と調査地……45
第25図　「背割り排水溝」確認調査　西グリット西壁断面図……45
第26図　ＳＥ1102・ＳＥ1103・ＳＥ1105～ＳＥ1107出土遺物実測図……47
第27図　ＳＥ1108・ＳＫ1101・ＳＫ1102・ＳＫ1105出土遺物実測図……48
第28図　ＳＫ1109～ＳＫ1111・ＳＫ1115・ＳＫ1116出土遺物実測図……50
第29図　ＳＫ1117～ＳＫ1119・ＳＫ1123～ＳＫ1126出土遺物実測図……52
第30図　ＳＫ1129・ＳＫ1131・ＳＫ1132・ＳＤ1101・ＳＤ1102出土遺物実測図……55
第31図　ＳＤ1103・ＳＯ1101・ＳＫ2101～ＳＫ2104出土遺物実測図……56
第32図　埋め甕2101・2102出土遺物実測図……58
第33図　埋め甕2103・2104出土遺物実測図……59
第34図　埋め甕2105・2106出土遺物実測図……60
第35図　ＳＥ3101出土遺物実測図……62
第36図　ＳＥ3102出土遺物実測図……63

第37図　ＳＫ3101出土遺物実測図……64
第38図　ＳＫ3102～ＳＫ3105出土遺物実測図……66
第39図　ＳＫ3106・ＳＫ3107出土遺物実測図……67
第40図　ＳＫ3108～ＳＫ3112出土遺物実測図……69
第41図　ＳＫ3113～ＳＫ3117出土遺物実測図……71
第42図　ＳＫ3118・ＳＫ3119出土遺物実測図……73
第43図　ＳＫ3120・埋め桶3101・ＳＤ3101・ＳＤ3102出土遺物実測図……74
第44図　第１層出土遺物実測図……76
第45図　第２・３層出土遺物実測図……77
第46図　第４層出土遺物実測図Ⅰ……79
第47図　第４層出土遺物実測図Ⅱ……81
第48図　第５層出土遺物実測図……82
第49図　ＳＫ1201・ＳＫ1203・ＳＫ1208・ＳＫ1215・瓦溜め1201出土遺物実測図……83
第50図　ＳＤ1201・ＳＤ1202・集石遺構1201出土遺物実測図……84
第51図　ＳＫ2201・ＳＤ2201出土遺物実測図……85
第52図　木樋3201・杭列3201・石列3201・石組み溝3202出土遺物実測図……86
第53図　第７層・第８層出土遺物実測図……88
第54図　江戸時代の軒丸瓦実測図Ⅰ……91
第55図　江戸時代の軒丸瓦実測図Ⅱ……92
第56図　江戸時代の軒平瓦実測図……93
第57図　室町時代以前の軒丸瓦実測図……93
第58図　室町時代以前の軒平瓦実測図……94
第59図　室町時代以前の平瓦実測図……95
第60図　金属製品実測図……96
第61図　出土銭貨拓影……98
第62図　石製品実測図Ⅰ……99
第63図　石製品実測図Ⅱ……101
第64図　ミニチュア土製品実測図……103
第65図　その他の出土遺物実測図……104

写　真　目　次

写真１　調査風景……2
写真２　現地説明会風景……2
写真３　第１区　下層調査風景……3
写真４　跡部遺跡第５次　銅鐸出土状況……5
写真５　八尾寺内町／江戸時代初頭の町屋遺構……7
写真６　瓦溜め1201検出状況……43

表　目　次

表１　第１面　土坑（ＳＫ）一覧表……23
表２　第１面　柱穴（ＳＰ）一覧表……31
表３　第２面　柱穴（ＳＰ）一覧表……34
表４　ＳＢ1201　柱穴一覧表……35
表５　ＳＢ1202　柱穴一覧表……36
表６　江戸時代の軒丸瓦　法量一覧表……92
表７　江戸時代の軒平瓦　法量一覧表……93
表８　室町時代以前の軒丸瓦　法量一覧表……94
表９　室町時代以前の軒平瓦　法量一覧表……94
表10　出土銭貨　一覧表……97
表11　硯　一覧表……100
表12　砥石　一覧表……100
表13　ミニチュア土製品　一覧表……101・102

原色図版目次

図版一　調査地・地層断面
図版二　出土土器　陶磁器・瓦類

図　版　目　次

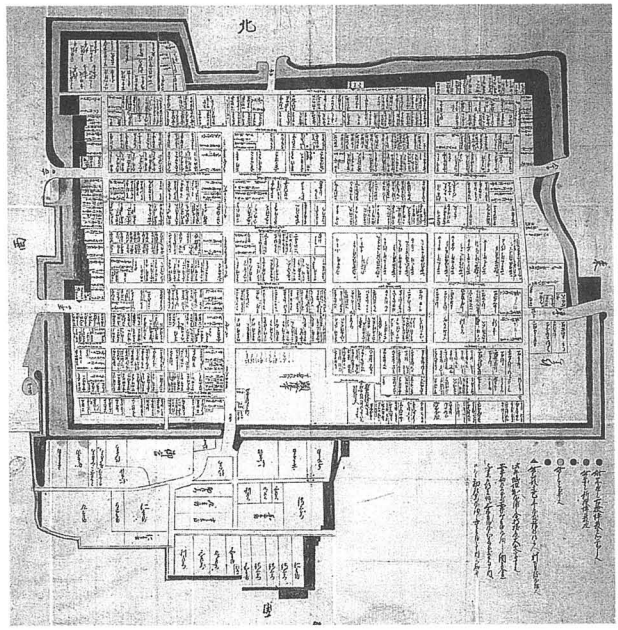
図版一　第１区　第１面（江戸時代）遺構面全景
図版二　第１区　第１面（江戸時代）検出遺構
図版三　第２区　第１面（江戸時代）遺構面全景
図版四　第３区　第１面（江戸時代）遺構面全景・検出遺構
図版五　第３区　第１面（江戸時代）検出遺構
図版六　第１区　第２面（室町時代末期）遺構面全景
図版七　第１区　第２面（室町時代末期）検出遺構
図版八　第１区　第２面（室町時代末期）検出遺構
図版九　第２区　第２面（室町時代末期）遺構面全景・検出遺構
図版一〇　第３区　第２面（室町時代末期）北部遺構面遺構検出状況
図版一一　第３区　第２面（室町時代末期）検出遺構
図版一二　第１区　下層調査
図版一三　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＥ1101・1103・1105・1107・1108、
ＳＫ1101・1102
図版一四　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ1102・1105・1109・1110・1111・

1115～ＳＫ1118
図版一五　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ1119・1123～ＳＫ1126・1129・1131・1132
図版一六　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ1132、ＳＤ1101～ＳＤ1103、ＳＯ1101、ＳＫ2101～ＳＫ2104
図版一七　江戸時代の土器・陶磁器
埋め甕2101～埋め甕2106、ＳＥ3101
図版一八　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＥ3101
図版一九　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＥ3101・3102、ＳＫ3101～ＳＫ3103
図版二〇　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ3104～ＳＫ3107
図版二一　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ3107～ＳＫ3112
図版二二　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ3112～ＳＫ3115
図版二三　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ3116～ＳＫ3119
図版二四　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＫ3119・3120、埋め桶3101、ＳＤ3101・3102
図版二五　江戸時代の土器・陶磁器
ＳＤ3102、第１～３層
図版二六　江戸時代の土器・陶磁器
第２～４層
図版二七　江戸時代の土器・陶磁器
第４層
図版二八　江戸時代の土器・陶磁器
第４・５層
室町時代末期の土器・陶磁器
ＳＫ1201・1203・1208・1215
図版二九　室町時代末期の土器・陶磁器
ＳＤ1202、集石遺構1201、ＳＫ2201、木樋3201、杭列3201、石列3202、石組み溝3201
図版三〇　室町時代末期の土器・陶磁器
石組み溝3201、第７・８層
図版三一　軒丸瓦
ＳＥ1108、ＳＫ1114・1116・1117・1129、ＳＯ1101、ＳＫ3101・3103・3105・3107・3112・3117、第１区／第４層
図版三二　軒丸瓦
第１区／第５層、第２区／第２～５層、第３区／第５層、集石遺構1201、ＳＤ1201、石組み溝3201、第３区／第８層
図版三三　軒平瓦・平瓦
ＳＫ3107・3108・3112、ＳＯ1101、第２区／第５層、ＳＫ1209、瓦溜め1201
第３区／第６～８層
図版三四　硯・砥石
ＳＥ1105・3101・3102、ＳＫ3110・3112・3114・3115～ＳＫ3117、ＳＯ1103
第２区／第２・３・５層
図版三五　石臼・石塔
ＳＤ1202、ＳＫ3107
図版三四　金属製品・銭貨
ＳＥ1102・1103・3101、
ＳＫ1101・1116・3102・3104・3110、集石遺構1201、第２区／第４・５層
図版三七　ミニチュア土製品
ＳＥ1106、ＳＫ1127・3101・3106・3110・3113、ＳＤ1101、埋め桶3101、埋め甕3101、第１区／第２・３・５層
第３区／第４層
図版三八　ミニチュア土製品・その他
ＳＤ1101、ＳＫ3107・3117、第１区／第５層、第３区／第２・３層

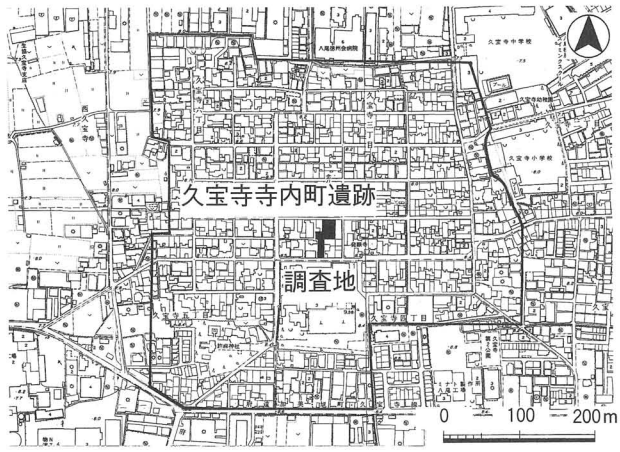
第Ⅰ章　調査に至る経過と方法

第１節　調査の経緯と経過

久宝寺寺内町は畿内の寺内町のなかでも創立期が早く、天文十年(1541)頃には『久宝寺御坊顕証寺』を中核として町づくりが成され、江戸時代はじめ頃まで繁栄していたと伝わる。形成当初の町割りについては不明であるが、江戸時代当時の寺内町を描いた絵図が二葉現存している。一葉は元禄年間頃とされる『久宝寺村屋敷惣絵図』(第１図)、もう一葉は大和川付け替え後の享保八年(1773)に作成された『久宝寺村屋敷新検分間正絵図』である。その絵図と現在の久宝寺寺内町の町割りとを照合させると、ほぼ重なり合致していることがわかる。すなわち、江戸時代からの町割りがそのまま残されているということである。また、現在の久宝寺寺内町には道路や街区のみならず、江戸時代の町屋様式を伝える商家や旧街道の里程を示す道標、そして地蔵堂が点在している。



第１図　久宝寺村屋敷惣絵図(個人蔵)



第２図　調査地位置図(Ｓ＝1/10000)

八尾市はこのような江戸時代の名残を留める歴史的環境の保全・整備という課題をかかえ、平成２年度から整備構想の策定に着手してきた。その具現化の一つとして八尾市都市整備部まちづくり推進室(以下、都市整備部)は、市民まちづくり活動の支援等および久宝寺寺内町の情報を発信するとともに、活動・交流の拠点を基本理念とした「八尾市まちなみセンター」の建設計画を打ち出した。その建設予定地となったのが、現在の「久宝寺御坊顕証寺」の北側にあたる久宝寺寺内町のほぼ中央に位置する地点である(第２図)。平成９年度にこの「まちなみセンター」建設の旨を受けた八尾市教育委員会文化財課(以下、市教委)は、建設予定地が埋蔵文化財包蔵地(久宝寺寺内町遺跡)範囲内であり、周辺における既往の遺構確認調査から埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、遺構確認調査が必要であることを都市整備部へ通告した。

都市整備部と市教委との２者間の協議の結果、平成９年６月２日、遺構確認調査として建設予定地内に約３ｍ×３ｍの調査区１箇所を設定(本調査の第２区東隣にあたる)し、人力と重機を併用して現地表下３ｍ前後までの掘削が実施された。調査の結果、近世の遺構面３面とその下層に

写真１　調査風景（第１区／北から）

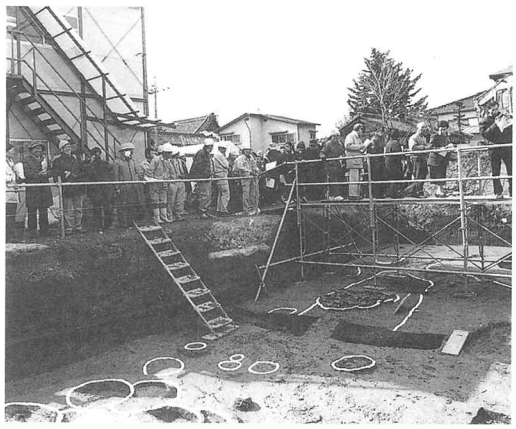


写真２　現地説明会風景（北東から）

古墳時代の遺物包含層が確認された。この調査結果をもとに市教委は建設対象となる部分において発掘調査を実施する必要があると判断し、都市整備部への協力を要請した。その後、２者間で協議された結果、建設工事部分の発掘調査を実施することで合意し、（財）八尾市文化財調査研究会に発掘調査が依頼されることとなった。そして３者間で協議が行われ、契約締結を経て平成10年11月26日に発掘調査を開始する運びとなった。今回の発掘調査は、久宝寺寺内町遺跡内ではじめて実施された本格的な発掘調査となる。

調査開始から11日目となった平成10年12月11日に、第３区において第１面にあたる江戸時代の遺構面の撮影と図面作成が終了した。そして埋め戻し前に調査区の南北に約１ｍ四方の調査区を設け、部分的な下層確認調査を実施した。その結果、江戸時代の遺構面の下層に室町時代末期に比定される遺物を含む層厚0.2ｍ前後の焼土層の存在を確認した。そこで、調査区を面的に広げて焼土層の状況を確認したところ、調査区全域に及んでいることが判明した。本焼土層について勘案した結果、包含される遺物の年代と「安井家文書」の史料から、天正五年（1577年）の「石山合戦」に伴うものであることが推測された（註１）。そこで都市整備部、市教委、当研究会の３者で緊急協議を行った結果、調査期間内に終了することを前提条件とし、第２面にあたる焼土層以下の平面的な調査を実施することで合意した。なお、第１区と第２区については全面調査、第３区については建物基礎部分にあたる箇所のみの部分調査となった。また、第２区と第３区については第２面の調査終了後、真砂土で埋め戻して遺構保存を行った。第２区と第３区は平成10年12月24日に２面の調査が終了し、翌年の平成11年１月11日から第１区の調査を開始した（写真１）。２月17日、「八尾市まちなみセンター」内に展示するための「地層断面剥ぎ取り」作業を第１区北東部の北壁の一部で実施した。第１区の調査は２月19日に終了し、翌２月20日の部分確認（背割り排水溝）調査をもってすべての現地作業を完了した。

今回の調査での最大の成果は、天正五年（1577年）の「石山合戦」に伴うと推定される焼土層と合戦前後の２時期の遺構面を検出したことである。この成果について平成11年２月９日に記者発表を行い、翌週の14日に地元住民および一般市民を対象とした現地説明会を開催した（写真２）。当日の見学者数は438名を数え、市民の久宝寺寺内町遺跡への関心の高さが窺えた。

（註１）

２月４日、第１区の第２面調査時に前川要氏（中央大学）が現場視察され、史料『安井家文書』の記載年代と本焼土層に含まれる遺物の年代が、並行関係にあるとのご教示を賜った。因みに焼土層内遺物は、「若江城」（東大阪市）の廃絶（1580年）に伴う堀内一括遺物と対応する。

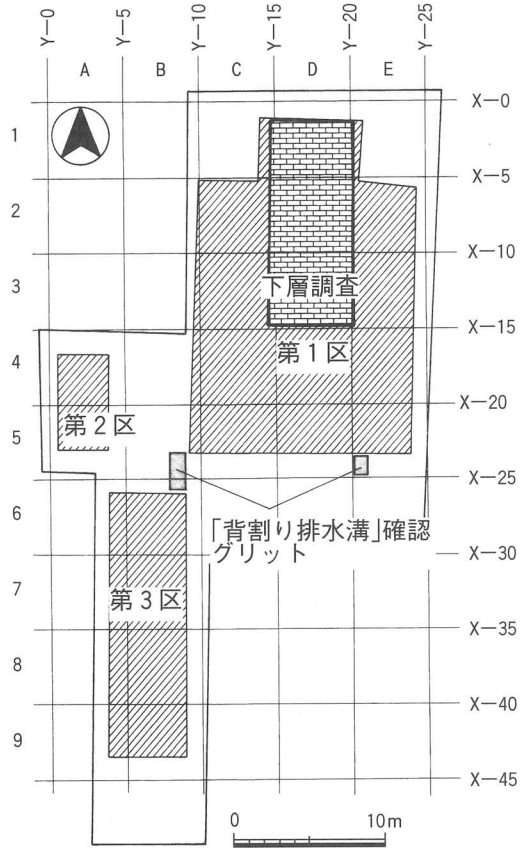
第２節　調査の方法

調査区は「八尾市まちなみセンター」建築工事部分にあたる３箇所で、北から第１～３区と呼称した。調査総面積は約460㎡を測る。調査は、掘削残土処理の関係から第３区→第２区→第１区の順で行った。掘削は各調査区ともに市教委が実施した遺構確認調査成果をもとに、現地盤（T.P.＋9.1m前後）から0.3m前後を測る現代の工場建設に伴う整地層および撹乱部分を重機により掘削除去し、次に建設工事対象となる深度１m前後までの地層を人力のみで掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

第１区については、第２面の調査終了後に中央北寄りにおいて地下構造（防火水槽）設営工事に伴う下層調査を実施した（写真３）。調査規模は南北13.5m×東西5.5mの面積約74㎡で、掘削深度は第２面から約2.5m（T.P.＋5.4m前後）までを測る。掘削方法は、重機と人力を併用し、地層および遺構・遺物の確認を行いながら工事予定深度まで実施した。

調査区の地区割りは、調査地内の北西部に任意の基準点を設定し、それを起点として南北45m×東西25mの調査地範囲を５×５mの区画で分割した。各地区の表示については、南北を数字（１～９）、東西をアルファベット（A～E）とし、本文中の遺構検出地点を１A区～９E区と呼称した（第３図）。

遺構番号については、遺構略号（ＳＥ・ＳＫ…）の次に、地区番号（第１～３区）・調査面数（第１・２面）・地区毎に通し番号（２桁）の順に４桁の数字で示した。例えば、第１区第１面で検出した井戸の場合はＳＥ1101、第２区第２面で検出した土坑の場合はＳＫ2201となる。



第３図　調査区地区割り図（Ｓ＝1/500）

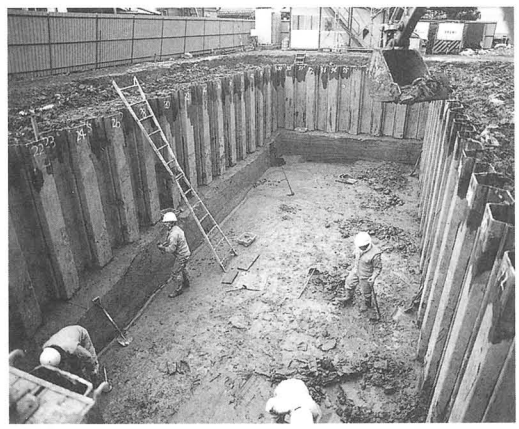


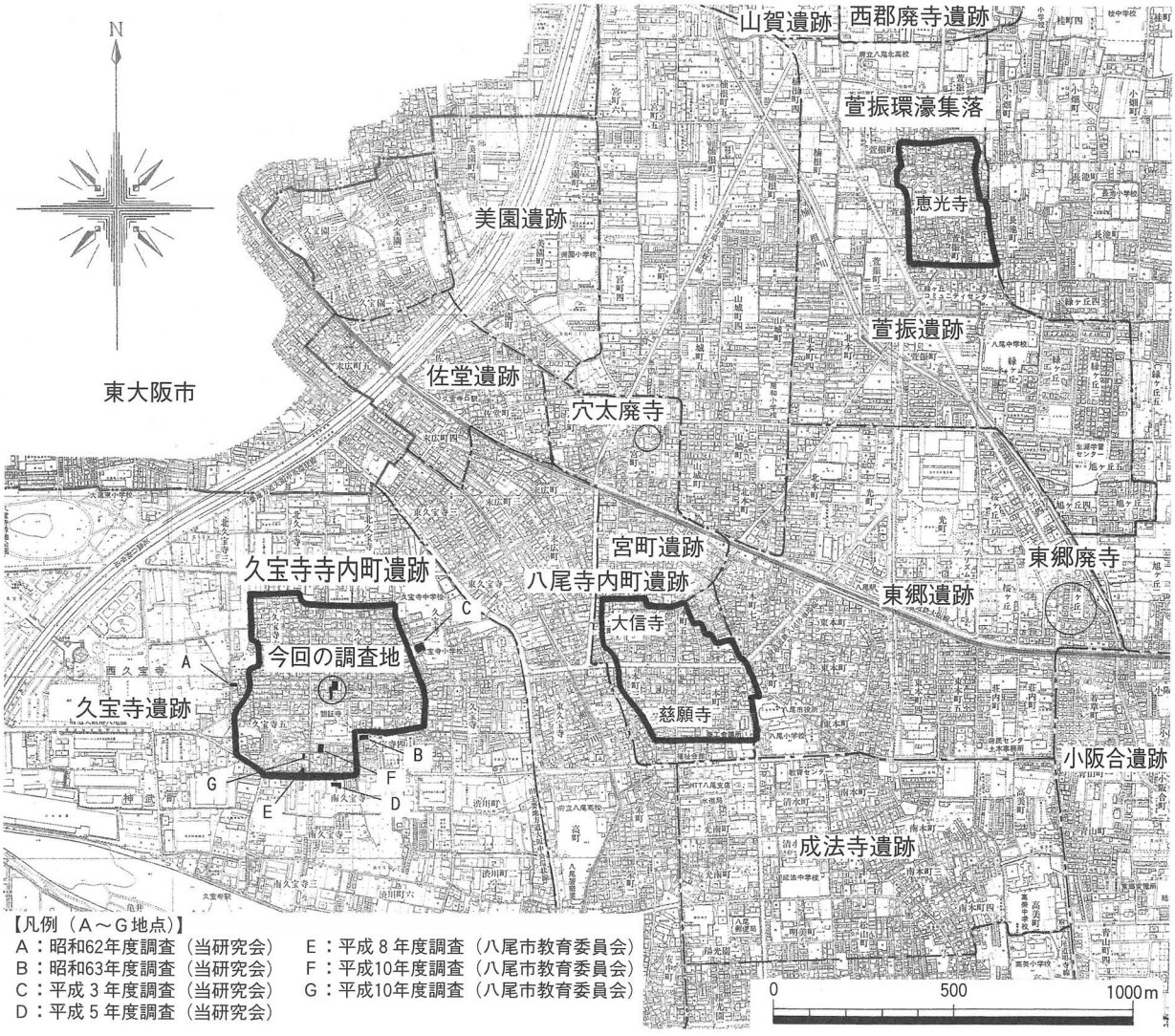
写真３　第１区　下層調査風景（北から）

また、調査終了後は、絵図に見られる「背割り排水溝」の構築時期を解明する目的から、都市整備部・市教委・当研究会との３者協議の後、第１区と第３区間に２m×１mほどのグリットを２箇所設定し、確認調査を行った。掘削方法は第１～３区と同様に現代の盛土・撹乱部分を重機で除去した後、第２面にあたる深度（木樋3201の上面）までを人力により掘削した。

第Ⅱ章　地理・歴史的環境

第１節　遺跡周辺における地理的・歴史的環境

久宝寺寺内町遺跡は、八尾市と東大阪市の一部にまたがる南北1.6㎞、東西1.7㎞の範囲を測る久宝寺遺跡内に位置し、地理的には旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積低地に立地する。本遺跡は、昭和10年(1935)に式内社「許麻神社」の裏にあたる小字「西口」・「栗林」で行われた道路工事において、弥生土器や古墳時代の土師器および須恵器、さらに丸木舟の残片が見つかったことにより、認識されるようになった。その後、昭和48年(1973)から翌年にかけて実施された近畿自動車道建設予定地内における試掘調査により、久宝寺遺跡はもとより、周辺の美園遺跡・佐堂遺跡・亀井遺跡が、弥生時代～中世にかけての複合遺跡であることが判明した。この結果をもとに、近畿自動車道建設工事に先立って昭和55年(1980)～昭和61年(1986)にかけて、(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)により、本格的な発掘調査が実施された。以後も、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、市教委、当研究会によって多数の調査が実施



【凡例（A～G地点）】
A：昭和62年度調査（当研究会）　E：平成８年度調査（八尾市教育委員会）
B：昭和63年度調査（当研究会）　F：平成10年度調査（八尾市教育委員会）
C：平成３年度調査（当研究会）　G：平成10年度調査（八尾市教育委員会）
D：平成５年度調査（当研究会）

第４図　近隣における既往の調査地と周辺遺跡の分布図(S＝1/20000)

され、多大な成果が得られている。現在、ＪＲ関西本線(大和路線)久宝寺駅に近接する竜華操車場跡地再開発に伴う発掘調査が、(財)大阪府文化財センターおよび当研究会によって実施されており、その結果、弥生時代～古墳時代にかけての居住域・生産域・墓域を示す遺構・遺物が多数検出されている。以下、久宝寺遺跡と周辺における遺跡の概要について、時代順に概説する。

〔旧石器時代〕

約２万年前の地質年代でいう洪積世の頃、河地平野一帯には陸地が広がっており、海面は現在より約140m低いところにあった。この時期は後期旧石器時代にあたり、当地に人の営みが始まるのはこの頃とされている。考古学的な裏付けとして、羽曳野丘陵の北端部に位置する八尾南遺跡や長原遺跡(大阪市)では、後期旧石器時代の国府型のナイフ型石器や小型のナイフ型石器を伴う石器群や石器製作址が見つかっている。これらの石器群は、近畿地方における旧石器の編年研究の重要な指標となっている。

〔縄文時代〕

前期にあたる約６～７千年前は世界的に温暖期となり、海水面が上昇する「縄文海進」によって河内平野一帯に海水が進入し、「河内湾」が形成される。該期では恩智遺跡で多量の縄文土器やサヌカイト製の石器が検出されている。後期～晩期には、上町台地北部に砂堆が発達して、「河内湾」が淡水化し「河内潟」が形成される。八尾市域では先述の恩智遺跡をはじめ、山賀遺跡・美園遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡で土器が出土している。そのなかで久宝寺遺跡において、晩期最終末の遺物包含層から、「長原式」と呼ばれる土器片に籾の圧痕が認められた。これは当該期にすでに水稲耕作が行われていたことを示唆する。「長原式土器」は、板付遺跡(福岡県)の夜臼式土器の影響を受けて成立したものとされている。

〔弥生時代〕

旧大和川の主流には、前時代にも増して三角州が形成されるようになり、前期では山賀遺跡・美園遺跡・亀井遺跡・田井中遺跡・八尾南遺跡をはじめ遺跡数が増大する。田井中遺跡・山賀遺跡・美園遺跡では、微高地上において掘立柱建物や多数の溝が検出され、河内平野中央部における最古の集落であることが判明した。さらにこれらの遺構の検出は、稲作導入期の動向を知る上で貴重な資料を提供している。亀井遺跡でも前期中頃の居住域が検出されているほか、土器棺・木棺・供献土器を伴なう方形周溝墓が見つかっている。田井中遺跡では、前期後半～中期後半にかけて集落の中心付近であることを示唆する竪穴住居をはじめ多数の遺構･遺物が検出されている。八尾南遺跡では、掘立柱建物群に近接して甕棺墓が検出されているほか、自然河川内で堰(しがらみ)が見つかっている。中期になると水稲耕作を主とした生活基盤が安定し、集落規模が拡大化していく。その顕著なものとして、亀井遺跡では大型の集落や環濠をはじめ、銅鐸片などの青銅器が検出されている。中期末～後期になると、河川の氾濫による流水堆積層から自然環境の悪化が認められる。城山遺跡では中・後期の方形周溝墓、亀井遺跡では後期の水田が

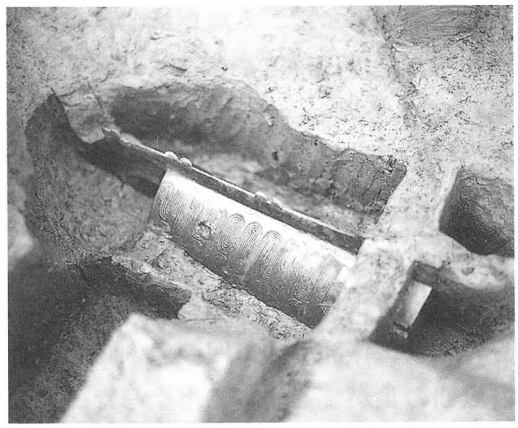


写真４　跡部遺跡第５次　銅鐸出土状況
(平成元年度　当研究会調査)

検出されている。跡部遺跡では、公共下水道工事に伴う調査において、弥生時代中期に比定される流水文銅鐸が埋納されたままの状態で検出された(写真４)。この成果は、全国的にも類例の少ない低湿地内からの出土ということから見ても貴重な発見と言える。また、同遺跡内では当研究会が平成４年度に実施した第７次調査(ＡＴ92－７)で、弥生時代前期～後期の遺物を包含する約１ｍの堆積層を確認しており、当該期が安定した土地条件であったことが窺われる。

〔古墳時代〕

前時代から引き続く河内潟への大小河川による土砂運搬作用によって、前期には河内湖が形成され、山賀遺跡・美園遺跡・亀井遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡(大阪市)で集落の拡大と拡散が顕著となる。久宝寺遺跡では、近畿自動車道建設に伴う調査において、当該期の水運や大陸との交流を究明する上で重要な資料となる「準構造船」の一部が見つかっている。また近年、同遺跡では布留式期古段階(３世紀末)に築造された方墳「久宝寺１号墳」が検出され、さらに、その墳頂部の墓壙内から良好かつ完全なかたちでコウヤマキ製の「割竹形木棺」が見つかった。割竹形木棺が完存する事例は全国的に極めて珍しく、良好な割竹形木棺遺存例として最古例となるものである。中期になると河川の支流において大規模な治水事業が行われるようになる。久宝寺遺跡では、「ほぞ穴」を穿った二俣木を使用した「合掌型」の堰が広範囲にわたって検出されている。これは検出例が少なく、当時の土木技術を究明する上で貴重な成果と言える。さらに同遺跡では、朝鮮半島との交流を示唆する韓式系土器が多数出土している。前期後半頃になると萱振遺跡で一辺約27m、周濠幅約５ｍを測る方墳「萱振１号墳」が見つかっている。この方墳の墳頂部からは高さ1.8mを有する最大級の「朝形埴輪」が出土している。また、同遺跡内では、後期後葉に入って「萱振２号墳」が検出されており、これら平地に形成された古墳は、後述の「高安古墳群」と地形的条件から比較検討する上で貴重な発見といえる。長原遺跡では後期前半で古墳が終焉を迎えるが、生駒山西麓部では後期～終末期になると「高安古墳群」に見る群集墳が形成されるようになる。古墳以外では、城山遺跡で小区画水田、さらに八尾南遺跡・長原遺跡では広範囲にわたって水田が見つかっている。

〔飛鳥時代～奈良時代〕

大陸からの玄関口にあたる河内一帯には、多くの渡来系氏族集団が住むようになり、大陸からの新しい文化をいち早く受け入れた有力氏族たちは、古墳に代わる権力の象徴として寺院を次々と建立していった。八尾市域では、渋川廃寺・西郡廃寺・弓削寺・高麗寺・竜華寺・教興寺跡が点在する。渋川廃寺の調査では、出土例としては希少な瓦葺宮殿・仏殿の大棟に使用される「鴟尾」の破片が見つかっている。近接する久宝寺遺跡においても、当該期の井戸や瓦類をはじめ建築部材が出土している。また、同遺跡では奈良時代の溝内から国内では数少ない三彩陶器小壷の細片が出土している。出土例の多くが宮殿や官衙、寺院などの施設であることから、付近にこれらの施設が存在していることが想定される。東郷遺跡・成法寺遺跡では奈良時代の官衙や城柵などに関係ある地に多く見られる墨書人面土器(甕)が出土している。このうち、成法寺遺跡出土のものには、体部外面に四つの人物顔が描かれている。東郷遺跡では近年、遺跡の南東部において白鳳期の瓦がまとまって出土したことにより、「東郷廃寺」として認知されるようになった。その南方に隣接する小阪合遺跡では、旧河川内から奈良時代～平安時代にかけての皇朝銭、墨書土器、施釉陶器をはじめ多数の遺物が出土している。

〔平安時代〕

八尾市域では、前期～中期にかけての遺構・遺物が希薄であるが、東郷遺跡では初頭頃の掘立柱建物に伴う柱穴が多数検出されたほか、方形の横板組み井戸内から墨書土器を含む多量の土師器・須恵器の杯や甕が出土している。後述する東郷遺跡で見つかった前期の居住域以外は、ほとんどが後期～末期にかけての遺構・遺物であり、開発が盛んとなるのはこの時期から鎌倉時代にかけてとなる。近年では、久宝寺遺跡内に立地する旧国鉄竜華操車場跡地で実施された駅前開発に伴う一連の調査の結果、平安時代前期～鎌倉時代に比定される農耕に関連する灌漑用の井戸や鋤溝群が広範囲にわたって検出された。それらの調査結果から、条里地割りの施工時期が少なくとも平安時代前期まで遡る可能性があることが指摘されている。矢作遺跡では、平安時代後期に比定される居住域が検出された。その遺構のなかで特筆すべきものとして、東西幅３ｍ前後、南北幅12ｍ前後、深さ1.2ｍを測る池状遺構がある。遺構の底面には粘土で床を作り、さらにその上には樹皮が丁寧に貼られているといった特異性をもつ。この状況から絶えず清水を湛えておくことを目的とするものと考えられ、祭祀等に関わりをもつ集団の集落であったことが想定される。

〔中世～近世〕

萱振遺跡では、「河内街道」と「十三嶺道」の分岐点となる鎌倉時代の居住域が確認されている。さらに同遺跡では南北朝の動乱や畠山氏の内乱等の戦禍に対し、防御を目的としたことが想定される集落を囲繞する溝(堀)が見つかっている。竜華寺跡では、室町時代に比定される溝内から、当時の信仰生活を知る上で貴重な「呪符木簡」が出土している。宮町遺跡では、当研究会が平成３年度に実施した第１次調査の結果、室町時代後半に火災を受けた寺院を示唆する多量の瓦集積を検出している。東郷遺跡では、八尾寺内町形成時にあたる江戸時代初頭の屋敷地の区画溝(堀)や環濠の一部が確認されている(写真５)。久宝寺遺跡では、ＪＲ関西線久宝寺駅前再開発に伴う調査によって、広範囲にわたり江戸時代以降の「島畑」・水田・灌漑用井戸といった生産域に関連する遺構が検出されている。宝永元年(1704)の大和川付け替え以後は、川筋の新田開発によって農業生産が安定し、木綿の原料となる綿作りが「島畑」において盛んに行われた。江戸時代後半になると、久宝寺寺内町から八尾寺内町へ「河内木綿」の集産地が移行し、木綿問屋制の八尾組仲間の発展とともに商業の町として栄え、そしてこれが近代八尾の基盤となった。

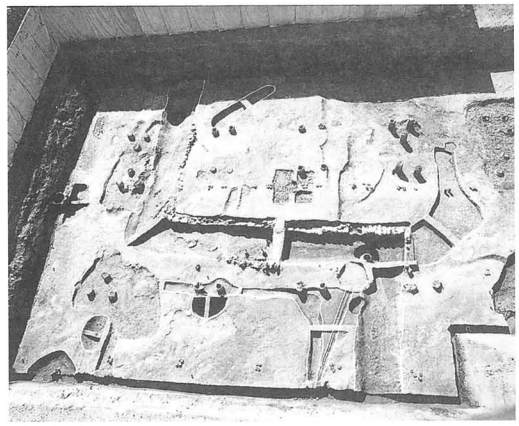


写真５　八尾寺内町／江戸時代初頭の町屋遺構(当研究会　東郷遺跡第37次調査より)

第２節　史料からみた歴史的環境

【立地と環境】

久宝寺寺内町は、旧大和川の主流であった平野川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。当地は旧大和川流域であること、さらに南方には難波と大和を結ぶ八尾街道が東西に伸びていることから、地理的にみて政治・経済を担う要衝の位置にあった。八尾街道は、古く神武天皇大和東征の際の通路であったという伝承から、現在でも別名「神武街道」と称されている。江戸時代の当寺内町の景観について、元禄二年(1764)貝原益軒の『南遊紀行』には「久宝寺村は八尾から五町程あり、その間に河川が流れ久宝寺町は低くて富家が多い。大体河内の国は平広で荒野が無く土地よく肥えて民家は富み豊かである。暖気が早いから草木よく繁り民俗上品で和気あり、田地広い」ということが記されている。また、当遺跡の西方には近年まで「ベントウ山」と呼ばれる弥生時代の土器や古墳時代の土師器・須恵器が出土するところがあって、言い伝えによると少なくとも室町時代以前においては久宝寺墓地であったとされている。

「久宝寺」という地名については、聖徳太子が蘇我氏と共に太子堂の辺りに於て物部守屋を討った時の祈願所としてここに「久宝寺」を創建し、十一面観世音を本尊として堂塔を営んだことに由来するという伝承がある。しかし、この聖徳太子創建というのは後世の創作であり、実際は八尾慈願寺所蔵にかかる文明七年(1475)の蓮如上人の署名書判のあるので有名な親鸞上人絵伝に「河内国渋川郡橘島久宝寺」と記されており、ここにはじめて「久宝寺」の名が登場する。また、当地は古くは巨麻荘と称され、高句麗系の渡来人の居住地であり、当寺内町の南西にあたる街道沿いに、その祖神を祀ったものと伝わる式内社「許麻神社」がある。現在、この神社境内にある手洗いの屋形は、昔の宮寺である久宝寺観音院の鐘楼の名残りであるとし、聖徳太子創建というのは創作であっても「久宝寺」という寺院が存在したことは事実であるとされている。

【久宝寺寺内町形成に至る経緯と変遷】

文明二年(1470)、浄土真宗本願寺第八世蓮如上人は河内布教のために久宝寺に訪れ、「帰するもの市の如し」といわれるほどに多くの帰信者を得た。当時、蓮如上人が訪れた久宝寺には、すでに一向宗の道場として「慈願寺」が存在した。それは、本願寺三世覚如著「拾遺古徳伝」の写本奥書に、「河内国渋川郡久宝寺道場　釈法心之　応永十四年亥丁十一月三日　執筆毛須　生年三十主慈願寺」と記されていることから見てとれる。「慈願寺」の創建は古く、同寺蔵の縁起によると親鸞の弟子であった信願房法心が親鸞と共に上京し、親鸞が没した数年後の弘安三年(1280)に河内久宝寺に道場が建設されたと伝わる。当時の慈願寺の場所については、現在「久宝寺御坊顕証寺」の東方に「慈願寺町」の名が残っていることから知ることができる。蓮如はこの一向宗の道場であった慈願寺の協力を得た後、明応年間に「西証寺」と号する寺院を建立した。蓮如が当地に寺院を建設した理由としては、大和川流域で地理的に要衝の位置を占めており、当寺を中・南河内の一向宗の中心道場として布教の拠点と考えるに至ったことが挙げられる。

蓮如は西証寺の初代住持として、第二十一子の実順を立てた。そして実順についでその子実真が後を継いだが、享禄二年(1529)早世したので近江大津顕正寺の住持蓮淳を迎えて住持とした。天文三年(1534)、「第一次石山戦争」と呼ばれる大坂本願寺と細川氏を中心とした武家勢力の戦闘により八尾・萱振が焼き討ちされる。久宝寺においても、焼き討ちにあった可能性が高く、西証寺が破壊されたことが推測される。翌年の天文四年(1535)に和平が成立し、河内の門徒集団は西証

寺の再建に乗り出し、近江大津の近松山顕証寺の住持である蓮淳を久宝寺に迎えることとなる。そして、同時期に西証寺の寺号を「近松山顕証寺」に改めた。後の天文八年(1539)、蓮淳は子の実順に後を譲って近江に帰ったが、実淳没して嗣子がなかったので傘下十二坊の要請により、天文十一年(1542)、蓮淳は再び久宝寺に帰住することとなった。蓮淳は本願寺十世証如の祖父にあたり、証如の後見役として当時、本願寺第一の有力な指導者であったので、当寺と本願寺は密接な関係にあった。こうした有力者を呼べる力を当時の久宝寺門徒衆は有していた。一方、環濠の築造や町割りの最初の部分が建設されたのは、天文九年末～同十四年(1541～46)の御堂完成までの間と考えられ、堺をはじめ各地の商人をも移住せしめて寺内町を形成した。こうして寺内町の建設が行われている頃、室町幕府から久宝寺に制札が出される。『証如上人日記』の天文十年十二月十五日の条に「久宝寺、西証寺之制札認来候、飯尾上野判形也、」と記されており、久宝寺は諸公事の免除、徳政令適用免除などの寺内特権を獲得する。寺内町は大別すると、本山寺内町と地方寺内町があり、後者は畿内にあって本山と密接な関連をもつ畿内寺内町に分類することができる。久宝寺は盛期寺内町の時代に属し、畿内寺内町の中でその成立が最も古く、大坂本願寺と密接な関係(蓮淳は証如の祖父)を有し、畿内では他の寺内町の成立に大きな影響を与えた可能性がある。

久宝寺寺内町の支配権は、久宝寺御坊顕証寺と本願寺教団にあったが、直接の実権を握っていたのは土豪安井氏であった。元和先鋒録に久宝寺村は、「太平記の末畠山旗下渋川何某の城地にて、村のめぐり七、八尺の濠今に御座候、四方出口門を構、左右に高き築地御座候」とある。伝えるところでは、久宝寺寺内町の北西隅に在したとされるもと久宝寺城は畠山氏の居城で、畠山家国の子孫播磨守刑部少輔満基が、渋川郡一帯の地を領してここに拠城したとされている。そして、その子主計頭定重及び定正の兄弟は織田信長に仕えていたが、天正五年(1577)の「石山合戦」において大坂本願寺の兵に攻められて定重は戦死し、弟定正もまた傷ついて後死し、久宝寺の城は陥った。そこで末弟の清右衛門定次がこの後を継ぎ、同九年信長より久宝寺村屋敷一切の支配を認める制札が下付されて、安井氏は一三五石の請所とした。豊臣秀吉の時代にも安井定次は数々の戦陣見舞いを送り、天正十一年(1583)十一月に久宝寺屋敷安堵のことを令している。その後、慶長五年(1600)九月、顕証寺は徳川家康より朱印状を受け、河内国内十一郡の真宗寺院の触頭として支配する権利を与えられ、安井氏が当寺の下代として支配する。関ヶ原以後、安井家は徳川方となり久宝寺内では庄屋として独占的支配を行う。このような安井氏の権力に対して久宝寺村百姓森本七郎兵衛等17人を主導者とする一部の久宝寺村民は、慶長十一年(1606)、幕府に「安井氏排斥」を訴えた。しかし、安井氏の勝訴となったため、森本らと彼らを援助した慈願寺は、ともにその支配下から自主性を獲得するために久宝寺を離れ、東方にあたる長瀬川沿いの荒野の地を開拓し、「八尾寺内町」を形成した。その後、久宝寺寺内町は安井氏の衰退により慶長十七年(1612)に検地を受け、支配権返上とともに寺内町としての特権を失うこととなる。

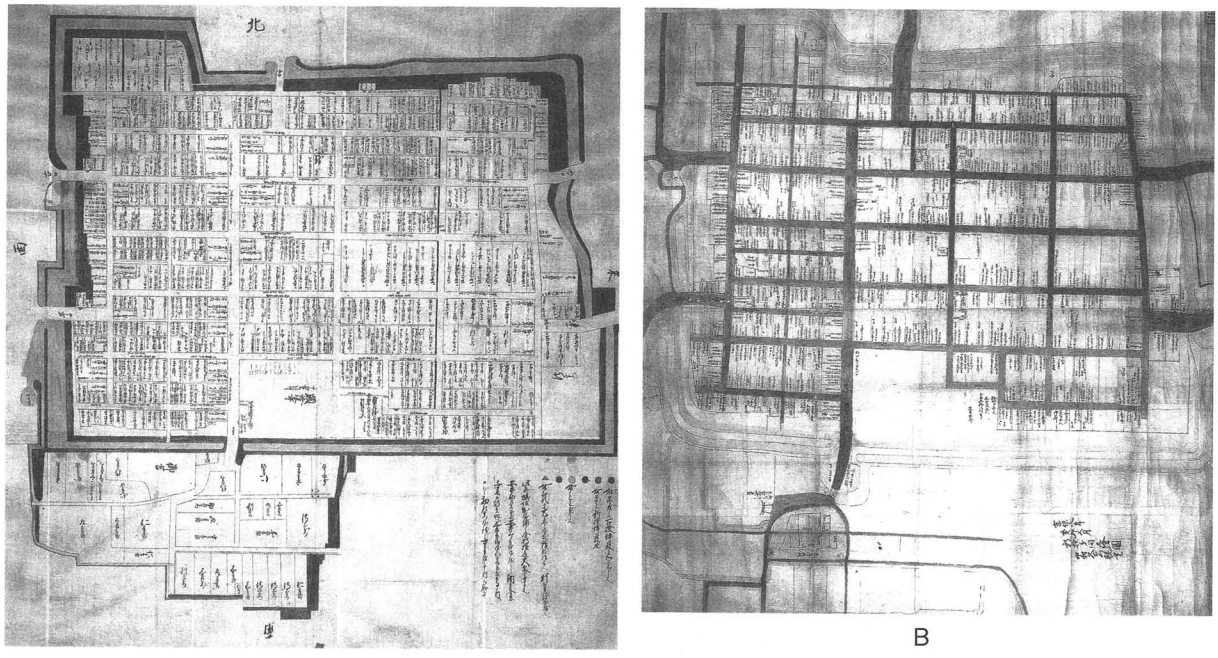
久宝寺は寺内特権を失ったが、江戸時代になると新田の開発が進み、一九八〇石あまりの石高をもつ大村となった。また、宝永元年(1704)の大和川付け替えが行われるまでは、水運を利用して大坂、河内、大和を結ぶ舟運業が盛んで、多くの商人や職人が集住し、当地の在郷町として発展した。しかし、付け替え後は、河川は次第に井路川となり、舟運に支障をきたすようになって村民も他に転出していき、久宝寺は次第に疲弊していく。そして、久宝寺に代わり八尾寺内町が商業の町として繁栄を迎えるようになる。

【絵図からみた久宝寺寺内町の町割り】

久宝寺寺内町の成立時期、言い換えると環濠・土居や町割りがいつ完成したのかについては、現在までの文献史の研究成果から天文九年末～同十四年(1541～46)とされているが、その実態については不明なところが多い。その理由としては解明の糧となる史料が少ないのに加え、考古学的に旧環濠・土居はもとより平面的な発掘調査がなされていないことが挙げられる。現在のところ、久宝寺寺内町の旧の環濠・土居・町割りの形状を伝える資料として、江戸時代に作成された２葉の絵図をはじめ、明治年間と昭和二年の絵図、そして大正七年に作成された地籍図が残っている。このなかで初期の形状に最も近いものとして、元禄二年(1689)に作成されたとみられる「久宝寺村屋敷惣絵図」と、享保八年(1773)に作成された「新検分間正絵図」の二葉の絵図が挙げられる(第５図)。これらの絵図は、いずれも村内の屋敷割りとその規模を把握するために当時作成されたもので、土居と環濠が色分けして描かれ、屋敷一筆毎に面積(坪数)と人名、屋号などが詳細に記されている。因みに、双方の絵図に描かれている町割りの名残りが、現在の久宝寺寺内町の町並みにも多く見受けられる。久宝寺寺内町の町割りについては、内田九州男氏と桜井敏雄氏の研究成果がある。それは、両氏各々が絵図に記載されている各屋敷の坪数、街路幅および街区の寸法等を綿密に分析し、街区と両側町という二方式から街区による建設の時期差をもって、寺内町をⅠ～Ⅳのブロックに分けて建設プランを考察されたものである。ここでは、具体的な町割りの計画や建設時期については触れず、江戸時代の２枚の絵図からみた両氏の研究論文を引用および参考にしながら、寺内町の内部構造について簡単に記述する。なお、文中においては記述上の便宜を図るため、「久宝寺村屋敷惣絵図」をＡ、「新検分間正絵図」をＢとする。

≪環濠・土居≫

寺内町の周囲はすべて二重の環濠(堀)と土居を以って取り囲まれた一区画を成していることがわかる。Ａでは西側の環濠と土居の幅が広く、防衛を重要視していることが窺われるのに対し、ＢはＡに比べややラフなスケッチ風である。Ｂに見られる顕正寺の南側で庭園の一部として残って



Ａ　　Ｂ

第５図　Ａ－久宝寺村屋敷惣絵図とＢ－新検分間正絵図(いずれも個人蔵)

いる蓮池とその南端の土居は、享保十四年(1729)に顕正寺の敷地が約倍に拡張されたときのもので、その際に広げられた久宝寺の外郭の中堀と土居藪の在していたことが知られ、明治末年頃においてもまだ二重藪の名で呼ばれていたようである。環濠内の水は、久宝寺寺内町の東方に位置する長瀬川から取水され、後述の水路を経て、寺内町の北部および西部へ排水される。

≪出入口≫

環濠と土居を切る形で北側環濠の中央に北口、東側環濠の北から今口と東口、南側環濠の中央に南口、西側環濠に北から古口、平ノ口(平野口)の計6箇所描かれているが、Bでは平ノ口(平野口)が、西口となっている以外に、「北口」の記載が無い。また、Bには会所・町井戸が北環濠沿いに2箇所(内1箇所は「北丁会所」と記す)増加しており、この地区の人口増加が示唆される。各出入り口には木戸門と門番所があり、寺内町内の治安が維持されていたことが見てとれる。北口では柳の古木が神木のような形で祀られて今に残り、その他の木戸口ではそれぞれに辻地蔵堂が在している。現在もこの部分の所は、道路が部分的に特に広くなったまま残っていて、その出入口の正面は必ずT字型(虎口)になって突き当たり、そこで左右に分岐して、また屈折して集落内に入るようになっている。すべて防備を厳重にした戦国時代の城構えにあたるものである。

≪街路・水路・屋敷割り≫

街路はすべて直交し、碁盤形をなしている。東西の基本道路が五道あって、北から大手町、米屋町、馬追町、表町、中之町の名がある。南方の中の町筋には、久宝寺御坊顕証寺を設け、表町は西部の平野口を入って、東口をすぎて八尾表町に通ずるもので、住吉、天王寺から平野を経て通る八尾街道の主要路に当たるものである。本路は、Bには「表通り」の記入がある。街路の幅については、寺内町の西端から東へ2本目の南北筋と北端の東西筋の2本が最も狭く、先述の「広小路」の1本が最も広いのを除き、すべて同じ法量である。水路については、寺内町の東端より西へ2本目の南北筋を道路に沿って直線的に伸びるものと、広小路の北西部で街区を切るように南北方向に短く伸びる2本が主要排水路と考えられる。また、主要排水路には、各屋敷の東西方向に街区を分割する「背割り排水溝」と連結するようになっている。屋敷割りについては、一筆毎に坪数あるいは間口・奥行きと持主の名が記入され、街区の大きさを示す総長の寸法が記載されている。Aには、坪数のところに古検地と新検地の坪数が併記されている。これは、『安井家文書』の中に、「元禄二年巳年十月□日　屋敷方新検坪改之帳引換覚　安井九兵衛」と題する帳面が残っていることから、元禄二年に新検地による屋敷の坪改めが行われたことがわかる。それとは逆にBの今口から東口にかけては、白紙で何も記載されていないところが点在する。このことについて、当地区一帯はAでは土豪安井一族の所有地であったが、文献史料の記載から勘案すると、Bの時代には安井一族の多くは大坂の地へ移転したため、家屋敷地は貸し付けられていたことが考えられる。

≪城土居(シロンド)≫

寺内町の北西隅の城郭によく見られる「出隅」の部分には「城土居(シロンド)」と称する出張ったところがあり、ここはかつて河内守護畠山氏の築いた城で、その旗本の渋川満貞がこれを再築して渋川郡一帯を領していたと伝えられる。そして満貞の子光重は摂州安井郷を領したので安井氏を称した。城土居(シロンド)および後述の出屋敷(地下垣内)は、当時安井一族が掌握しており、安井氏はおそらく当時久宝寺を中心として当地の名主的土豪として権威を有していたものと考えられる。当地区が出張っているのは、寺内町建設に際して取り込み、堀の一部を残したことに

よるものとされている。この出隅の西側部分の木戸口を「古口」と称される所以は、この地区が古くから存在していた一郭であることを示している。

≪出屋敷(地下垣内)≫

南西端の濠の外側には「地下垣内（じげかいと）」あるいは「出屋敷」と称される周囲を溝で囲った一小画をなしているところがあり、ここは安井一族の広大な屋敷地が存在したところと推定されている。地下垣内(出屋敷)は、寺内町形成時における久宝寺の百姓の居住地域、地下町はその百姓たちが寺内形成に参加し、新たに住んだ地域と考えられている。

【引用・参考文献】

◎棚橋利光他　1988『増補版　八尾市史(前近代)本文編』八尾市史編集委員会・八尾市役所

◎中西靖人・赤木克視他1987『河内平野遺跡群の動態Ⅰ　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－プロローグ編－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

◎原田昌則　2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書　－大阪竜華都市拠点地区区画道路２号線に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告68

◎原田昌則　2001『久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書　－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線３工区の掘削工事に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告69

◎原田昌則・坪田真一・滝　斎　2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書　－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告74

◎岩崎二郎・林日佐子・駒井正明・本間元樹　1997『田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防１次)　陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴なう発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター

◎岡田清一　1998「Ⅱ　10．久宝寺遺跡第23次(ＫＨ97－23)」『平成９年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

◎森　毅　1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪市文化財協会

◎山本　昭・米田敏幸他　1981『八尾南遺跡　－大阪市高速電気軌道2号線建設に伴なう発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会

◎田代克己他　1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会

◎安井良三他　1991『跡部遺跡発掘調査報告書　－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』(財)八尾市文化財調査研究会報告31

◎後藤信義・本田奈都子　1996『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書　－ＪＲ久宝寺駅舎・自由通路設置に伴なう－』(財)大阪府文化財調査研究センター

◎西村　歩　2003『八尾市亀井地内所在　久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ　―大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査―(財)大阪府文化財センター』(財)大阪府文化財センター調査報告書　第103集

◎広瀬雅信　1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書　第39輯』大阪府教育委員会

◎西村公助　1990「府営八尾萱振第３期中層住宅新営工事に伴う調査(第３次調査)」『萱振遺跡発掘調査概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告20

◎青木勘時　1989「Ⅱ　23．渋川廃寺(第1次調査：渋川町５丁目41)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28

◎滝　斎　1992「東郷廃寺(90－531)の調査」『八尾市文化財調査報告25　平成３年度国庫補助事業　八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会

◎駒井正明・本間元樹　2003『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集　八尾市　若草町所在小阪合遺跡　－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－』(財)大阪府文化財調査研究センター

◎原田昌則　1989「Ⅰ　矢作遺跡(第１次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22

◎原田昌則　1996「Ⅰ　萱振遺跡第６次調査(ＫＦ88－６)」『萱振遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報

告52
◎高萩千秋　1992「ＸⅡ　竜華寺跡第２次調査(ＲＫ91－２)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34
◎坪田真一　1995「Ⅱ　宮町遺跡第１次調査(MM91－１)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告45』
◎岡田清一　1995「Ⅱ　19．東郷遺跡第47次調査(ＴＧ94－47)」「Ⅱ　20．東郷遺跡第48次調査(ＴＧ94－48)」『平成６年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
◎原田昌則・西村公助・藤田道子　1999「Ⅱ　東郷遺跡第37次調査(ＴＧ91－37)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
◎沢井浩三　1954「一一、中河の中心『久宝寺発展史』」『河内史談　第四輯』東大阪新聞社
◎棚橋利光　1981「中世の河内　四、戦国動乱の世　久宝寺寺内町の成立」『大阪・市史双書１　八尾・柏原の歴史』松籟社
◎棚橋利光他　1988「第三章　第六節　寺内町の発展、第九節　久宝寺寺内町の町割り」『増補版　八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
◎辻合喜代太郎他　1983『八尾市史(近代)本文編』八尾市史編集委員会
◎岩永憲一郎　1984『城と陣屋シリーズ　157号　河内　久宝寺寺内』日本古城友の会
◎内田九州男　1986『八尾市史紀要　第九号　久宝寺寺内町の町割りについて』八尾市教育委員会
◎櫻井敏雄・大草一憲　1988『寺内町の基本計画に関する研究　―久宝寺寺内と八尾寺内を中心として―』八尾市教育委員会
◎『安井家文書』大阪市史史料第二〇輯　1987　大阪市史編纂所
◎金井年　1995「寺内町の形成と原集落」『寺内町研究　創刊号』貝塚寺内町歴史研究会
◎小谷利明　2003『畿内戦国期守護と地域社会』清文堂

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　調査の概要

調査の結果、現地表下1.0m前後(T.P.＋8.1m前後)で江戸時代(第１面)、それより0.4m前後下(T.P.＋7.7m前後)で室町時代末期(第２面)の２時期の遺構面を検出した。また、第１区内で実施した下層調査においては、T.P.＋7.0～7.2m間で平安～鎌倉時代、T.P.＋5.5～6.5m間で弥生時代後期～古墳時代初頭のいずれも生産域を示唆する地層を確認することができた。以下、時代の新しい順に時期ごとにその概要を記述する。

≪江戸時代≫

町家を構成する井戸・土坑・柱穴・溝(水路)・落込み等を検出した(第１面)。第１区と第３区では建物に伴うとみられる礎石の抜取り穴が総数27箇所見つかったが、建物を復原するまでには至らなかった。井戸は全体で10基見つかっており、それらの井戸の多くは井戸側として瓦質の磚と井筒桶を数段積み重ねた構造をもつ。また、第１区では竹筒(ＳＤ1101)を連結して井戸(ＳＥ1104)から水を引き込む上水施設が見つかっている。埋め甕では第１・２区で一カ所に複数の大甕が埋設された「甕蔵」と考えられるものと、水甕や便槽といった単体で埋設されているものの２種類がある。第２区では第１区と同じ備前焼大甕が６個体、底部のみ据え付けられた状態で見つかった(**埋め甕2101～2106**)。土坑は全体で60基近く見つかっている。土坑については大きく分けると、①日常生活において不要となった皿・碗などの雑器や食物残滓である貝殻・魚骨を廃棄したいわゆる「ゴミ穴」と、②火災あるいは老朽化による住居の建替えの際に不要となった瓦・建築部材・礎石などを一括処理するための非日常的な廃棄土坑の２種類がある。また、第１区の南西部では、自然の落ち込み状の地形を利用した②の性格を有する遺構が見つかっている(ＳＯ1102)。溝については、先述の竹筒を使用した上水施設以外に第１区で３条(ＳＤ1102～1104)見つかっている。第１区北部で検出した溝(ＳＤ1102)は、南西－北東方向に延びる比較的規模の大きい溝で、検出状況から屋敷間における区画溝であったことが考えられる。また、ＳＤ1103の底部付近で、竹樋に用いられていたと思われる竹管の一部が見つかっている。

≪室町時代末期≫

江戸時代初頭の整地層下に堆積する層厚0.2～0.4mを測る焼土層を排除した面で、室町時代末(16世紀末)に比定される遺構面を検出した。焼土層の年代については、包含される遺物と文献史料「安井家文書」から天正五年(1577)の「石山合戦」に伴うものと考える。本来調査では、焼土の上面で一旦精査を行い、「合戦後」の遺構面を捉えてから次に焼土層を除去して「合戦以前」の遺構を捉えるべきである。しかし、今回は調査期間の制約上、やむなく「合戦前後」の遺構を同一面で捉えることとなった。検出遺構は、建物跡・柱穴・集石遺構・瓦溜め遺構・池状遺構・排水施設(木樋・石列)・石組み溝である(第２面)。建物跡(ＳＢ1201・1202)や**石組み溝3201**は、江戸時代の絵図と比べてやや方位の異なるものであり、加えて**池状遺構2201**や**集石遺構1201**については江戸時代の絵図からは想像できないものである。さらに、それらの施設の規模からは、一般的な町屋ではなく寺院や領主居館といった大型建物の存在が想定される。また、今回の調査に先立って実施された市教委の遺構確認調査では、寺院などの大型建物の屋根の大棟や降り棟を漂う際に用

いる「雁振瓦」が出土しているうえ、本調査においても第３区の江戸時代の整地層内から寺院に関連すると見られる五輪塔や宝篋印塔の一部が出土している。

第１区で実施した第２面以下の下層調査では、現地表下２ｍ前後（T.P.＋7.0m前後）で平安～鎌倉時代の耕作溝と自然河川、さらにそれより2.4m前後下(T.P.＋5.6m前後)で弥生時代後期～古墳時代初頭頃に比定される水田遺構を想定させる堆積層を確認した。

また、今回の調査では江戸時代の絵図に見られる町割りの形成時期を確認する目的で、調査終了後に調査地内にグリット２箇所を設置し、「背割り排水溝」の遺構確認調査を行った。調査の結果、地層断面で確認された本排水溝の掘方層位および伴う出土遺物から、本排水溝の構築は江戸時代以降のものであることが判明した。

第２節　層序(第６図)

調査地の現地盤の標高はT.P.＋9.1m前後を測る。久宝寺寺内町では、現在まで市教委によって道路築造工事、下水・水道・ガス工事、個人住宅建設などの遺構確認調査が実施されている。しかし、それらの大部分は狭小で、近・現代の人為的な整地層範囲迄で、江戸時代の生活面にまで及ぶ調査は稀少である。

今回調査の対象となった調査地一帯は、既述したように民間工場の跡地であり、層厚0.2m前後は工場建設に伴う整地層である。また、調査地内には産業廃棄物処理を目的に掘削された埋め穴などのカクランが数箇所点在する。その規模は、径0.5～2.0m、深さ1.0～2.0mと様々である。整地層を排除すると0.8m前後を測る江戸時代(17～19世紀)の地層となる。後述する第１～４層にあたる堆積層で、これらは人為的な整地・盛土層、火災による焼土、遺構内埋土が幾層にも複合して構成されている。今回の調査では、17世紀初頭頃の整地層と判断される第５層上面において江戸時代の遺構を検出した(第１面)。第６・７層には16世紀後半に比定される多くの陶磁器類が包蔵されており、その年代から第６層は天正五年(1577年)「石山合戦」後の寺内町再建に伴う整地層、そして第７層が合戦時の焼土に比定される堆積層と考えられる。今回の調査では、本焼土を排除した第８層上面において室町時代末の遺構を検出した(第２面)。第８層には鎌倉時代～室町時代前半、第９層には平安時代の遺物を包蔵する。第10～16層については、第１区の第２次調査で確認した層序である。これらの堆積層は、出土遺物の年代や周辺の調査から弥生時代後期～古墳時代初頭にあたるもので、このなかには水田耕作土を示唆する堆積層が含まれる。以下、各層相について記述する。

第０層：近・現代に比定される整地・盛土層である。層厚は0.2m前後。

第１層：細分すると、１ａ層－10YR8/3浅黄橙色シルト(層厚0.1～0.2m)、１ｂ層－5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト(層厚0.1～0.3m)の２層に分層できる。19世紀代の遺物が含まれる。

第２層：10YR6/6明黄褐色シルト・砂礫層。層厚0.1～0.2m。18世紀後半～19世紀初頭の遺物が含まれる。第２・３区では、希薄である。

第３層：5YR5/4にぶい赤褐色シルト。層厚0.1～0.4m。18世紀代の遺物が含まれる。第２・３区は第１区に比べかなり希薄となる。また、第１区の北半部では焼土が混入する。

第４層：細分すると、４ａ層—7.5YR5/1褐灰色シルト(層厚0.2m前後)、４ｂ層—2.5YR3/6暗

赤褐色シルト(層厚0.2～0.3m)の２層に分層できる。17世紀代～18世紀前半にかけての遺物が含まれる。両層とも粘土偽礫を含み、均質に堅く締まっていることから、４ａ層は４ｂ層に連続して行われた整地層と考えられる。

第５層：2.5Y8/4淡黄色礫混じりシルト。層厚0.1～0.2m。粘土偽礫を多く含んだ17世紀初頭の整地層である。

第６層：5YR6/4にぶい橙色礫混じりシルト。層厚0.1m前後。調査区すべてに均して認められ、焼土とともに多くの粘土偽礫が含まれる。16世紀後半頃の遺物が少量含まれる。天正五年(1577)「石山合戦」以後の整地層と考えられる。

第７層：5YR5/6明褐色シルト。層厚0.1～0.3m。出土遺物の年代観から「石山合戦」時の焼土層と考えられる。第１区の**集石遺構1201**の付近からは、被熱した多くの瓦とともに15～16世紀にかけての土師器皿・瓦器椀・瓦質土器そして輸入陶磁器類が出土した。

第８層：10BG6/1青灰色粘土質シルト。層厚0.2～0.4m。部分的にシルト偽礫を含むところがみられることから、久宝寺寺内町建設時の整地層の可能性がある。

第９層：5YR7/3にぶい橙色砂質シルト。層厚0.2～0.3m。平安時代の遺物片が僅かに含まれる。上層部には酸化鉄分の付着が観察される。

第10層：5Y8/1灰白色細粒砂と7.5YR8/6浅黄橙色砂質シルトの互層。層厚0.1～0.3m。極細粒砂の水平ラミナが挟在する。

第11層：7.5YR7/1明褐灰色極細粒砂～細粒砂。層厚0.9m以上。調査区内の壁断面およびラミナの状況から南東－北西に流向もつ河川であったことがわかる。埋積土内に平安時代後期～鎌倉時代に比定される瓦器椀の破片が数点含まれることから、該期中に埋没したものと推定される。

第12層：5Y4/1灰色～5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土。層厚0.3m前後。炭化物を混入するラミナが認められる。本層上面(T.P.＋7.0m前後)で、平安時代後期～鎌倉時代に比定される耕作溝を数条確認した。

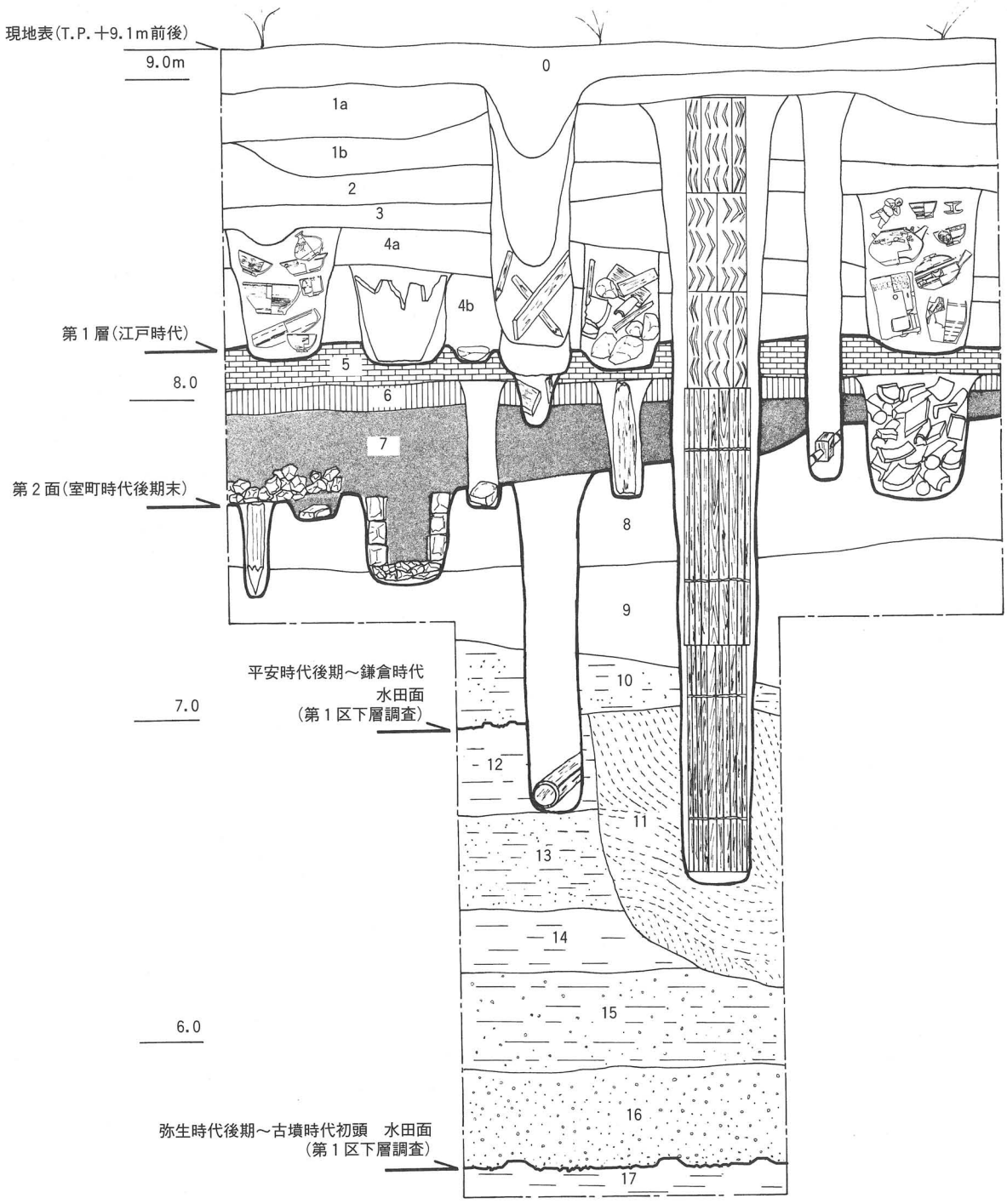
第13層：N3/0暗灰色シルト～極細粒砂。層厚0.3m前後。厚さ５㎜前後のラミナが連続して水平に堆積しているのが認められた。

第14層：5B2/1青黒色～5B7/1明青灰色粘土質シルト。層厚0.2m前後。下部には植物遺体が多く含まれる。

第15層：5G4/1暗緑灰色砂礫混じりシルト。層厚0.3m前後。下部では砂礫優勢となり、径２～５㎜程度の細礫を少量、径５～10㎜程度の小礫を極少量含む。

第16層：7.5YR8/1灰白色極細粒砂～細粒砂。層厚0.3m前後。下部では細粒砂が優勢で、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての土器片と炭化物・木片が含まれる。

第17層：5B4/1暗青灰色～5PB6/1青灰色粘土。層厚0.1m以上。上部にはマンガン斑や鉄分が沈着している。第１区の第２次調査において、本層上面(T.P.＋5.6m前後)で弥生時代後期末～古墳時代初頭に比定される水田面を確認した。



【層序】
第０層：近現代の整地および撹乱層
第1a層：10YR8/3浅黄橙色シルト
第1b層：5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト
第２層：10YR6/6明黄褐色シルト・砂礫
第３層：5YR5/4にぶい赤褐色シルト・粘土
第4a層：7.5YR5/1褐灰色シルト
第4b層：2.5YR3/6暗赤褐色シルト
第５層：2.5Y8/4淡黄色礫混じりシルト
第６層：5Y6/4にぶい橙色礫混じりシルト
第７層：5YR5/6明黄褐色シルト（「石山合戦」時の焼土か？）
第８層：10BG6/1青灰色粘土質シルト
第９層：5YR7/3にぶい橙色砂質シルト

＜以下、第１区下層調査＞
第10層：5Y8/1灰白色細粒砂と7.5YR8/6浅黄橙色砂質シルトの互層
第11層：7.5YR7/1明褐灰色極細粒砂～細粒砂
第12層：5Y4/1灰色～5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土
第13層：N3/0暗灰色シルト～極細粒砂
第14層：5B2/1青黒色～5B7/1明青灰色粘土質シルト
第15層：5G4/1暗緑灰色砂礫混じりシルト
第16層：7.5YR8/1灰白色細粒砂～細粒砂
第17層：5B4/1暗青灰色～5PB6/1青灰色粘土

第６図　地層断面模式図

第３節　第１面　江戸時代の遺構

【井戸（ＳＥ）】

第１区で８基（ＳＥ1101～1108）、第３区で２基（ＳＥ3101・3102）の総数10基を検出した。掘方平面の形状は概ね円形と不定形に２分され、規模は径１～３ｍを測る。深さについては、２ｍ以上を測るものが大半であるが、上部が後世に削平されて0.5ｍほどの深さのものもある。２ｍ以上を測るものについては、周壁崩落の事情から底まで掘削できないものがあった。掘方の多くは検出面から0.5ｍ前後下がったところで平坦なテラス状となり、その面から径0.7ｍ程の井戸側が埋設されるものが多い。井戸側については抜き取られたものもあるが、大半は本時代に多くみられる径0.7ｍ前後の底板を抜いた桶２～３段程の上に、「瓦磚」と呼ばれる一辺30㎝前後・厚さ３～4㎝ほどの瓦状のもの７～８枚を２～３段巡らし、積み上げたものである。埋土はすべて人為的な埋め戻し土で、埋土内に日常雑器をはじめ礎石などが含まれる井戸もあり、井戸廃絶時に廃棄物処理に転用したことが窺える。以下、各井戸の詳細を記述する。

ＳＥ1101

２Ｃ区で検出した。掘方は平面円形で、径は1.0ｍ前後、深さ0.52ｍを測る。井戸側そのものは抜取られていたが、井戸側として壁面に残る桶の痕跡と埋土内に瓦磚２枚がみられることから径0.7ｍ前後で瓦磚と桶が使用されていたものと考えられる。内部には瓦磚のほかに人頭大の花崗岩１点があった。

ＳＥ1102

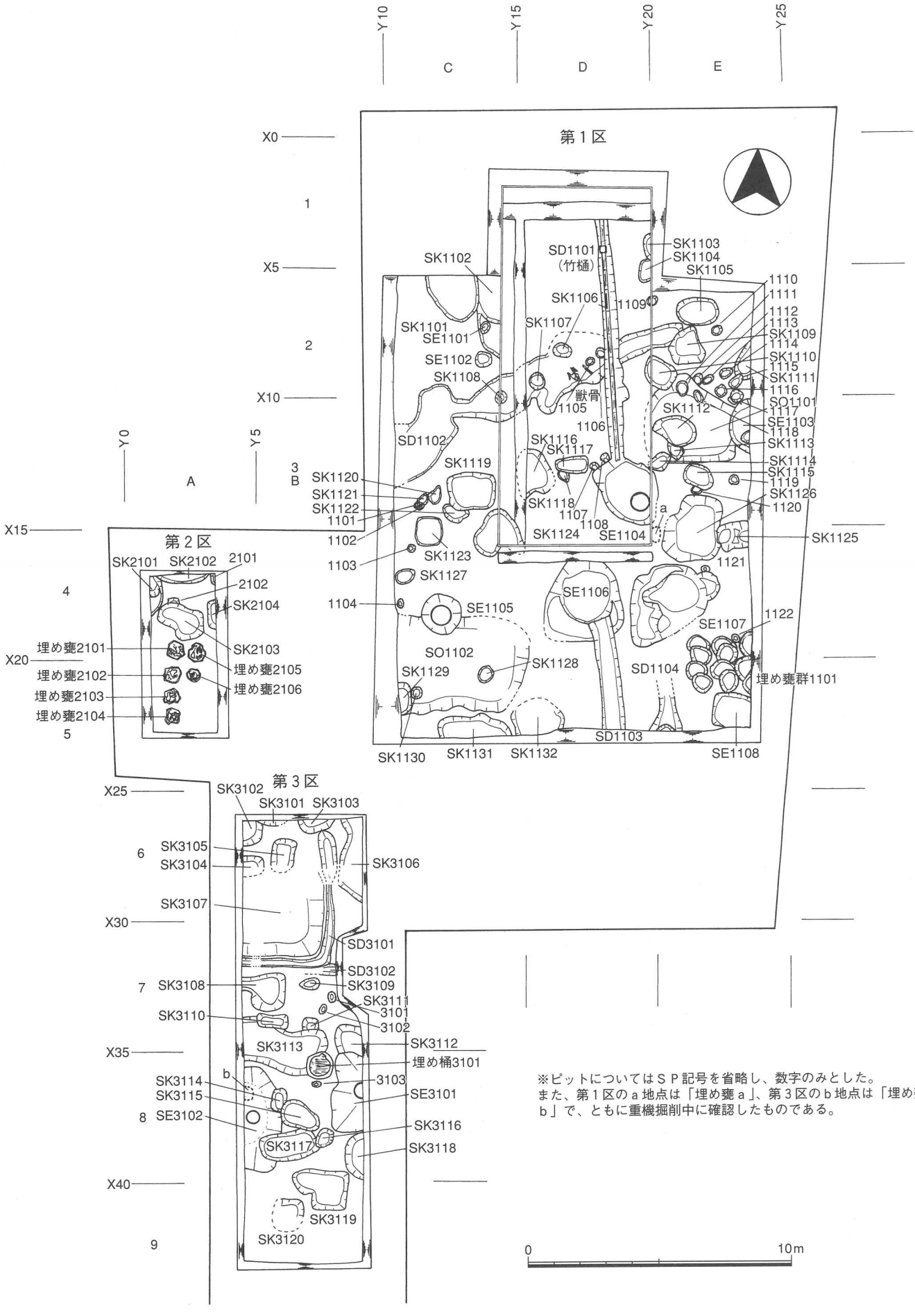
ＳＥ1101の南約１ｍ地点で検出した。掘方は平面円形で、直径は1.0ｍ前後・深さは0.7ｍ以上であるが、壁面崩落の恐れがあったため、底までは掘削していない。井戸側は径0.74ｍで、桶約1/3と瓦磚７枚を巡らしたもの一段が残存していた。内部には陶磁器の破片が数点と投げ込まれた人頭大の花崗岩３点があった。

ＳＥ1103

３Ｅ区で検出した。東部は調査区外に至るために全容は不明である。掘方の最大検出長は2.23ｍを測る。検出面から約0.22ｍ下がったところでテラス状となり、南端部で径約0.6ｍの井戸側の抜取り穴を確認した。抜取り穴の埋土に竹製の箍や板材が含まれていたことから、井戸側として桶が使用されていたものと思われる。深さはテラス状の面から約0.5ｍ掘り下げたところで、壁面崩落の恐れから掘削を中断したため不明である。内部からは陶磁器の破片が数点出土した。井戸側内埋土から17世紀後半に比定される肥前系磁器瓶徳利・唐津焼鉢・瓦質火入れが出土した。

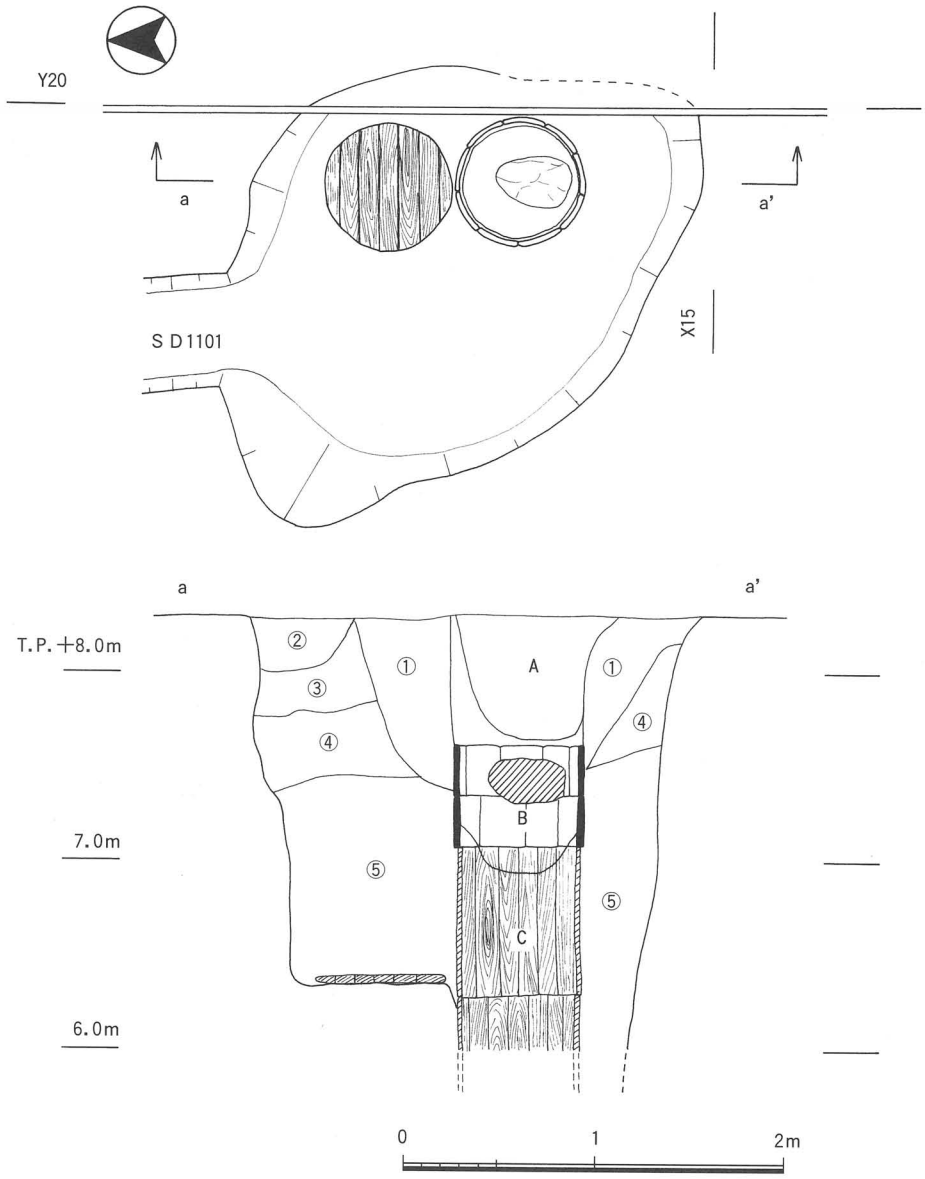
ＳＥ1104（第８図）

３Ｄ～３Ｅ区で検出した。長径2.92ｍ、短径2.18ｍを測る北西－南東方向にやや長い楕円形を呈する。深さは、検出面から約0.3ｍ下がったところでテラス状となり、さらに内側に径約2.0ｍの掘方があり、その南東部に径約0.7ｍを測る桶の井戸側を確認した。この井戸側の深さは、第２次調査で確認したところ、テラス状の面から2.35ｍで底となった。桶は２段用いられ、その上段にはさらに、内部に落ち込んだ瓦磚の状況から２段以上の瓦磚の井戸側が付設されていたと思われる。また、井戸側底の北側に接して径0.68ｍの桶の底板が置かれており、これに関して憶測ではあるが、井戸側を設置する際の足場として使用されたものかと思われる。遺物は、テラス状の掘方埋土内から炮烙と土瓶の破片などが出土した。なお、本井戸には竹樋（ＳＤ1101）が接続される。



※ピットについてはＳＰ記号を省略し、数字のみとした。
また、第１区のａ地点は「埋め甕ａ」、第３区のｂ地点は「埋め甕ｂ」で、ともに重機掘削中に確認したものである。

第７図　第１面（江戸時代）遺構平面図（Ｓ＝1/200）



【遺構内埋土】
◎井戸側内埋土ーA：10YR5/8黄褐色シルト
B：2.5Y6/3にぶい黄色砂礫混じりシルト
C：10BG5/1青灰色粘土質シルト

◎掘方内埋土ー①：10YR5/3にぶい黄褐色砂礫混じりシルト
②：10YR5/1褐灰色シルト
③：2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
④：N3/0暗灰色砂礫混じりシルト
⑤：5B5/1青灰色粘土質シルト

第８図　ＳＥ1104　平・断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＥ1105（図版二）

４Ｃ区で検出した。掘方の平面は円形で、直径は1.5m前後、深さは1.86mを測る。井戸側は、径0.78mの桶２段の上に１周７枚の瓦磚が２段積まれている。井戸側内埋土から、外底部に「太明年製」の字款がある肥前系染付磁器碗のほか、陶磁器や瓦質土器の破片が数点出土した。

ＳＥ1106

４Ｄ区で検出した。長径3.12m、短径2.83mを測る南北にやや長い不定形を呈する。検出面から0.3m前後でテラス状となり、そこからさらに北寄りで径約2.0mの井戸側埋設時の掘方を有する。深さは、0.8m以上であるが、壁面崩落の恐れがあったため、底までは掘削していない。埋土はすべて埋め戻し土で井戸側は見られなかった。井戸側内埋土から、18世紀末～19世紀初頭にか

けての土師器耳皿・鍋・焜炉・炮烙が出土した。なお、本井戸はＳＥ1104同様に、竹樋等の導水管が伴っていたと想定されるＳＤ1103と接続する。

ＳＥ1107

ＳＥ1106の東隣で検出した。長径3.58m、短径2.56mを測る北東－南西方向に長い不定形を呈する。検出面から0.5m前後でテラス状となり、そこからさらに北東寄りで径約2.0mの井戸側埋設時の掘方を有する。深さは、ＳＥ1106と同様0.8m以上であるが、壁面崩落の恐れがあったため、底までは掘削していない。埋土はすべて埋め戻し土で井戸側は見られなかった。井戸側内埋土から、17世紀前半代の土師器皿・肥前系青磁碗・焼締陶器・火消し壷が出土した。

ＳＥ1108

５Ｅ区の調査区南東隅で検出した。掘方の東部および南部は調査区外に至るため、全容は不明である。検出最大径1.48m、深さ0.64mを測る。井戸側そのものは抜き取られていたが、埋土内に残存する板材と竹製の箍から、桶が使用されていたものと考えられる。井戸側抜き取り埋土内からは19世紀前半代の底部に字款のある瀬戸美濃染付磁器小坏と土師器破片、掘方埋土内からは混入品である17世紀初頭の丹波焼擂鉢２個体分と陶磁器の破片数点が出土した。

ＳＥ3101

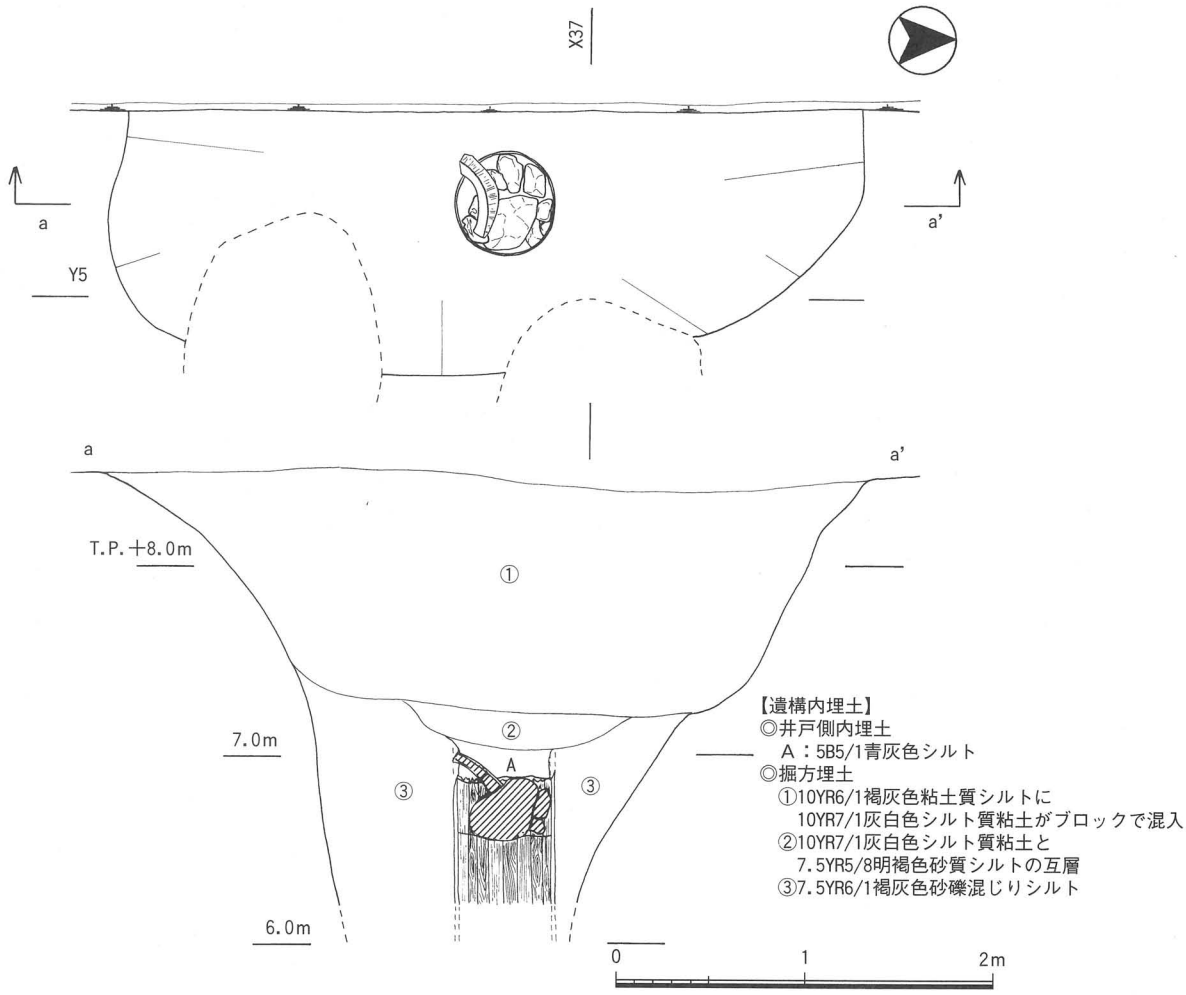
８Ｂ区で検出した。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。検出できた掘方の最大径3.08m、検出面から0.3m前後でテラス状となり、そこから中央付近とみられるところで径0.7m前後の井戸側の抜取り穴を確認した。深さについては、テラス状の面から約1.5m迄しか掘削できず、底は確認していない。井戸側については、井戸側抜取り埋土内から、桶の板材や瓦磚４枚が出土した以外に、径37cmを測る土師質の井筒側の破片が出土した。また、同埋土内からは19世紀代の肥前系の染付磁器の皿・碗蓋・碗、瀬戸美濃系染付磁器の蝋燭立て、土瓶蓋、行平、陶器植木鉢が出土した。一方、掘方埋土内からは、混入品とみられる17世紀前半の唐津焼の皿・鉢・徳利が出土した。

ＳＥ3102(第９図)

８Ａ～８Ｂ区で検出した。西部は調査区外に至るため、全容は不明である。検出できた掘方の最大径4.03m、検出面から0.5m前後下がったところで中央付近に径0.54mの桶を使用した井戸側を確認した。井戸側の深さは0.43mで底となった。桶の上半は破損しており、原形を留めない。井戸側内からは、17世紀末～18世紀初頭の所産とみられる肥前系の白磁小坏・陶器皿・陶器碗・染付磁器碗、唐津焼鉢・炮烙のほか、石臼の破片１点と人頭大～やや小振りの花崗岩６点が出土した。

【土坑(ＳＫ)】

第１区で32基(ＳＫ1101～1132)、第２区で４基(ＳＫ2101～2104)、第３区で20基(ＳＫ3101～3120)の総数56基を検出した。土坑について出土遺物でみると、第１区では瓦、礎石、板材といった火災後の焼け跡処理に伴うものが多くを占めるのに対し、第３区では皿・碗・火鉢播鉢等の日常雑器類の廃棄坑、いわゆるゴミ捨て穴が目立つ。埋土のほとんどは人為的な埋め戻し土であるが、一部に炭・灰の薄層が何層も堆積するものやシルト・粘土といった自然堆積層から時間の経過を示すものが確認される。また、こういった廃棄土坑以外では、掘方平面が方形あるいは長方形を呈し、壁面が垂直で、埋土が一気に埋め戻されたことを示すブロック土で構成されることから土取り穴の可能性が高い。さらに土坑のなかには礎石の抜取り穴の可能性があるものや、



第９図　ＳＥ3102　平・断面図（Ｓ＝1/40）

0.1ｍほどの浅いもので出土遺物が皆無で、遺構の時期や性格が不明なものもある。以下、機能が顕著に判断できるもの、および比較的出土遺物の多い土坑について記述する。なお、それ以外の土坑については、表１に検出地点、法量等を示した。

ＳＫ1102

２Ｃ区で検出した。北西部をＳＫ1101に切られ、北部は調査区外に至っている。また、東部は調査時に側溝掘削により削平してしまったのも含め掘方を確認することはできなかった。以上のことから規模については不明であるが、機能については埋土に炭化物を多く含む、いわゆるゴミ穴として解釈できるものである。検出規模は南北長3.22ｍ、東西長0.88ｍを測る。深さについては、南半部が0.1ｍ前後にあるのに対し、北半部は0.24ｍ前後と低く段差を有している。埋土は炭化物を多く含む灰黒色のシルトの単一層である。埋土内からは、17世紀初頭に位置付けられる唐津焼皿、碗が出土した。

ＳＫ1105

２Ｅ区で検出した。東西長1.62ｍ、南北長1.08ｍ、深さ0.41ｍを測る東西に長い楕円形を呈する。埋土下部は黒色の炭化物を多く含む自然堆積土で、その上は人為的に埋め戻されている。上部の埋土からは、18世紀前半の肥前系染付磁器皿・碗のほか、拳大～人頭大よりやや小振りの花

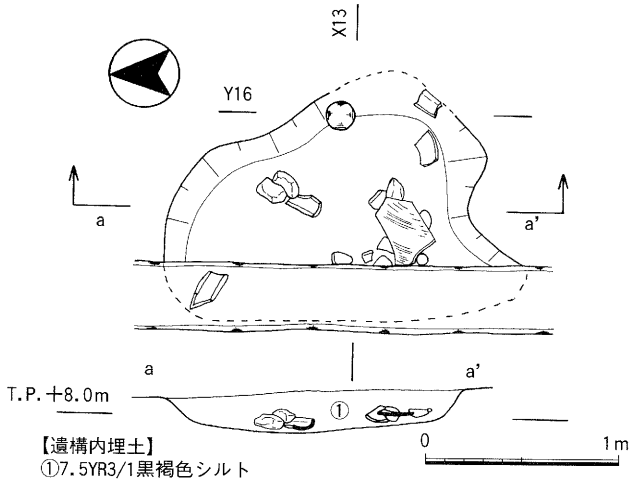
表1　第1面　土坑（ＳＫ）一覧表

遺構番号	地点	長径－短径	深さ	平面形状	埋土	出土遺物（括弧内は遺構年代）
SK1101	2C	(1.81)	0.12	不明	暗茶灰色シルト	中国製磁器皿（17C前半）
SK1103	1D	(1.31)	0.13	不明	暗褐色砂礫混じりシルト	土師器片、銭貨
SK1104	1D～2D	(0.85)	0.13	不明	黄灰色シルト	土師器片、陶磁器片
SK1106	2D	0.73－0.54	0.06	楕円形	黒褐色シルト	なし
SK1107	2D	0.63－0.61	0.09	円形	黒褐色シルト	土師器片
SK1108	2C～3C	0.54－0.49	0.12	円形	黒褐色シルト	陶磁器片
SK1109	2E	1.35－1.28	0.24	不定形	黄灰色シルト	瓦質火鉢、土師質大甕（17C前半）
SK1110	2D～2E	1.27－1.03	0.35	隅丸長方形	黒褐色砂礫混じりシルト	土師器皿（17C前半）
SK1111	2E	(1.18)	0.14	不明	暗青灰色シルト	唐津焼皿、焼き締め陶器鉢、瓦質火入れ
SK1112	3E	1.62－1.31	0.36	不定形	黒褐色砂礫混じりシルト	陶磁器片、瓦
SK1113	3D～3E	0.63	0.23	不明	黒褐色砂礫混じりシルト	なし
SK1114	3E	0.82－0.6	0.31	不定形	黒褐色砂礫混じりシルト	土師器、瓦質土器片
SK1115	3D～3E	1.18－0.8	0.16	楕円形	黒褐色砂礫混じりシルト	火燈（17C初期）
SK1119	3C	1.8－1.5	0.13	隅丸長方形	黒褐色シルト	肥前系染付小杯、碗（17C末～18C初頭）
SK1120	3C	0.76－0.5	0.05	不定形	黒褐色シルト	陶磁器片
SK1121	3C	0.48－0.4	0.04	不定形	黒褐色シルト	陶磁器片
SK1122	3C	(1.02)	0.13	不明	茶褐色シルト	土師器片、陶磁器片
SK1124	3C～3D4C～4D	1.9	0.14	不定形	黒褐色シルト	肥前系陶器碗（17C末～18C初頭）
SK1125	3E～4E	1.48	0.43	不明	黒褐色シルト	肥前系陶器皿、土製円盤（17C後半）
SK1127	4C	0.78－0.6	0.08	楕円形	黒褐色シルト	瓦質土器片、磁器片
SK1128	5C	0.6－0.2	0.1	円形	黒褐色シルト	土師器片、瓦
SK1130	5C	0.45	0.18	円形	黒褐色シルト	なし
SK1132	5C～5D	2.1	0.22	不明	黒灰色シルト	肥前系陶器碗・染付碗、焙烙（17C末～18C初頭）
SK2101	4A	(1.5)	0.5	不明	暗茶灰色シルト	唐津焼皿（17C後半）
SK2101	4A	(2.0)	0.34	不明	暗茶灰色シルト	丹波焼擂鉢（17C後半）
SK2104	4A	(1.15－1.1)	0.29	不明	暗茶灰色シルト	唐津焼皿、備前焼大甕（17C後半）
SK3102	6A～6B	(0.98)	0.43	不明	黒灰色シルト	唐津焼皿、肥前系染付磁器皿（17C後半）
SK3103	6B	(1.43)	0.2	不明	黒灰色シルト	肥前系染付磁器碗、土瓶蓋（18C末～19C前半）
SK3104	6A～6B	(0.8)	0.23	不明	暗褐色シルト	肥前系染付磁器皿、丹波焼擂鉢（18C末～19C前半）
SK3105	6B	(1.1)	0.16	不明	暗褐色シルト	肥前系染付磁器碗、唐津焼壷（17C前半）
SK3109	7B	0.8－0.45	0.14	楕円形	暗褐色シルト	なし
SK3110	7B	1.21－0.47	0.32	長方形	暗褐色シルト	肥前系染付磁器碗（18C前半）
SK3111	7B	(0.62)	0.26	不明	黒褐色シルト	瀬戸美濃系陶器碗、唐津焼壷（17C前半）
SK3112	7B～8B	(1.1)	0.25	不明	黒褐色シルト	唐津焼皿・碗、備前焼壷（17C前半）
SK3114	8B	(0.92)	0.15	不明	黒褐色シルト	肥前系白磁皿、陶器碗（17C後半～18C初頭）
SK3116	8B	0.82－0.48	0.21	楕円形	黒褐色シルト	陶磁器片、獣骨
SK3118	8B	(1.85)	0.39	不明	黒灰色シルト	肥前系染付磁器碗、唐津焼捏鉢（18C前半）
SK3120	9B	(0.88)	0.95	不明	黒灰色シルト	唐津焼皿、肥前系染付磁器鉢、備前焼壷（17C前）

崗岩が十数点出土した。

ＳＫ1116（第10図）

３Ｄ区で検出した。西部は側溝掘削時に削平してしまったために全容は不明であるが、側溝範囲内に納まるものと思われる。検出最大長1.98m、深さ0.13mを測る。埋土は偽礫を含む均質な黒褐色シルトである。埋土内から、17世紀前半頃の肥前系染付小坏、肥前系陶器碗、瀬戸美濃系天目碗、炮烙、竈が出土した。



第10図　ＳＫ1116　平・断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＫ1117

ＳＫ1116の東隣で検出した。平面は東西に長い楕円形を呈し、底部は平坦である。規模は東西長1.27m、南北長0.65m、深さ0.15mを測る。埋土は人為的な埋め戻し土である。埋土内から、肥前系染付磁器の皿・鉢が出土した。

ＳＫ1118

３Ｄ区で検出した。北部はＳＫ1117に削平されるため全容は不明である。検出最大長0.58m、深さは0.13mを測る。埋土は底面付近では、有機物を多量に含む黒色土の自然堆積土で、それ以上は埋め戻し土である。埋土内から、17世紀後半頃の瀬戸美濃系の陶器香炉、肥前系の白磁大皿、丹波焼擂鉢が出土した。

ＳＫ1123

３～４Ｃ区で検出した。一辺１m前後を測る隅丸方形を呈する。深さは0.07mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。底面は平坦である。埋土内から、17世紀前半頃に比定される瀬戸美濃系皿、備前焼の壷・甕、火燈が出土した。

ＳＫ1126

３～４Ｅ区で検出した。東部の一部をＳＫ1125が切る。長辺2.48m、短辺2.12mを測る平面不定形で、深さは0.41mを測る。埋土は底から約0.2mまでは有機質を多量に含む黒色シルトの自然堆積土で、それ以上は埋め戻し土である。埋土内から、肥前系陶器碗、瓦質火入れが出土した。

ＳＫ1129

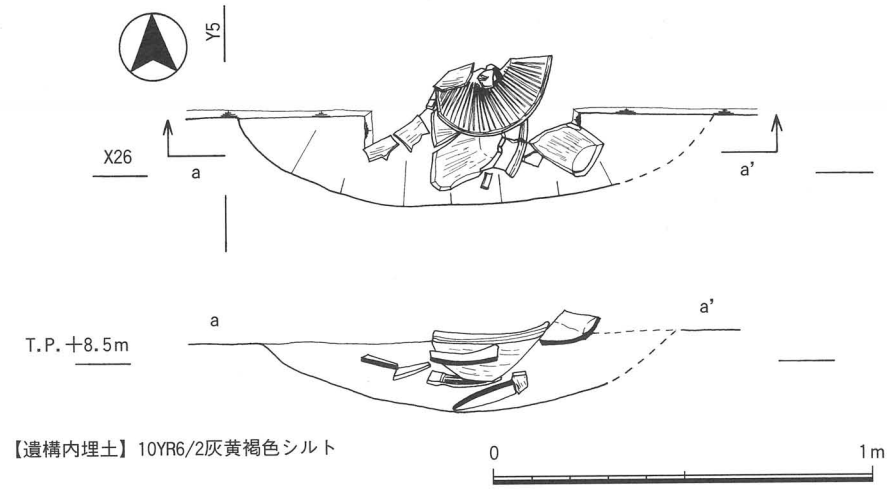
５Ｃ区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出最大長1.24m、深さ0.16mを測る。埋土下部は黒色シルトの炭化物を多く含む自然堆積土で、その上は人為的に埋め戻されている。埋土下部内から、18世紀後半～19世紀初頭に位置付けられる肥前系染付磁器の皿・碗、鍋、火鉢、焜炉が出土した。

ＳＫ1131

５Ｃ区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出最大長2.72m、深さ0.29mを測る。埋土は黒色シルトの炭化物を多く含む自然堆積土の上に、人為的な埋め戻し土が堆積する。埋土下部内から、18世紀前半頃の比定される唐津焼碗、肥前系染付磁器碗、炮烙が出土した。

ＳＫ2103

４Ａ区で検出した。平面は北西－南東方向に長い瓢箪形を呈する。長辺1.92m、短辺0.98m、深さ0.29mを測る。埋土は人為的な埋め戻し土である。本土坑は、近接する埋め甕遺構（**埋め甕**2101～2106）の埋土に類似することと、埋土内から備前焼大甕１個体分に近い土器片が含まれていること、そして配置状況からみて、もと埋め甕が設置されていたことが考えられる。ほかに埋土内からは、唐津焼皿が出土した。



第11図　ＳＫ3101　平・断面図（Ｓ＝1/20）

ＳＫ3101（第11図）

６Ａ～６Ｂ区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。北部は調査区外、さらに東部の一部は撹乱により全容は不明である。深さ0.24ｍを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。埋土内から、17世紀末～18世紀初頭に比定される堺擂鉢３点が出土した。

ＳＫ3106

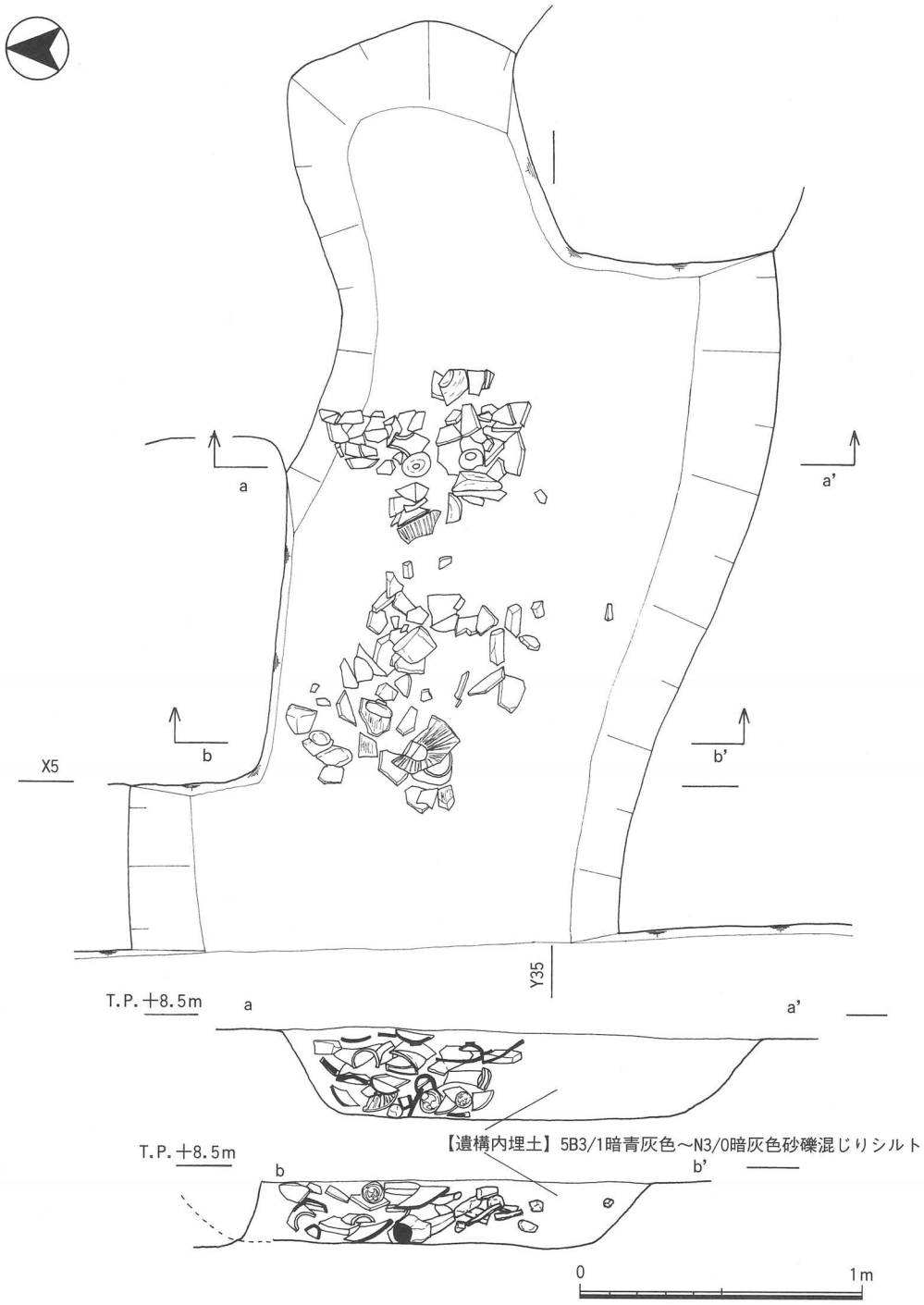
６Ｂ区で検出した。北部および東部は調査区外に至るために全容は不明である。検出規模は、南北長3.38ｍ以上、東西長0.82ｍ以上、深さ0.3ｍ前後を測る。南部の西肩の一部は現代の撹乱を受ける。埋土は、炭化物を多量に含む黒色シルトが主体である。埋土内からは、17世紀前半に比定される唐津焼皿・碗・鉢、備前焼壷が出土した。

ＳＫ3107

６Ａ～６Ｂ・７Ａ～７Ｂ区内で「Ｌ」字状に曲がるＳＤ3101の内（北東）側で検出した。西側は調査区外に至り、北部は現代の撹乱で削平を受けているため、明確な掘方については不明である。ただ、西壁面観察の結果、掘方の切り合い関係から本遺構がＳＤ3101より先行することが確認できた。検出規模は、南北長2.92ｍ、東西長3.18ｍ、深さ0.3ｍ前後を測る。埋土は、下部が炭化物を多量に含む黒色粘土質シルト、上部はブロック状の粘土や粗砂等の２層で埋め戻されている。遺物は、下部埋土内から壁土・建築部材とともにコンテナ（40㎝×60㎝×20㎝）５箱分を数える大量の瓦類で、上部から肥前系染付磁器の蕎麦猪口・筒形碗・碗蓋・碗、炮烙、火鉢のほか、特異なものとして五輪塔・宝篋印塔が出土した。機能としては大型の廃棄坑であるが、出土遺物の多くは火を受けておらず、火災に関係する遺構ではない。おそらく屋敷の建て替えに伴う廃棄処理土坑で、先に瓦をまとめて廃棄した後、皿・碗など不要となった日常雑器を廃棄したものと思われる。

ＳＫ3108

７Ａ～７Ｂ区で検出した。一辺1.2ｍ前後の隅丸方形の土坑に、幅0.5ｍ前後の溝が東西方向に取り付いた形をしているが掘方の西部は調査区外に至る為、全容は不明である。埋土は黒色シルトを主体とし、砂礫を若干含む。埋土内から、19世紀前半の土師器皿、肥前系染付磁器筒形碗・小碗・鉢、香炉、鍋、土瓶、炮烙、土師質羽釜が出土した。



第12図　ＳＫ3113　平・断面図（Ｓ＝1/25）

ＳＫ3113（第12図）

７Ａ～７Ｂ・８Ａ～８Ｂ区間で検出した。他に比して大型の土坑であるが、西部は調査区外に至るため全容は不明である。北部をＳＫ3110、南東部を**埋桶3101**がそれぞれ掘方の一部を切る。検出規模は最大長3.18m、最大幅1.52mを測る。深さについては、東から西に向かって緩やかに深くなり、東部では0.2m前後で西部の最も深いところで0.5mを測る。埋土は暗青灰色～暗灰色の砂礫混じりシルトである。埋土内からは、18世紀前半に位置付けられる唐津焼碗、肥前系染付磁器瓶・皿、関西系陶器碗が出土したほかに、瓦片・焼壁片がある。

ＳＫ3115

８Ｂ区で検出した。北西－南東方向に長い楕円形を呈する。最大長1.52m、最大幅1.02m、深さ0.19mを測る。埋土は砂礫を多く含む暗茶灰色シルトが主体となる。埋土からは、19世紀前半代に比定される肥前系染付磁器蕎麦猪口・筒形碗・碗蓋・碗、淡路産珉平焼小判皿、土瓶、灯明皿、碁笥が出土した。

ＳＫ3117

ＳＫ3113の南側で検出した。東部の一部がＳＫ3116によって切られる。平面は東西に長い楕円形で、長辺2.17m、短辺1.12mを測る。深さは、東部は0.4mで、西部は0.7mと段状に深くなる。埋土は埋め戻し土である。埋土内からは、18世紀前半に位置付けられる唐津焼碗、肥前系青磁皿・染付磁器碗、丹波焼擂鉢、炮烙が出土した。

ＳＫ3119

ＳＫ3117の南東側で検出した。平面は不定形で、長辺2.18m、短辺1.52m、深さ0.27mを測る。埋土は、炭を多く含む黒色シルトが主体であるが、出土遺物の多くは火を受けておらず、火災に関連する遺構ではないと思われる。埋土内からは、17Ｃ前半代の唐津焼皿・碗、肥前系陶器碗・染付磁器碗、備前焼擂鉢、土師器甕が出土した。

【溝（ＳＤ）】

第１区で４条（ＳＤ1101～1104）、第３区で２条（ＳＤ3101・3102）の総数６条を検出した。その中で最も時期が古いものが17世紀前半に位置付けられるＳＤ1102で、それ以外はすべて19世紀代の遺構である。機能としては、屋敷の区画溝と推定されるもの（ＳＤ1102）、上水施設に伴うもの（ＳＤ1101・1103・1104）の２種に分類できる。以下、各溝の詳細について記述する。

ＳＤ1101

１～３Ｄ区で検出した。上水樋として竹樋を伴う溝である。溝は南北方向に伸び、南部でＳＥ1104の井戸側に接続され、北部は調査区外に至る。掘方の規模は検出長9.18m、幅0.6～0.7mで、横断面は凹形で両肩はほぼ垂直に掘られている。深さについては、北部で0.5m前後、南部で約0.7m前後と底面のレベルをみると南部が北部より0.2m前後低くなっている。この数値から判断して、北部から南部方向へ竹樋を通して配水されており、ＳＥ1104は溜め井戸としての機能も兼ね備えていたことが考えられる。一方、竹樋は径７cm前後のもので、挿入されたＳＥ1104から北部へ約８mのところで「継手」によって、もう一方から径の若干異なる竹筒が接続されている。継手は16cm立方を測る木製で、両側から径の異なる円形の挿入孔が空けられている。埋設土内からは、19世紀前半代の肥前系染付磁器碗、土師質羽釜のほか、混入品として17世紀前半の所産とみられる炮烙が出土した。

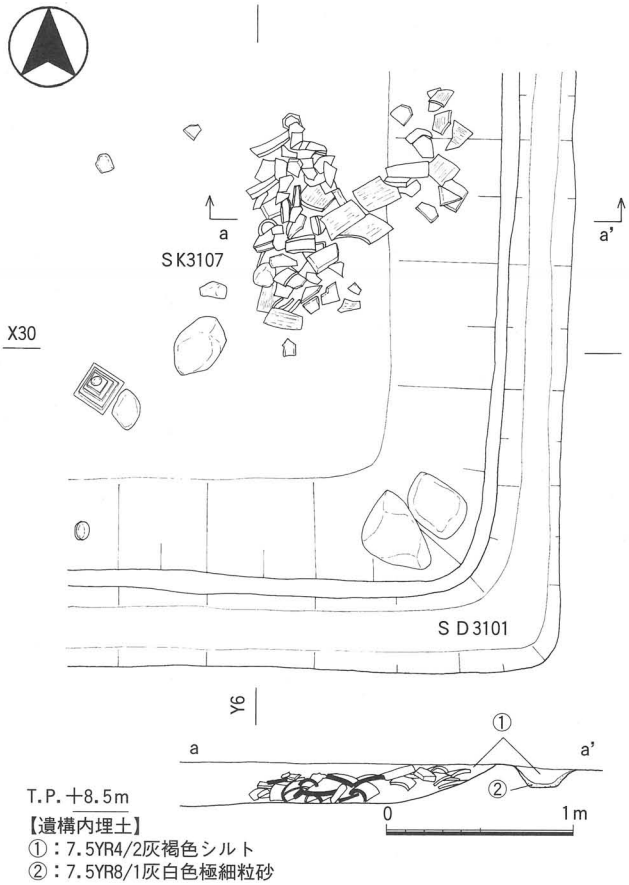
ＳＤ1102

２Ｃ～２Ｅ・３Ｃ～３Ｅ区間の調査区北部にあたるところを、南西―北東方向に伸びる溝である。南西部は調査区外に至り、北東部はＳＫ1105およびＳＫ1109に切られ、それ以東は確認できない。しかし、２Ｅ区の北東隅部分にあたる壁面では本溝とみられる逆台形の掘方が確認できることから、さらに調査区外の北東部へ向かって伸びるものと推定される。検出長は12.13m、幅0.82～1.64m、深さ0.12～0.25mで、北東部にいくほど深くなっている。また、溝の中央部では、３基の土坑（ＳＫ1106～1108）と２個の礎石の抜き取り穴（ＳＰ1105・1106）が溝を切っている。遺

構間における平面の掘方の先後関係から、本溝が一旦人為的に埋め戻された後に、これらの遺構が構築されていることがわかる。埋土については、下部はラミナを有する黄灰色の砂・シルト層、上部は偽礫を多く含む人為的な埋め戻し土である。北東端部では、径0.5m前後の自然礫２点と拳大ほどの自然礫６点が埋め戻し土と一緒にひとかたまりになって廃棄されていた。ほかに遺物としては、南西部の埋め戻し土内に集中して、17世紀前半に位置付けられる唐津焼碗・鉢、肥前系青磁皿、信楽焼壷が出土した。また、溝中央部の南肩付近では、犬と推定される獣骨が見つかった。本溝の機能について、下部の堆積状況から水が流れていたこと、そしてその規模から屋敷の区画溝であったことが想定される。しかし、江戸時代の絵図からはその様子が窺えず、それより以前の時期の屋敷に関わる溝であった可能性が高い。

ＳＤ1103

４Ｄ～５Ｄ区で検出した南北方向の溝で、南部は調査区外に至る。本溝は、遺構内埋土に竹樋の存在を示唆する竹筒の破片が数点含まれていることと、平面の掘方の検出状況から、北部がＳＥ1106につながると見られ、ＳＤ1101同様に上水施設に伴う水路であったことが言える。検出長4.18m、幅0.8m前後を測る。深さは、検出面から北部が0.54m、南部が0.42mと北部の方が0.12m深くなっていることから南側からＳＥ1106に取水された可能性が高い。掘方の断面形状は凹形を呈しており、両肩はほぼ垂直に掘られている。埋土は偽礫を多く含む人為的な埋め戻し土である。埋土内からは、19世紀前半代に位置付けられる肥前系磁器徳利、瓦質火鉢のほか、混入品とみられる17世紀後半頃の唐津焼鉢が出土した。



第13図　ＳＫ3107・ＳＤ3101　部分平・断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＤ1104

ＳＤ1103の東隣で、南北方向に並行して伸びる溝である。南部は調査区外に至り、北部はＳＥ1107に向かって伸びているが途中撹乱によって削平されている。機能としては底部付近に水が流れていたことを示す層厚３㎝前後の砂層が堆積しており、水路であったことが推察されるが詳細は不明である。規模は検出長1.38m、幅については0.65～1.32mと南部で広がる。深さは、0.1m前後と他の溝遺構に比して浅い。また、南部では径0.6m前後の礎石の抜取り穴とみられるピットに切られる。埋土は人為的な埋め戻し土で、内部から19世紀前半代の肥前系染付磁器碗の破片が数点出土した。

ＳＤ3101（第13図）

６Ａ～６Ｂ・７Ａ～７Ｂ区で検出した。「Ｌ」字状の溝で、北部はＳＫ3103の南部側で留まる。検出規模は南北長約５m、東西長約３m、幅0.2～0.3mで、深さは0.05～

0.1ｍを測る。埋土は底面には薄い灰白色の砂層で、上部は偽礫を多く含む人為的な埋め戻し土である。埋土内からは、18世紀末～19世紀初頭頃の肥前系染付磁器の筒形碗が出土した。

ＳＤ3102

ＳＤ3101の南東側で検出した。東西方向の溝と思われるが検出できたのは東部の一部で、大部分はＳＤ3101によって削平される。検出長0.64ｍ、幅0.48ｍ、深さ0.05ｍを測る。埋土内からは、19世紀前半代の染付磁器小坏、土瓶蓋、行平蓋が出土した。

【埋め甕遺構】

第１区と第２区の２箇所で複数の大甕が埋設された「甕蔵」の一部と、第１区で「便槽甕」１点、第３区で「水甕」とみられるものがみつかった。なお、第１区の「便槽甕」(**埋め甕ａ**)と第３区の「水甕」(**埋め甕ｂ**)については重機掘削中に見つかったもので、遺構本来の掘方を捉えることができなかった。以下、各遺構の詳細について記述する。

埋め甕遺構群1101

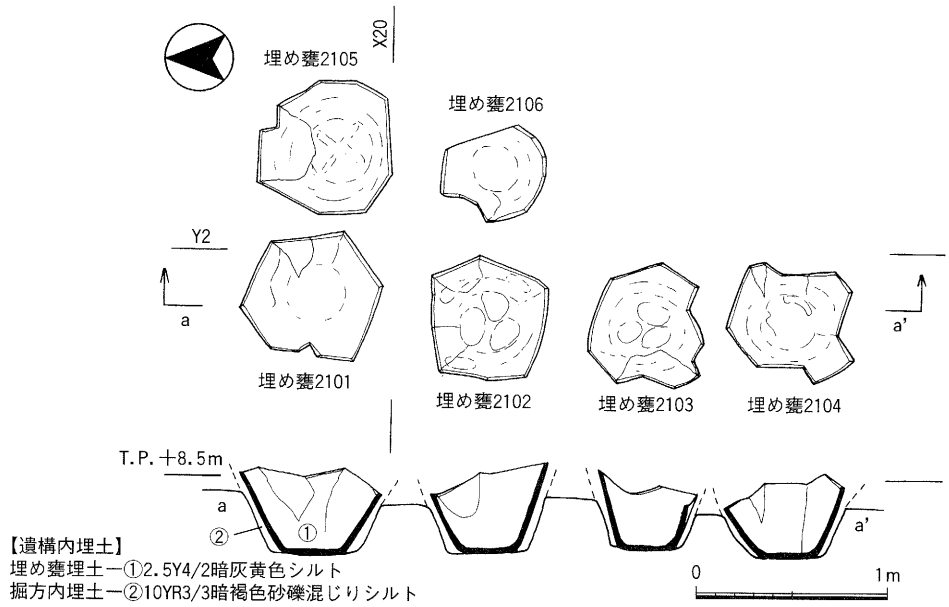
４Ｅ～５Ｅ区で検出した。原形を留める甕は残存していなかったが、埋め甕の抜取りを示唆する穴を12箇所検出した。掘り込み埋土内から備前焼大甕の口縁部および破片が数点出土し、その残片から推測すると後述の第２区でみつかった備前焼大甕と同等のものと思われる。掘方の平面は円形または楕円形を呈し、規模は平均すると径0.7ｍ前後、深さ0.1ｍ前後を測る。東側は調査区外に至るため不明であるが、最初に東西方向２列で６個以上の甕が据え付けられていたが、後に何らかの理由で抜取られ、再び南側へずらして２列で６個以上の甕が据え付けられたものと思われる。それは、埋め戻し埋土の相違によって窺える。最初の抜取り穴の方は粘土質中粒砂を主体とした均質な埋め戻し土であるのに対し、その南側の一部を切る後の抜取り穴の方は、偽礫を多量に含むグライ化した粘土質シルトとなる。新旧双方ともに埋土内から大甕の破片以外に肥前系染付磁器の細片が少量出土した。また、これらの埋め甕を埋設するための土坑、いわゆる地下式倉庫や蔵といった遺構の掘方については、上層が工場建設の際に撹乱をうけており、確認することはできなかった。

埋め甕ａ(図版二)

重機掘削中にＳＥ1104の南東側で確認した。丹波焼甕を便槽に使用した埋め甕である。掘方の法量・埋土等については、甕を発見した時点で周囲の埋土は取り除かれていたため不明である。甕は底部を打ち欠き、上下逆さまの状態で埋められていたと思われる。甕の法量は残存高約45.5㎝、体部最大径51.2㎝を測る。甕の内側には乳白色の石灰質分が厚くこびりついていた以外、遺物は見つからなかった。丹波焼甕は17世紀後半の所産である。

埋め甕2101～2106(第14図　図版三)

４Ａ～５Ａ区で、南北方向２列で６個体の埋め甕を検出した。甕は三石入りの備前焼大甕で、底部から体部下半が遺存し、上半部は破壊され底体部内に落ち込んでいた。甕の据付方法は断ち割り確認調査の結果、大甕の底部よりやや大きめ(径60㎝前後)の円形の穴を掘り、そこに大甕を設置した後、掘方との隙間に土(暗褐色の粘土質シルト)を入れて固定していることがわかった。遺存していた甕の底体部内からは、甕上半部位外に17世紀前半に比定される唐津焼皿、備前焼徳利、瓦燈が出土した。なお、これらの埋め甕に関連する地下式倉庫や蔵などの掘方については第１区の埋め甕遺構群と同様、現代の撹乱によって破壊されているため確認できなかった。



第14図　埋め甕2101～2106　平・断面図（S＝1/40）

埋め甕ｂ

８Ａ区の西壁沿いで検出した。本遺構も第１区の**埋め甕ａ**と同様、重機掘削中に確認したため、掘方の全容については不明であるが、壁断面の観察から推定すると径0.9m前後を測るものと思われる。深さについては、第１層下面から約0.5m掘り下げ、さらにその面から内側に径約0.4m、深さ0.15mの規模で掘られている。甕は、上半部が工場建設時に破壊されているため全容および産地は不明であるが、残存するところでは体部最大径52cm、底径21.5cm、残存高44.5cmを測る（第44図　277）。甕と掘方との間は、底面から上に約0.3mまで上層が黄褐色～暗灰黄色のシルト質粘土層、その上はにぶい黄色を呈する均質な粗粒砂によって埋め戻し固定している。甕内埋土は人為的な埋め戻し土である。甕内および掘方の各埋土内から、19世紀前半代に位置付けられる肥前系染付磁器皿・碗、瓦質土器の破片が数点出土した。

【埋め桶（図版五）】

第３区の８Ｂ区で、埋め桶を１箇所（**埋め桶3101**）検出した。掘方の上部は後世に削平されており、全容は不明である。残存するところで、平面は径1.15mのほぼ円形、深さ0.2m前後である。その掘方底部には、径0.7m前後、厚さ0.05m前後を測る桶の底板のみが残存していた。側板は抜き取られたものか一片も残存していなかった。埋め戻し埋土内からは、19世紀前半代に位置付けられる土師器皿、磁器製瓶、丹波焼徳利が出土した。

【落ち込み（ＳＯ）】

掘方の肩部は明瞭ではなく、凸凹を呈しながらなだらかに傾斜し、平面の広さに反して底面までは浅く、人為的に掘削されたものか否か判断のつきにくいものを落ち込みとした。それらは第１区で２箇所（ＳＯ1101・1102）確認した。以下、各詳細について記述する。

ＳＯ1101

２Ｅ～３Ｅ区で検出した。西部は現代の撹乱で削平されるほか、部分的に井戸、土坑、礎石抜き取り穴といった遺構に切られる。検出規模は南北長3.38m、東西長3.02m、深さは0.2m前後を測る。平面は不定形、横断面は皿状を呈する。埋土は底から0.05m前後は水成のシルト質粘土層

で、上部は炭・灰・焼土に焼けた瓦類と木舞等の建築部材が多く含まれる堆積層である。これからは、火災にあった屋敷の処理場として利用されたことが窺われる。上部の埋土からは、瓦片のほか、17世紀前半代に比定される唐津焼皿・碗、備前焼徳利、火鉢が出土した。

ＳＯ1102

４Ｃ～４Ｄ・５Ｃ～５Ｄ区間で検出した。西部は調査区外に至り、東部は現代の撹乱で部分的に切られるほかに、井戸や土坑によっても部分的に切られる。検出規模は東西長4.92m、南北長3.73m、深さ0.1m前後を測る。埋土は下部がグライ化した水成によるシルト質粘土で、上部は炭・灰の薄層と焼土が堆積する。埋土内から、火災を受けた瓦類をはじめ、瀬戸美濃系や肥前系の陶磁器類の破片が出土した。

【柱穴・礎石抜き取り穴(ＳＰ)】

建物に伴うと判断される柱穴および礎石抜き取り穴を、第１区－22個(ＳＰ1101～1122)、第２区－２個(ＳＰ2101・2102)、第３区－３個(ＳＰ3101～3103)の総数27個検出した。柱根が遺存するもの、あるいはその痕跡を留める柱穴とみられるものは、ＳＰ1116・1117・1119・2101の４個のみで、それ以外はすべて礎石建物に伴なうものと考えられる。また、礎石については後世の整地等によって遊離し原位置を保っているものはなく、すべて抜き取り穴でしか確認できない。遺構の分布としては、第１区の北東部に集中して見られるが、全体を通して建物が復原できるような規則性をもつ柱穴および礎石抜取り穴は確認できなかった。平面の形状は、概ね円形と楕円形の２種に分類される。なお、個々の法量等の詳細については表２に掲載した。

表２　第１面　ＳＰ一覧表(※法量の単位はcm、(　)内数値は部分検出である。)

遺構番号	地点	長径－短径	深さ	平面形状	埋土	出土遺物	備考
SP1101	3C	56.4－45.2	4.6	楕円形	7.5YR4/2褐色シルト		
SP1102	3C	32.3－18.0	4.5	楕円形	7.5YR4/2褐色シルト		
SP1103	4C	32.1－30.9	16.2	円形	7.5YR4/2褐色シルト	磁器片	
SP1104	4C	42.0－28.7	6.9	楕円形	7.5YR4/2褐色シルト		
SP1105	2D	41.8－32.2	12.2	円形	2.5Y5/4黄褐色砂礫混じりシルト		
SP1106	2D	(42.1－38.9)	16.5	不明	2.5Y5/4黄褐色砂礫混じりシルト	瓦質土器片	
SP1107	3C	(38.6－35.3)	9.1	不明	2.5Y4/1黄灰色シルト		
SP1108	3C	(41.8－38.4)	9.2	不明	2.5Y4/1黄灰色シルト		
SP1109	2D～2E	48.0－38.1	7.2	円形	5YR6/4にぶい橙色シルト	磁器片	
SP1110	2E	49.5－41.8	6.5	円形	5YR6/4にぶい橙色シルト	土師器片	
SP1111	2E	61.1－45.3	14.8	楕円形	7.5YR8/4浅黄橙色シルト		
SP1112	2E	(48.0－37.6)	9.0	不明	5YR6/4にぶい橙色シルト	磁器片	
SP1113	2E	51.7－39.3	10.8	楕円形	5YR6/4にぶい橙色シルト	磁器片	
SP1114	2E	57.8－39.0	6.2	楕円形	5YR6/4にぶい橙色シルト	磁器片	
SP1115	2E	68.1－41.4	9.4	楕円形	5YR6/4にぶい橙色シルト		
SP1116	2E～3E	45.7－43.6	22.2	隅丸方形	5YR6/4にぶい橙色シルト	土師器・陶磁器の破片	柱根遺存
SP1117	3E	50.0－48.3	16.6	円形	5YR6/4にぶい橙色シルト		柱根遺存
SP1118	3E	55.1－28.7	12.7	楕円形	7.5YR8/4浅黄橙色シルト		
SP1119	3E	41.8－39.8	7.4	円形	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト		柱根遺存
SP1120	3E	(40.0－28.6)	6.6	不明	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト		
SP1121	4E	(31.9－25.4)	11.7	不明	5G3/1暗緑灰色シルト	磁器片	
SP1122	4E	39.2－28.6	6.6	円形	5G3/1暗緑灰色シルト		
SP2101	4A	(48.8－18.0)	23.1	不明	5YR4/2灰褐色シルト		柱根遺存
SP2102	4A	(45.5－21.9)	12.4	不明	5YR4/2灰褐色シルト		
SP3101	7B	45.0－31.5	5.6	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混じりシルト		
SP3102	7B	39.7－25.2	9.0	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混じりシルト		
SP3103	8B	40.8－24.0	11.6	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混じりシルト		

第４節　第２面　室町時代末期の遺構

第２面では「層序」で既述したように調査期間の制約から、天正五年(1577年)の「石山合戦」の火災に伴うと推定される焼土層を境に、「合戦以前」と「合戦以後」の遺構を同一面で検出した。以下、第２面で検出した各遺構について、時期別に記述する。

≪合戦以前≫

【建物跡(ＳＢ)】

２Ｅ～３Ｅ区で、重なり合う礎石建物(ＳＢ1201)と掘立柱建物(ＳＢ1202)の２棟の建物を検出した。いずれも天正五年(1577年)の「石山合戦」時の火災によると推定される焼土に覆われていること、柱穴内に焼土および礎石に熱を受けた痕跡が見られる等から、合戦以前の時期にあたる建物ということになる。双方の先後関係については、礎石抜き取り穴と柱穴の切り合いから礎石建物が先行することがわかった。また、この２棟の建物は、江戸時代の絵図に見られる町割り区画に対し、わずかな角度ではあるが後述する**石組み溝3201**と同様に方向が異なっている。なお、２棟の各柱穴の法量等については、表３・４に掲載した。

ＳＢ1201(Ｐ１～８　第16図　図版七)

礎石抜き取り穴からの復原で、南北３間(2.8m)で、東西の柱間は不明瞭であるが1.5m以上を測るとみられる礎石建物である。西側に関しては、後世の土坑や現代の撹乱によって削平されているため不明である。付近に遊離している自然石の様子から、20～30cmを測る花崗岩を使用していたものと推定される。そしてその据え付けをみると、0.05m前後の深さまで掘って自然石を置き、隙間を砂礫混じりの粘土質シルトで埋め戻す地業を行っていることがわかった。また、建物の内側にも割り石が埋設されているところや遊離した礎石が数箇所見られることから、本建物は床張りの部分を有していた可能性がある。

ＳＢ1202(Ｐ９～16　第16図　図版七)

規模は南北５間(3.8m)、東西２間(2.0m)以上を測る掘立柱建物である。柱間寸法は南北が0.7m、東西方向については一定でない。柱穴は円形ないしは楕円形を呈する。規模は径0.3～0.5m、深さ0.2～0.35mを測る。柱痕跡の直径は10～12cmである。柱根そのものが遺存していた柱穴はなかった。

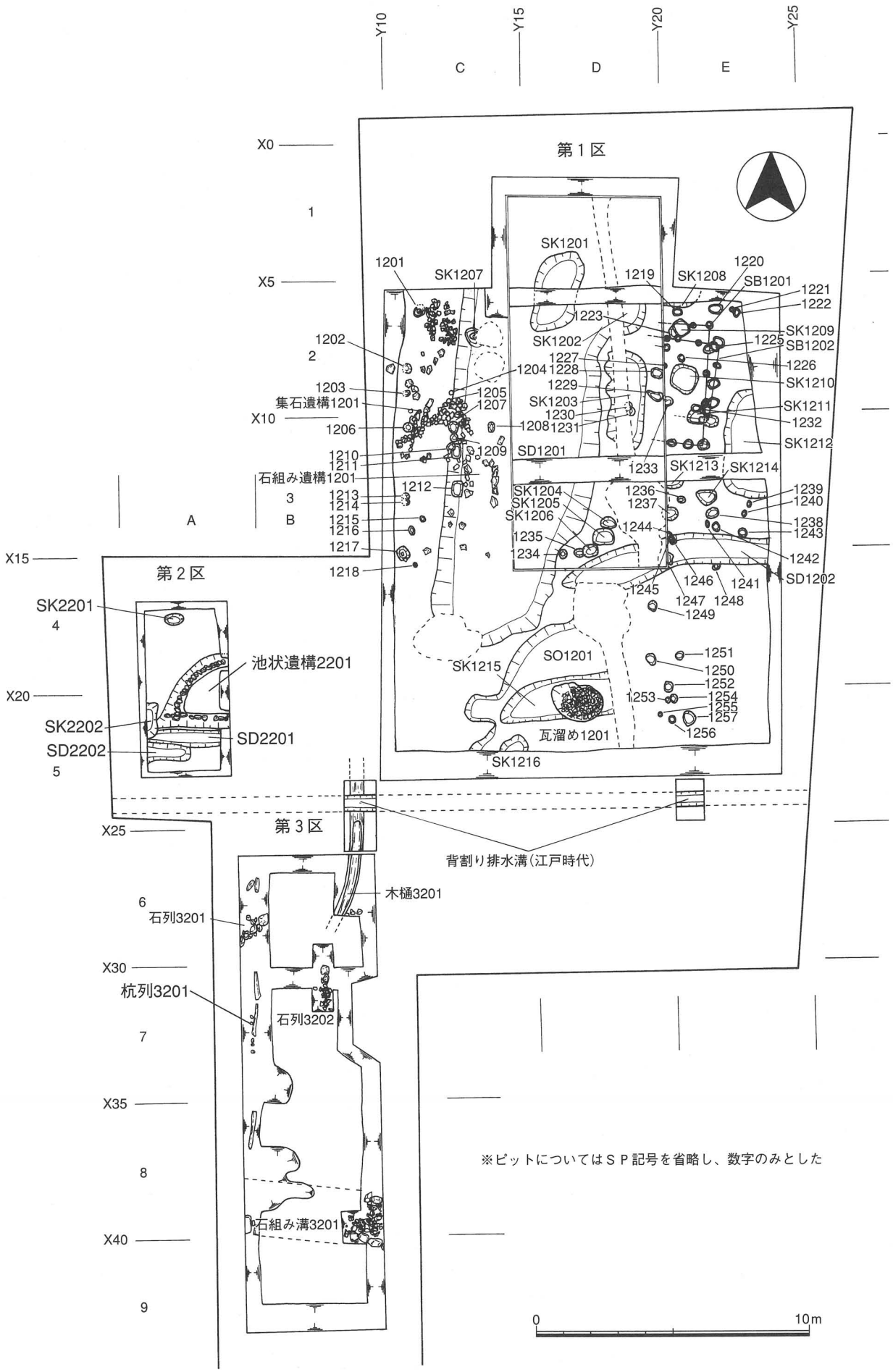
【柱穴・礎石抜き取り穴(ＳＰ)】

ＳＢ1201・1202以外に建物に関連すると思われる柱穴および礎石抜き取り穴を、第１区のみで55個(ＳＰ1201～1255)検出した。遺構が集中するのは北西部の集石遺構と北東部のＳＢ1201・1202付近の２地点である。江戸時代と同様に建物を復原するまでには至らなかったが、このうちＳＰ1201・1217・1237には掘立柱建物に伴うと見られる柱根のほか、ＳＰ1231の底部には根石が残存していた。ＳＰ1231の根石の石材は花崗岩で、一辺20cm前後、厚さ７cm程の上下面方形で平坦面を呈する。なお、個々の法量等の詳細については表３に掲載した。

【集石遺構】

集石遺構1201・石組み遺構1201(第17図　図版七・八)

第１区の北西部にあたる２Ｃ～４Ｃ区で検出した。集石は南北約11m、東西約４mの範囲に散在した状況で広がっており、規則性は認められないが、大まかにみると北部と中央部の２箇所に集中している。礫は安山岩および花崗岩の自然礫で、その大きさは拳大～人頭大のものまである



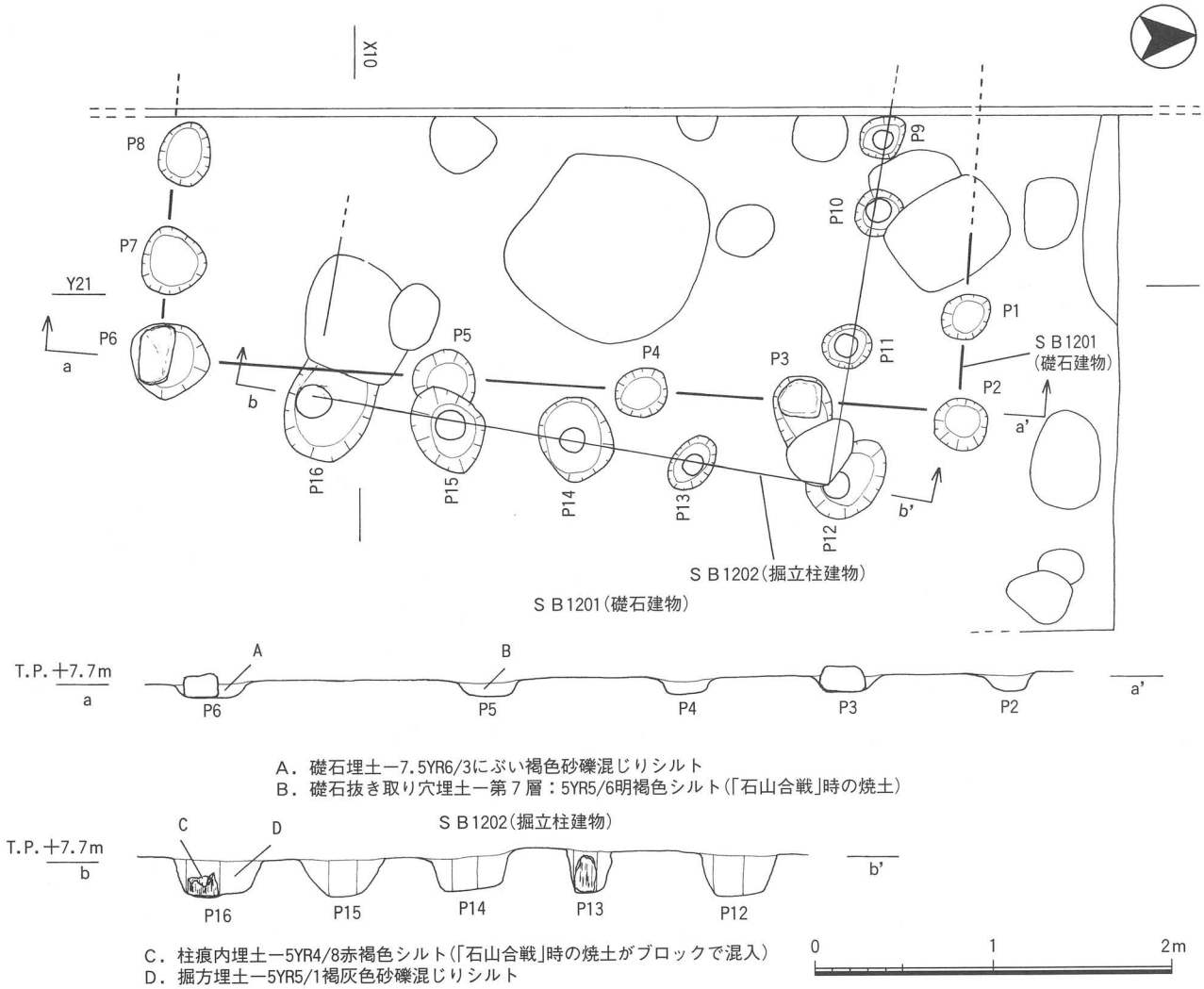
第15図　第２面（室町時代末）遺構平面図（Ｓ＝1/200）

表3　第2面　ＳＰ一覧表(※法量の単位はcm、(　)内数値は部分検出である。)

遺構番号	地点	長径－短径	深さ	平面形状	埋土	出土遺物	備考
SP1201	2C	(39.8－37.6)	21.6	不明	2.5Y3/1黒褐色砂礫混じりシルト	瓦質土器片	柱根遺存
SP1202	2C	(38.7－22.1)	5.8	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1203	2C	(22.3－21.0)	6.1	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1204	2C	18.4－17.9	5.1	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1205	2C	18.0－17.6	4.5	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1206	3C	39.8－38.0	7.8	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1207	3C	45.9－39.7	10.2	楕円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1208	3C	38.9－22.2	7.3	楕円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1209	3C	40.2－39.0	6.9	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1210	3C	33.8－31.5	8.4	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1211	3C	52.3－33.1	9.3	隅丸長方形	2.5Y3/1黒褐色砂礫混じりシルト	土師器・陶磁器片	
SP1212	3C	59.8－40.0	8.7	隅丸長方形	2.5Y3/1黒褐色砂礫混じりシルト	土師器・陶磁器片	
SP1213	3C	(28.4－15.0)	4.6	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1214	3C	(27.3－16.5)	4.8	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1215	3C	28.8－20.2	6.6	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1216	3C	35.6－21.7	5.3	楕円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1217	3C～4C	50.0－43.8	19.5	隅丸方形	10YR3/3暗褐色シルト	土師器・瓦片	柱根遺存
SP1218	4C	19.3－18.5	5.5	円形	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)		
SP1219	2E	39.8－25.7	7.8	楕円形	5YR5/1褐色砂礫混じりシルト		
SP1220	2E	38.9－26.7	8.3	楕円形	5YR5/1褐色砂礫混じりシルト		
SP1221	2E	20.9－19.2	6.0	円形	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1222	2E	38.7－28.6	7.0	楕円形	5YR5/1褐色砂礫混じりシルト		
SP1223	2E	(40.2－29.0)	7.7	不明	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1224	2E	28.7－21.4	5.8	円形	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1225	2E	45.7－29.3	6.0	楕円形	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1226	2E	31.2－29.1	5.3	円形	10YR6/2灰黄褐色シルト		
SP1227	2E	(20.0－14.2)	4.5	不明	10YR6/2灰黄褐色シルト		
SP1228	2D	45.8－40.0	6.7	楕円形	10YR6/2灰黄褐色シルト		
SP1229	2D	59.6－30.4	8.0	不定形	10YR6/2灰黄褐色シルト		
SP1230	3D	(29.5－12.3)	15.4	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)	土師器・瓦質土器片	
SP1231	3D	(30.2－21.1)	20.8	不明	5YR4/8赤褐色シルト(焼土)	瓦質土器片	根石遺存
SP1232	2E	41.0－25.4	5.7	楕円形	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1233	2E	(38.6－29.3)	7.8	不明	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1234	4D	39.7－40.2	5.4	円形	5Y3/1オリーブ黒色シルト		
SP1235	4D	(35.4－32.3)	6.1	不明	5Y3/1オリーブ黒色シルト		
SP1236	3E	31.8－25.6	7.4	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1237	3E	(50.3－45.7)	8.0	不明	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土師器片	柱根遺存
SP1238	3E	50.4－39.7	9.4	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	陶磁器片	
SP1239	3E	28.9－18.0	5.8	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1240	3E	35.2－21.2	6.3	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1241	3E	38.8－17.9	4.5	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1242	3E	39.7－29.6	7.2	楕円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1243	3E	36.2－35.6	8.7	円形	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土師器・瓦質土器片	
SP1244	3E	(21.1－15.8)	5.5	不明	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1245	3E	24.5－19.0	6.1	円形	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1246	3E	(31.3－18.6)	7.0	不明	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		
SP1247	4E	(45.3－15.2)	9.7	不明	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1248	4E	(31.0－25.2)	8.0	不明	7.5YR6/3にぶい褐色シルト		
SP1249	4E	40.0－35.2	7.9	隅丸方形	5G2/1緑黒色粘土質シルト		
SP1250	4D	49.7－31.6	10.1	不定形	5G2/1緑黒色粘土質シルト	磁器片	
SP1251	4E	36.1－30.2	5.5	円形	5G2/1緑黒色粘土質シルト		
SP1252	5E	41.6－32.2	6.3	隅丸方形	5G2/1緑黒色粘土質シルト		
SP1253	5E	21.9－20.0	4.3	円形	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト		
SP1254	5E	35.9－28.3	6.6	円形	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト		
SP1255	5D	21.4－15.3	4.0	円形	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト		
SP1256	5E	31.2－25.7	6.2	円形	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト		
SP1257	5E	58.7－49.6	8.9	不定形	5G2/1緑黒色粘土質シルト	土師器片	

が、多数を占めるのは拳大より一回り大きいものである。礫のなかには火を受けた痕跡を有すものが多数混在する。また、礫に混じって壁土・木舞の炭化したものも散乱している。

そういった礫群の床面は著しく焼けており、その上面には礫群に埋もれた礎石の抜取り穴と判断される遺構が17箇所(ＳＰ1202～1218)確認できた。規模は径0.2～0.4ｍで、平面が円形または方形を呈する。礎石が原位置を保っているのは皆無であり、すでに取り除かれて抜き取り穴でのみ礎石の存在が確認できた。礎石の抜き取り穴で建物を復原できる規則性をもつものはなかったが、当地点に礎石建物が存在したことは間違いないであろう。さらに火を受けた瓦類が集石内か



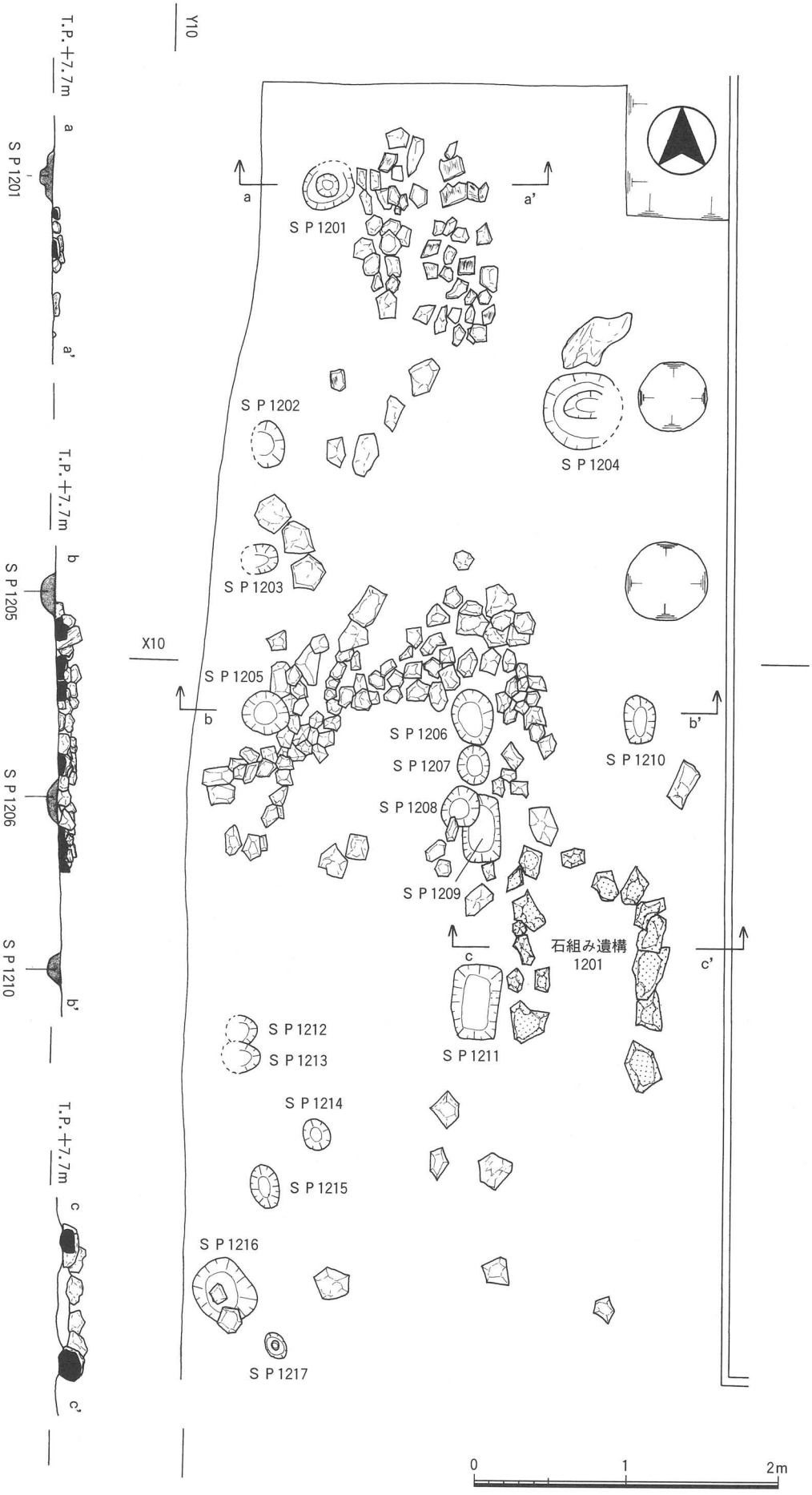
第16図　ＳＢ1201(礎石建物)・ＳＢ1202(掘立柱建物)　平・断面図(Ｓ＝1/40)

表４　ＳＢ1201　柱穴一覧表(※法量の単位はcm、(　)内数値は部分検出である。)

P番号	長径－短径	深さ	平面形状	埋土	出土遺物	備考
P1	31.5－25.2	6.7	円形	5YR5/6明褐色シルト	なし	
P2	31.1－29.7	8.5	円形	5YR5/6明褐色シルト	なし	
P3	(32.2－31.7)	10.1	不明	5YR6/3にぶい褐色砂礫混じりシルト	陶器片	礎石遺存
P4	31.8－27.2	7.8	円形	5YR5/6明褐色シルト	なし	
P5	(34.8－33.6)	6.9	円形?	5YR5/6明褐色シルト	なし	
P6	43.5－42.2	7.7	円形	5YR6/3にぶい褐色砂礫混じりシルト	なし	礎石遺存
P7	46.7－45.8	9.2	円形	5YR5/6明褐色シルト	なし	
P8	36.2－29.8	8.4	楕円形	5YR5/6明褐色シルト	陶器片	

表５　ＳＢ1202　柱穴一覧表(※法量の単位はcm、(　)内数値は部分検出である。)

P番号	長径－短径	深さ	平面形状	埋土	出土遺物	備考
P9	39.5－24.2	17.8	円形	・柱痕内埋土－5YR4/8赤褐色シルト ・掘方内埋土－5YR5/1褐灰色砂礫混じりシルト	瓦質土器片	
P10	(26.8－23.2)	19.4	円形		なし	
P11	27.8－24.5	23.1	不明		なし	
P12	(50.2－25.2)	22.5	楕円形?		なし	
P13	33.8－22.4	23.0	楕円形		土師器片	柱根遺存
P14	45.0－40.4	19.8	隅丸方形		なし	
P15	51.8－37.7	21.2	不定形		陶器片	
P16	(51.8－47.2)	21.3	不明		なし	柱根遺存



第17図　集石遺構1201　平・断面図（S＝1/40）

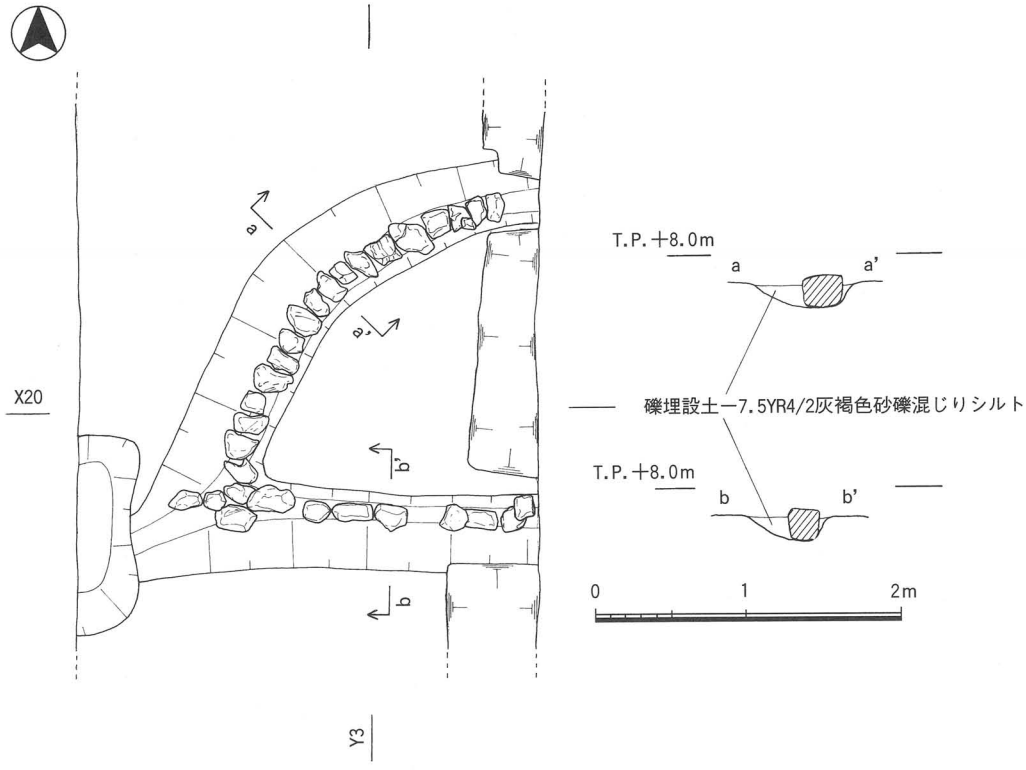
※S P 内埋土はすべて、第7層：5YR5/6明褐色シルト（「石山合戦」時の焼土）

ら多数出土し、とくに北部では集積して見つかった。集石遺構内全体における瓦の出土量は先述の古代瓦も含め、コンテナ５箱分を数える。また、本遺構の多数の礫については、整地の際に地盤を補強するために地中に敷かれたもの、あるいは土間としての作業場であったことなどが考えられる。礎石建物焼亡時の年代観を示す遺物として、本遺構内から16世紀末頃に比定される多数の土師器皿(灯明皿)をはじめ、瀬戸美濃系陶器皿、土師質甕、羽釜、火鉢が出土している。それ以外には伝世品として、16世紀前半頃の中国製輸入青磁碗が出土している。

また、規則性をもたない集石のなかにあって、１箇所だけ注目すべきところがある。それは先述の礫が集中する中央部の南東に位置するところで検出した**石組み遺構1201**である。本遺構は検出状況から明らかに人為的作用が窺えるもので、拳大～人頭大までの大きさの安山岩および花崗岩を用い、南側が空いた１段分の「コ」字状を呈する。規模は南北長約1.8m、東西長約1.2mを測る。内部には第７層の焼土が詰まっており、埋土内からは土師器皿と陶器の破片が少量出土した。本遺構の機能としては、竈や炉とするには内部に灰の痕跡や礫に被熱による赤化が認められない等から考えにくく、それよりは「石室」といった地下貯蔵庫であった可能性が高い。

【池状遺構2201(第18図　図版九)】

第２区のほぼ中央部にあたる４Ａ～５Ａ区で、径1.0m前後の弧状を描く石列を検出した。石材は上下がやや平坦を呈す一辺20～25cm、厚さ10cm前後を測る安山岩および花崗岩である。形状としてはやや角ばったものが多数を占め、検出できた数量は29個を数える。据え付けは、幅0.5m前後、深さ0.05m前後で先述した弧状の溝を布掘りし、そこへ礫を並べた後、その隙間に掘った深さの分だけ茶灰色の粘土質シルトで均質に埋め戻し、固定するものである。石列内側の埋土



第18図　池状遺構2201　平・断面図(Ｓ＝1/50)

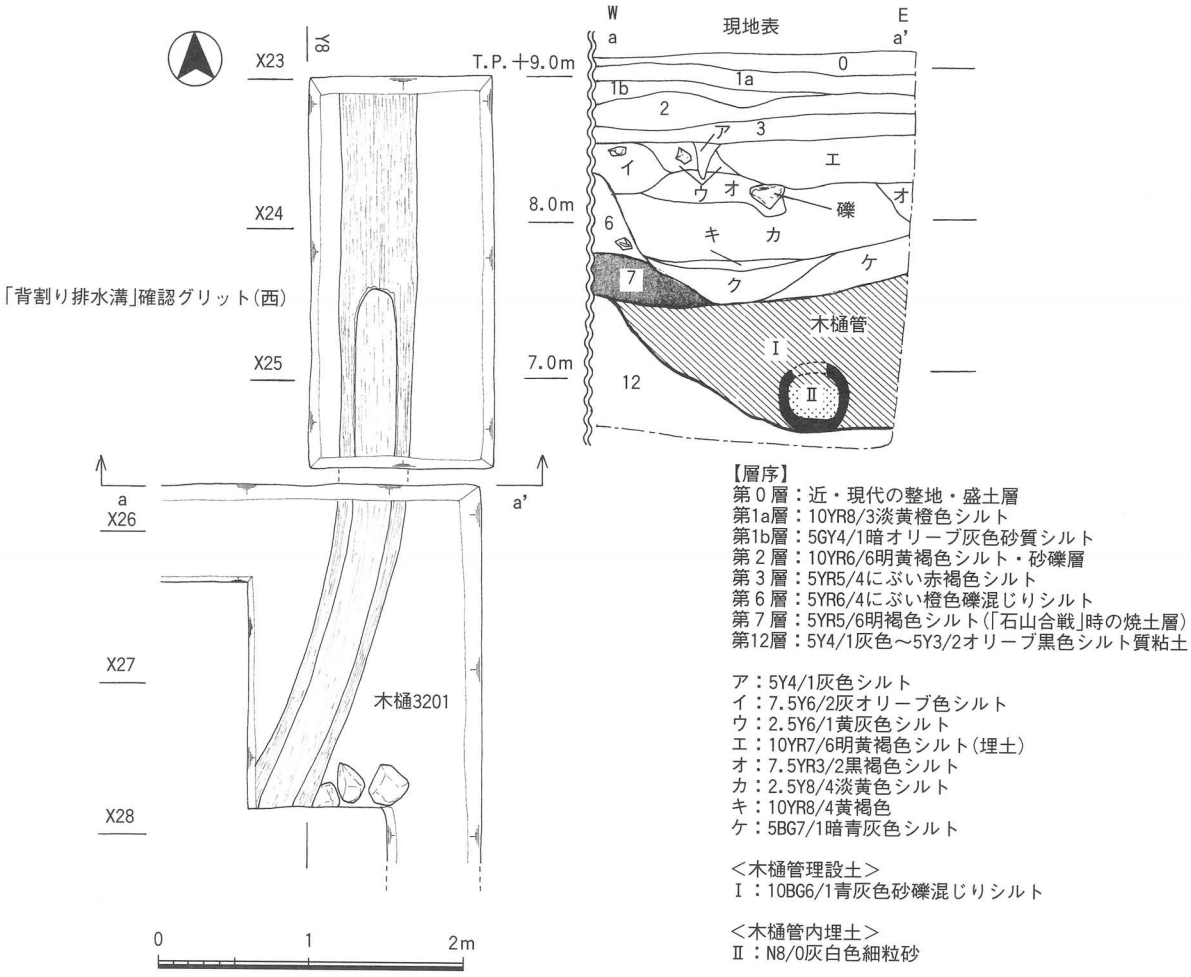
を観察すると、最深部0.54mで椀状に掘り窪められていることがわかった。埋土は上・中・下の3層で、それらは掘方に沿ってややレンズ状に堆積する。下部は0.1m前後の青灰色粘土、中部は0.15m前後の淡褐色砂質シルトの自然堆積層と判断できるもので、上部の0.25m前後は偽礫を多数含む茶褐色粘土質シルトで人為的に埋め戻されていた。この埋土と護岸的な石列の状況から、本遺構は庭園の一郭を占める池であったことが想定される。遺物は、上部の埋め戻し埋土内から土師器皿、備前焼擂鉢、羽釜の破片が数点出土した。

【排水施設】

第3区の概ね北半部では一連の排水施設と考えられる木樋3201、石列3201・3202、杭列3201を検出した。これらは構築状況から見て、暗渠であったことがわかる。

木樋3201(第19図　図版一〇)

6B区で検出した。木樋は北からやや屈曲して南西方向に向かう。検出長は後述する「背割り排水溝」のグリット調査の成果を含めると4.5m以上を測る。木樋は径0.5m前後の丸太材を用いた刳り抜き式のもので、一木から蓋の部分を切り除き、残部を刳り抜いた後に槙肌を詰めて蓋板を置き、釘を打ち付けるものである。検出時点では蓋部分が腐食しており、内部には灰白色の極～細粒砂で満たされていた。木樋内から遺物は出土しなかったが、周囲の埋め戻し埋土内からは、瀬戸美濃系陶器皿、土師質の甕およびミニチュアの羽釜が出土した。



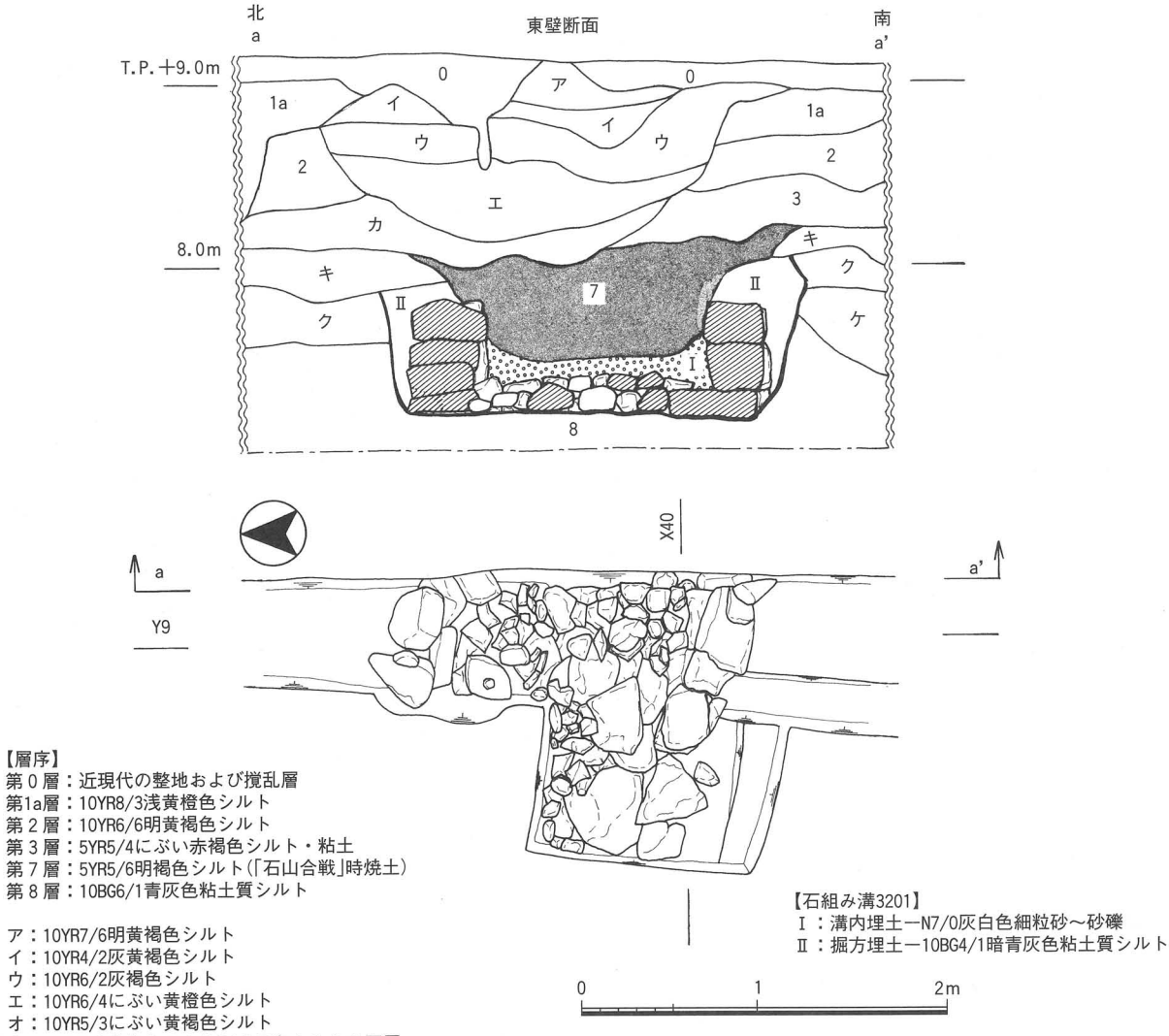
第19図　木樋3201　平・断面図(S=1/50)

石列3201・石列3202・杭列3201（図版一〇）

６Ａ～８Ａ・６Ｂ～８Ｂの範囲で検出した。これらはすべて木樋3201とつながる排水溝である。遺構範囲の確認を行うための部分的な調査であるために全容は不明であるが、相互の位置関係と底面のレベル高低差から判断すると、北から南西方向に排水されていたものと思われる。構造については、残存していた自然礫や木製部材（側板・杭）から推測すると、底板の有無は不明であるが、側板の内側を木杭で留め、外側を拳大～人頭大の花崗岩および安山岩を用いて固定し、蓋板を載せた後に埋め戻すといった工程で構築された木組みの暗渠排水溝であったと思われる。遺物は、石列3202周辺から土師器皿・常滑焼甕・産地不明焼締め陶器甕・瓦質香炉（獣脚）、杭列3201周辺から土師質の羽釜およびミニチュアの羽釜、火鉢が出土した。

【石組み溝3201（第20図　図版一一）】

第３区の南端部にあたる８Ａ～８Ｂ・９Ｂ区で検出した。安山岩および花崗岩を使用した石組み溝で、排水および屋敷区画を目的に構築されたものと考える。底面の深さから判断して、南東



【層序】
第０層：近現代の整地および撹乱層
第1a層：10YR8/3浅黄橙色シルト
第２層：10YR6/6明黄褐色シルト
第３層：5YR5/4にぶい赤褐色シルト・粘土
第７層：5YR5/6明褐色シルト（「石山合戦」時焼土）
第８層：10BG6/1青灰色粘土質シルト

ア：10YR7/6明黄褐色シルト
イ：10YR4/2灰黄褐色シルト
ウ：10YR6/2灰褐色シルト
エ：10YR6/4にぶい黄橙色シルト
オ：10YR5/3にぶい黄褐色シルト
カ：2.5Y8/6黄色シルトとN4/0灰色シルトの互層
キ：10YR7/6明黄褐色砂質シルト
ク：5Y7/3浅黄色粘土質シルト
ケ：10YR7/3にぶい黄橙色粘土質シルト

【石組み溝3201】
Ⅰ：溝内埋土ーN7/0灰白色細粒砂～砂礫
Ⅱ：掘方埋土ー10BG4/1暗青灰色粘土質シルト

第20図　石組み溝3201　平・断面図（Ｓ＝1/40）

から北西に流れていたものと思われる。検出長は5.1m、内幅1.2m前後、残存の深さは0.25～0.38mを測る。残存する側石は人頭大よりやや大きめのもので積みは2段、底は全面石敷きで側石と同大のものを使用するが敷方は粗く、隙間を拳大～やや大きめのもので詰めている。断面形状は凹形を呈する。埋土は下部が炭・灰を多量に含む灰色粘土質シルト、上部は第7層の焼土が側石肩部から落ち込む。遺物は、埋土上部から土師器皿、備前焼擂鉢、瓦質擂鉢、香炉、竈が出土した。

【土坑（ＳＫ）】

第1区ではＳＫ1204～1217、第2区ではＳＫ2201・2202の計16基を検出した。ほとんどは第1区からの検出である。粘土採掘坑と考えられるＳＫ1212以外は径がおおよそ1m未満のもので、江戸時代および後述の大型廃棄坑のような性格のものは確認されない。

ＳＫ1204～1206・1214

3Ｄ～3Ｅ区で検出した。検出長0.4～0.7m、深さ0.1～0.2mを測る。平面形は、ＳＫ1214が不定形である以外すべて東西に長い楕円形を呈する。埋土は4基ともに黒褐色を呈するシルト質粘土の単一層である。各埋土内からは、土師器および瓦質の土器片が僅かに出土した。

ＳＫ1207

2Ｃ区で検出した。東部は江戸時代の井戸ＳＥ1101に削平されるために全容は不明であるが、検出状況から径0.7m前後を測る平面円形を呈するものと推定される。断面形状は、逆凸形を呈する。埋土は黒褐色粘土質シルトの単一層である。埋土内からは、土師器皿および瓦質土器の破片が少量出土した。

ＳＫ1208

2Ｅ区で検出した。大部分は調査時の側溝掘削時に削平してしまったが、壁面の観察からさらに北部の調査区外に広がっているものと思われる。検出長1.18m、深さ0.17mを測る。埋土は暗褐色砂礫混じりシルトの単一層である。埋土内からは、15世紀後半の所産とみられる瓦質の羽釜が出土した。

ＳＫ1209～1211

2Ｅ～3Ｅ区で検出した。一辺0.5～1mを測る隅丸方形を呈する。深さは0.08～0.13mを測る。断面は逆台形で、底面は平坦である。埋土は灰褐色シルトの単一層である。各遺構の埋土内からは、土師器や瓦器の破片が少量出土した。

ＳＫ1212

2Ｅ～3Ｅ区で検出した。東部は調査区外に至るために全容は不明である。東西長1.08m、南北長3.97m、深さ0.24mを測る。埋土は、底から約0.05mまで水成のシルト質粘土が堆積し、上部はブロック状の粘土や粗砂等で埋め戻されている。遺物は皆無である。本遺構に関しては、埋土の状況から粘土採掘坑の可能性がある。

ＳＫ1215

4Ｃ～4Ｄ・5Ｃ～5Ｄ区で検出した。東部は江戸時代の溝ＳＤ1103によって削平されるが、検出状況から平面は東西に長い溝状を呈するものと推定される。検出当初は、その形状から溝と考えたが、遺構内埋土に流水を示すような水成層はなく、東部の掘方も先述した江戸時代の遺構に削平されるものの、それより以東で続く溝らしき痕跡もないために土坑とした。規模は、東西長4.12m、南北幅1.5m前後、深さ0.26mを測る。埋土は埋め戻し土で、炭化物を多量に含む暗茶灰色粘

土質シルトである。埋土内からは、土師器皿、陶器皿、瓦質土器のほか瓦の破片が数点出土した。

SK1216

SK1215の南部西寄りで検出した。南部は調査時の側溝掘削で削平してしまったために全容は不明である。規模は検出長1.02m、深さ0.23mを測る。埋土は炭を多く含む黒色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK2201

4A区で検出した。南北長0.42m、東西長0.73m、深さ0.19mを測る。平面は東西に長い楕円形、断面は逆台形を呈する。埋土は砂礫を多量に含む茶灰色粘土質シルトである。遺物は土師器皿と備前焼壷の破片が数点出土した。

SK2202

5A区で検出した。西部は調査区外に至るために全容は不明である。検出長1.34m、深さは北部が0.24mで南部が0.12mと北部が低くなっている。埋土は炭を含む黒色の粘土質シルトである。遺物は、土師器皿と丹波焼壷が出土した。

【溝(SD)】

第1区で2条(SD1201・1202)、第2区で2条(SD2201・2202)の4条を検出した。これらの溝は埋土にすべてラミナが観察されることから、水の流れがあったことがわかる。比較的規模の大きいSD1201については、埋土に含まれる遺物から鎌倉時代に廃絶した可能性がある。SD1202については、溝としての機能を失った後に廃棄場として利用されたことが溝内の出土遺物から窺える。また、この2条の溝については、その規模から屋敷地等の土地区画の役割をもつことも考えられる。第2区で検出した2条の溝SD2201・SD2202については、後述する石列2201とともにその位置関係から庭園に関連するものとして捉えることができよう。また、第3区の第2面で検出した木樋3201、石列3201、石列3202、杭列3201、石組み溝3201については、すべて排水を目的に構築されたものである。これら排水施設のうち木樋3201、石列3201、石列3202、杭列3201については暗渠排水溝、石組み溝3201については開渠排水溝である。なお、石組み溝3201を除く木樋・石列等を構築する際に掘削された溝肩の輪郭については、天正五年(1577年)の「石山合戦」時の焼土と推定される第7層除去後、第8層上面において入念に平面精査を行ったが検出することができなかった。調査区内壁面の観察においても、木樋・石列等の埋め戻し土が全域に広がっていることは確認できたが、掘方の切り込みを見つけることはできなかった。ただ、石組み溝3201との先後関係では、石組み溝3201の掘方が木樋・石列等の埋め戻し埋土の上面から切り込まれており、石組み溝3201の方が後に構築されたものであることがわかった。また、石組み溝3201は江戸時代の絵図や現代に見られる町割り方向に対し、東西を軸として北に約6度振っている。以下、各遺構の詳細を記述する。

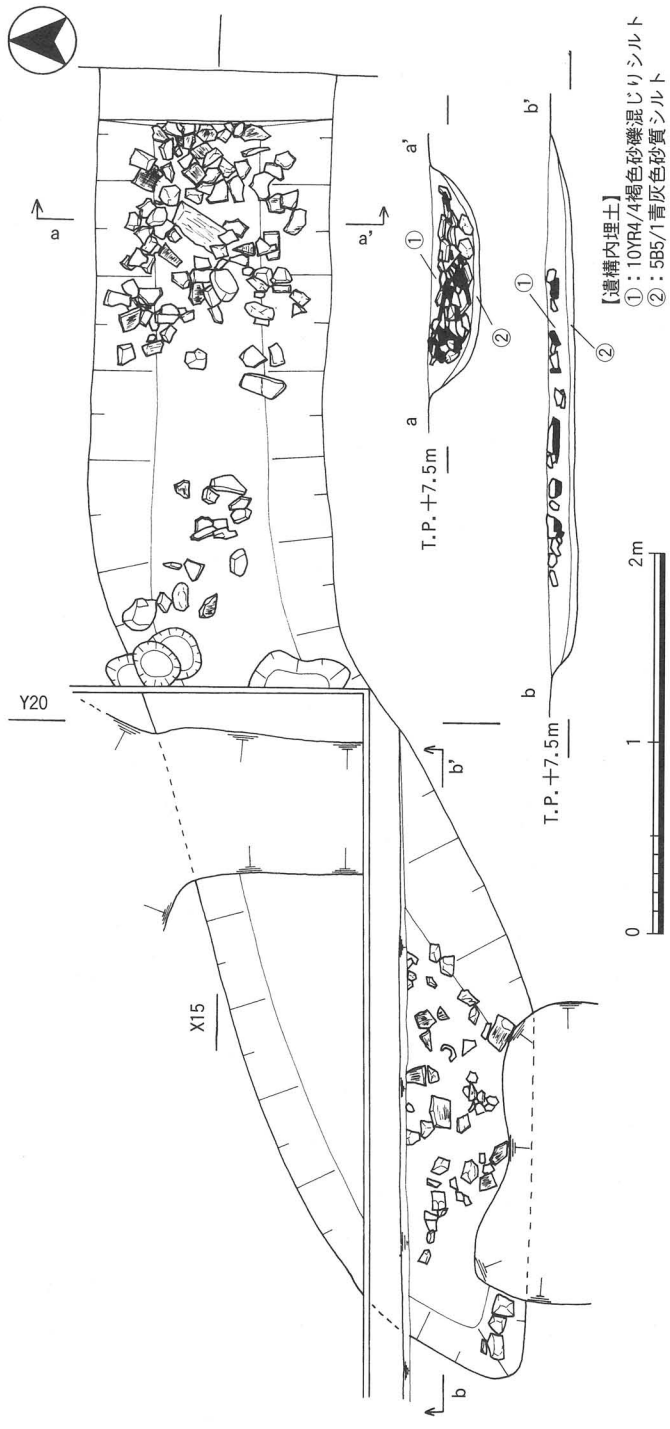
SD1201

1C～4C・1D～4D区間の広範囲で検出した。北端部と南端部は後世に削平されたものか判然としないが、規模は検出長13.23m、東西両岸の幅は南部で4.1m前後、北部で5.5m前後を測る。深さは南部で0.1m前後、北部で0.25m前後と北部へ向かうほど緩やかに深くなる。埋土は底部に灰白～黄白色の極細粒砂が5cm前後堆積し、その上に青灰色シルト～粘土質シルトが堆積する水成層である。以上、底面レベルと埋土の状況から勘案して、南側から北側にかけて流水作用

のあったことが考えられる。埋土内からは13世紀後半～14世紀代にかけての土師器皿、瓦器椀、瓦質火鉢の破片が出土した。

ＳＤ1202（第21図　図版八）

３Ｄ～４Ｄ・３Ｅ～４Ｅ区にかけて検出した東西方向の溝である。東部は調査区外に至り、西部は後世の削平および現代の撹乱によって削平され不明である。規模は検出長7.74m、幅1.0～1.5m、深さは0.2m前後を測る。埋土は下部の0.05～0.2mまでは流水の痕跡を示す灰白色の極細粒砂～シルトで、上部は炭化物を多く含む黄褐色～暗灰黄色のシルト質粘土である。遺物は上部から、土師器の破片と多量の瓦片が出土した。



第21図　ＳＤ1202　平・断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＤ2201・2202

５Ａ区で検出した。２条は並行して東西方向の調査区外に延びるが、ＳＤ2202は東部へいくにつれ浅くなり、掘方が不明瞭となる。規模はＳＤ2201が検出長2.73m、ＳＤ2202が1.62mを測る。深さは、両溝とも0.05～0.13mを測る。底面のレベルが一定でなく流路方向は不明である。両溝の埋土は、底面ににぶい黄色の粗粒砂層が薄く堆積し、上部は同色の細粒砂と粘土質シルトが互層となって堆積する。この埋土の状況は、流水がある時と澱んでいた時があることを示す。遺物はＳＤ2201から煤の付着した土師器皿の破片が数点出土したが、ＳＤ2202からの出土はなかった。これら２条の溝は、いずれも石列2201と有機的関係にある庭園遺構の一郭と考える。

【落ち込み（ＳＯ）】

ＳＯ1201

第１区の南部にあたる４Ｃ～４Ｄ・５Ｃ～５Ｄ区で検出した。西肩は一部垂直気味に急に落ち込む部分もあるが、大方は凸凹をもって緩やかに傾斜する。一方、南部は調査区外に至り、東部は江戸時代の井戸ＳＥ1106と溝ＳＤ1103のほか現代の撹乱で削平され、全形は捉えられない。検出規模は、南

北長4.73m、東西長4.2～5.4m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は上下２層に分層でき、上層は水漬かり状態を示すグライ化した青灰色シルト質粘土、下層は植物遺体の薄層が挟在する暗灰色粘土質シルトの自然堆積層である。埋土から遺物は出土しなかった。

≪合戦以後≫

【土坑（ＳＫ）・瓦溜め】

当該期に比定される土坑は、第１区の北部にあたる１Ｄ～３Ｄ区間でＳＫ1201・1202、３Ｅ区でＳＫ1213の計３基を検出した。３基とも炭･灰と焼壁片や炭化した木舞、そして被熱した土器類または瓦類を含む焼土が埋土であることから、火災後の焼け跡処理に伴う土坑と言える。

ＳＫ1201は、南北長約３m、東西幅約1.5m、深さ0.25mを測る。遺物は土師器皿、土師質甕のほか陶器や瓦質土器の破片が多量に出土した。また、混入遺物として12世紀後半～13世紀前半に比定される瓦器椀が出土している。

ＳＫ1202は、江戸時代の溝ＳＤ1101と調査時の遺構確認トレンチによって削平され、南東部にあたる一部分しか検出できなかった。検出規模は、東西南北の最大長１m前後、深さ0.15mを測る。遺物は陶器、瓦質土器の破片のほか、被熱した径15cm前後の花崗岩が５点出土した。

ＳＫ1213は３Ｅ区で検出したが、調査時の確認トレンチおよび西部は江戸時代の井戸ＳＥ1104に削平を受けるなど全容は不明である。検出部での最大長0.63m、深さ0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

そして同地区の２Ｄ区では、コンテナ約５箱分を数える大量の瓦を廃棄した**瓦溜め1201（第22図　写真６）**を検出した。本遺構は、不要となった瓦を捨てるために掘られたもので、原形を留める瓦は１枚もなくすべて破損した瓦を一括投棄している。また、これらの瓦には火を受けたものがなく、埋め戻し埋土にも焼土は見られない。このことから、本遺構は火災に関係するものではなく、屋敷の建て替え等に伴うものと考えられる。遺物は瓦のほかに陶器片数点と火鉢の小破片１点が出土した。先述のＳＫ1201・1202と比して、掘り込み層位および埋土の相違から一時期新しい遺構と考える。

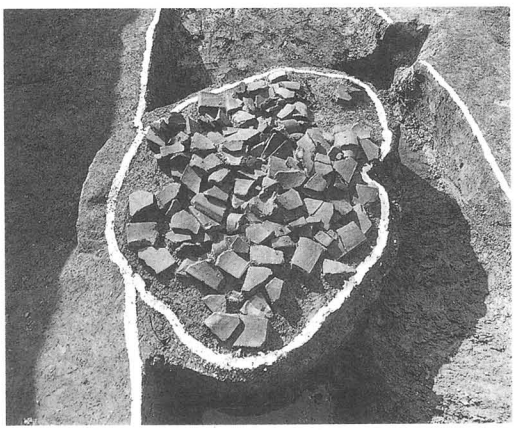
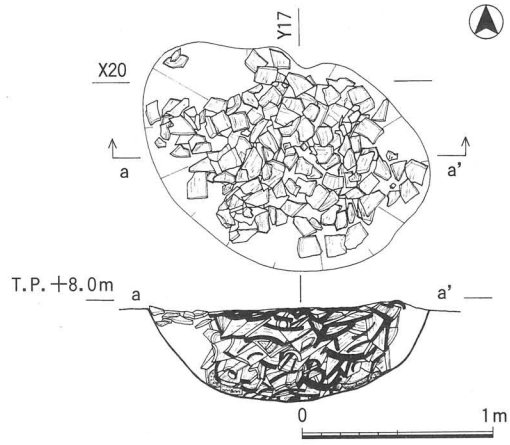


写真６　瓦溜め1201検出状況（東から）



【遺構内埋土】
N3/0暗灰色粘土質シルトと2.5Y3/1黒褐色シルトの互層

第22図　瓦溜め1201　平・断面図（Ｓ＝1/40）

第５節　第１区の下層調査と「背割り排水溝」の確認調査（図版一二）

１）第１区の下層調査

調査の結果、面的に遺構を捉えることはできなかったが、第10～17層間で弥生時代後期～鎌倉時代にかけての遺構の存在を確認することができた。以下、その内容について記す。

【平安時代後期～鎌倉時代】

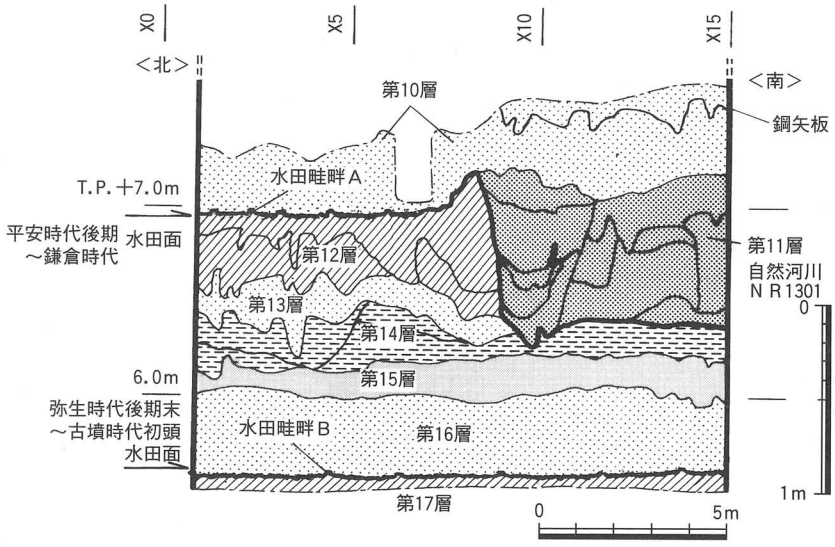
第12層の上面（T.P.＋7.0m前後）において、平安時代後期～鎌倉時代にかけての水田面（畦畔・足跡）と自然河川を確認した。水田面は調査区の北半部に分布するもので、第10層の砂層に覆われた５条以上の畦畔とヒト・動物の踏み込み痕を確認した。畦畔の規模は、幅30～40cm・高さは15cm前後を測る。踏み込み痕は、主に北部に集中していた。一方、自然河川は調査区の南東部分に位置し、東壁および南壁断面に見られるラミナと底面の高低差から北東から南西方向に流路をもつことがわかった。規模は地層断面の観察から幅７ｍ以上、深さ１ｍ前後を測るものと推測される。明褐灰色極細粒砂～細粒砂で構成され、径２～５cmの偽礫が含まれていた。

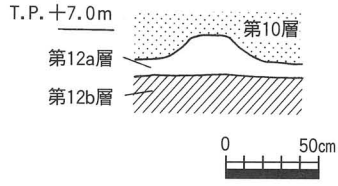
遺物は、畦畔および自然河川内から土師器皿・黒色土器Ａ類椀・瓦器椀等の破片が出土したが、いずれも細片で図化するまでには至らなかった。

【弥生時代後期末～古墳時代初頭】

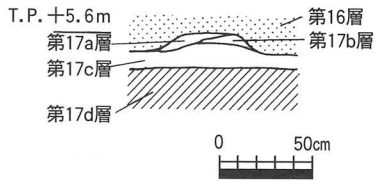
第17層上面（T.P.＋5.6m前後）において、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃に比定される水田面を示唆する畦畔状の起伏やヒト・動物の踏み込み痕を確認した。水田耕土と考えられる第17層上部にはマンガン斑や鉄分が沈着している。畦畔と判断できたのは５条を数え、各幅は40～60cm、高さは10cm前後を測る。畦畔の断面には作土のブロック第17－ａ層・第17－ｂ層（第18図　畦畔断面図参照）が認められることから、作土を耕起して畦畔が盛られたものと判断される。

遺物は作土にあたる第17層上部から畿内第Ⅴ様式～庄内式期に比定される壷・甕の破片が数点出土したが、すべて細片で図化することはできなかった。





【層序】
第12ａ層：5GY2/1オリーブ黒色砂礫混じりシルト質粘土
第12ｂ層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土
Ⅰ＜平安時代後期～鎌倉時代　水田畦畔Ａ断面図＞



【層序】（※第６図　地層断面模式図と対応）
第10層：5Y8/1灰白色細粒砂と7.5YR8/6浅黄橙色砂質シルトの互層
第11層：7.5YR7/1明褐灰色極細粒砂～細粒砂（自然河川．NR1301）
第12層：5Y4/1灰色～5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土
第13層：N3/0暗灰色シルト～極細粒砂
第14層：5B2/1青黒色～5B7/1明青灰色粘土質シルト
第15層：5G4/1暗緑灰色砂礫混じりシルト
第16層：7.5YR8/1灰白色細粒砂～極細粒砂
第17層：5B4/1暗青灰色～5PB6/1青灰色粘土（水田作土層？）

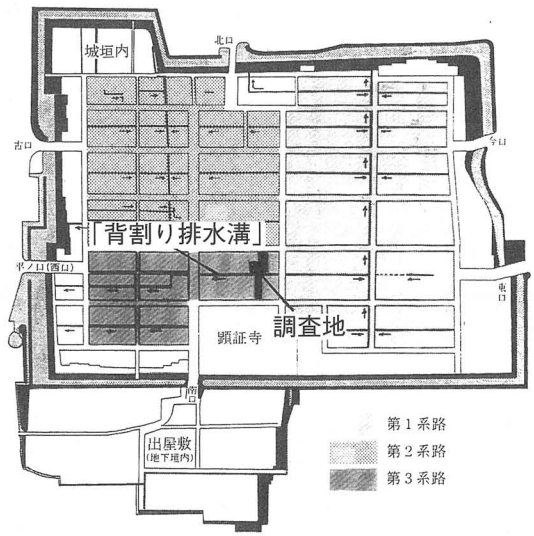
【層序】
第17ａ層：5BG4/1暗青灰色砂礫混じりシルト質粘土
第17ｂ層：10BG2/1青黒色砂礫混じりシルト質粘土
第17ｃ層：5PB2/1青黒色シルト質粘土
第17ｄ層：5B4/1暗青灰色シルト質粘土
Ⅱ＜弥生時代後期～古墳時代初頭　水田畦畔Ｂ断面図＞

第23図　第１区下層　東壁断面図（縦：Ｓ＝1/40、横：Ｓ＝1/400）および畦畔（部分）断面図（Ｓ＝1/40）

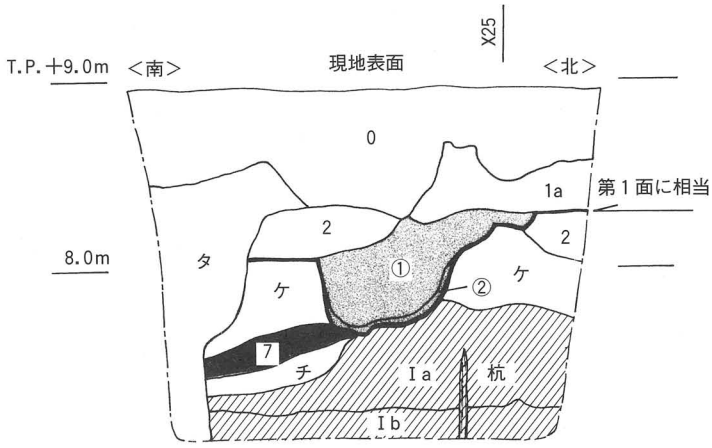
2）「背割り排水溝」の確認調査

江戸時代に作成された二葉の絵図には、いずれも各屋敷のほぼ中央で東西に延びる「背割り排水溝」が描かれている。その「背割り排水溝」の構築時期を明らかにすることによって、本寺内町の町割りの形成時期が解明できるものと考えた(註１)。そこで今回の調査地と絵図と照合したところ、その「背割り排水溝」が第１区と第３区間に位置するものであることがわかった。調査区として、第１区南側の東西２箇所に南北２ｍ前後×東西１ｍのグリットを設置(本書第３図参照)して、「背割り排水溝」の掘方層位の確認調査を行なった。

調査の結果、東西両グリットの東および西壁断面において江戸時代初頭(17世紀初頭)の整地層である第５層上面(T.P.＋8.0m前後)から掘り込まれる溝を確認した。本溝の残存規模は幅0.85m、深さ0.43ｍを測るもので、掘方の断面は「U」字形を呈する。埋土の大部分は人為的な埋め戻し土であるが、底部付近には薄く細かい砂粒が堆積し、水が流れていたことが窺える。埋土内からは、細片のため図化できなかったが17世紀中頃に比定される唐津焼の鉄絵皿と一重網目文を描いた肥前系染付磁器碗の破片が出土した。さらにその上面からは工場建築直前まで機能していた排水溝の掘方痕跡が見つかった。一方の東側のグリットにおいても西側と同等の規模の溝が確認でき、掘方内には溝構築時に使用されたと見られる多量の板材が投棄されていた。以上の調査結果から、「背割り排水溝」の構築時期は江戸時代以降に構築されたものであり、第２面にあたる室町時代末までは遡らないことが判明した。また、西側のグリットでは溝底部からさらに約0.5m下層において、第３区の第２面で検出した**木樋3201**の続きがみつかった。木樋はさらに北に向かって直進しており、第３区で朽ちていた蓋部分が良好に遺存していた。



第24図　高田家絵図による水路網図(櫻井・大草1988)と調査地(加筆)



【層序】
第０層：近現代の整地および撹乱層
第１a層：10YR8/3浅黄橙色シルト
第２層：10YR6/6明黄褐色シルト・砂礫
第７層：5YR5/6明黄褐色シルト(「石山合戦」時の焼土か？)
ケ層：5BG7/1明青灰色シルト(※第19図と対応)
タ層：10G3/1暗緑灰色砂礫混じりシルト
チ層：N7/0灰白色細粒砂

＜木樋管理設土＞
Ⅰａ層：10BG6/1青灰色砂礫混じりシルト
Ⅱｂ層：10BG6/1青灰色砂質シルト

《江戸時代の背割り排水溝埋土》
①10BG2/1青黒色シルト
②5PB7/1明青灰色極細粒砂

第25図　「背割り排水溝」確認調査　西グリット西壁断面図(Ｓ＝1/40)

(註)

1　現地において、前川要氏(中央大学)からご教示・ご指導頂いた。「背割り排水溝」とは南北に相対する各屋敷地の裏側(表玄関が北ならば南側、表玄関が南ならば北側)に東西方向に掘削された生活排水用の溝で、これは同時に各屋敷地の境界線でもある。

第６節　出土遺物

１）土器・陶磁器（江戸時代）

ｉ）遺構内出土遺物

［第１区］

【井戸（ＳＥ）】

ＳＥ1102（１）

１は肥前系の京焼風陶器碗である。灰白色の精良な素地に高台部分を除き灰釉が掛けられ、淡黄色に発色する。高台内中央に円刻と「清水」の刻印銘がある。17世紀後半に属す。

ＳＥ1103（２～４）

２は肥前系磁器瓶である。釉面には、「貫入」（用語１）が全体に見られる。畳付は露胎で、多量の砂が付着している。３は唐津焼鉢で、口縁部がやや内彎して折縁を呈する。内面には「白泥」（用語２）を掛けた後に鉄絵で草文が描かれ、口縁部内面には白泥を界線と波状に掻き取り透明釉を掛ける。外面は口縁部～腰部まで暗オリーブ色の釉が掛けられ、腰部以下は露胎である。胎土は橙色を呈する。４は瓦質の火鉢である。器壁は厚めで、外底部の四隅に足を有する。18世紀後半～19世紀前半に属す。

ＳＥ1105（５）

肥前系染付磁器碗で、外面にはヘラ彫りで縦方向に並行して細かく掻き取る「しのぎ」（用語３）が施され、蓮弁が表現される。高台内には「太明年製」銘が染付される。17世紀後半に属す。

ＳＥ1106（６～９）

６は土師器皿の相対する口縁部（２箇所）を、内側に折り曲げた「耳皿」と呼ばれるものである。色調は褐色系を呈する。７は瀬戸美濃系と思われる陶器製ミニチュア鍋である。鉄釉が掛けられ、腰部以下は露胎である。口縁部外面に把手、そして底部端には火にかける際、底部が直接五徳などに触れるのを防ぐ為のものと思われる３個の小突起が付く。８は土師質の焜炉で、下部には窓、内面には灰落としをのせる断面三角形の鍔が付く。９は炮烙で、口縁部は内傾し、全体的に器壁は薄い。色調は褐色を呈する。難波分類（難波1992）のＤ類に属する。18世紀末～19世紀初頭に属す。

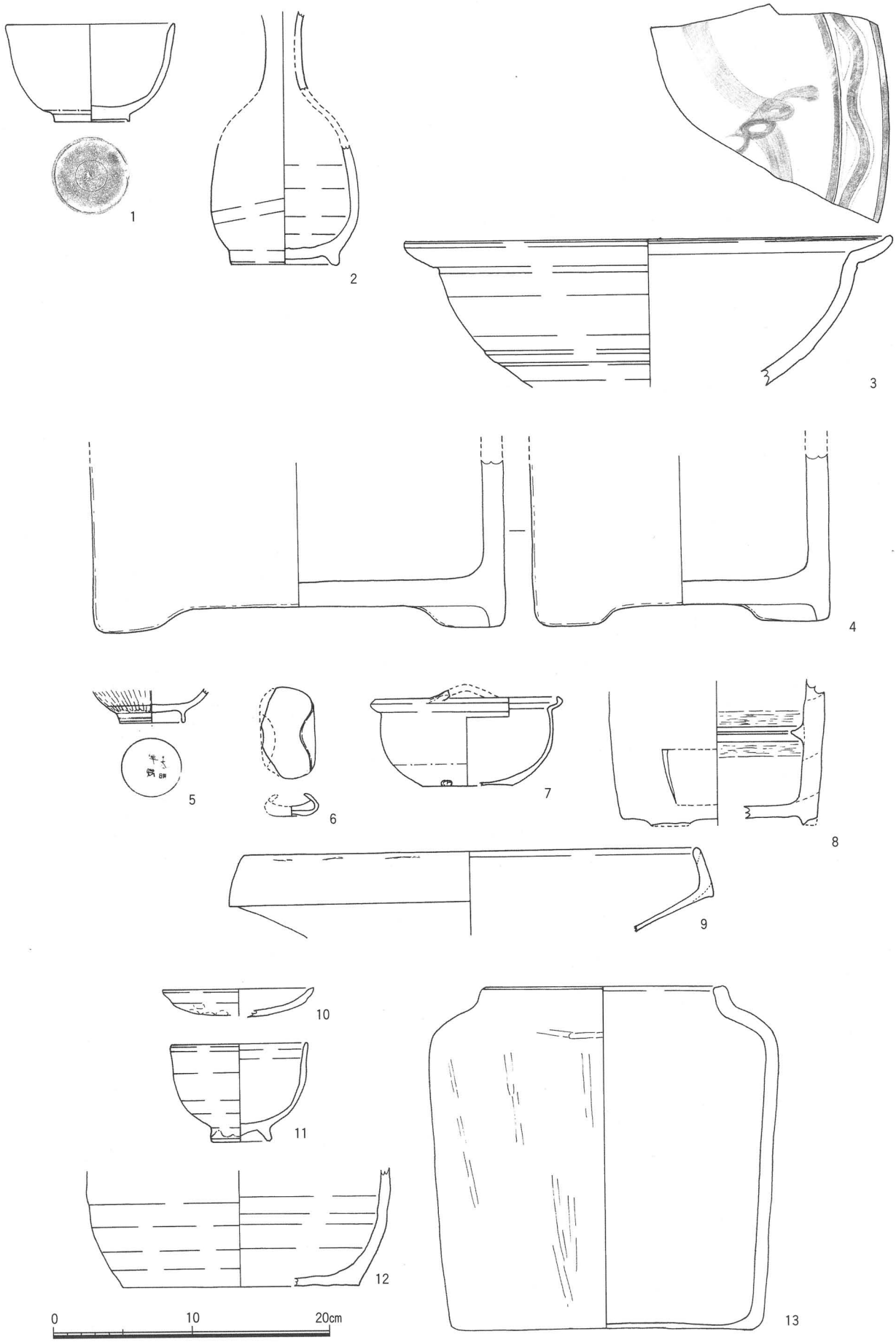
ＳＥ1107（10～13）

10は土師器皿で、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有し、口縁端部は尖る。色調は乳白色を呈する。11は肥前系陶器碗で、青緑釉が掛けられる。器形としては「呉器手」（用語４）である。高台内は露胎で、高台側面には釉切れが見られる。二次焼成を受け、部分的に白く変色している。12は焼締め陶器壷と思われるが、産地は不明である。内外面にはロクロ目が顕著に見られる。色調は暗赤褐色を呈する。13は蔵骨器形をした土師質の壷で、火消し壷と思われるが煤や被熱した痕跡はない。全体的に摩滅が著しい。底部の器壁は、体部に比して非常に薄い。17世紀前半に属す。

ＳＥ1108（14～16）

・井戸側内出土―14は肥前系染付磁器小坏で、外面だけに鉄釉が掛けられ、その上に竹文を「金付」（用語５）で上絵付している。高台内には方形枠内に変形字（判読不明）銘を染付ける。また、「ガラス焼継」（用語６）が施されている。17世紀代の伝世品と思われる。

・掘方埋土内出土―15・16はいずれも丹波焼擂鉢で、色調は灰褐色を呈する。擂目は１単位８条で、内底面には15が１単位７条、16が１単位５条で中央で交わるように重ねた３帯の櫛目が施



第26図　ＳＥ1102(１)、ＳＥ1103(２～４)、ＳＥ1105(５)、ＳＥ1106(６～９)、ＳＥ1107(10～13)

される。さらに16には、外周に同単位の櫛目が巡らされる。口縁端部は外傾し、15が平坦面を成すのに対し、16は凹面を呈する。いずれも17世紀前半の所産である。

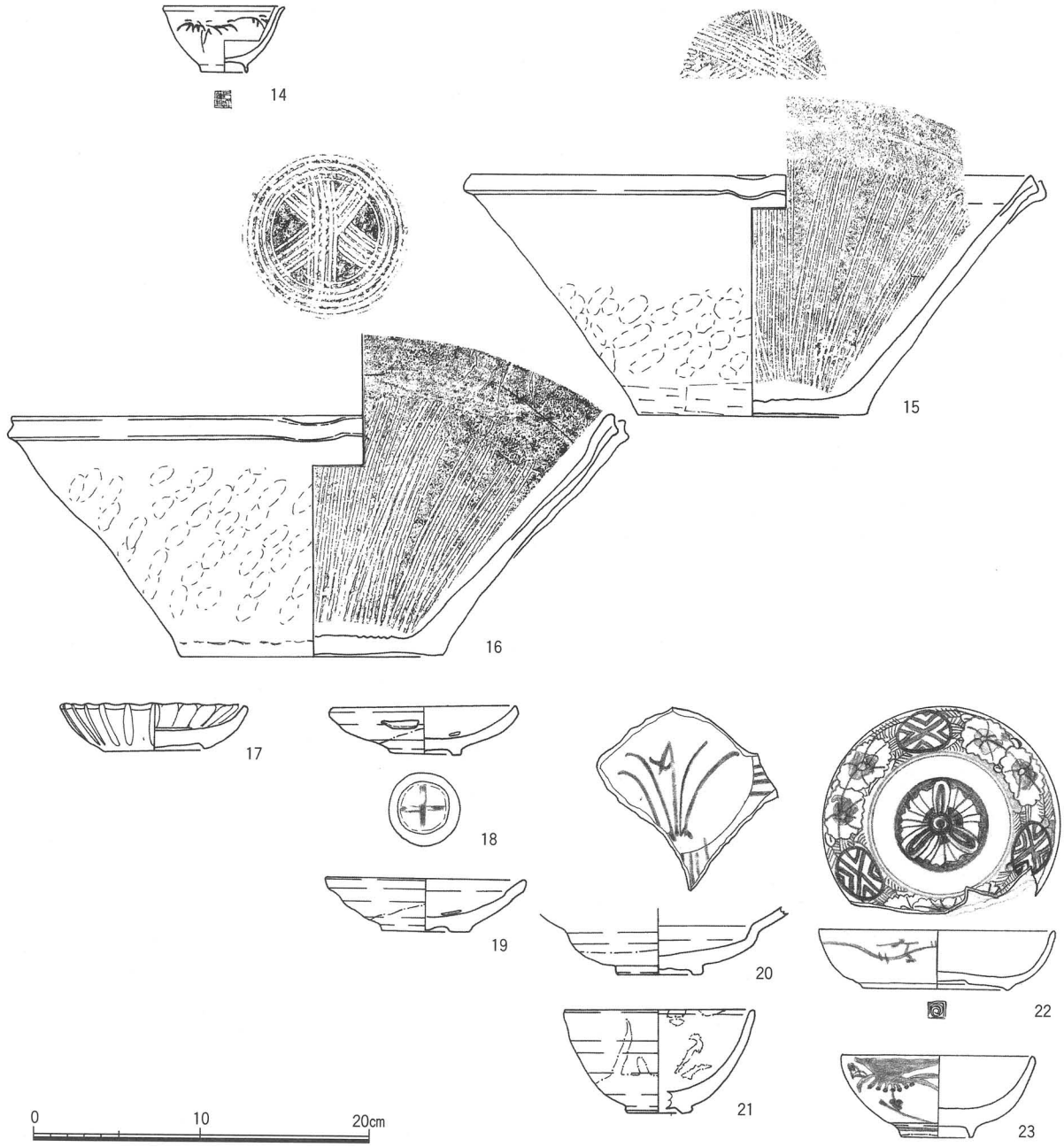
【土坑（ＳＫ）】

ＳＫ1101(17)

中国輸入品の可能性がある青磁皿である。体部内面は型による凹凸、口縁部周縁は削り込み、外面はヘラによる放射状の線彫りをそれぞれ施して内外面に花弁を表現している。底部は「碁笥底」(用語７)を呈し、高台内は「蛇の目釉剥ぎ」(用語８)される。17世紀前半に属す。

ＳＫ1102(18～21)

全て唐津焼の製品で、18～20が皿、21は碗である。18は「三日月形高台」(用語９)で、高台内には「十」字の墨書がある。また、体部外面には重ね焼きによる熔着物が認められる。19の高台は



第27図　ＳＥ1108一井戸側内(14)・掘方埋土内(15・16)、ＳＫ1101(17)、ＳＫ1102(18～21)、ＳＫ1105(22・23)

「兜巾高台」(用語10)を呈する。18・19の見込みには胎土目が3個残る。20は体部に明瞭な段をもつ鉄絵皿で、内底面には菖蒲文が描かれる。「目跡」(用語11)は確認できない。18～20はいずれも橙色の胎土にオリーブ灰色の釉が掛けられる。21は高台が低く、高台脇と高台の区分が明瞭でない。橙色の胎土に灰釉が掛けられ、明褐色に発色するが「ひしゃく掛け」(用語12)によるものか内外面ともに釉切れが目立つ。17世紀初頭に属す。

S K1105(22・23)

いずれも肥前系染付磁器で、22は皿、23は碗である。22の口縁部内面には丸文、見込みには三方割銀杏文、外面には唐草文が描かれる。また、高台内を蛇の目釉剥ぎし、中央がやや窪む「蛇の目凹形高台」(用語13)を呈する。窪んだ中央には方形枠内に「渦福」銘が染付される。23は「くらわんか手」(用語14)の碗で、外面には梅文が描かれる。18世紀前半に属す。

S K1109(24～26)

24・25は火鉢で24が瓦質、25が土師質である。24は口縁部が内彎し、口縁端部は内側にやや張り出し、上端に面を有する。25は脚部のみ残存で、円筒型の空洞で、内面にはシボリ目が見られる。また、径7㎜前後の円孔が1箇所穿たれる。26は土師質の大甕で、張りのない体部から、断面が逆台形で帯状を成す口縁部に至る。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は外面がタタキ、内面はハケナデを施す。色調は淡黄褐色を呈する。17世紀前半に属す。

S K1110(27・28)

いずれも土師器皿で、外面にはユビオサエ痕が顕著に残る。27は平坦な底部から内彎気味の口縁部に至り、口縁端部は尖り気味である。28はやや丸底を呈する底部から斜上方へ直線的に延びる口縁部に至り、口縁端部は丸味をもって終わる。また、内面には口縁部と体部の境目に明瞭な段が認められる。色調はいずれも褐色系を呈する。17世紀前半に属す。

S K1111(29～31)

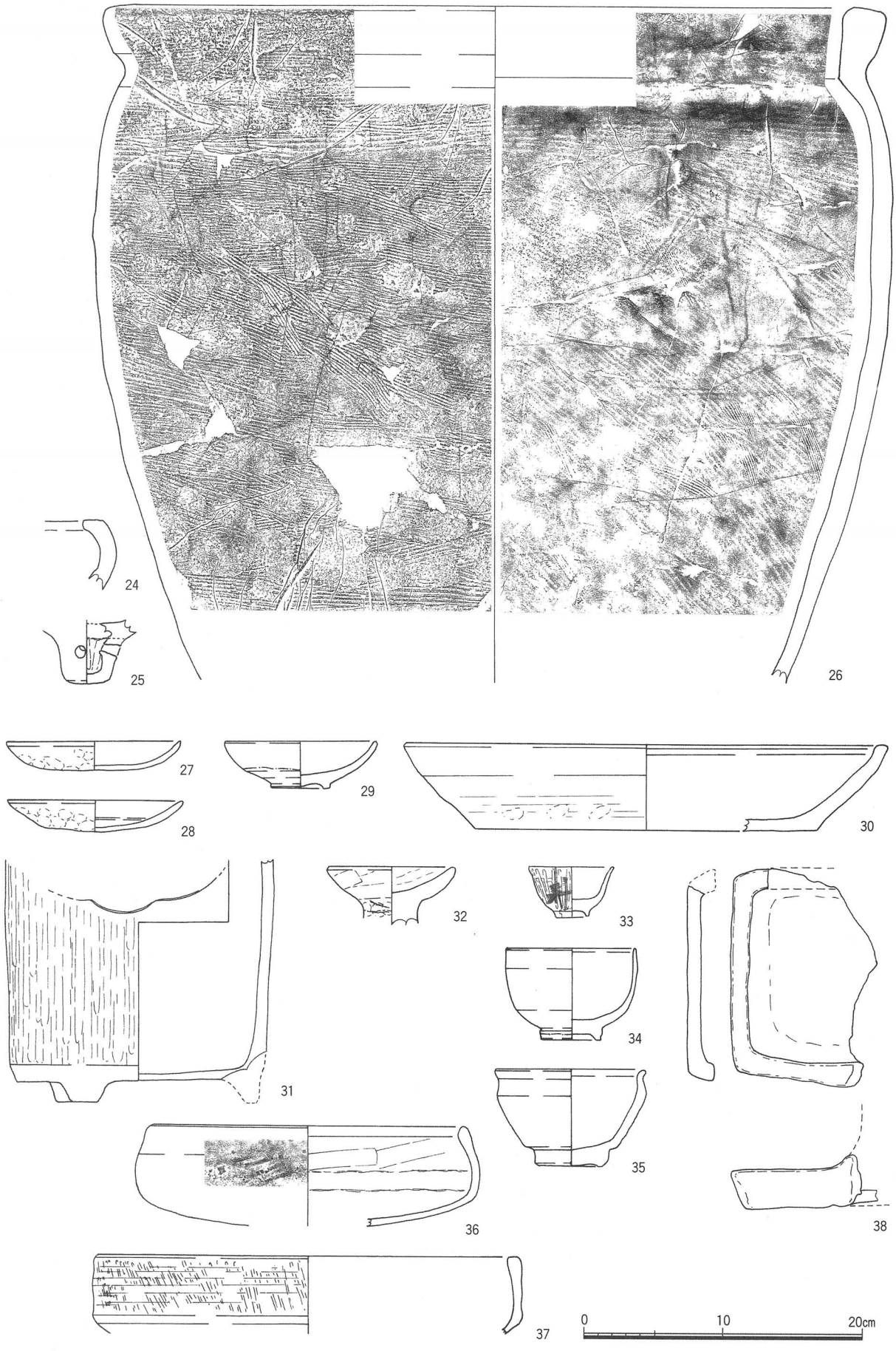
29は唐津焼皿で、高台から口縁部にかけて緩やかに彎曲した体部を有するもので、一般的に「丸皿」と呼ばれる。灰白色の胎土に白濁した灰色系の釉が掛けられる。腰部以下は露胎である。目跡は見られない。高台は削り出しで、兜巾高台を呈する。30は丹波焼大平鉢である。広く平坦な底部から体部～口縁部はやや内彎気味に斜上方へ伸び、口縁端部は上端に面を有する。底部内外面には重ね焼きの痕跡が認められる。31は瓦質の火鉢である。体部は円筒形を呈し、底部外面には逆台形の脚が3箇所付く。体部外面は丁寧に縦方向のヘラミガキが施され光沢がある。上半部は欠損しているが、残存する上端の一部に空気孔あるいは装飾を意識したかのような切込みが確認される。17世紀前半に属す。

S K1115(32)

土師質の「火燈」(用語15)の蓋頭部に付く把手と思われる。煤の付着が見られず、柱状部が短く外面がヘラナデによる丁寧な調整が施されている。色調は明褐色を呈する。17世紀前半に属す。

S K1116(33～38)

33は肥前系磁器染付小坏である。口縁部は端反りで、外面には、しのぎによる蓮弁の上に寿字文が染付される。高台部分は露胎で、畳付に「離れ砂」(用語16)が付着する。34は肥前系陶器碗である。内外面には青緑釉が掛けられている。高台部は露胎である。2次焼成により部分的に白く変色している。35は瀬戸美濃系の鉄釉天目茶碗である。口縁部は「S」字形にくびれ、口径が器高



第28図　ＳＫ1109(24～26)、ＳＫ1110(27・28)、ＳＫ1111(29～31)、ＳＫ1115(32)、ＳＫ1116(33～38)

を上回る。器壁は厚く、高台は高い。高台部分は露胎で、胎土は灰白色を呈する。大窯編年(藤澤2001)のⅤ期に比定される16世紀後半からの伝世品であろう。36・37は炮烙で、36は外型を使用して製作されたもので、浅い丸底に内彎する口縁部がつき、口縁端部はやや肥厚する。体部外面の上半には、右上がりの並行タタキがある。37も36と同様に外型が使用されているが、口縁部は内彎しないで直線的に伸びる。そして口縁部には、櫛状工具による左上がりの掻き上げ痕が認められる。難波分類では36がA類、37がC類に属する。38は煤の痕跡が認められないが、その形状から移動式竈と思われる。内外面は丁寧にヘラナデされている。17世紀前半～中頃に属す。

SK1117(39～41)

すべて肥前系染付磁器で、39・40が皿、41が鉢である。いずれも畳付は露胎で、砂が付着している。39の外面は唐草文、口縁部内面は4つに区画された竹図・草花唐草文、見込みには手描きの五弁花が描かれる。呉須は滲んだ発色を呈する。高台内には「太明年製」銘が染付される。40の外面は唐草文、口縁部内面は草花文、見込みには海浜文が描かれる。また、高台内には「ハリ支え痕」(用語17)が5個見られ、「太明成化年製」銘が染付される。41は肥前系染付磁器鉢で、体部は内彎しながら立ち上がった後、緩やかに屈曲して内彎気味の口縁部に至る。文様は内外面ともに草花文が描かれる。呉須は39と同様、滲んだ発色を呈する。18世紀前半に属す。

SK1118(42～44)

42は瀬戸美濃系の陶器香炉である。外底部には円錐台形の足が3個付く。口縁部内面～外面にかけては鉄釉が掛けられ、にぶい褐色を呈するが2次焼成によって部分的に白く変色している。外底部と内面は露胎で、素地は灰白色を呈する。43は肥前系の白磁皿である。口縁部と体部との境目に段を有し、高台の断面は三角形を呈する。畳付は露胎で、砂が付着する。44は丹波焼擂鉢で、擂目は1単位4条である。口縁端部は外傾する凹面を有し、内面の口縁部と体部の境目には浅く凹線が巡らされる。17世紀前半に属す。

SK1119(45・46)

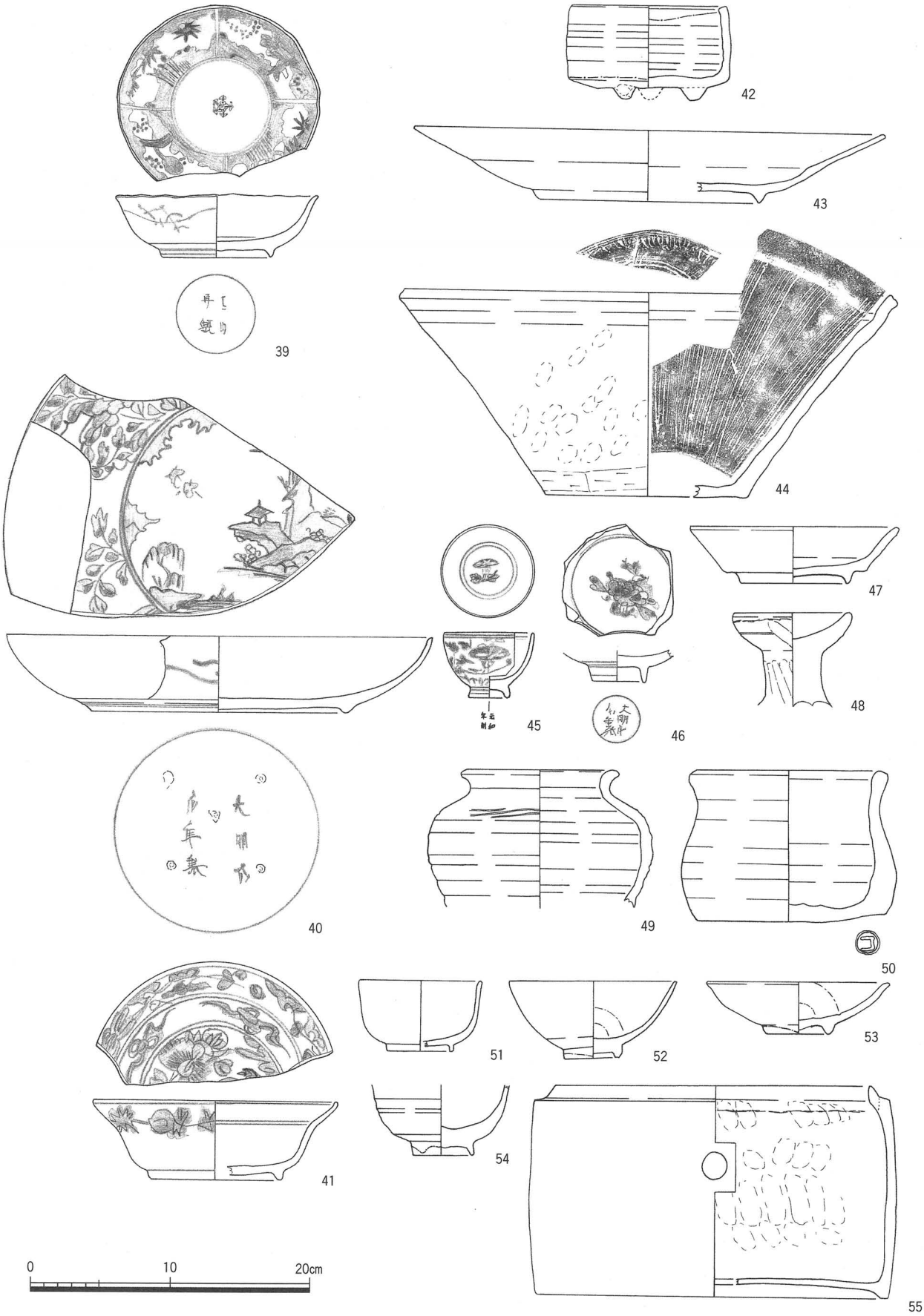
いずれも肥前系染付磁器で、45が小坏、46が碗である。45は見込みと体部外面には草花文が描かれ、高台内には「元和年制」銘が染付される。46は見込みに草花文が描かれ、高台内に「大明成和年製」銘が染付される。17世紀末～18世紀初頭に属す。

SK1123(47～50)

47は瀬戸美濃系の志野皿である。体部と高台境目に段を成す「腰折れ」タイプのもので、高台の断面は三角形を呈する。全体に長石釉がかけられ、貫入が見られる。48は32と同種の火燈の蓋頭部に付く把手である。49・50は備前焼壷で、いずれも胎土中に砂粒を多く含み、内外面にはロクロ目が顕著に見られる。49は張りのある肩部から短く外反する口縁部を呈する。外面肩部には、櫛描きによる波状文が見られる。50は器壁が比較的厚い。平坦な底部とやや寸胴形を呈する体部で、口縁部は体部から緩やかに外反する。底部外面には○内に「コ」の窯印がある。17世紀前半に属す。

SK1124(51・52)

51・52は肥前系の京焼風陶器碗である。双方ともに黄味がかった灰白色の精良な胎土に、高台部分を除き灰釉が掛けられ、淡黄色に発色する。52の内底面は蛇の目釉剥ぎされる。17世紀末～18世紀初頭に属す。



第29図　ＳＫ1117(39～41)、ＳＫ1118(42～44)、ＳＫ1119(45・46)、ＳＫ1123(47～50)、ＳＫ1124(51・52)、ＳＫ1125(53)、ＳＫ1126(54・55)

ＳＫ1125(53)

53は肥前系の端反り磁器皿である。釉色は淡青磁色を帯びた白色を呈する。見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台部分は露胎である。体部外面には重ね焼きによる熔着物がある。17世紀後半に属す。

ＳＫ1126(54・55)

54は唐津焼碗で、灰白色の胎土に灰釉が掛かり、暗緑色に発色する。兜巾高台を呈し、高台側面に釉切れ、畳付には砂が付着する。55は瓦質の火鉢である。筒型を呈する体部には、径約２cmの丸い空気孔を有する。口縁部は直立気味の体部から内側に入り、「蓋受け部」を有する。17世紀前半に属す。

ＳＫ1129(56～61)

56～58は肥前系染付磁器で、56が皿、57・58が碗である。56は「印判」(用語18)によって、内面には楓・菊花・蔦、外面には蔦と２重の圏線が染め付けされる。57は外面に青磁釉が掛かる青磁染付である。口縁部内面に四方襷文、見込みに手描きの五弁花、外面には蔦の文様が描かれる。また、高台内には方形枠内に「渦福」(用語19)銘を染付ける。58は「広東碗」と呼ばれるもので、高台が高く、体部が直線的に開く形を呈する。見込みに菊花文、外面に草花文の文様が描かれる。59は関西系(註１)の陶器鍋で、内外面に鉄釉が掛けられている。器壁は薄く、内彎する体部からそのまま直立する口縁部に至り、口縁端部は内折して上端に面を有する。60は瓦質の火鉢で、厚手である。平坦な底部からやや内彎気味に延びる体部～口縁部に至り、口縁端部は内側にやや肥厚し、上端に面を有する。底面には「ハ」の字形の高台がつく。61は８と同種の土師質の焜炉である。口縁端部は内側に肥厚し、上端に面を有する。体部中央には1.5cm前後の円孔を１個有する。18世紀後半～19世紀初頭に属す。

ＳＫ1131(62～66)

62～64は肥前系の製品で、62が唐津焼の碗、63・64は染付磁器碗である。62は白泥によって内外面に刷毛目文様が施されるいわゆる「刷毛目碗」である。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、腰部以下は露胎である。畳付きには３個所の砂目跡が残る。63には松竹梅文、64には風景(船・海・山)文がそれぞれの外面に描かれる。63の畳付きには砂が付着する。65・66は炮烙で、口縁部と体部の境目に断面三角形状の貼り付け凸帯が巡る。いずれも難波分類のＦ類にあたるもので、奈良盆地中・南部を中心に分布する。17世紀末～18世紀前半に属す。

ＳＫ1132(67・69)

すべて肥前系の碗で、67は陶器、68は磁器、69は白磁である。67は精良な灰白色の胎土に茶灰色の釉が掛かる。高台は低く、畳付は露胎で、砂が付着する。68の外面には網目文が描かれる。高台側面には釉切れが見られる。69の畳付には砂が付着する。17世紀末～18世紀前半に属す。

【溝(ＳＤ)】

ＳＤ1101(70～72)

70は肥前系染付磁器碗で、口縁端部は端反りを呈する。口縁部内面と見込みおよび外面にはよろけ縞文が描かれる。ガラス焼継ぎ痕を有する。71は36と同種の炮烙でＡ類に属する。72は土師質の羽釜で、内彎する長い口縁部を呈し、上端に面を有する。鍔は短く、やや斜下方向に付く。内外面ともに丁寧にナデ調整され、色調は浅黄橙色を呈する。19世紀前半に属す。

ＳＤ1102(73～78)

73～75は唐津焼の製品で、73・74は碗、75は鉢である。いずれも灰オリーブ色の釉が掛かる。総掛けは73のみで、74・75は腰部以下が露胎である。73の畳付には砂が付着する。また、75の体部外面には押圧痕が２箇所認められる。76は信楽焼の四耳壺と思われる。直線的に短く立ち上がる頸部に外折する口縁部を有する。胎土には精良な長石粒が混じる。77は肥前系青磁皿で、見込みには花文がヘラによって「片切彫り」(用語20)されている。78は44と同種の丹波焼擂鉢で、擂目は１単位５条である。外傾する口縁端部はやや凹面を呈する。17世紀前半に属す。

ＳＤ1103(79～82)

79・80は肥前系染付磁器で、79は碗蓋、80は広東碗である。79は内外面ともによろけ縞文が施される。80は内底面に寿字紋・草文、外面には雲龍文・火炎宝珠文の絵付け、そして高台内には「奇玉珍元」銘が染付される。81は産地不明の仏飯磁器で、皿状の受け部に「ハ」の字形に開く高い中空の台脚がつく。受部外面には赤色で草花文が上絵付けされている。台脚内と外底部は露胎である。82は京・信楽系の陶器灯明具で、黄味がかった灰白色の胎土に灰釉が掛けられる。受けには半月状の切込みがある。脚内と外底部は露胎で、施釉部に貫入が見られる。18世紀末～19世紀前半に属す。

【落ち込み(ＳＯ)】

ＳＯ1101(83～86)

83・84は唐津焼の製品で、83が丸皿、84が碗である。83は底部が厚手で、底部は三日月形高台を呈する。84は「ハ」の字形を呈する兜巾高台から、緩やかに延びる体部に至り、口縁部は端反り形を呈する。83は見込み、84は畳付にそれぞれ４個の砂目跡が残る。いずれも橙色の胎土にオリーブ灰色の釉が掛かる。83は腰部以下が露胎である。85は備前焼徳利で、鶴首の口頸部のみ残存する。直線的に延びる頸部から外反する口縁部に至り、端部はやや肥厚する。内面は斜め方向にヘラケズリ、外面はヨコナデ調整される。色調は暗赤褐色を呈する。86は土師質の火鉢で、平面形状は残存部から隅丸方形を呈し、底部の四隅には足が付くものと推定される。直立する体部からそのまま口縁部となり、口縁端部はやや肥厚して上端に面を有する。また、その上端面の１箇所に、幅１cm前後の浅い切り込みが認められる。調整は内面ユビナデ後ヘラナデ、外面は横方向のハケナデで、全体的にやや粗雑な作りである。色調は淡橙色を呈する。17世紀初頭～前半に属す。

[第２区]

【土坑(ＳＫ)】

ＳＫ2101(87)

瀬戸美濃系の陶器皿で、口縁部が端反りになる。高台の削り込みは深い。灰色の胎土にオリーブ黄色の釉が掛けられる。内底面は蛇の目釉剥ぎ、畳付きと高台内は露胎である。17世紀後半に属す。

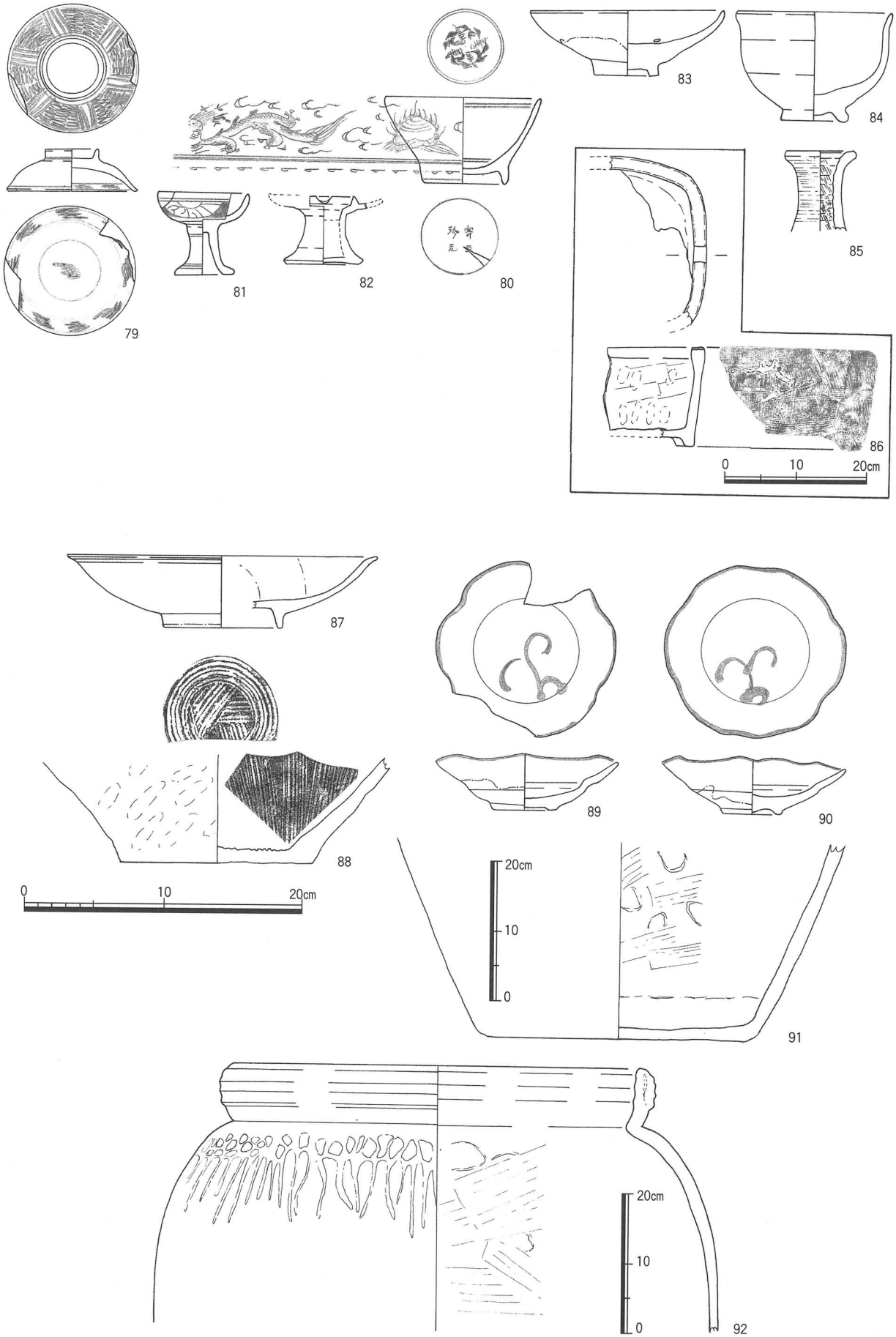
ＳＫ2102(88)

16と同種の丹波焼擂鉢で、擂目は１単位７条である。また、内底面には擂目と同単位の櫛目が３帯交わって施され、さらにその外周にも巡らされる。17世紀前半に属す。

ＳＫ2103(89～91)

89・90は唐津焼の鉄絵皿である。赤橙色の胎土にオリーブ灰色の釉が掛かる。見込みには施釉された上に鉄釉で植物文様が描かれる。口縁部はひだ状に変形させ、その端部には「皮鯨手」(用語21)と呼ばれる装飾が施される。91は備前焼大甕の底部である。17世紀初頭に属す。

第30図　ＳＫ1129(56～61)、ＳＫ1131(62～66)、ＳＫ1132(67～69)、ＳＤ1101(70～72)、ＳＤ1102(73～78)



第31図　ＳＤ1103(79～82)、ＳＯ1101(83～86)、ＳＫ2101(87)、ＳＫ2102(88)、ＳＫ2103(89～91)、ＳＫ2104(92)

ＳＫ2104(92)

備前焼大甕で、寸胴形と推定される体部から直立気味の口縁部に至る。口縁部外面には３条の凹線が巡る。肩部外面には垂れ下がった胡麻状の灰を被り、内面には粗いヘラ使いが残る。胎土は堅緻で赤褐色を呈する。17世紀初頭に属す。

埋め甕2101(93～96)

93は比較的大型の土師器皿で、内面の煤付着の状況から灯明皿として使用されていたものと思われる。内外面にはロクロ目が顕著に認められ、内面の口縁部と体部との境目に１条の沈線が巡る。色調は褐色系で、焼成は堅緻である。94・95は唐津焼皿で、いずれもにぶい黄橙色の釉が掛かる。口縁部の形態をみると、94が端反り形で、95は内彎する丸皿となる。また、95の内底面には胎土目が４個残る。96は備前焼大甕で、肩が張った体部から口縁部が「く」の字状に外方に折れ、口縁部外面には３条の凹線が巡る。そして外面肩部にはヘラ描きによる「参石入」の刻字と「⋉」の窯印がある。生産時期については、口縁部および体部の形態・法量から92よりは古く、16世紀後半頃に比定される。なお、93～95については17世紀前半の所産である。

埋め甕2102(97)

92と同種の備前焼大甕である。内面は全面に粗いヘラ使いが残る。肩部外面には「一吉」と「ひねり土」のヘラ描きがある。17世紀初頭に属す。

埋め甕2103(98)

備前焼大甕で、16世紀後半の所産である。

埋め甕2104(99)

口縁部の形態から、17世紀初頭に比定される備前焼大甕であろう。肩部外面には「吉」のヘラ描きがある。

埋め甕2105(100・101)

いずれも備前焼の製品で、100は85と同種の徳利である。101の大甕の肩部外面にはヘラ描きによる「⌓」の窯印がある。17世紀初頭に属す。

埋め甕2106(102・103)

102は土師質の火燈で、煤の付着や調整の粗雑さ、そして全体の形状から身に付く灯芯部であると思われる。103は備前焼の大甕である。17世紀初頭に属す。

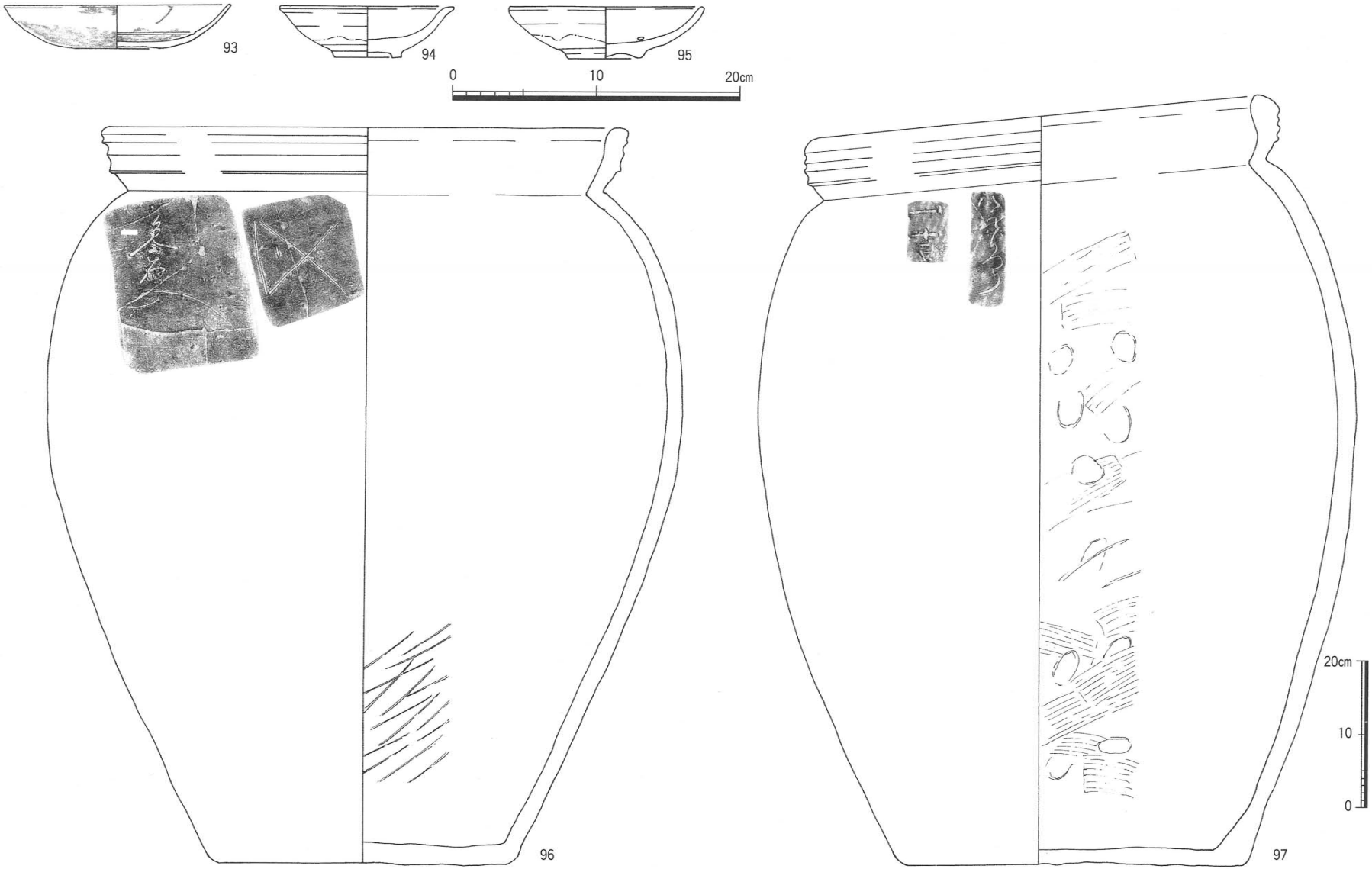
［第３区］

【井戸(ＳＥ)】

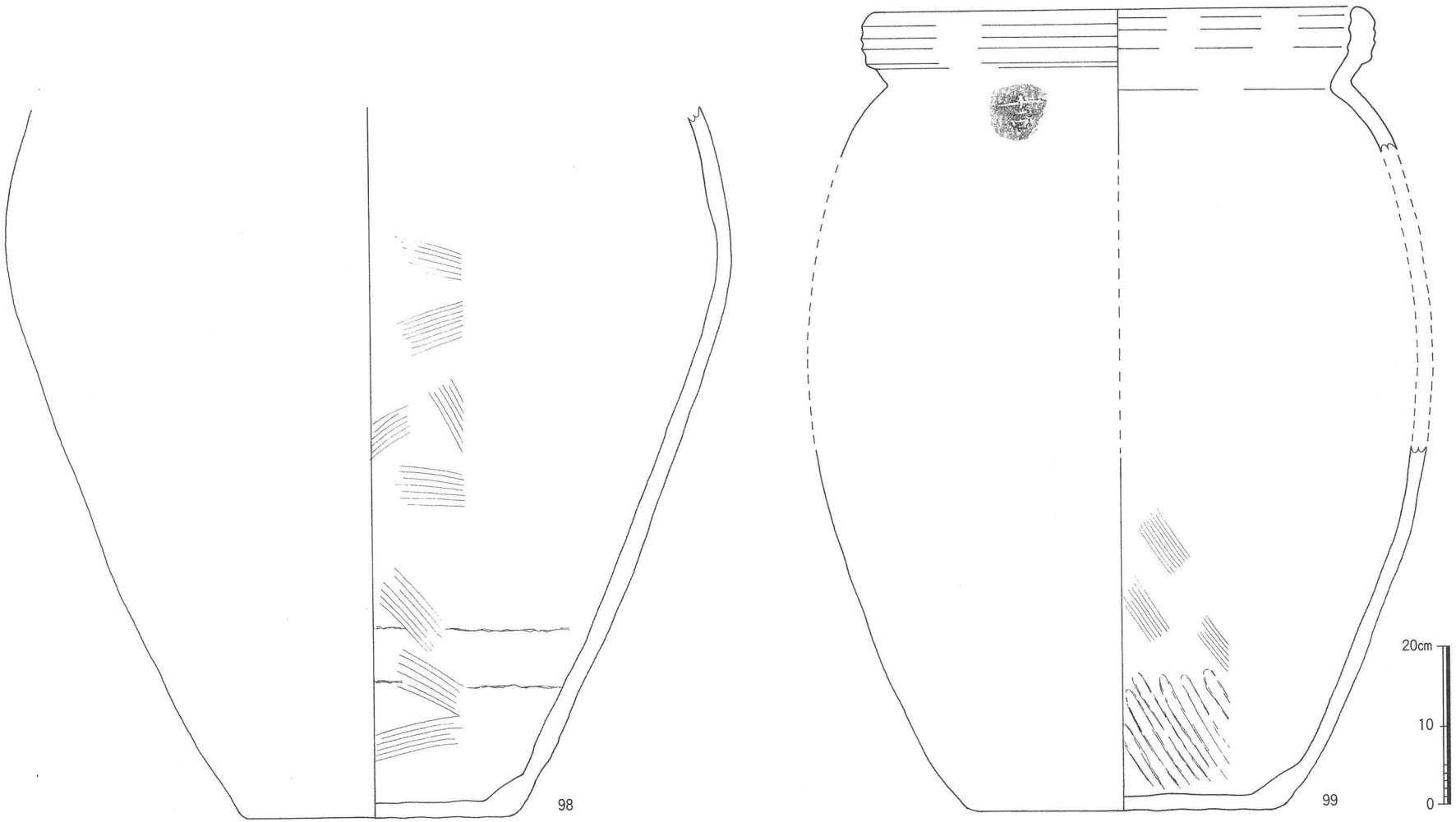
ＳＥ3101(104～126)

・井戸側内出土―(104～122)

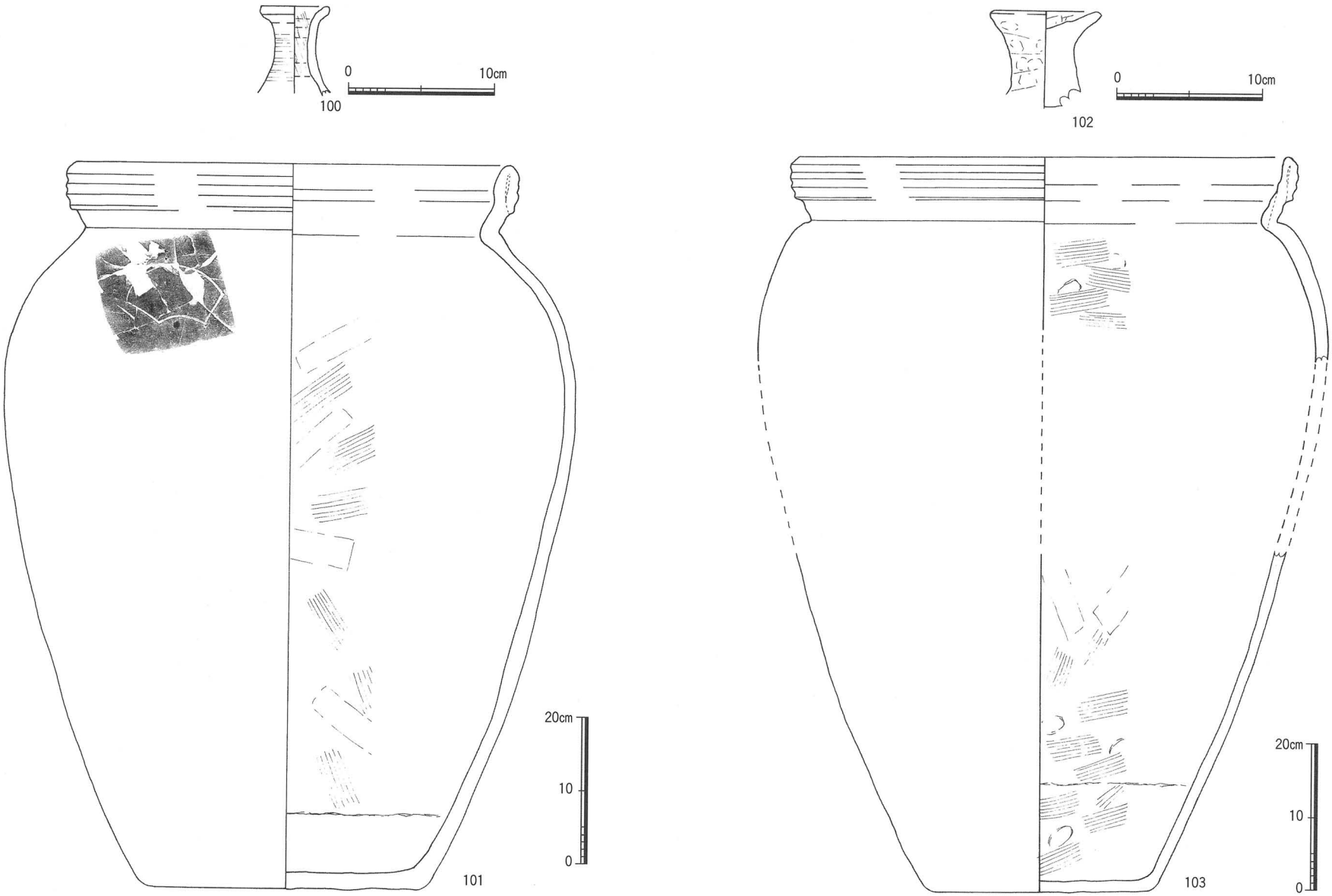
104は京・信楽系の灰釉陶器小碗で、全面に灰釉が掛かり、貫入が見られる。外面には酸化鉄を主体にした鉄釉による錆絵の草花文が描かれる。口縁の周縁部には二次焼成によるものか、帯状に白く発泡している。高台部分は露胎である。105～111は肥前系染付磁器で、105・106・108～110は碗、107は青磁碗蓋、111は皿である。105・109はくらわんか手の碗である。106は69と同種の白磁碗で、畳付きに砂が付着する。107・108の蓋・碗２点はセット関係で、いずれも外面が青磁で口縁部内面に四方襷文、見込みに２条の界線に手描きの五弁花文を描く。また、摘み内および高台内には方形枠内に「渦福」銘を染付ける。109は口縁部内面に四方襷文、内底面に２条の



第32図　埋め甕2101(93～96)・2102(97)



第33図　埋め甕2103(98)・2104(99)



第34図　埋め甕2105(100・101)・2106(102・103)

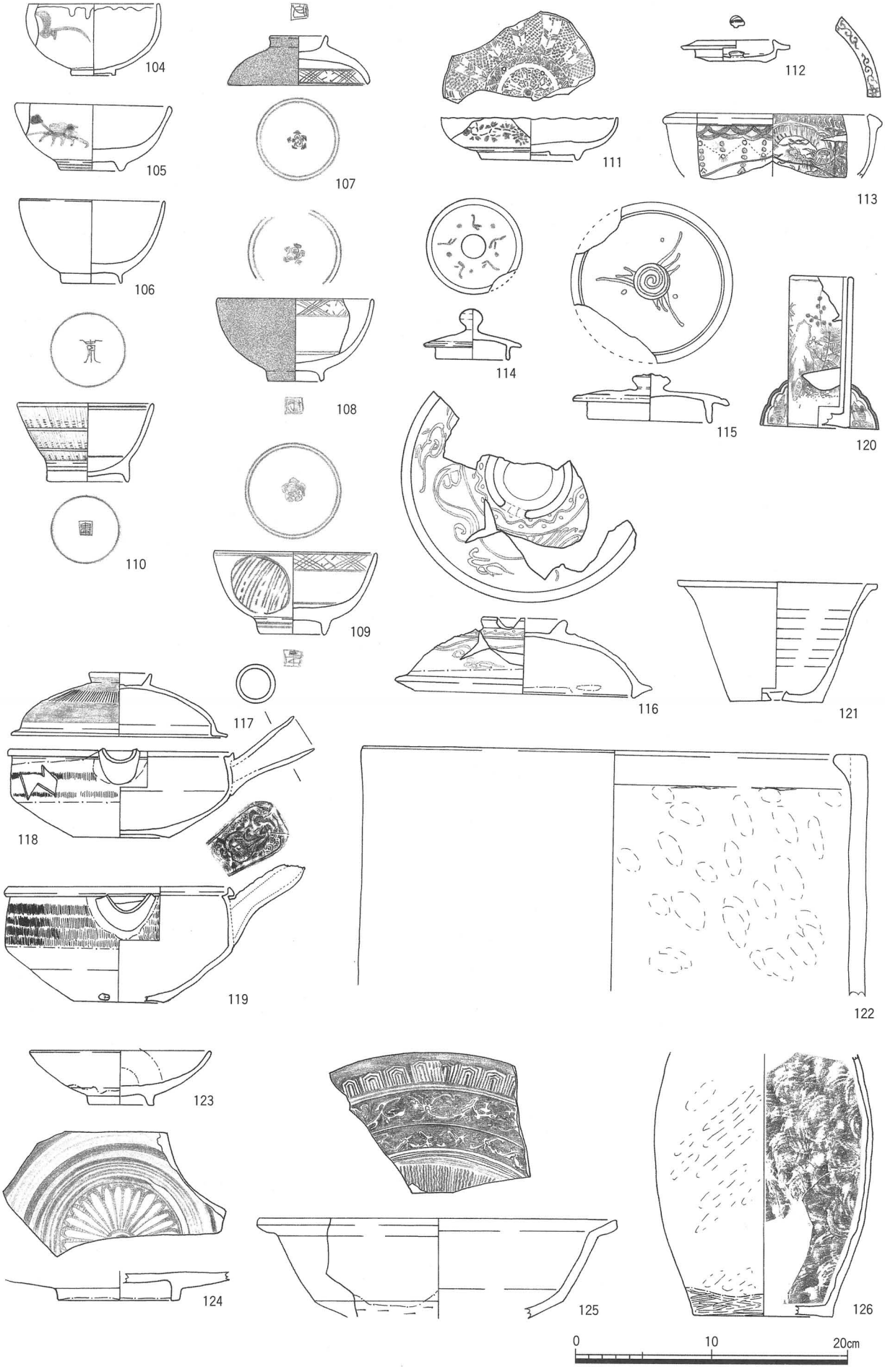
界線内に印判の五弁花文、外面には丸文を描く。そして高台内には方形枠内に「渦福」銘を染付ける。110の広東碗は、外面に伊勢暦文、内底面には界線に「寿」字を描き、高台内には方形枠内に変形字銘を染付ける。111の口縁部は「輪花風」(用語22)で、底部外面は蛇の目凹形高台を呈する。残存部で見込みにハリ支え痕が2個残る。外面には草花文、内面には矢羽・格子の区画文が「型紙絵付け」(用語23)される。112は関西系の陶器土瓶落とし蓋で、オリーブ黄色の釉が掛けられ、外底部は露胎である。113は漳州窯系の赤絵磁器鉢と思われる伝世品で、ガラス焼継ぎが認められる。内彎気味に立ち上がる体部から直立する口縁部に至り、口縁端部は肥厚して外傾する面を有する。その面には赤色で唐草文が描かれる。そして内面には龍文、外面には瓔珞(ようらく)繋ぎ文が描かれる。114・115は京・信楽系の陶器土瓶蓋である。外面には、白泥塗布後に鉄釉と緑釉によって捻子文を描き、透明釉が掛けられる。114は渦巻きの陰刻が施された丸摘みを貼り付け、白泥によって放射状に文様が描かれる。116～119は行平で、116・117は蓋である。116は摘みに半月状の切込みを有する。外面には、緑灰色の釉が掛けられた上に白泥により唐草文が描かれる。なお、摘み裾の外周部分は鉄釉が掛けられ、その上に白泥で波条文・列点文の文様帯が巡らされる。117は外面に鉄釉(鉄泥？)をかけた後、上半部に放射状に1帯の「飛鉋」(用語24)が施される。118は2帯の飛鉋が施された体部上面に、半円形の注口と断面円形で中空の把手がつく。119は4帯の飛鉋が施された体部上面に、半円形の注口と上下型合わせによる中空の把手がつく。把手の上面には亀に乗った人物(浦島太郎？)の絵柄が陽刻される。また、残存する外底部には、1個の小突起が付く。120は瀬戸美濃系染付磁器の蝋燭立で、体部下半部には3個の足がつく。体部および足部には草花文が描かれる。121は瀬戸美濃系の陶器植木鉢である。口縁端部は外折して上端に面を有し、底中心部には1穴を穿孔する。色調は灰白色を呈し、内面のロクロ目が顕著である。122は円筒形を呈する土師質の井戸側と思われる。口縁端部は内側に粘土帯を貼付けて肥厚させ、上端に面を有する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は緻密である。外面が丁寧にナデ調整されるのに対し、内面はユビオサエ痕が顕著に残る。18世紀後半～19世紀代の所産である。

・掘方内出土(123～126)

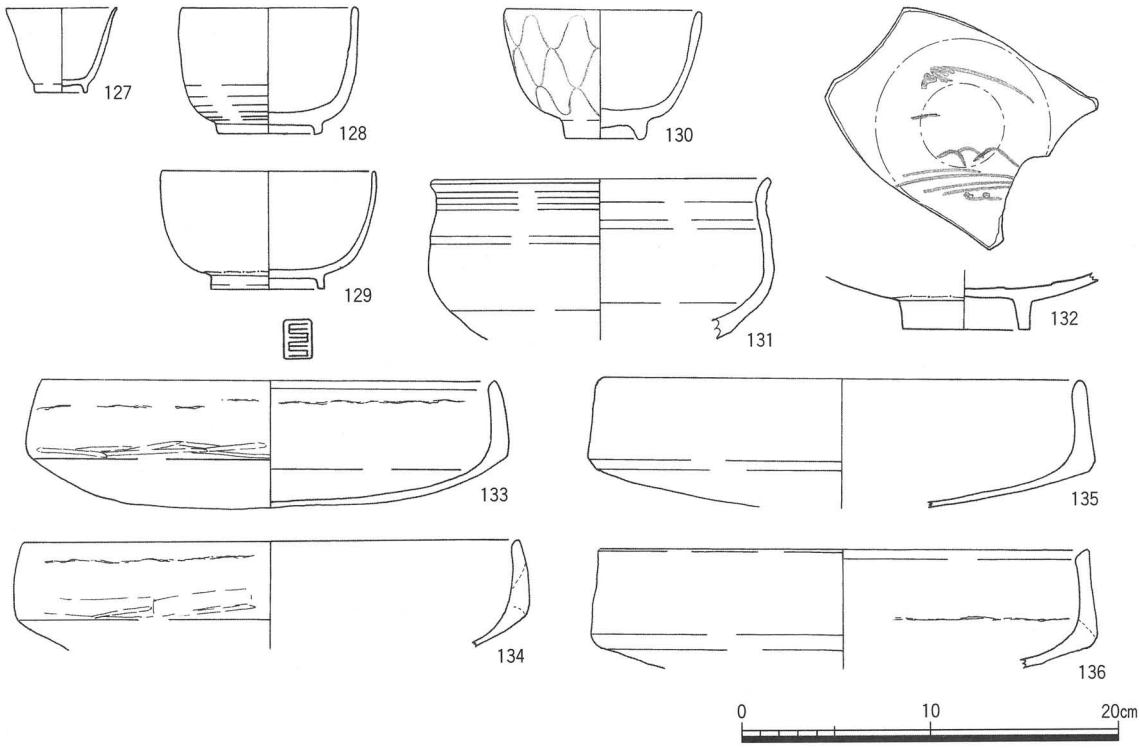
全て唐津焼の製品である。123は丸皿で、灰黄色の胎土に浅黄色の釉が掛かる。124は内底面に鉄釉(鉄泥？)により、中央に菊花文と外周に数条の圏線が描かれる。高台の削り込みは深い。125は折縁の鉢で、いわゆる「三島手」(用語25)と呼ばれるものである。内面には白泥象嵌によって菊花・唐草暦手の文様が描かれた後に鉄釉が掛けられる。126は徳利形瓶で、叩き成形で作られたものである。平底を呈し、体部外面はユビナデ、内面には折り重なった同心円状(「青海波文」(用語26)とも言う)のタタキ痕が顕著に認められる。外面には鉄釉が掛けられ、最下端部は露胎でヘラ状の工具痕が見られる。17世紀初頭～前半の所産である。

ＳＥ3102(127～136)

127～132はすべて肥前系の製品である。127は白磁小坏、128・129は灰釉陶器碗、130は染付磁器碗である。127は口縁部が端反りを呈し、畳付には砂が付着する。128は淡橙色を呈する胎土に暗オリーブ色の釉が掛かり、光沢がある。高台は露胎で、畳付きに砂が付着する。129は精良な灰白色を呈する胎土に淡黄色の釉が掛けられる。高台内には、長方形枠内に変形字の刻銘を有する。いずれも畳付きは露胎で砂が付着する。130は染付磁器碗で、68と同じ網目文が施される。畳付きは露胎で砂が付着する。131は唐津焼の鉢で、口縁部は端反りで、内外面に灰オリーブ色の釉



第35図　ＳＥ3101－井戸側内(104～122)・掘方埋土内(123～126)



第36図　ＳＥ3102

が掛かり、底部は露胎である。見込みは露胎である。132は京焼風の陶器鉢で、見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台は削り出しの露胎である。見込みには山水文の銹絵が描かれる。133～136は炮烙で、133・134は口縁部が内傾内彎し、口縁部と体部外面の境目に板状の工具痕が残る。135・136は口縁部が直線的に延びる。133・134がＢ類、135・136がＤ類にそれぞれ比定される。17世紀後半～18世紀初頭に属す。

ＳＫ3101(137～139)

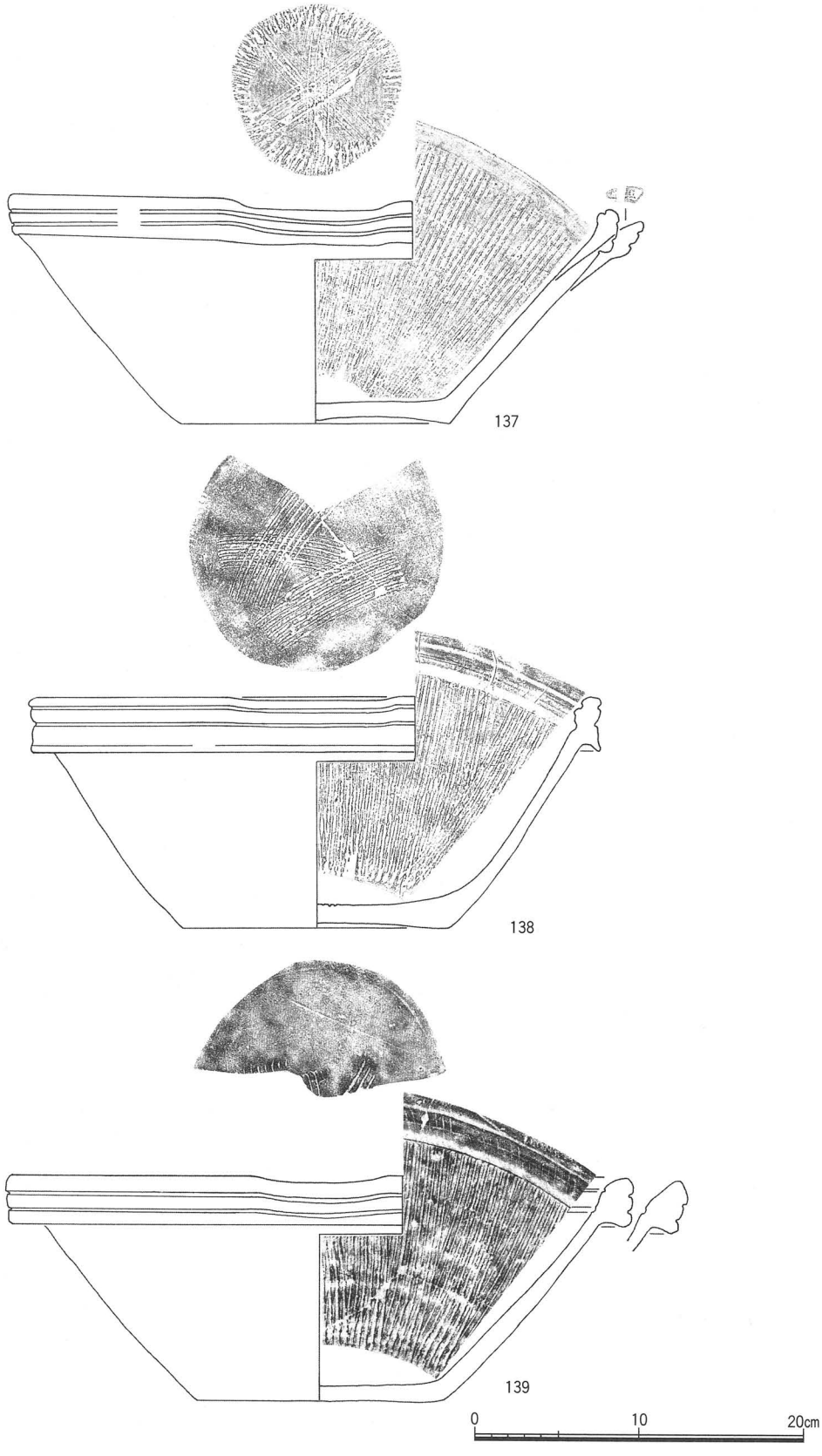
すべて堺産の擂鉢である。体部の擂目は密で、内底部には137・138の双方とも３条の擂目が施される。擂目の形状については137が中央で交わるように重ねられるのに対し、138は内側に彎曲する「ウールマーク」状を呈する。口縁部の形態を見ると137・138の内面にはそれぞれ１条の凸帯が巡らされるが、137は138に比して下端がかなり突出する。底部についてはいずれも高台風の作りが窺える。また、137の片口部には扇形内に「上長」の刻印が見られる。139は平底で、口縁部の断面が三角形を呈し、内側への張り出しはなくなる。これら３点の色調はいずれも赤褐色～暗赤褐色を呈する。白神分類(白神1988、1993)では、137がⅠ型式、138がⅡ型式、139がⅢ型式に比定される。18世紀後半～19世紀代に属す。

ＳＫ3102(140・141)

140は肥前系染付磁器皿で、口縁部には「口錆」(用語27)が施され、畳付きは釉拭き取りで砂が付着する。見込みには人物(釣り人)画が描かれる。141は唐津焼皿で、口縁端部は受口状に内彎する。内面には白泥による刷毛目文様を施した上に鉄釉で草文を描く。17世紀後半に属す。

ＳＫ3103(142～145)

142は肥前系の陶器蓋で、天井部に白化粧土した後に中心から放射状によろけ縞文が描かれ、透明釉が掛けられる。底面は露胎で、突出した中心部には糸切り痕が残る。143は肥前系染付磁器碗



第37図　ＳＫ3101

で、見込みには印判による五弁花文、外面には丸文が描かれる。144・145は炮烙でD類に属するものである。いずれも口縁部には粘土を貼り付けた把手がつく。また、144には把手の上端に貫通しない孔が2個認められる。18世紀末～19世紀前半に属す。

SK3104(146・147)

146は肥前系の京焼風陶器碗で、内外面に淡黄色の釉が掛かり、高台は削り出しで露胎である。見込みには山水文が描かれ、高台内には「小松吉」の刻印がある。147は丹波焼の擂鉢で、口縁端部は粘土貼り付けによって内側に肥厚し、上に面を有する。擂目は1単位6条である。色調は暗赤褐色を呈する。17世紀末～18世紀前半に属す。

SK3105(148～150)

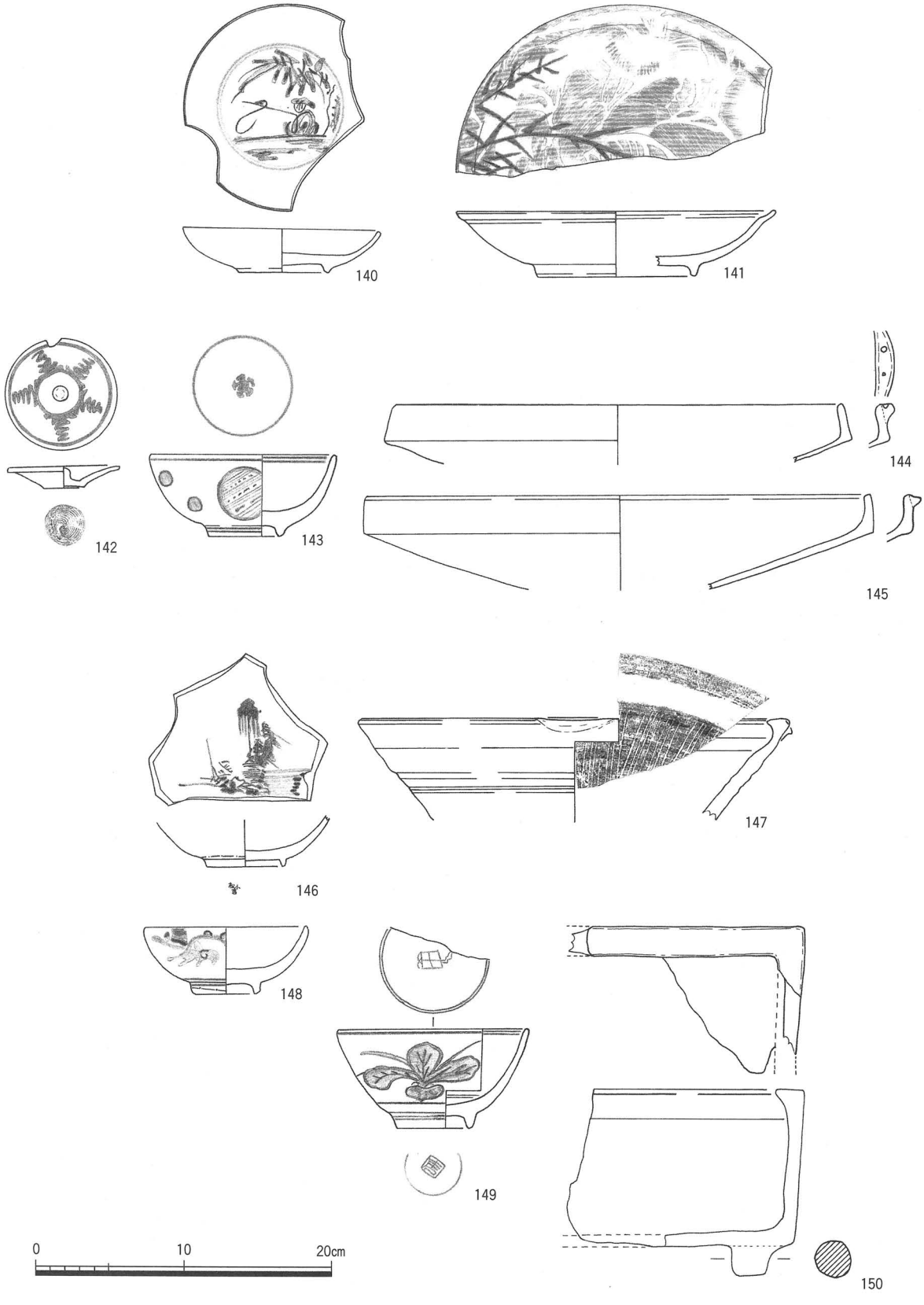
148・149は肥前系染付磁器碗である。148は外面に松竹梅文が描かれる。見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台は釉切れが認められる。149は外面に蕪文が描かれる。見込みおよび高台内に銘を有する。150は土師質の火鉢で、口縁端部は内側に肥厚し、上に面を有する。底面には円筒型の足がつく。18世紀前半に属す。

SK3106(151～158)

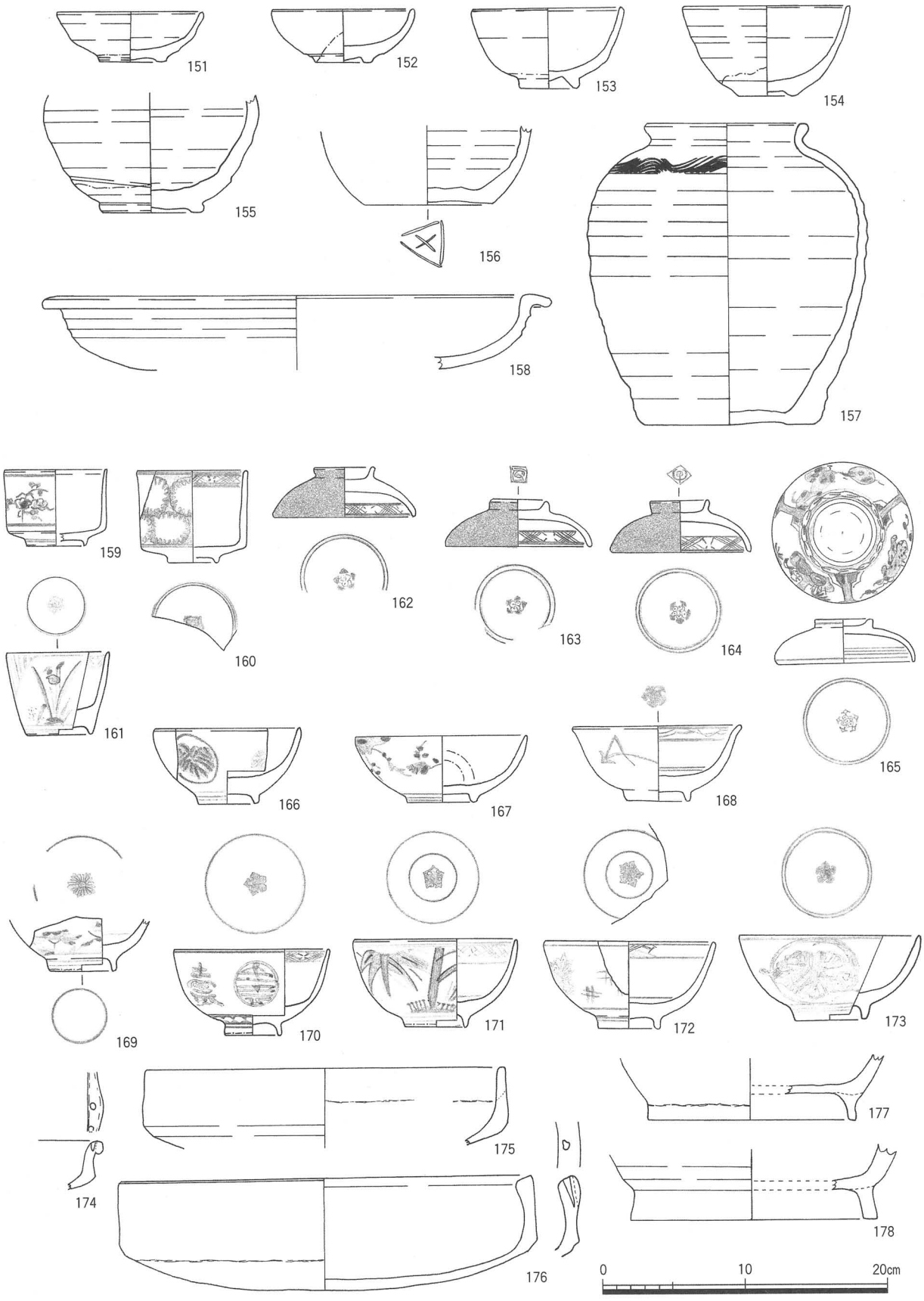
151～155は唐津焼の製品で、151・152が皿、153・154が碗、155が壷である。皿と碗については全て体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。底部の形態は151～153が兜巾高台を呈し、154については高台脇に削りを施さず、碁笥底状となる。釉色は151がオリーブ色、152・153がオリーブ灰色、154が灰白色を呈する。155の壷は、灰オリーブ色の釉が掛かり、腰部以下は露胎である。2次焼成を受けている。156・157は備前焼壷で、いずれも色調が暗赤褐色を呈する。156の外底部には「△内に×」のヘラ描き窯印がある。157は短く外反する口縁部を呈し、端部は丸みを有する。肩部外面には4～5条の櫛描波状文が巡る。色調は暗赤褐色を呈する。158は瀬戸美濃系の灰釉陶器皿と思われる。口縁部外面に3条の凹線を巡らせ、口縁端部は外折し、垂下する。内外面にオリーブ黄色の釉が掛かり、外底部は露胎である。17世紀前半に属す。

SK3107(159～178)

159～173は肥前系染付磁器で、159・160が筒形碗、161が蕎麦猪口、162～165が碗蓋、166～173が碗である。159は梅文、160は雪輪文、161は菖蒲文がそれぞれの外面に描かれ、160・161の口縁部内面には四方襷文が描かれる。また160・161の見込みにはそれぞれ五弁花文が描かれるが、160は印判で161は手描きである。162～165の碗蓋のうち162～164は外面が青磁で、貫入が顕著である。全て口縁部内面には四方襷文、見込みには手描きの五弁花文が描かれる。また、163・164の摘み内には渦福銘が施される。165は外面に松竹梅文、見込みに手描きの五弁花文が描かれる。166～173はすべてくらわんか手の碗である。口縁部の形態について169は欠損のため不明であるが、168のみが端反りで、他は内彎する。文様については体部外面に166・173が蔦丸文、167が松竹梅文、168が梅枝文、169が草花文、170が寿字文、171が竹笹文、172が井桁・蔦文が外面にそれぞれが描かれる。次に口縁部内面を見ると168に唐草文様帯、170～172に四方襷文が染付される。また、見込みでは169に菊花文、168・170～173に五弁花文が染付印判される。174～176は炮烙で、全てD類に属する。そのうち174・176は把手に貫通しない孔を有するもので、同氏分類では174が粘土を貼り付けたａ2類、175が粘土を貼り付けないｂ2類になる。177・178は土師質の焜炉の脚部であろう。いずれも「ハ」字状の高台が貼り付けられ、色調は明褐色を呈する。18世紀後半に属す。



第38図　ＳＫ3102(140・141)、ＳＫ3103(142～145)、ＳＫ3104(146・147)、ＳＫ3105(148～150)



第39図　ＳＫ3106(151～158)、ＳＫ3107(159～178)

ＳＫ3108(179～189)

179・180は施釉陶器皿で、灯明具として使用されたものである。179はいわゆる「柿釉皿」と呼ばれるもので、褐色の鉄分の多い釉を用い、酸化焔で焼成して柿茶色に発色させたものである。底部は碁笥底風である。180は受け付きで、内面だけに明オリーブ色の釉が掛かる。181は肥前系染付磁器の筒形碗で、体部はやや内傾気味である。外面に菊文・菱文、口縁部内面に四方襷文、見込みに印判の五弁花文が描かれる。182・183は関西系の陶器小碗である。182の口縁部は端反りで、高台を除く内外面に淡黄色の釉が掛かる。口縁部に内外面には雨降り文を施す。183は半球形の体部で、高台を除く内外面にやや黄味がかった灰白色の釉が掛かる。外面には松葉文の錆絵が描かれる。184は産地不明の磁器香炉で、外面には明オリーブ灰色の釉が掛かり、内面と外底部は露胎である。内面はロクロ目が顕著で、外底部は凹型を呈する。185は肥前系染付磁器の鉢である。底部は厚めで、畳付きは露胎で、砂が付着する。見込みには、印判の五弁花文、高台内には「渦福」銘を有する。186は陶器鍋で、内外面に明オリーブ色の釉が掛かり、腰部以下は露胎である。口縁部は蓋受けとなる受口状で、底部は平底を呈する。187は陶器土瓶で、算盤珠形を呈する。肩部外面には山形の耳、やや上げ底を呈する外底部には３個の小突起がつく。内外面に薄く鉄釉が掛けられ、一部その上から白泥により流し掛けを施す。外底部および内面下半は露胎である。188は炮烙で、Ｄ類にあたる。189は土師質の羽釜で、72に比べ口縁部はやや直立気味で、鍔は水平である。19世紀前半に属す。

ＳＫ3109(190)

肥前系染付磁器の碗で、半球形の体部に「ハ」の字形の高台が付く。外面には桐の文様帯、口縁部内面には四方襷文が描かれる。18世紀後半に属す。

ＳＫ3110(191)

肥前系染付磁器瓶で、体部下半に張りをもち、畳付きは露胎である。外面には梅文が描かれる。18世紀前半に属す。

ＳＫ3111(192～194)

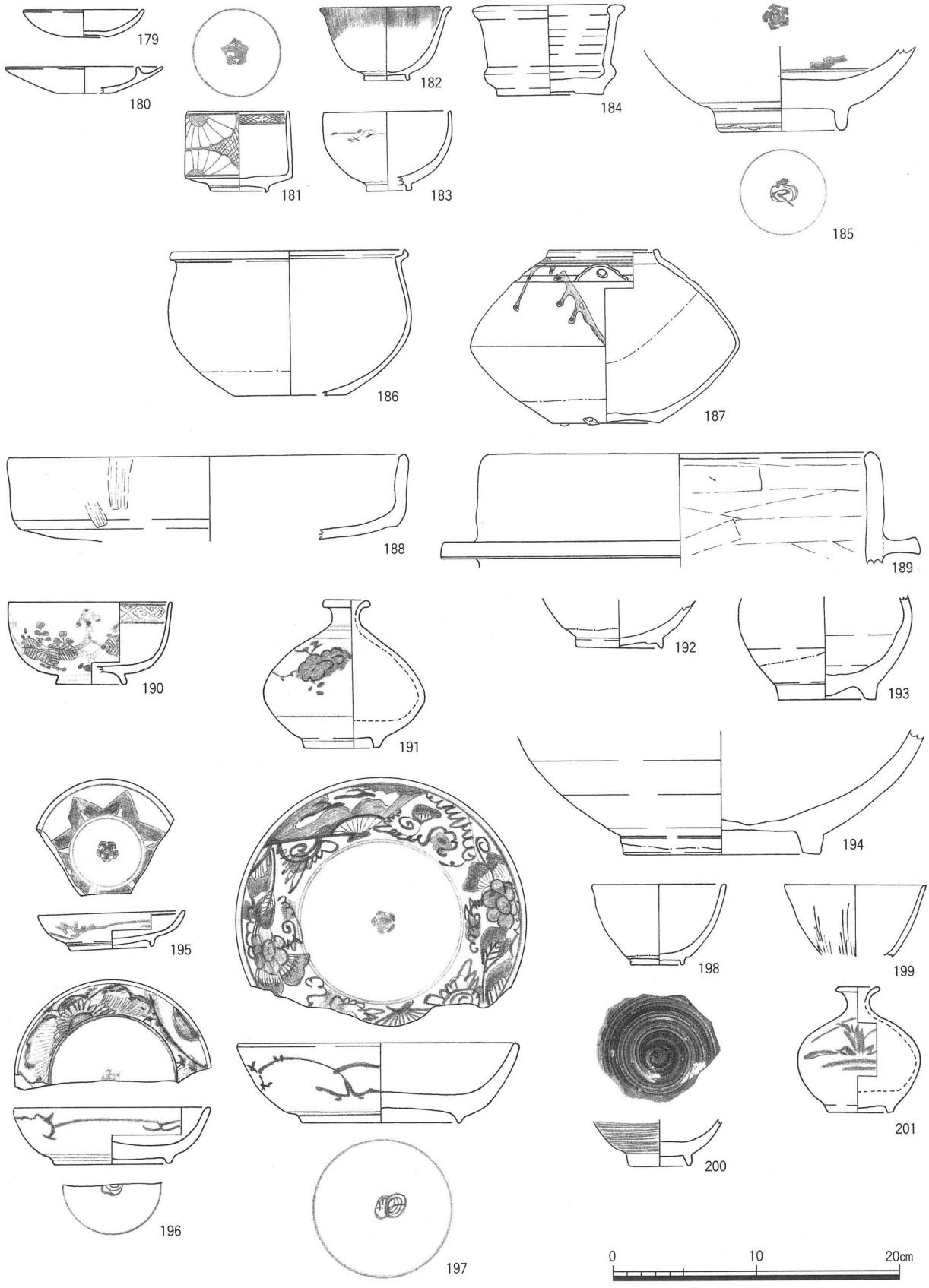
192は瀬戸美濃系の陶器碗である。灰釉が掛けられた丸碗で、高台部分は露胎である。高台の削りは浅い。193・194は唐津焼で、193が壷、194が鉢である。193は内外面に鉄釉が掛けられ、暗茶褐色に発色している。腰部以下は露胎である。高台内は兜巾高台を呈する。194も193と同等の鉄釉が掛けられる。内底面には砂目跡が残り、畳付きは露胎である。17世紀前半に属す。

ＳＫ3112(195～201)

195～197は肥前系染付磁器皿である。３点ともに見込みには印判の五弁花文、外面には唐草文が描かれる。口縁部内面の文様については、195が蓮弁文、196が半菊文、197が扇・草花文がそれぞれ描かれる。196・197の高台内には銘を有する。また、195の内底面には、重ね焼き痕が認められる。198・199は関西系の陶器小碗である。200はやや黄味がかった灰白色の釉が掛かる。高台は露胎である。199の釉調は198と同等で、外面には若杉文が描かれる。200は唐津焼碗で、内外面に白泥による刷毛目が施されるいわゆる刷毛目唐津である。201は肥前系染付磁器瓶で、体部は球形を呈し、畳付きは露胎である。外面には菖蒲文が描かれる。17世紀後半～18世紀前半に属す。

ＳＫ3113(202～204)

202・203は唐津焼である。202は皿で、橙色の素地に透明釉が掛けられ、口縁部内面には簡単な鉄絵が施される。腰部以下は露胎である。203は兜巾高台を呈する碗で、橙色の素地に灰白色の



第40図　ＳＫ3108(179～189)、ＳＫ3109(190)、ＳＫ3110(191)、ＳＫ3111(192～194)、ＳＫ3112(195～201)

釉が掛けられるが、腰部以下および高台内に釉切れが見られる。204は備前焼壷で、内傾する肩部からそのまま口縁部に至り、口縁端部は肥厚し丸味をもって終わる。色調は暗赤褐色を呈する。17世紀前半に属す。

ＳＫ3114(205～207)

205・206は肥前系の白磁皿である。見込みが蛇の目釉剥ぎで、腰部以下は露胎となる。207は肥前系の陶器碗で、11と同種の呉器手である。淡黄色の釉が総掛けされる。畳付きは露胎で、砂が付着する。17世紀後半～18世紀初頭に属す。

ＳＫ3115(208～219)

208は関西系と思われる磁器小坏で、飲酒専用器として生産された別名「薄手酒杯」(用語28)とも呼ばれるものである。内面には「銘酒　□　白梅　玉泉水」と藍色で上絵付けされている。器壁は極めて薄く、型作りの可能性がある。209・210は肥前系染付磁器で、209が筒形碗、210が蕎麦猪口である。209の外面には草花文、内底面には崩れた印判の文様(五弁花文？)が描かれる。呉須は滲んだ発色を呈する。210は外底部がやや凹形を呈し、口縁上端部には口錆装飾が施される。外面には石畳地文、内底面には虫文が描かれる。211・212は淡路産珉平焼の「小判皿」と呼ばれるものである。内底面には陽刻で龍文の型押成形が施され、外底部にはハリ支え痕が３個残る。胎土は精良な磁器質で、黄釉が総掛けされている。213～215は肥前系の製品で、213が染付青磁蓋、214・215が染付磁器碗である。214は外面に格子文、内底面に斜格子文、もう一方の215は外面に区画繞文、内底面に菱形文がそれぞれ施される。216は112と同種の陶器落とし蓋で、灰色の釉が掛けられ、外底部は露胎である。217は180と同種の灯明皿で、内面だけに淡黄色の釉が掛かる。また、仕切り上端には１箇所、半月状の切込みを有する。218は土師質の香炉で、上げ底から内彎して延びる口縁・体部に至り、口縁端部は内側にやや肥厚する。外面には、白泥と鉄釉を使った「練上手」(用語29)によって「マーブル」状の繞模様を表現している。内面はロクロ目が顕著であるのに対し、外面は平滑で艶がある。また、外底部には長方形枠内に「松花山」の刻印があることから、京焼系と思われる。219は陶器土瓶で、底部は逆凹形を成す上げ底を呈する。肩部には「鉄砲口」と呼ばれる断面円形の注口と山形の耳が付き、茶漉しは２穴である。鉄釉が腰部までと内面肩部まで薄く掛けられ、外面には施釉後に白泥と緑釉によって花文が描かれる。18世紀末～19世紀代に属す。

ＳＫ3116(220～223)

全て肥前系の製品で、220が白磁皿、221が青緑釉皿、222が陶器碗、223が染付磁器碗である。221・222は見込みが蛇の目釉剥ぎで、220が腰部以下、221は高台がそれぞれ露胎となる。222はにぶい橙色の胎土に灰釉が掛かり、全面に貫入が顕著である。畳付は露胎である。223は、高台に比して体部の器壁が厚めである。内底面には果物文が描かれ、高台内には銘を有する。17世紀後半に属す。

ＳＫ3117(224～229)

224～227は肥前系の製品で、224・225は唐津焼碗、226は染付磁器碗、227は青磁皿である。224・225は200と同種の刷毛目唐津であるが、224は被熱によって白く変色している。226は外面に竹笹文が描かれる。227の口縁部は端反りで、畳付きは無釉である。228の炮烙はＦ類に属する。

229は147と同種の丹波焼擂鉢で、底部は高台風の作りである。擂目は１単位５～６条で、内底面には１単位４条の櫛目を引いた後に渦巻状に巡らす。17世紀後半～18世紀前半に属す。

第41図　ＳＫ3113(202～204)、ＳＫ3114(205～207)、ＳＫ3115(208～219)、ＳＫ3116(220～223)、ＳＫ3117(224～229)

ＳＫ3118(230～235)

230～234は肥前系の製品である。230は磁器碗で、「虫喰い」(用語30)が認められる。畳付きは露胎である。231～233は染付磁器碗である。231は外面が櫛歯状文様帯の区画内に草花文、口縁部内面には鎖状の文様態を施す。232は外面に松竹梅文、233は外面に梅文、内定面には印判の五弁花文をそれぞれ施す。234は唐津焼の捏鉢である。口縁端部は内外に肥厚し、上に面を有する。高台は深い削り込みで、外側を斜めに切り落とす。内外面には鉄釉と白泥による刷毛目文様が施される。口縁部上面と高台は無釉である。235の炮烙は、154と同じＦ類に属する。18世紀前半に属す。

ＳＫ3119(236～246)

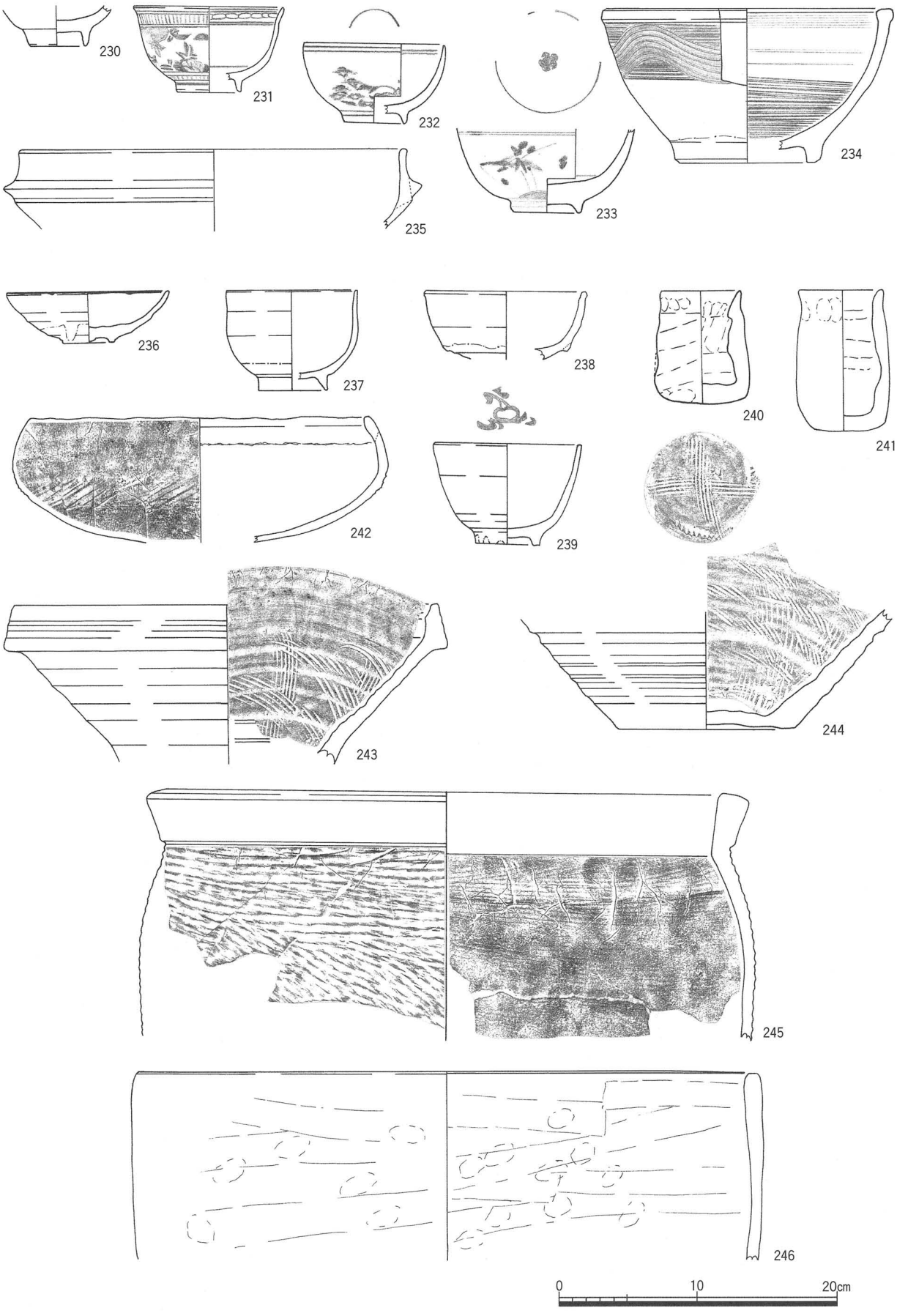
236～239は肥前系の製品で、236が唐津焼皿、237が唐津焼碗、238が陶器碗、239が磁器碗である。236は精良な白色の胎土に茶灰色の釉が掛かる。口縁端部には口錆が施される。外面腰以下は露胎である。兜巾高台を呈する。237は口縁部と体部の境目にややくびれる部分を有する。内外面に鉄釉が掛けられ、腰部以下は露胎である。238は口縁部が若干外反する。内外面に緑色の釉が掛けられるが、被熱により部分的に白く変色している。腰部以下の露胎との境目には、釉の粘りと厚みにより釉垂れが生じている。239は口縁部内面から外面にかけて鉄釉、内面には透明釉が掛けられ、高台は外側面も含め露胎となる。内底面には成り物文が染付される。240・241は焼塩壷である。いずれもコップ形を呈し、内外面ともにナデ調整される。口縁部は外反して尖る。色調は橙色を呈する。積山分類(積山1995、1997)ではＣ類にあたる。242は炮烙でＡ類に属する。243・244は備前焼擂鉢である。外面にはロクロ目が顕著で、内面にはロクロ目状に凹線が刻まれる。擂目は１単位６～８条で斜め方向に施され、244の内底面には１単位６～８条で「十」字形に櫛目が入れられる。色調はいずれも暗赤褐色を呈する。245は114と同種の土師質の甕で、色調はにぶい橙色を呈する。246は乳橙色を呈する土師質の井戸側で、内外面ともにユビオサエした後に横方向にヘラナデ調整される。部分的に２次焼成を受けている。17世紀前半に属す。

ＳＫ3120(247～251)

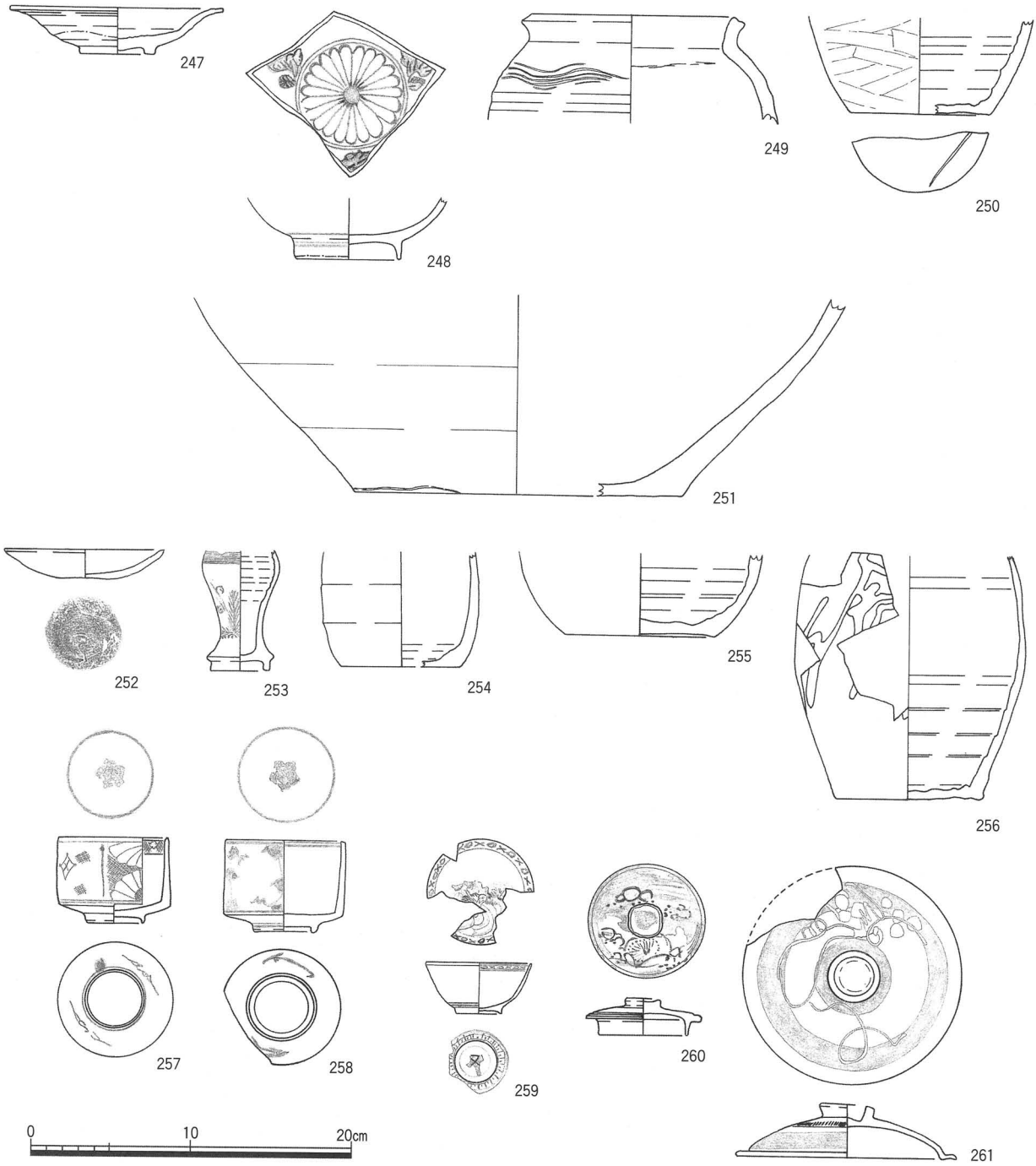
247・248は肥前系の製品で、247が唐津焼皿、248が染付磁器鉢である。247は端反り皿で、オリーブ色の釉がかけられ、全体的に器壁が薄い。248は畳付きが露胎で砂が付着する。内底面には菊花文が描かれる。249～251は備前焼の製品で、249・250が壷、251が甕である。249は157と同種で、肩部外面に３～４条の櫛描波状文が巡る。しかし、口縁端部は157と異なり、外傾する凹面を有する。250は底部のみの残存で、ロクロ成形後に外面は板ナデ調整されている。外底部にヘラ描き線刻の記号が入る。251も底部のみ残存で、胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。以上249～251の備前焼の色調はすべて暗赤褐色を呈する。17世紀前半に属す。

埋め桶3101(252～256)

252は土師器皿である。底部はやや上げ底で、口縁端部は尖り気味に終わる。外底部には糸切り痕を有する。253は肥前系染付磁器瓶である。口縁部は欠損しているが、形態的には口の狭い瓶子(徳利)形を呈するものと思われる。内面の上半部はロクロ目が顕著である。畳付きは釉拭き取りで砂が付着する。外面には錆絵染付の若松文が描かれる。254は産地不明の陶器製品で、徳利の底部と思われる。外面には薄く鉄釉が掛けられる。外底部は無釉である。255は備前焼の壷で、底部のみの残存である。底部はやや上げ底を呈する。色調は暗赤褐色を呈する。256は丹波焼の徳利で、鉄釉が総掛けされるが一部に釉切れが見られる。体部外面には白泥によって文字が書か



第42図　ＳＫ3118(230～235)、ＳＫ3119(236～246)



第43図　ＳＫ3120(147～251)、埋め桶3101(252～256)、ＳＤ3101(257・258)、ＳＤ3102(259～261)

れているが解読できない。19世紀前半に属す。

ＳＤ3101(257・258)

いずれも肥前系染付磁器筒形碗である。257は外面に半菊文・菱文、口縁部内面には四方襷文が描かれる。258は外面に草花文が描かれる。また、いずれも内底面には印判の五弁花文、外底面には松葉文が施される。畳付きは露胎で砂が付着する。18世紀末～19世紀初頭に属す。

ＳＤ3102(259～261)

259は208と同種の「薄手酒杯」で、産地は肥前系である。口縁部内面には「○×」文様帯、内底面

には雲龍文が染付される。また、高台内には朱色で焼継師印「イ」の上に重ねて「ヌ」があり、ガラス焼継が2回行われたことが推測される。260は陶器土瓶蓋である。天井部外面には、白泥と鉄釉によって「練上手」された上に錆絵が描かれ、さらにその上に透明釉が掛かる。かえりと内面は露胎である。261は陶器行平の蓋で、白泥と緑釉による花文を描く。19世紀前半に属す。

ii）各地層からの出土遺物

第1層（19世紀代）

第1区（262～269）

262・263は灯明皿である。262は「柿釉皿」で、底部に糸切り痕が認められる。外底部は露胎で、やや上げ底を呈する。口縁部内面には縦長方形枠内に「明石　山内茂」の刻銘があり、兵庫県明石産であることがわかる（註2）。263は関西系の素焼き品であるが、硬質に焼成されている。底部は碁笥底で、色調は乳白色を呈する。264・265は陶器の土瓶落とし蓋である。264は外面に淡緑色の釉が掛かり、底面は露胎である。素地は灰白色で、胎土には砂粒が多く含まれ粗い。265は112と同種の関西系で、緑色の釉が掛かり、底部は露胎である。266の行平蓋は、摘み上端部に計6箇所の切込みが認められる。外面には鉄釉で松葉文が描かれた上に透明釉が掛けられる。267は台付の陶器灯明具で、柿釉が掛かる。内部は中空で、外底部に糸切り痕を残す。268・269は関西系の仏花瓶である。268は頸部に粘土塊を摘んだ両耳が付き、口縁部は欠損で詳細は不明であるが上方に拡張するものと思われる。外底部を除き鉄釉が掛けられ、光沢がある。269は碗を逆さまにしたような台脚上に、鶴首の口径部に受皿状のものが付く特異な形態を呈する。外面は黄白色の胎土に鉄釉で斜格子文・竹笹文が絵付され、透明釉が掛けられる。台脚内および畳付きは露胎である。

第2区（270～273）

270は陶器行平鍋で、把手部分のみ残存である。把手の上面には「福寿」が陽刻される。271は素焼きの仏花瓶で、器壁は薄く、底部は若干上げ底である。胎土は精良で灰白色を呈する。内外面のロクロ目が顕著である。272は丹波焼の徳利で、直上に伸びる頸部から外傾して上下に肥厚する口縁端部に至る。肩部には白泥によって文字が書かれているが、残存部からは解読できない。273は大谷焼甕である。直上に伸びる口縁部と体部の外面境目はくびれ、口縁端部は内外にやや肥厚し、内傾する面を有する。金雲母・結晶片岩を含む橙色の胎土を有し、外面に光沢のある鉄釉が掛けられる。

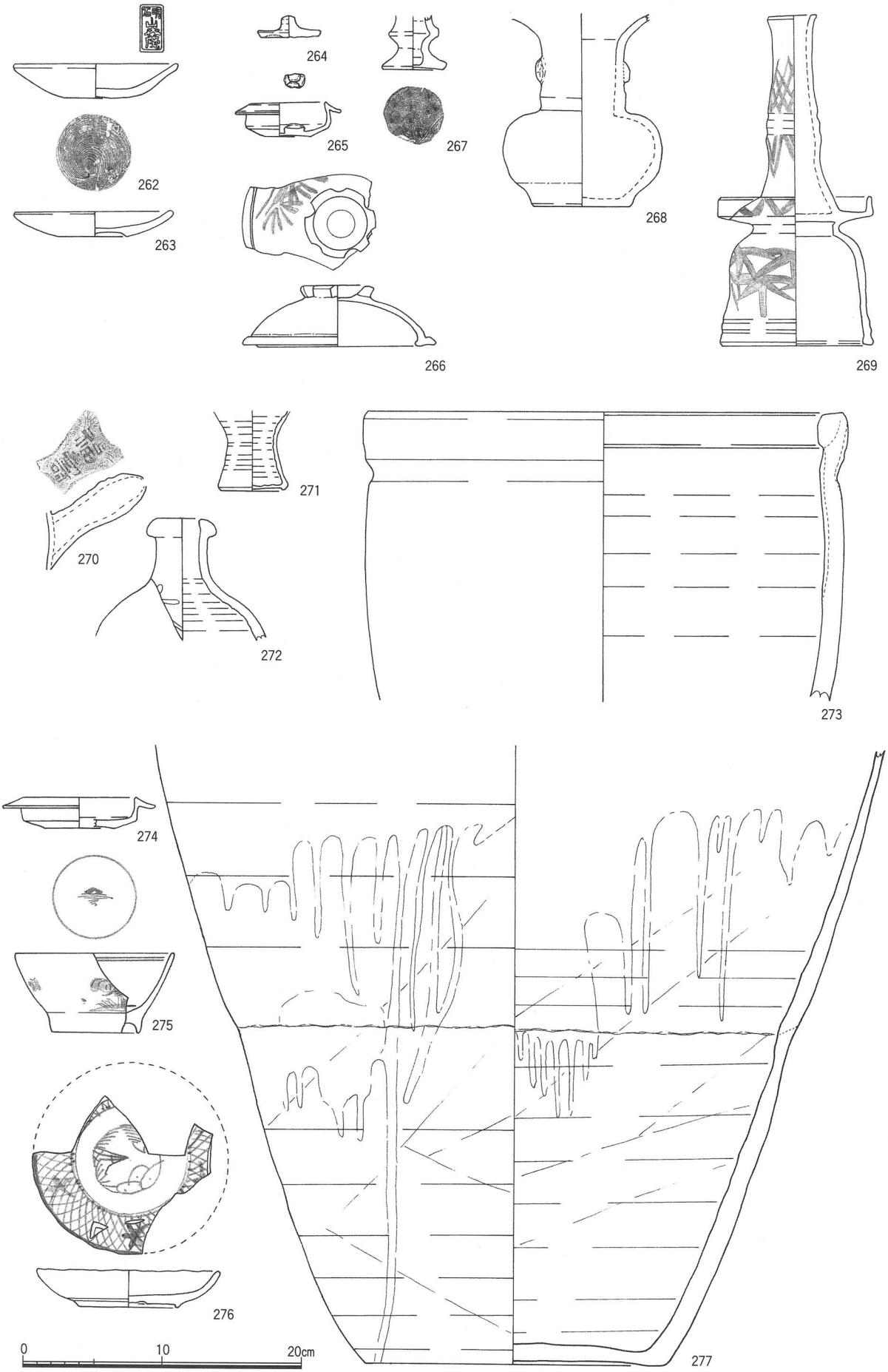
第3区（274～277）

274は関西系の落とし蓋で、オリーブ黄色の釉が掛かる。275は広東碗で、見込みに帆掛け船文、外面に飛蝶文が描かれる。276は肥前系染付磁器皿である。型打で口縁部が輪花状に成形され、さらに上端に口銹装飾が施される。口縁部内面には斜格子文・草文、見込みには簡略した成り物文が染付される。蛇の目凹形高台を呈し、畳付きに砂が付着する。また、内面には熔着物が認められる。277は丹波焼甕と思われる。体部下半に明瞭な接合痕と括れが認められ、底部はやや上げ底を呈する。内外面に薄く淡褐色の鉄釉を塗った後、暗赤褐色の鉄釉を流し掛けする。

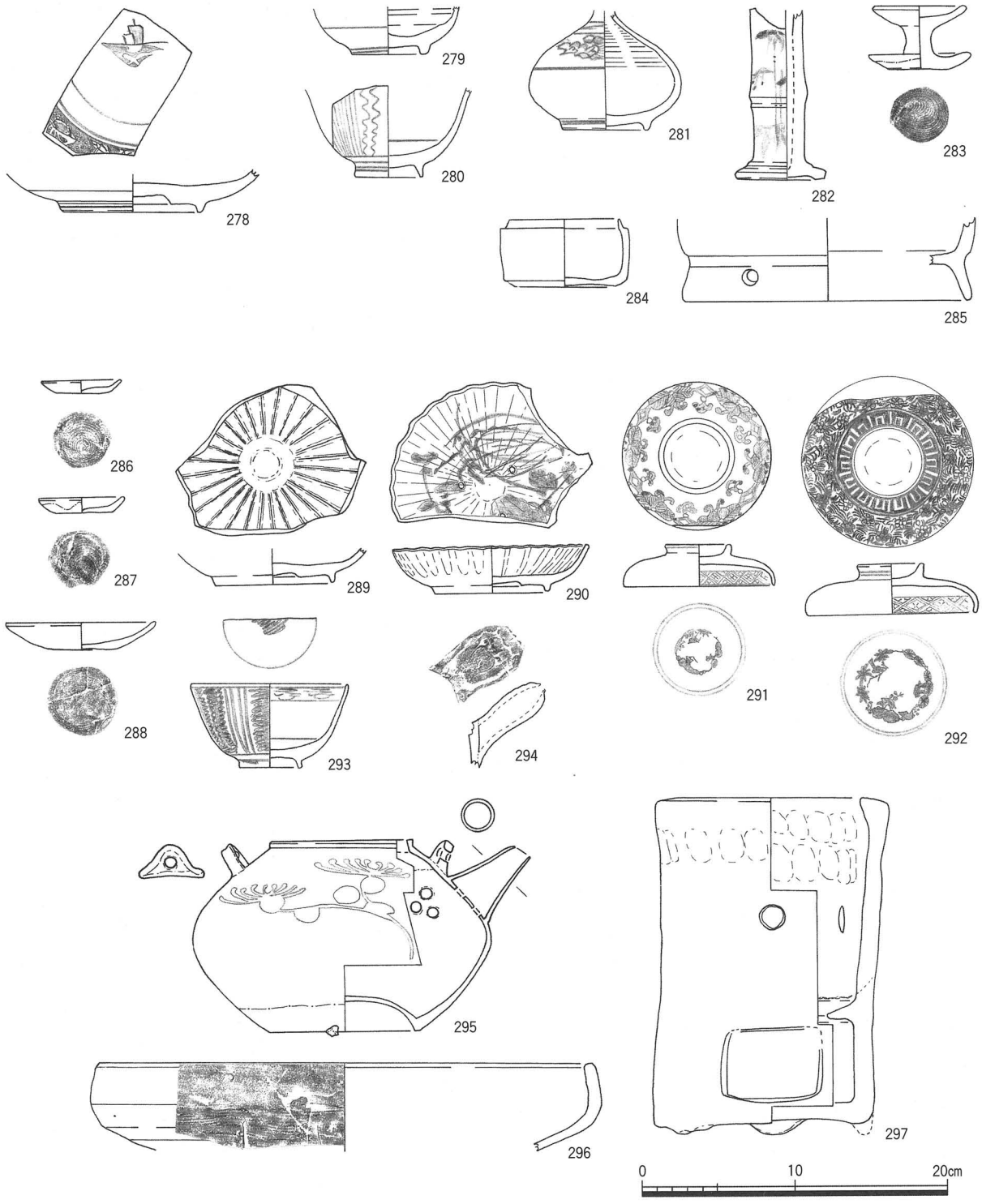
第2・3層（18世紀後半～19世紀初頭）

第2区（278～285）

278～282は肥前系の製品で、278は色絵白磁皿、279は磁器碗、280は染付磁器碗、281は染付磁器瓶、282は仏花瓶である。278は高台の低い蛇の目凹形高台で、畳付きに砂が付着する。また、赤・緑・黄で口縁部内面に草花文、見込みに帆船が上絵付けされている。279の外面には虫喰い



第44図　第１層(第１区－262～269、第２区－270～273、第３区－274～277)



第45図　第２・３層（第２区－278～285、第３区－286～297）

が見られる。内面は露胎で、橙色を呈する。280は端反り碗で、外面によろけ縞文が描かれる。281の肩部外面には草花文が描かれる。肩部内面のロクロメが顕著で、畳付きは露胎である。282の円筒状の体部には竹節を模したような凹線を１条巡らせ、外面には竹絵が描かれる。畳付きは露胎で、砂が付着する。283・284は関西系の施釉陶器で、283が灯明具、284が合子である。283は受け皿に脚柱が付くもので、底部には糸切り痕が見られる。浅黄色の素地に透明釉が掛けられ

るが、外底部は露胎である。284は口縁部に蓋受けを有し、底部は上げ底を呈する。黄味がかった灰白色の精良な胎土で、透明釉が掛けられるが、口縁部外面と外底部は露胎である。285は土師質焜炉の脚部と思われる。高台側面には径約８㎜前後の孔が穿たれる。

第３区(286～297)

286～288はすべて柿釉の灯明皿で、外底面には明瞭な糸切り痕を有する。289～293は肥前系の磁器で、289・290が皿、291・292が碗蓋、293が碗である。289・290はいずれも蛇の目凹形高台を呈し、菊花形に型打成形される。さらに290の見込みには、草花文が染付される。293は外面に70と同じよろけ縞文が描かれるが、口縁端部は端反りではなく内彎する。291・292の天井内面にはいずれも見込みに松竹梅繋ぎ文、口縁部内面に四方襷文が描かれる。外面は291が瓔珞(ようらく)繋ぎ文、292が蓮弁文帯・草花文が描かれる。294は陶器行平鍋の把手で、上面には伊勢蝦が陽刻される。295は関西系の土瓶で、上げ底を呈する外底面に豆粒大の小突起(足)が貼付けられている。体部上半部には白泥によって菊花が描かれる。296の炮烙は口縁部が内彎し、口縁部外面下半～体部と底部の境目にかけては、櫛状工具で粘土を掻き取った痕が残る。Ｂ類に属する。297は61と同種の土師質焜炉である。

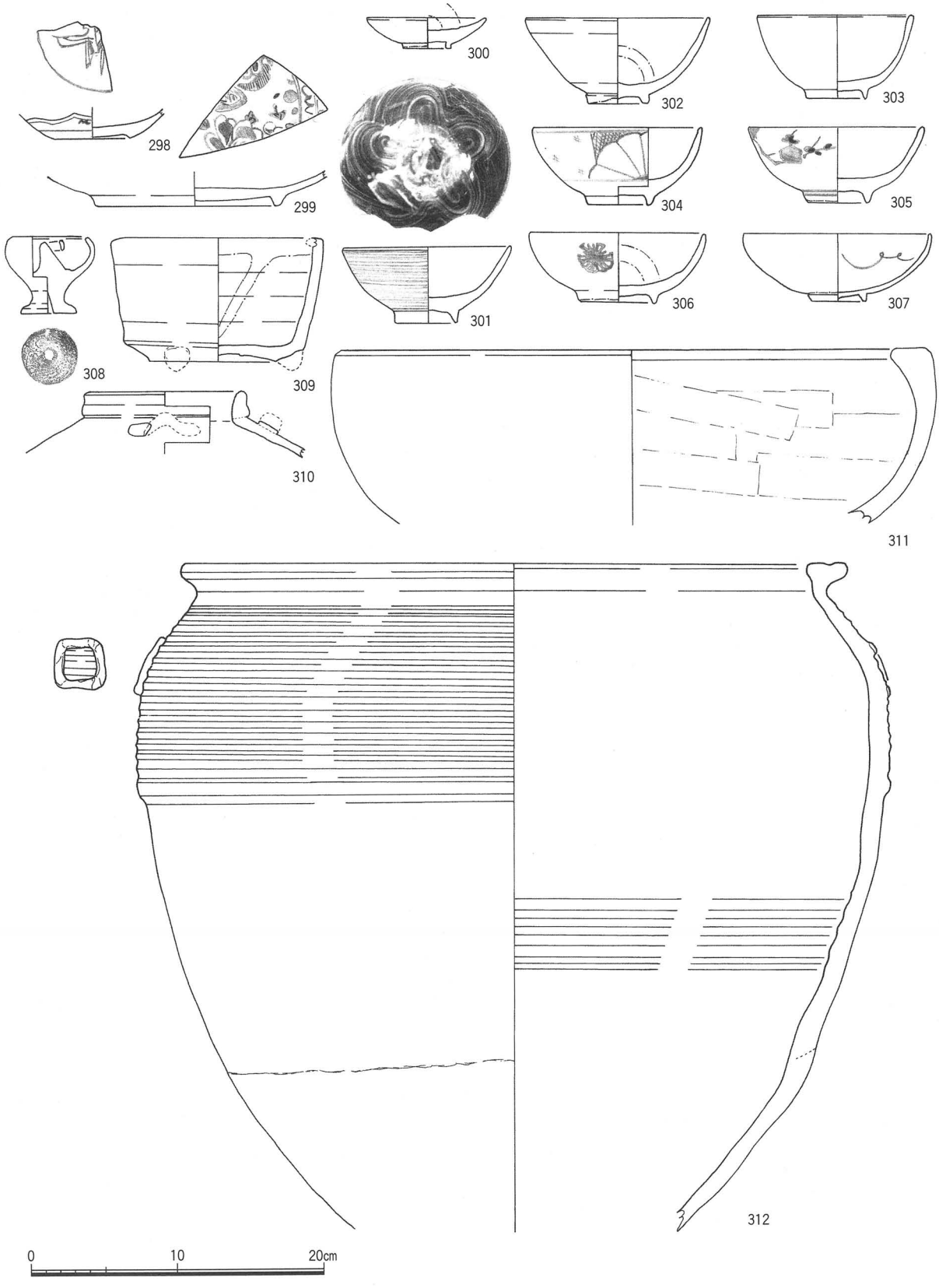
第４層(17世紀代～18世紀前半)

第１区(298～312)

298・299は漳州窯系の輸入磁器皿で、298は「青花」(用語31)皿、299は赤絵磁器皿である。298は碁笥底を呈し、内底面には「寿」字が染付けられる。299は白磁に赤・黒・緑の上絵付けにより文様が描かれる。畳付きは露胎で、砂が付着している。300～305は肥前系の製品で、300が白磁小皿、301が唐津焼刷毛目碗、302が陶器碗、303が白磁碗、304～306が磁器碗である。300は見込みが蛇の目釉剥ぎで、畳付きは露胎である。301の見込みには３箇所の砂目積み跡を有し、畳付きは露胎である。302は透明釉が掛かり、淡黄色に発色する。見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台は削り出しで側面は釉切れ、高台内は露胎である。303～306の畳付きは露胎で、砂が付着する。306の見込みは蛇の目釉剥ぎされ、全面に２次焼成を受けている。外面の各文様は、304が半菊文、305が梅枝文、306が印判の菊花文である。307は関西系の陶器碗で、黄味がかった乳白色の精良な胎土を有し、内外面に透明釉が掛けられる。口縁部内面には錆絵で草文が描かれる。高台部は露胎である。308は瀬戸美濃系で陶器製の台付灯明具である。内彎した碗形の受部に台脚をつけたもので、内面底部中央に細い管状(一方に切込みがある)の灯芯立が貼り付けされ、釉薬には鉄釉を施し黒褐色を呈している。底部には糸切り痕が認められ、中央に孔が穿たれる。外底部は露胎である。309は瀬戸美濃系の香炉である。底部はやや上げ底で、縁部に３足の貼り付け痕が認められる。口縁端部は残存状況から内側に肥厚するようである。灰緑色の釉が口縁部内面と体部に掛かり、底部は蛇の目状に釉剥ぎされる。310は東南アジア産の可能性がある陶器四耳壷である。外面のみ鉄釉が掛かり黒褐色に発色する。口縁端部上面は露胎である。311は瓦質の火鉢で、内面には横方向のヘラナデ痕が見られる。312は丹波焼甕である。口縁端部は内外に肥厚し、上端はやや凹面を成す。体部上半にはカキ目を有し、肩部には輪耳が貼り付けられる。内外面に塗土が施され、胎土中には多量の石英・金雲母・長石が含まれる。

第２区(313～323)

313は土師器皿で、へそ皿状の底部とやや肥厚気味に終わる口縁部を呈する。外面にはユビオ



第46図　第４層－Ⅰ（第１区）

サエ痕が顕著に見られる。314は瀬戸美濃系の鉄釉皿で、内外面に鉄釉のムラが見られる。高台部分は低く、露胎である。315～321は肥前系の製品で、そのうち315～319は唐津焼の製品である。316は皿で、発色が鮮烈な銅緑釉が掛けられる。見込みは蛇の目釉剥ぎ、腰部以下は露胎である。316は「呉器手」の碗で、鉄釉が掛けられる。腰部以下は露胎である。317は口縁部がやや内彎する折縁の鉢である。内面は白泥によって刷毛目文様を施した後に鉄絵が描かれる、いわゆる二彩の刷毛目唐津である。外面には鉄釉が掛かり、内底面には砂目跡が残る。腰部以下は露胎で、素地は淡赤橙色を呈する。318は口縁部～体部が内彎し、口縁端部は若干肥厚する鉢である。高台の削り込みは深い。内外面ともに白泥による刷毛目装飾の後、透明釉が掛けられる。見込みは蛇の目釉剥ぎ、腰部以下と高台部分は露胎で、素地は淡赤橙色を呈する。319は235と同種の捏鉢であるが、口縁端部は斜め方向に垂下し、外傾する面を有する。320は染付磁器皿で、見込みには菖蒲文が描かれる。畳付きは露胎で、砂が付着する。外底部には熔着物が１点見られる。321は青磁皿で外底部は蛇の目凹形高台を呈し、素地は橙色を呈する。322・323は堺産の摺鉢である。322は口縁端部内面に明瞭な凸帯があり、口縁部外面には２条の沈線が巡る。擂目は見込みから口縁部に向けて施した後、ロクロナデによって口縁部の擂目を軽く消しているのが見てとれる。一方、323は口縁端部内面の凸帯は鈍く、体部内面の擂目に切り合いが見られる。色調はいずれも暗赤褐色を呈する。白神分類では、322がⅠ型式、323がⅡ型式に属する。

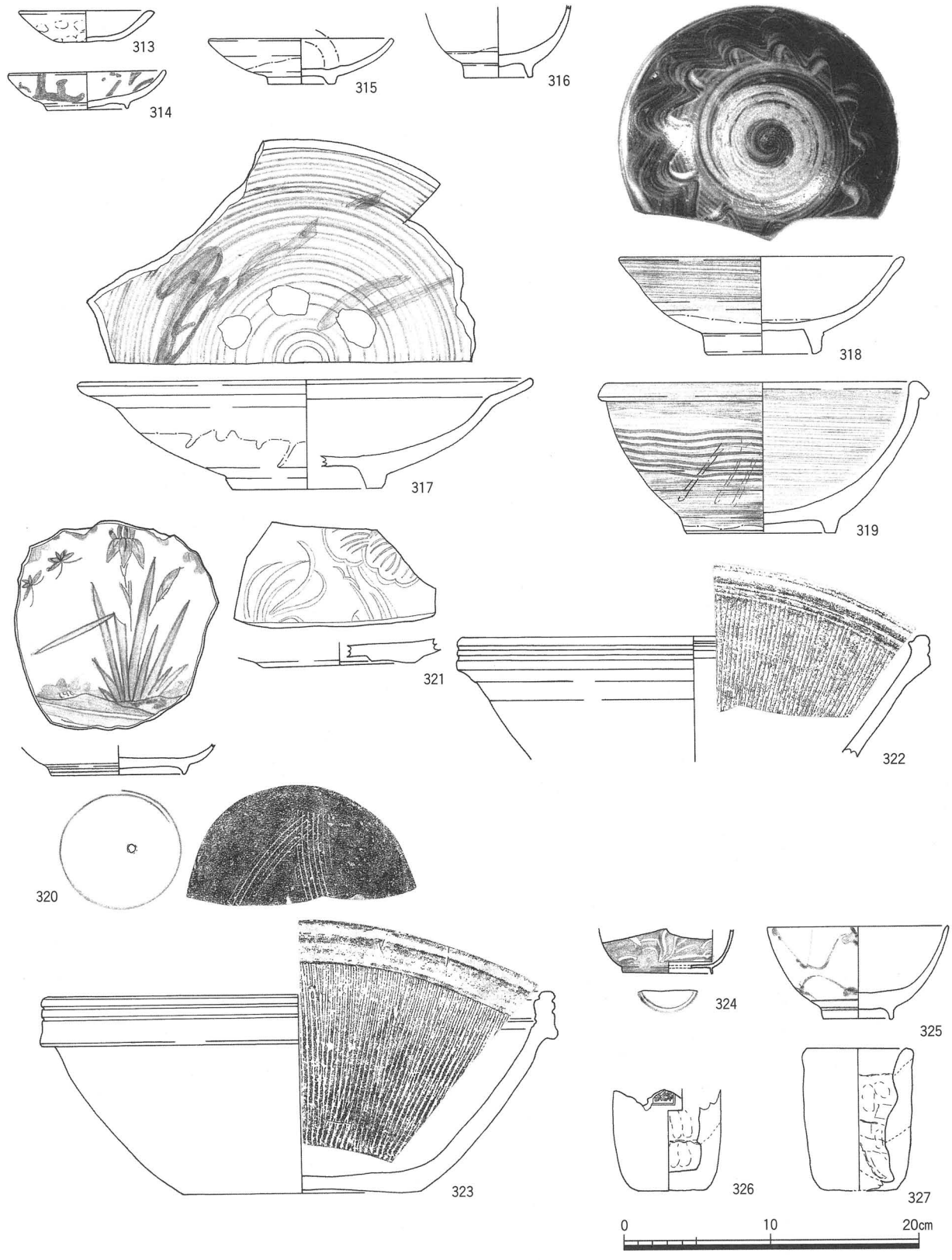
第３区(324～327)(17世紀代～18世紀前半)

324は産地不明の磁器小碗である。全体的に器壁は薄く、高台は幅広で低い。外面は黒色の鉄釉？が掛かり、白泥で草文が上絵付けされ、高台内には２重の圏線が染付される。輸入磁器の可能性もある。325は肥前系染付磁器の碗で、畳付きのみ露胎である。外面には網目文が描かれる。326・327は焼塩壺で、いずれも色調はにぶい橙色を呈する。また、326の体部外面には刻印銘があり、残存部分の推察から「御塩壺師堺湊伊織」と解される。２点とも積山分類のＤ類に当たる。

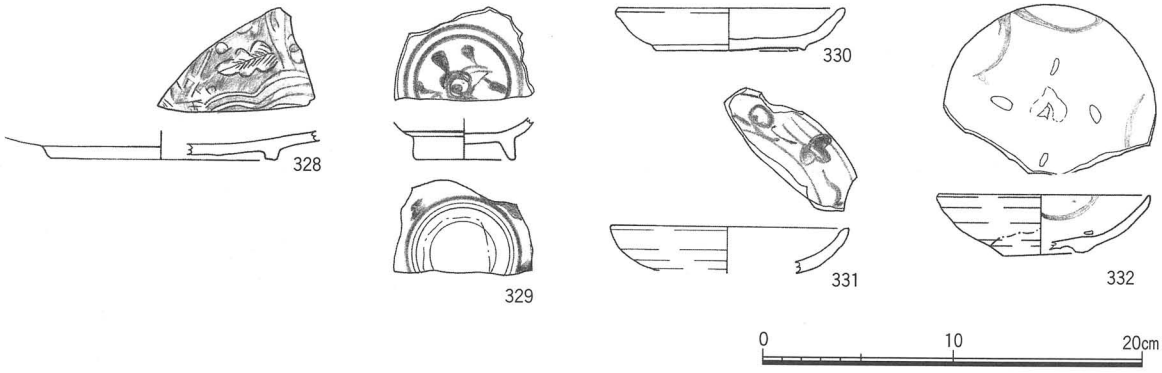
第５層(17世紀初頭)

第３区(328～332)

328・329は中国輸入磁器青花で、いずれも漳州窯系の製品と思われる。328は大皿で、高台には多量の砂が付着する。内底面には太い線描で草木文が描かれる。329は碗である。胎土は陶器質で、鉄分を含み黄白色を呈する。見込みと高台内は露胎で、見込みには鉄釉で花文が描かれ、腰部には葉文が染付される。330・331は瀬戸美濃の志野丸皿である。330は低い高台と若干肥厚する口縁端部を有する。長石釉が全面に掛けられるが焼成不良で、釉が灰白色に濁り「ピンホール」(用語32)が多く生じている。部分的に釉の薄いところも見られる。畳付きと高台内は露胎である。高台内に円錐ピン痕が２箇所残る。331は「絵志野皿」とも呼ばれるもので、口縁部内面には圏線で区画した蔓唐草の鉄絵が描かれ、薄い長石釉が掛けられている。大窯の時期区分では、330が大窯末期～連房式登窯初期、331が連房式登窯初期にあたる。332は唐津焼皿である。口縁部は緩やかに内彎し、端部は斜めに面取りされる。底部は碁笥底状に削り込まれる。内底面に胎土目が４個残る。口縁部内面の２箇所に円弧文の鉄絵を描く。橙色の素地に灰色の釉が施釉され、腰以下は露胎である。



第47図　第４層－Ⅱ（第２区－313～323、第３区－324～327）



第48図　第５層(第３区)

２）　土器・陶磁器(室町時代末期)

ｉ）遺構内出土遺物

[第１区]

ＳＫ1201(333～341)

333～335は土師器皿である。333・334はいわゆる「て」の字状口縁を有するもので、11世紀後半に位置付けられる。335は平底の底部から内彎し、口縁端部は摘み上げる。16世紀後半頃のものである。336～340はすべて和泉型の瓦器椀で、336・337・339・340は体部内外面および見込みのヘラミガキが密である。338は内外面のヘラミガキが粗く、とくに体部外面下半部はユビオサエの痕跡が明瞭に窺える。森島編年(森島1995)では336・337・339・340がⅠ－３期、338がⅡ－３期に比定されるもので、すべて12世紀代の所産である。341は土師器甕で、外面は横方向に粗いタタキ目が見られる。

ＳＫ1203(342・343)

342は土師質の香炉である。口縁端部は内側に屈曲し、底部には円錐台形の脚が３箇所付く。内外面は、ユビナデの後ヘラナデが施される。16世紀後半頃の所産である。343は瓦質の甕で、調整は341に類似するが、玉縁状を呈する口縁端部の形態から15世紀後半まで遡るものと思われる。

ＳＫ1208(344)

瓦質の羽釜である。口縁部外面には３条の凹線がめぐり、体部外面はユビナデのちヘラケズリ、口縁部～体部内面はヘラナデを施す。鍔は幅が狭く、水平に延びる。15世紀代の所産である。

ＳＫ1215(345)

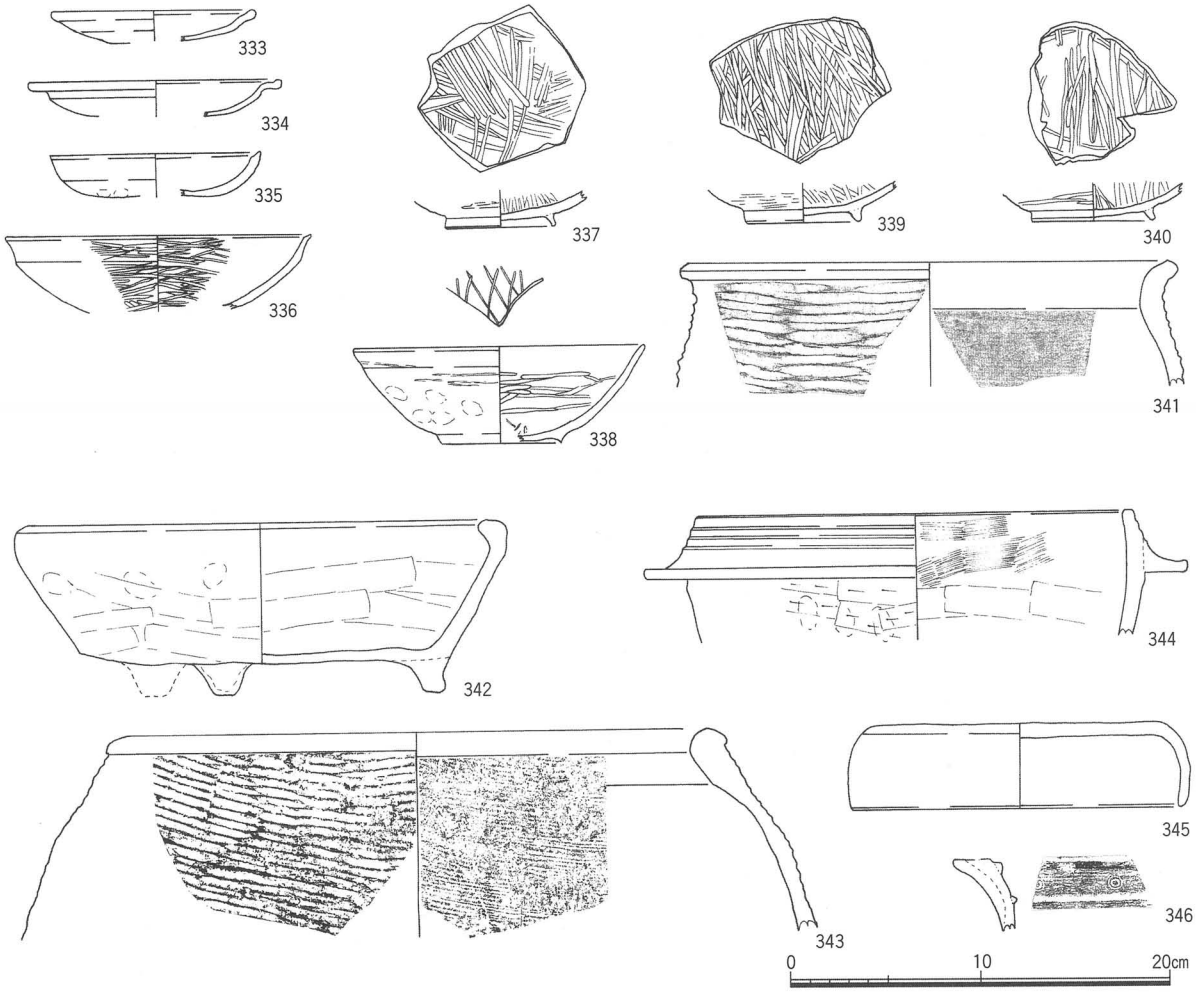
土師質の蓋である。火消し壷あるいは骨壷の蓋と思われるが詳細は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。

瓦溜め1201(346)

瓦質の火鉢である。内彎する口縁端部の上面には面を有する。口縁部外面には２条の貼り付け凸帯を有し、その内側にはスタンプで竹管文が施される。15世紀後半の所産である。

ＳＤ1201(347～355)

347～350は土師器皿で、色調は347・348が褐色系、349・350が白色系を呈する。347・348は底部がやや上げ底状で、口縁端部は尖り気味に終わる。それに対し、349・350は平坦な底部から丸みをもつ口縁端部となる。351は瓦質の火鉢で、直立する口縁端部の上端には面を有する。口縁部外面には２条の貼り付け凸帯を有し、その内側にはスタンプで花菱文が施される。15世紀後半

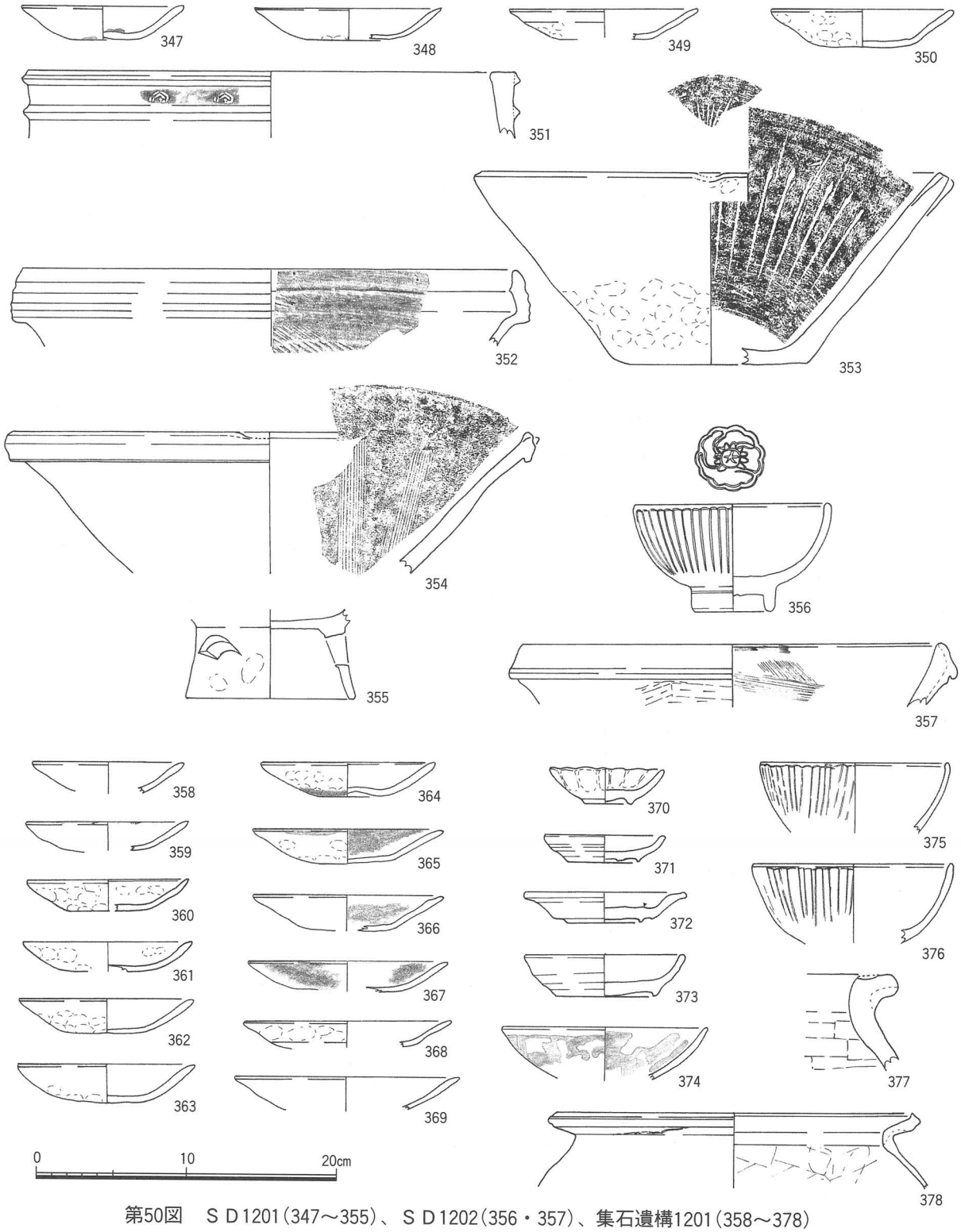


第49図　ＳＫ1201(333～341)、ＳＫ1203(342・343)、ＳＫ1208(344)、ＳＫ1215(345)、瓦溜め1201(346)

頃の所産である。352は備前焼擂鉢で、やや内傾する口縁部の端部外面には４条の凹線がめぐる。353は丹波焼擂鉢で、口縁部上端には外傾する面を有する。内面の擂目は一本引きで、破片のため単位は不明であるが内底面には数条の櫛目が施される。外面下半にはユビオサエ痕が明瞭に残る。354は瀬戸美濃系の擂鉢で、「錆釉擂鉢」と呼ばれる酸化鉄を主体にした鉄釉を全面に施したものである。口縁端部は上下に肥厚し、擂目は１単位９～10条である。色調は暗紫灰色を呈する。大窯の時期区分では大窯Ⅱ期の前半頃(16世紀前半頃)に比定される。胎土は暗赤褐色を呈し、２～３㎜の砂礫を含む。355は瓦質香炉の脚台部と思われ、２箇所に三日月状の透かし窓を有する。

ＳＤ1202(356・357)

356は龍泉窯系の青磁碗で、16世紀前半頃の所産である。高台内を除き、にぶい黄橙色の胎土に青緑色の釉を施す。外面にはヘラによる線描連弁文の線刻を施し、見込みには花文の中に「大」の文字が陰刻される。357は瓦質の捏鉢で、15世紀後半頃のものと思われる。全体に２次焼成を受けている。口縁部外面下端部を下方に拡張し、外傾する面を有する。体部内面は１単位８条のハケメ、外面はヘラケズリが施される。

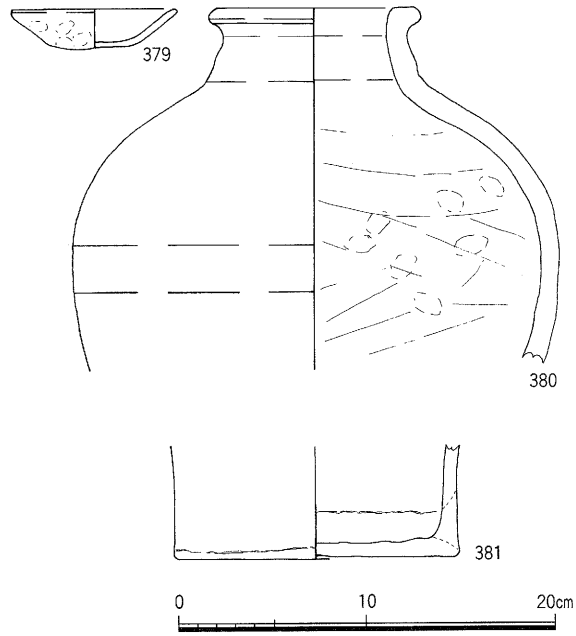


第50図　ＳＤ1201（347～355）、ＳＤ1202（356・357）、集石遺構1201（358～378）

集石遺構1201（358～378）

358～369は土師器皿である。色調で分類すると、白色系のもの359・361～363・367・368、褐色系のもの358・360・364～366・369に分けられる。口縁端部の形態でみると尖り気味に終わるものがほとんどで、368の１点だけが丸く終わる。また、底部では平底のもの360～362･365～367と、窪み底のいわゆる「へそ皿」を呈する364に分類できる。なお、364～367の４点は煤の付着か

ら灯明皿と思われる。370は産地不明(中国輸入品の可能性がある)の「型押し」(用語33)による磁器皿で、内外面に花弁を表現する。全体に薄く青緑色の釉が掛けられる。畳付は露胎で、砂が付着する。371～374は瀬戸美濃系の製品で、371・373は丸皿、372は折縁皿、374は平碗である。371～373は明緑色を呈する灰釉、374は鉄釉が施される。371～373の外底面には、「輪トチン」(用語34)の痕跡が残る。372の見込みは、器物同士が熔着しないように釉が拭われる。374は鉄釉のムラが内外面に顕著に出ている。大窯の時期区分では、371・373がⅣ期、372がⅤ期、374はⅢ期に比定されよう。375・376は356と同種の龍泉窯系の製品で、16世紀前半の所産である。377については形状から瓦質の羽釜と思われる。外折する口縁部を有し、口縁端部は丸く終わる。一部2次焼成を受けて赤化している。378についても、遺存部の形状から大和型の土師質羽釜と思われる。器壁は薄く、色調は淡橙色を呈する。胎土は緻密である。



第51図　ＳＫ2201(379・380)、ＳＤ2201(381)

[第2区]

ＳＫ2201(379・380)

379は土師器皿である。平坦な底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部で、端部は丸味をもつ。380は丹波焼壷である。ややすぼんだ頸部から玉縁状の口縁端部を有する。体部外面には鮮緑色の自然釉がきめ細かに掛けられ、よく焼締まっている。

ＳＤ2201(381)

381は土師質の火鉢である。比較的器壁の薄い円筒形を呈するものと思われる。内外面に1条ずつ接合痕が認められる。外面は2次焼成を受け赤化している。

木樋3201(382～385)

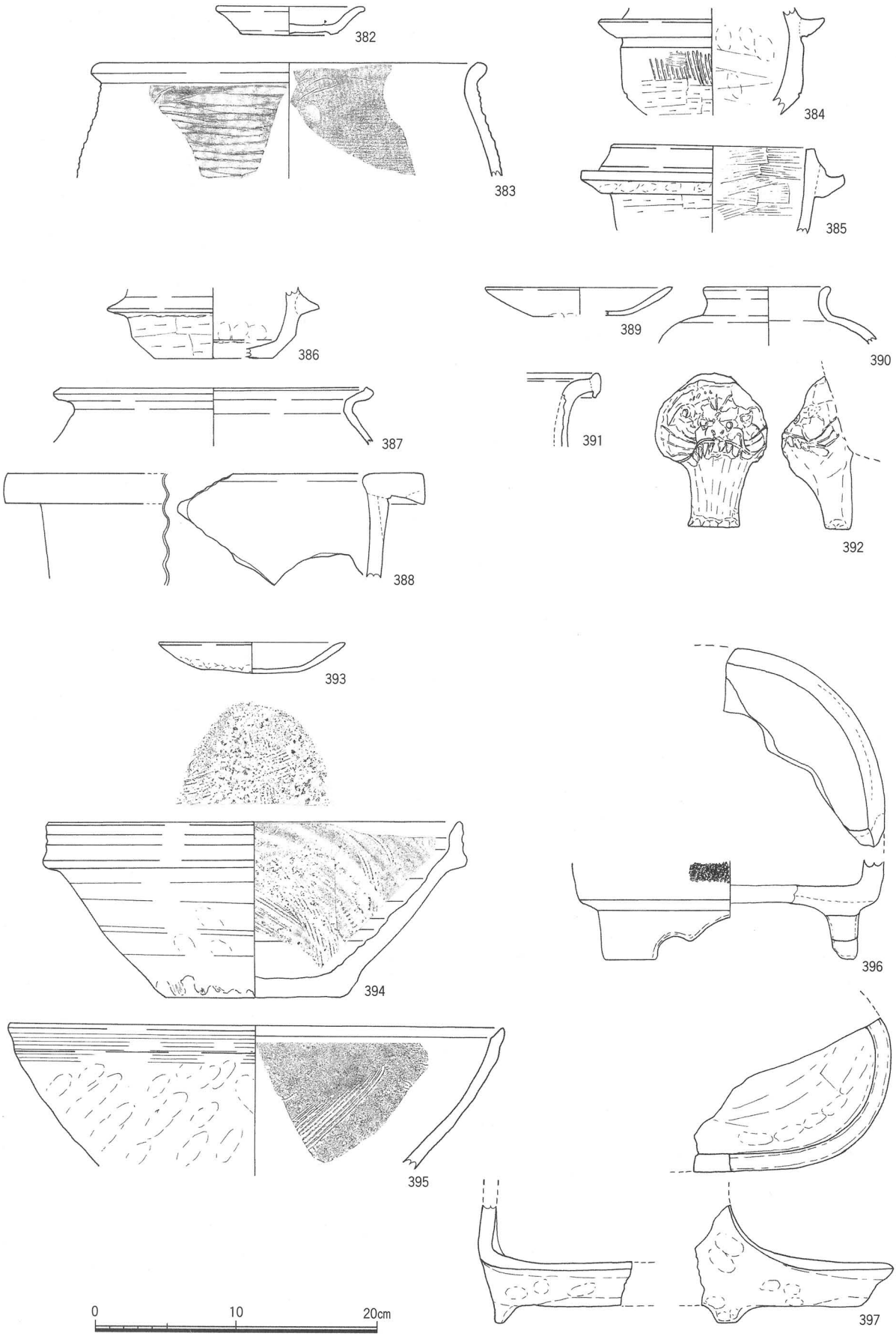
382は瀬戸美濃系の端反り丸皿である。灰釉が施され、黄緑色の発色をする。見込みは釉が拭い取られ、外底面には輪トチン痕が残る。大窯の時期区分では、Ⅳ期末に比定される。383は土師器甕で、色調は橙色を呈する。2次焼成を受けている。384・385は土師質で小型厚手のミニチュア羽釜である。いずれも体部から直立する口縁部を有するものと思われ、体部に付く鍔は短い。体部外面には煤が付着する。

杭列3201(386～388)

386は土師質のミニチュア羽釜で、体部は浅く、鍔は断面三角形で短小である。387は大和型羽釜である。388は土師質の火鉢で、口縁端部は水平に外折し、上端に水平な面を有する。全体的に2次焼成を受け、赤化している。

石列3202(389～392)

389は土師器皿で、口縁端部は尖る。色調は白色系を呈する。390は産地不明の焼締め陶器壷である。肩の張った体部から外反気味の短頸に至り、やや外方に曲がる口縁端部に至る。色調は褐灰色を呈する。391は常滑焼壷である。直立する頸部から、外反する口縁部に至り、口縁短部は上下に肥厚する。色調は灰褐色を呈する。392は瓦質香炉の獣脚で、「鬼面文」が施され、裏側の



第52図　木樋3201（382～385）、杭列3201（386～388）、石列3202（389～392）、石組み溝3201（393～397）

上部には本体と接合するための櫛目が数条認められる。

石組み溝3201(393～397)

393は土師器皿で、色調は褐色系を呈する。外底面にはユビオサエ痕が顕著に窺える。394は備前焼擂鉢で、擂目は底から右斜めに引き上げられているがかなり磨耗しており、使い込まれた様子がわかる。395は瓦質の擂鉢で、口縁端部が内傾する凹面を呈する。1単位8条の擂目を下半から右上方に彎曲して施される。口縁部外面には横方向のハケナデ、体部外面にはユビナデが施される。396は瓦質の香炉で、高台には装飾的に面取りした切込みが見られる。397は脚がつく土師質の移動式竈で、内外面にはユビオサエ痕が顕著に窺え、内底面には煤が付着する。

ii) 各地層からの出土遺物

第7層

第1区(398～403)

398～400は土師器皿で、400は内外面の煤の付着から灯明皿と思われる。色調は3点ともすべて白色系を呈する。すべて口縁部は斜上方に直線的に伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。また、399・400は底部が上げ底のいわゆる「へそ皿」となる。401は土師質のミニチュア羽釜で、算盤珠形を呈する。断面三角形の短小の鍔が付く。402は常滑焼壷で、口縁部は水平に外折し、口縁端部は上下に肥厚する。色調は光沢のある暗赤褐色を呈する。403は備前焼擂鉢で、直立気味の口縁端部外面に凹線は見られない。色調は暗赤褐色を呈する。

第3区(404～415)

404～409は土師器皿で、色調は白色系が404・405・409、褐色系が406～408に分けられる。すべて外面にはユビオサエ痕が顕著に残り、口縁端部は尖り気味に終わる。404・406については、口縁部と体部の境目に段が認められる。底部を見ると404・405は丸底で、他はすべて平坦である。また、405にのみ外底面に煤が付着する。410～412は中国輸入磁器で410・411が漳州窯系の皿、412が龍泉窯系の青磁碗である。410・411はいずれも碁笥底を呈し、見込みに410はねじ花文、411は寿字文が染付けされる。さらに、411の底部外面には芭蕉葉文が描かれる。いずれも高台内は露胎である。胎土は陶器質で、鉄分を含み浅黄橙色を呈する。412は356と同種のもので、見込みには花文の中に「王」の文字が陰刻される。413～415は瓦質の鉢で、いずれも内外面に煤が付着することから火鉢等の火に関連する容器と考えられる。413は55と同種とみられるもので、器壁は非常に薄く、底部はやや上げ底気味である。胎土は緻密で金雲母が多く含まれる。414は外底部の3箇所に円錐台形の脚がつく。口縁端部は水平に外折し、上端に面を有する。415は上半部のみの残存であるが、口縁部の形態は414と同じである。しかし、414との相違点は外面の調整で縦方向に丁寧なヘラミガキが施されていることである。

第8層

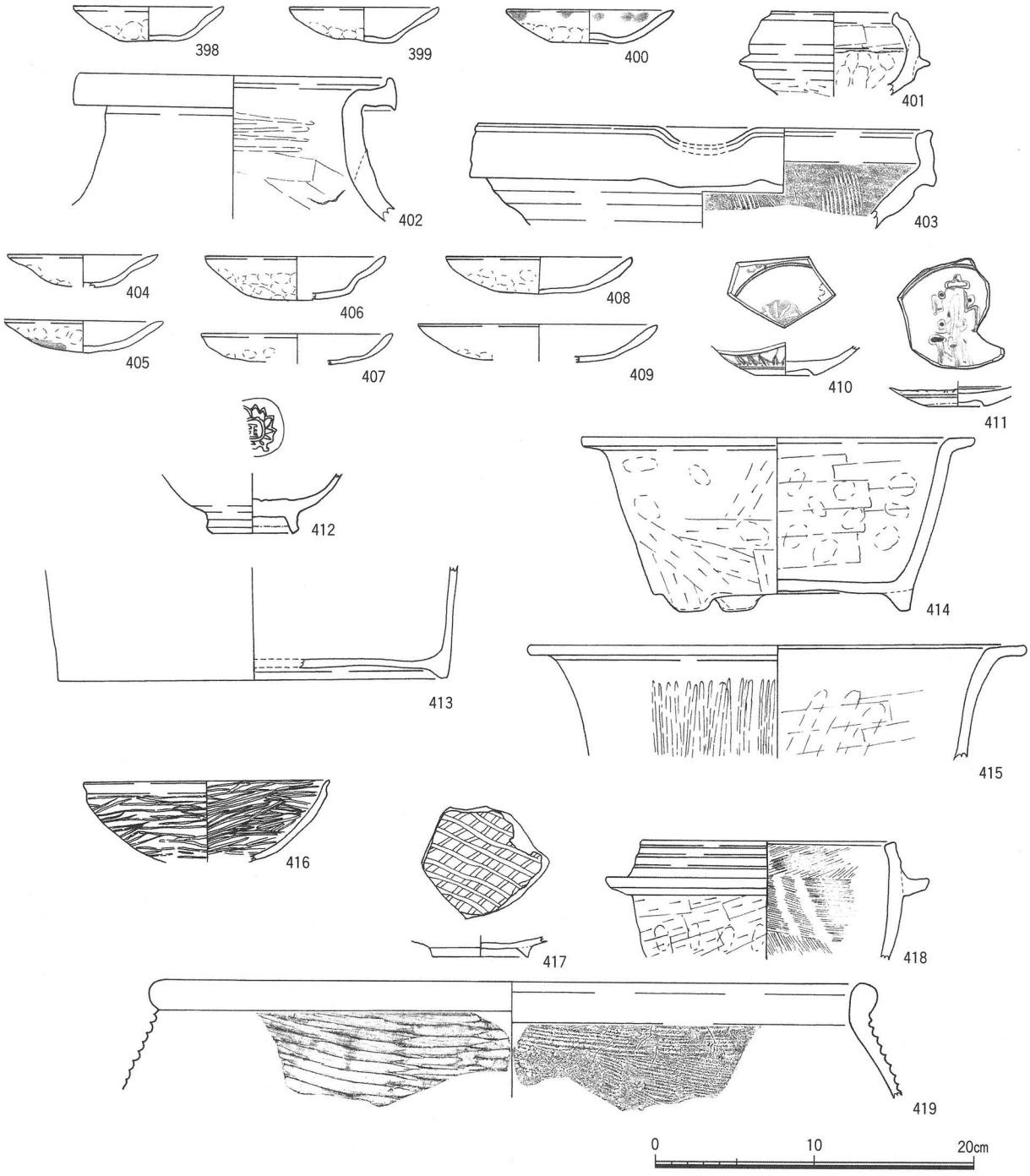
第1区(416)

和泉型の瓦器椀である。体部内外面のヘラミガキは密に施されている。森島編年のⅠ－3期にあたるもので、12世紀初頭頃の所産である。

第3区(417～419)

417は和泉型の瓦器椀で、見込みに格子状の暗文が施される。高台の断面は三角形を呈する。416とほぼ同時期のものと思われる。418は瓦質の羽釜である。内傾する口縁部外面に3条の凹線

が巡る。張りのない体部にやや上向きの短い鍔が付く。15世紀代に属する。419は土師質の甕で、玉縁状の口縁端部を有する。外面は平行タタキ、内面はハケナデが施される。16世紀前半に属する。



第53図　第７層（第１区－398～403、第３区－404～415）、第８層（第１区－416、第３区－417～419）

3）瓦類

第１面の遺構および第１～５層から江戸時代に比定される瓦類が、コンテナ(40×60×20cm)で約57箱分出土した。調査区別にみると第１区―33箱、第２区―２箱、第３区―22箱となる。遺構の中では、第３区のＳＫ3107が12箱と最も多く、続いて同地区のＳＫ3112の８箱、次に第１区ＳＯ1102の５箱である。

次に第２面の遺構および第６～８層から奈良時代～室町時代に比定される瓦類が、コンテナ約23箱分出土した。調査区別にみると第１区―16箱、第２区―３箱、第３区―４箱となる。遺構の中では、第１区の集石遺構からのものが６箱と最も多く、続いて同地区のＳＤ1201の４箱、瓦溜め1201の３箱の順となる。

以上、今回の調査で出土した瓦類の総数はコンテナ約80箱分を数える。以下、その中から瓦当文様および遺存度の良好なものについて、種類別・時期別に報告する。なお、軒丸瓦の巴巻については、向かって巴頭の左右の位置をもって「右巻き」あるいは「左巻き」とした。各瓦類の法量・胎土等については表６～９を参照されたい。

【江戸時代】

①軒丸瓦(420～440)

瓦当文様はすべて巴文で、421・439の２点が右巻きで他はすべて左巻きである。また、珠文と巴文との間に内圏線を巡らすものはない。422・424・428・432・434・435・439は巴の尾部が細く長く伸び、圏線状に見えるものがあるが、先端部は他の巴文に接していない。420は瓦当を笵より離す際の歪みからか、周縁幅に若干の差があり、珠文は楕円形になっている。421・433の瓦当文様は肉厚で、433の巴頭は周縁の高さと同等に盛り上がっている。巴頭についてはほとんどが丸くなるが、425・430は尖り気味である。また、巴のくびれを見ると420・425・430・433の４点は他のものと比べて鈍い。429はいわゆる丸・平瓦が組み合わさる桟瓦で、当地では19世紀以降多く使用されるようになる。以上の軒丸瓦の法量について、珠文の直径は429の軒桟瓦を除くと大半が0.8cm前後であるが、422・425・426が0.5cm前後と小さく、434の１cm前後が最も大きい。周縁幅では、430・440の1.5cmが最も狭く、421・434・438の2.3cmが最も広い。

②軒平瓦(441～446)

441～444の中心飾りは橘である。441・442は瓦当面の彫りが深く、唐草の先端が分岐している。441～443の側区は広く、６～９cmを測る。445は右側半分弱の破片で、中心飾りは不明である。唐草文は直線的で先端が丸く、２回反転する。446の中心飾りは、宝珠と推定される。瓦当裏面の調整については、442・443が平瓦凸面との接合部を縦方向にユビナデした後横方向にナデ調整する。446は平瓦凸面との境を工具によるナデで仕上げる。他はすべて横方向のナデ調整である。

【奈良時代～室町時代】

①軒丸瓦(447～453)

447は集積遺構1201から出土した奈良時代の混入品である。中央に複弁蓮華文を呈するものであるが、周縁および中房が欠損しており全容は不明である。448～451はＳＤ1201から出土した巴文を呈するもので、448・449・453は右巻き、451・452は左巻きである。448・449の巴文の頭部は扁平で、細くて長い尾部を有する。珠文は低く、小粒で密に配される。また、双方とも巴文と珠文帯の間に細い内圏線がめぐる。450の瓦当面の文様は低く、巴文の尾部は長いが、他には接

していない。丸瓦部の凹面にはコビキBに類される糸切り痕がみられる。451は直径が13.7cmとやや大き目である。瓦当面の文様は低い。丸瓦部の凸面は縦方向にヘラ削りされる。凹面には瓦当と丸瓦の接合痕と450と同様コビキBの糸切り痕がみられる。**石組み溝3201**出土の452は、瓦当を笵より離す際の歪みが認められる。巴文の頭部は周縁よりも突出する。丸瓦部は瓦当頂部に直角に接合される。丸瓦部の凸面は縦方向にヘラ削りされる。第8層出土の453は周縁部が高い。珠文は扁平で、巴文と珠文帯の間に圏線がめぐるものと思われる。瓦当裏面の調整は、447を除いてすべて工具によるナデ仕上げである（453は不明）。

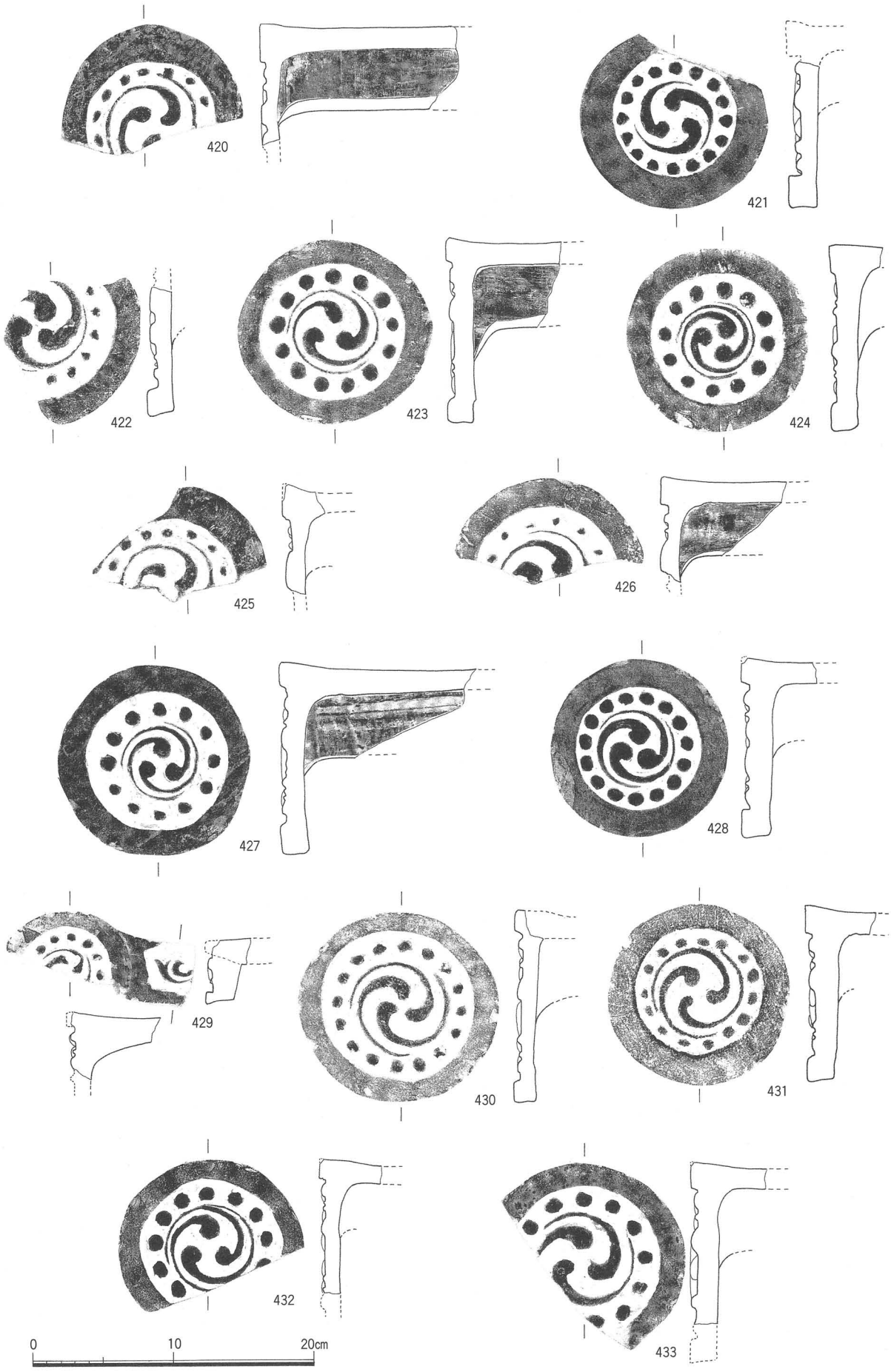
②軒平瓦(454～464)

454・455はSK1209から出土した。454は界線をもつ連珠文軒平瓦である。珠文の直径は0.8～0.9cmで、11個を配する。顎は曲線顎である。瓦当裏面は、縦方向にユビナデした後に横方向のナデで仕上げられている。平安時代末～鎌倉時代初頭の所産である。一方、455は向かって右側欠損の唐草文軒平瓦の破片で、上下外縁は薄い。顎は貼り付けの段顎で、顎裏面と平瓦部が直角を成す。周縁は狭く、反転する唐草文が4単位見られる。胎土は緻密で、微細な砂粒を含む。瓦当面に離れ砂の痕跡を残す。456は**瓦溜め1201**から出土した均整唐草文軒平瓦である。右側1/3が欠落した小型のもので、中心飾りは宝珠を意図した文様と思われる。唐草文は3単位で先端が丸く、巻きが甘い。瓦当裏面は傾斜する面を成す。457・458は**集石遺構1201**から出土した。457は向かって右側、458は左側欠損の破片で、いずれも界線をもつ連珠文軒平瓦であるが、珠文の直径は0.5cm前後と比較的小さめである。両者は瓦当裏面と平瓦部が直角を成す。瓦当面に離れ砂の痕跡を残す。室町時代前期頃の所産と思われる。

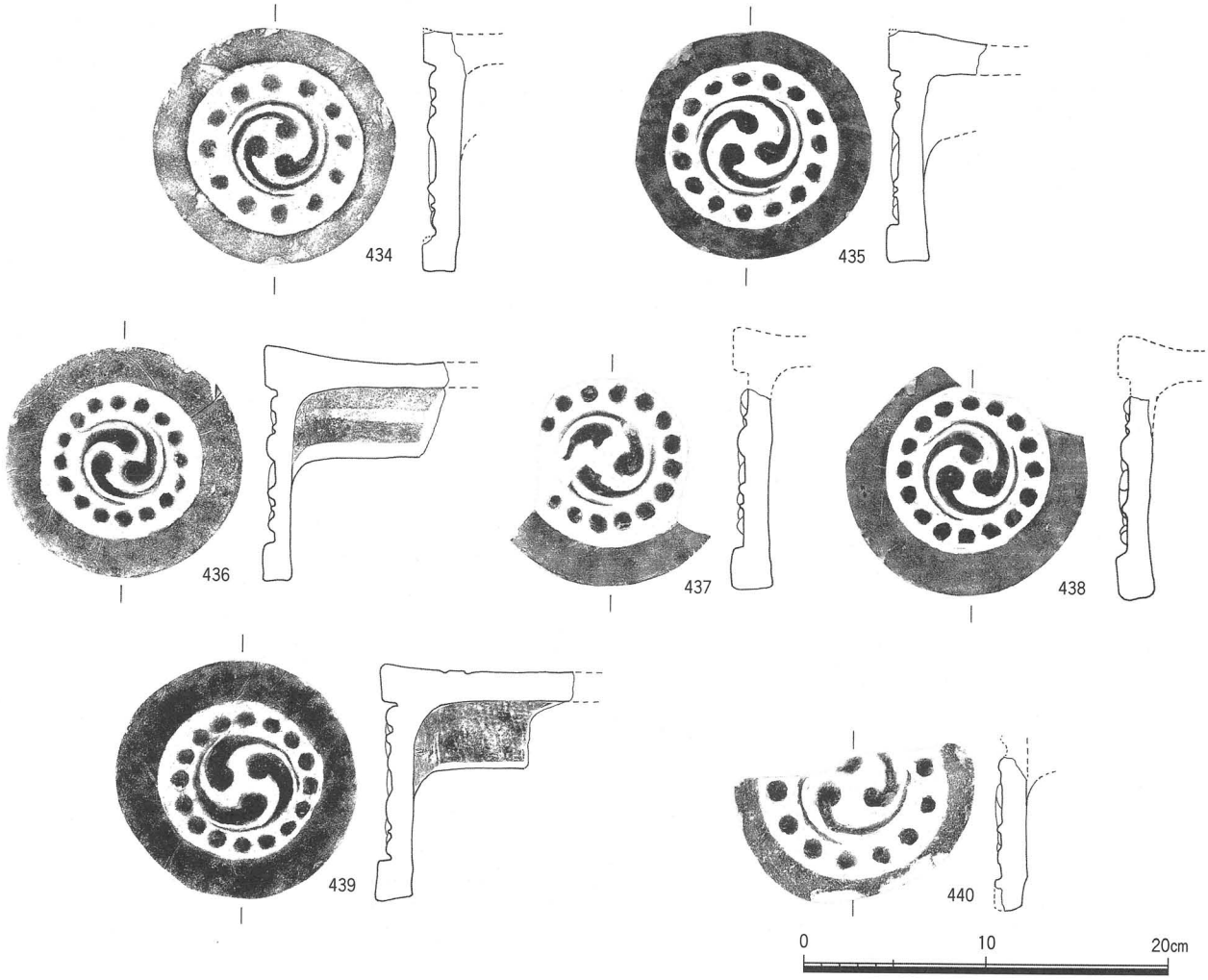
459～464は第3区の第6～8層から出土した均整唐草文軒平瓦である。459(第6層)は左側残存の破片で、瓦当裏面に傾斜面を成す。唐草文は細く、巻き込みの先は丸くなる。側区は広い。460(第6層)は右側2/3の残存で、中心飾りは上向き三葉である。唐草文は左右に1単位のみ有するものと思われる。453と同様に唐草文は細く、巻き込みの先は丸くなる。側区は広い。461(第7層)は左側1/3の残存で、顎は貼り付けの段顎である。唐草文の先端部は膨らむ。側区はやや広い。462(第7層)は瓦当中央部のみ残存するもので、中心飾りは上向き五葉である。段顎で、下端部は欠落している。463(第8層)は右側半分残存で、中心飾りは上向き三葉と思われる。唐草文は細く、4単位反転する。段顎であるが、平瓦との段差は他のものと比して小さい。464(第8層)は左2/3弱残存で、上向き三葉の中心飾りより左右に2本の支葉が派生する均整唐草文と思われる。顎は貼り付けの段顎である。若江遺跡第27次調査(才原1988)において、若江城に伴う堀内から出土した軒平瓦と文様・笵キズの状況から同笵であることが判明している(註3)。瓦当と平瓦凸面との接合部の調整については、455・457・461・462・463の5点が工具によるナデで、それ以外はすべて横方向のナデで仕上げられている。

③平瓦(465～468)

465はSK1209から出土した。凸面は斜格子タタキ、凹面には布目と桶板痕の凹凸がみられる。奈良時代の所産である。466・467は**集石遺構1201**から出土した。466の両面には糸切り痕が顕著に窺えるが、タタキ目はみられない。467は凹面に布目と桶板痕の凹凸がみられ、凸面には側縁に平行して縄タタキ目が認められる。468はSD1202から出土した。凹面には布目が明瞭に残る。一方、凸面には縄タタキ目がみられるが、側縁に対し斜め方向に叩いた後、平行に叩いているのがわかる。466～468は平安時代の所産と思われる。



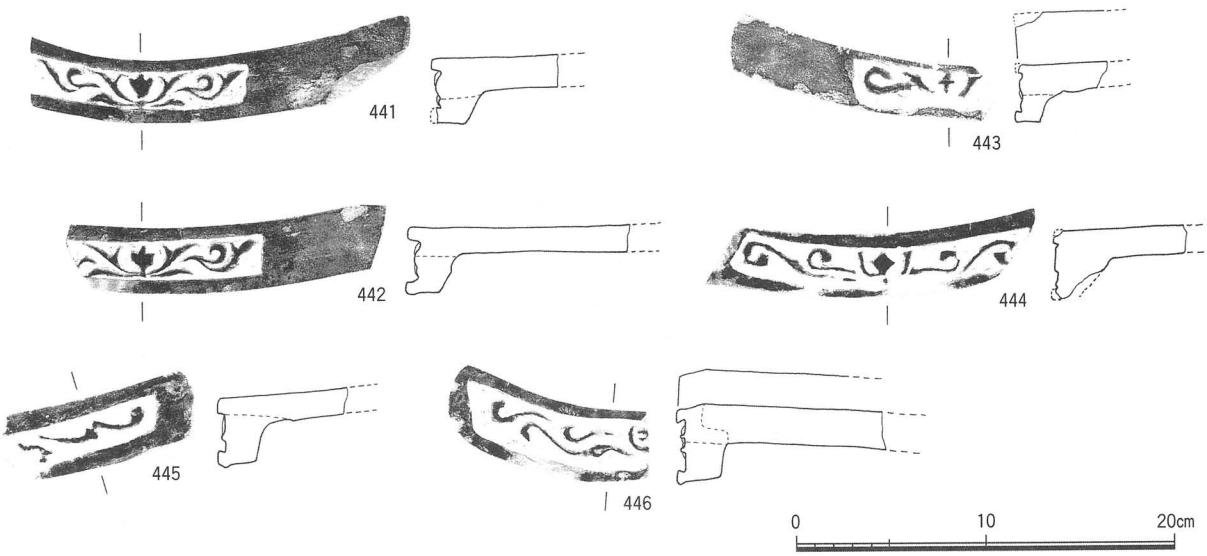
第54図　江戸時代の軒丸瓦Ⅰ（ＳＥ1108－420、ＳＫ1114－421、ＳＫ1116－422、ＳＫ1117－423、ＳＫ1129－424、ＳＯ1101－425・426、ＳＫ3101－427、ＳＫ3103－428・429、ＳＫ3105－430、ＳＫ3107－431、ＳＫ3112－432、ＳＫ3117－433）



第54図　江戸時代の軒丸瓦Ⅰ（ＳＥ1108－420、ＳＫ1114－421、ＳＫ1116－422、ＳＫ1117－423、ＳＫ1129－424、ＳＯ1101－425・426、ＳＫ3101－427、ＳＫ3103－428・429、ＳＫ3105－430、ＳＫ3107－431、ＳＫ3112－432、ＳＫ3117－433）

表６　江戸時代の軒丸瓦（420～440）　法量一覧表

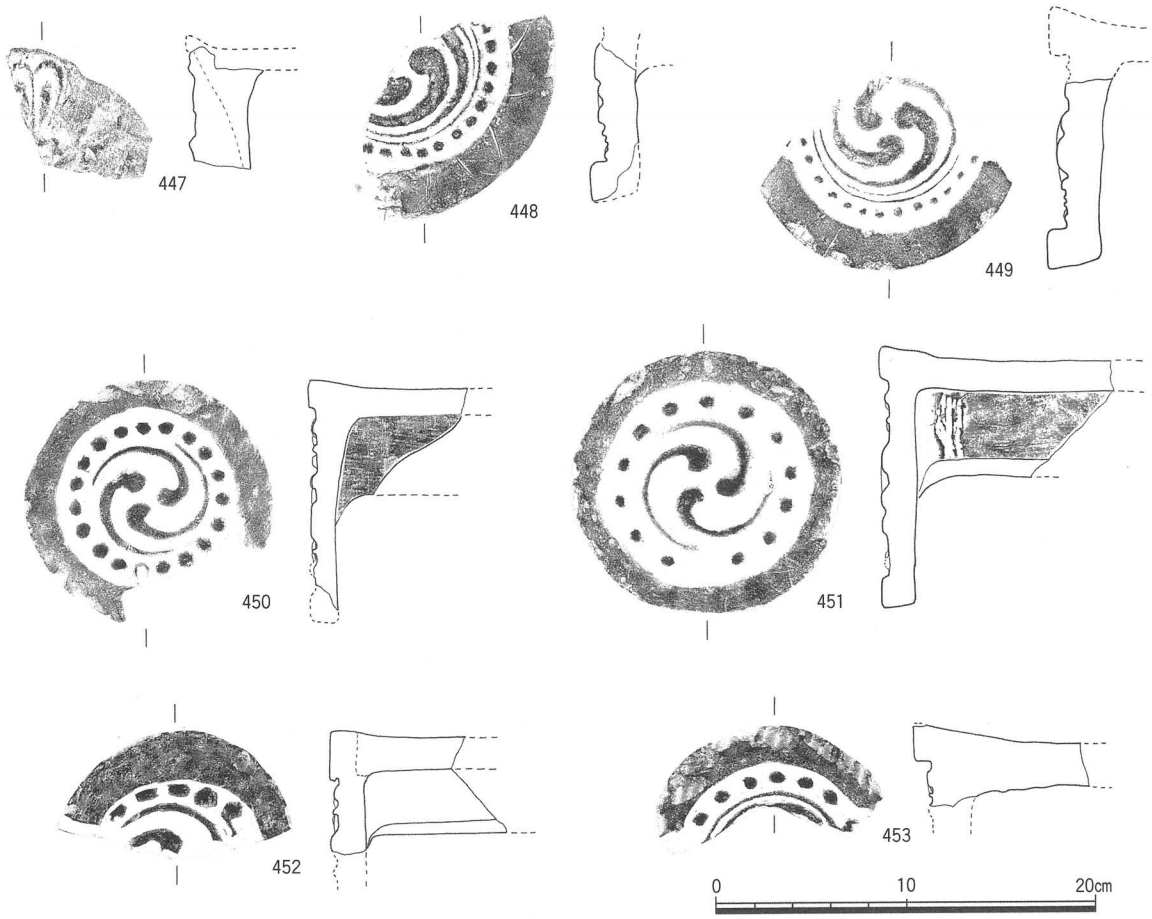
遺物番号	遺構番号	直径	厚さ	内区		外区内縁/珠文			外区外縁		離砂	胎土	色調	備考
				径	巴巻	数	径	高さ	幅	高さ				
420	SE1108	(12.6)	1.2	9.2	左	(20)	0.7	0.2	1.6	0.4	○	精緻	暗灰	
421	SK1114	13.2	2.0	6.7	右	16	0.8	0.4	2.3	1.0	×	精緻	黒	
422	SK1116	14.4	1.8	(10.6)	左	(24)	0.6	0.3	1.9	0.8	○	やや粗	灰	
423	SK1117	13.7	1.8	10.2	左	13	0.9	0.2	1.5	0.5	○	精緻	黒	
424	SK1129	13.2	1.9	9.5	左	12	0.9	0.2	1.9	0.4	○	精緻	灰	
425	SO1101	(15.0)	1.5	(9.4)	左	(16)	0.5	0.3	2.52	0.5	○	やや粗	灰黄褐	
426	SO1101	(14.0)	1.3	(10.0)	左	(20)	0.3	0.4	.0	0.6	○	精緻	暗灰	
427	SK3101	13.6	1.7	10.0	左	12	0.8	0.3	1.8	0.4	○	精緻	灰	
428	SK3103	12.6	1.9	9.0	左	15	0.9	0.5	1.9	0.6	×	精緻	黒	
430	SK3105	13.8	1.4	10.8	左	16	0.8	0.4	1.8	0.5	○	精緻	灰	
431	SK3107	12.7	2.2	9.0	左	15	0.9	0.5	1.9	0.5	○	精緻	暗灰	
432	SK3112	13.1	1.3	9.8	左	(16)	0.9	0.4	1.5	0.5	○	精緻	黒	
433	SK3117	14.0	2.0	10.7	左	(16)	0.8	0.4	1.7	0.3	○	やや粗	暗灰	
434	第１区－第４層	13.8	1.9	9.1	左	13	1.0	0.4	2.1	0.6	○	精緻	黒	
435	第１区－第５層	12.6	2.2	9.2	左	15	0.8	0.4	1.7	0.6	×	精緻	暗灰	瓦当面銀化
436	第２区－第２～3層	12.8	1.4	8.8	左	16	0.7	0.4	2.0	0.6	×	精緻	暗灰	
437	第２区－第４層	(14.2)	2.1	(10.0)	左	(16)	0.8	0.4	2.2	0.6	×	精緻	黒	
438	第２区－第４層	13.1	1.9	8.8	左	16	0.9	0.4	2.2	0.6	×	精緻	黒	
439	第２区－第５層	13.0	1.9	8.6	右	16	0.8	0.5	2.3	0.8	×	精緻	暗灰	瓦当面銀化
440	第２区－第５層	13.2	1.8	10.2	左	(16)	0.8	0.2	1.7	0.3	○	精緻	灰	



第56図　江戸時代の軒丸瓦（ＳＫ3107－441・442、ＳＫ3108－443、ＳＫ3112－444、ＳＯ1101－445、第２区／第５層－446）

表７　江戸時代の軒平瓦（441～446）　法量一覧表

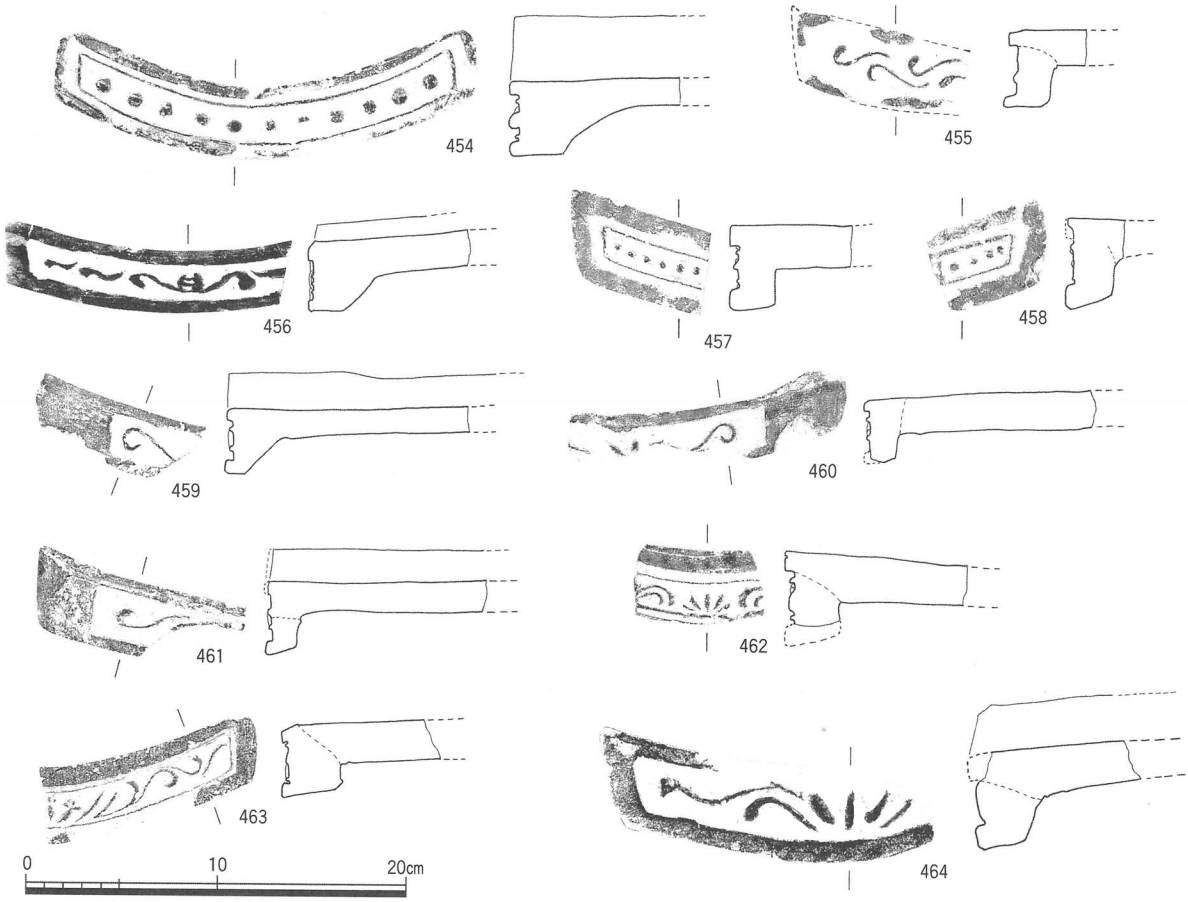
遺物番号	遺物番号	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	内区			外区			側区		離砂	胎土	色調	備考
						厚さ	幅	文様（中心飾）	上幅	下幅	高さ	左	右				
441	SK3107	(28.0)	－	2.4	3.4	2.0	(11.0)	均整唐草文様(橘)	0.7	0.7	0.5	－	8.6	○	精緻	黒	
442	SK3107	(25.4)	(23.6)	1.5	3.6	2.1	(10.6)	均整唐草文様(橘)	0.8	0.8	0.7	－	5.8	×	精緻	黒	
443	SK3108	(21.4)	(22.4)	3.8	(3.1)	2.0	0.3	均整唐草文様(橘)	－	0.6	0.3	6.5	－	○	精緻	黒	
444	SK3112	－	－	－	(3.7)	2.3	(15.6)	均整唐草文様(橘)	0.8	0.6	0.3	－	－	○	精緻	灰	
445	SO1101	－	－	－	3.8	2.1	－	均整唐草文様(不明)	0.9	0.9	0.4	－	1.9	×	やや粗	橙	
446	第2区－第5層	－	－	－	4.9	2.8	(18.0)	均整唐草文様(宝珠)	0.7	0.8	0.5	－	－	×	精緻	黄橙	2次焼成



第57図　室町時代以前の軒丸瓦（集石遺構1201－447、ＳＤ1201－448～451、石組み溝3201－452、第３区／第８層－453）

表８　室町時代以前の軒丸瓦(448～453)　法量一覧表

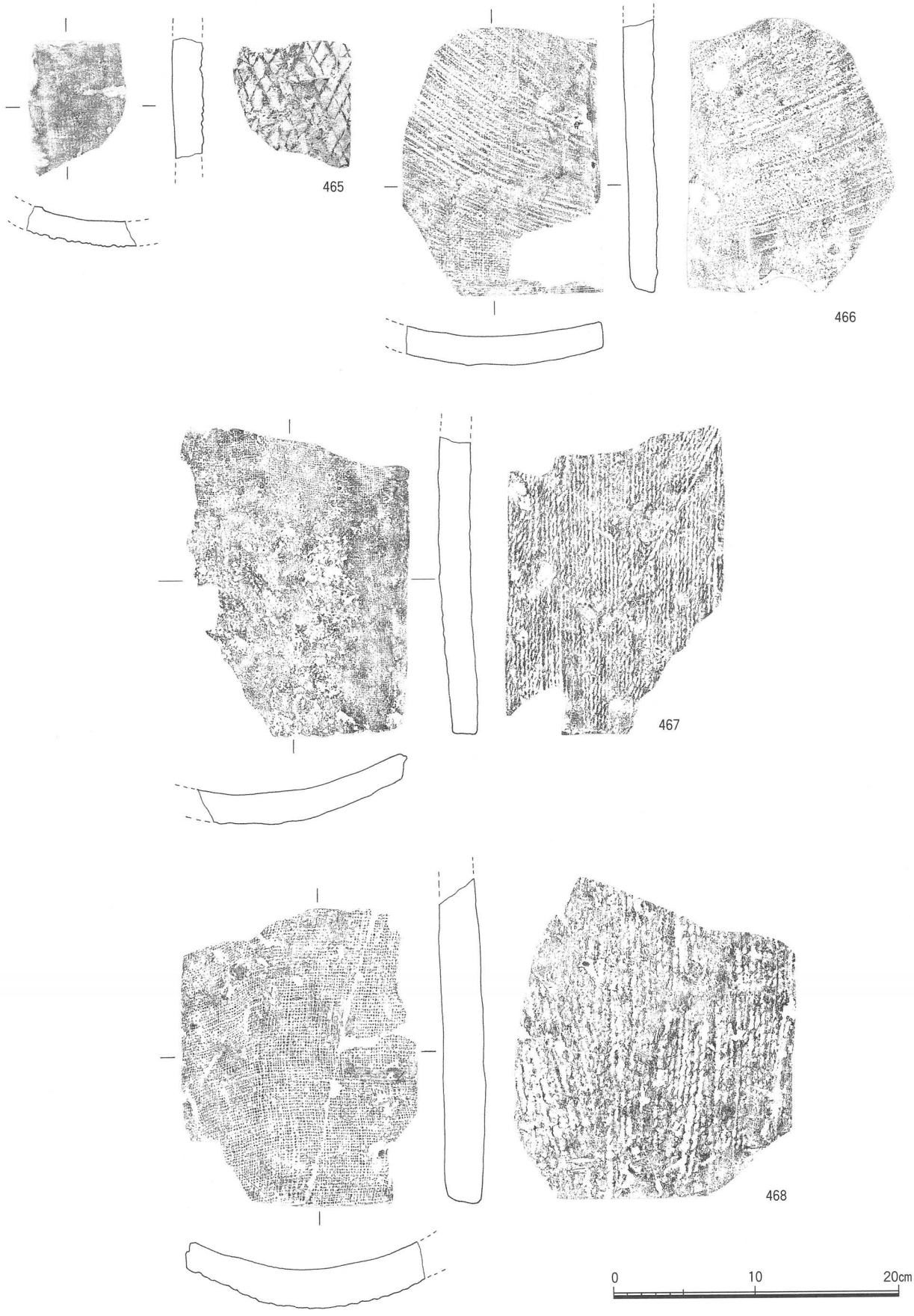
遺物番号	遺構番号	直径	厚さ	内区		外区内縁／珠文			外区外縁		離砂	胎土	色調	備考
				径	巴巻	数	径	高さ	幅	高さ				
448	集石遺構1201	(16.4)	2.7	(8.4)	右	(36)	0.5	0.2	2.5	0.9	○	やや粗	黒	
449	SD1201	(13.9)	2.9	(4.2)	右	(28)	0.3	0.2	1.9	1.1	×	やや粗	灰	
450	SD1201	12.8	1.8	6.2	左	19	0.6	0.2	1.7	0.3	○	精緻	黒	
455	SD1201	13.8	1.7	6.7	左	13	0.5	0.2	1.6	0.4	○	精緻	灰	
451	石組み溝1201	(12.4)	1.9	(5.6)	左	(20)	0.7	0.3	2.6	0.4	○	やや粗	暗灰	
453	第3区－第8層	(13.2)	3.0	(7.6)	右	(24)	0.5	0.2	1.9	0.8	×	やや粗	暗灰	2次焼成



第58図　室町時代以前の軒平瓦（ＳＫ1209－454・455、瓦溜め1201－456、集石遺構1201－457・458、第３区／第６層－459・460、第７層－461、第８層－463・464

表９　室町時代以前の軒平瓦(454～464)　法量一覧表

遺物番号	遺物番号	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	内区			外区			側区		離砂	胎土	色調	備考
						厚さ	幅	文様（中心飾）	上幅	下幅	高さ	左	右				
454	SK1209	20.7	22.0	2.8	3.8	2.4	2.4	連珠文	0.8	0.8	0.5	0.5	0.5	×	やや粗	灰	
455	SK1209	—	—	—	4.0	2.5	2.5	均整唐草文(不明)	0.6	0.5	0.6	—	—	○	やや粗	灰	
456	瓦溜め1201	(19.2)	(18.4)	(2.0)	3.6	2.1	2.1	均整唐草文(宝珠)	0.8	0.6	0.3	1.3	—	○	精緻	灰	
457	集石遺構1201	—	—	—	3.8	2.2	2.2	連珠文	1.1	0.9	0.5	1.0	—	×	やや粗	暗灰	2次焼成
458	集石遺構1201	—	—	—	(4.9)	2.5	2.5	連珠文	(1.1)	1.3	0.5	—	1.3	×	精緻	灰	2次焼成
459	第3区－第6層	—	—	—	3.8	2.3	2.3	均整唐草文(不明)	0.7	0.7	0.4	3.0	—	○	やや粗	暗灰	
460	第3区－第6層	(21.8)	21.4	2.3	—	—	—	均整唐草文(三葉)	0.6	—	0.3	—	4.5	○	やや粗	黒	
461	第3区－第7層	—	—	—	3.3	3.1	3.1	均整唐草文(不明)	0.6	0.6	0.5	4.2	—	○	やや粗	暗灰	
462	第3区－第7層	—	—	—	—	(2.7)	(2.7)	均整唐草文(五葉)	1.1	—	0.5	—	—	○	精緻	灰	
463	第3区－第8層	(21.6)	(21.4)	(2.7)	3.8	2.2	(19.6)	均整唐草文(三葉連珠文)	1.0	0.8	0.3	—	1.2	○	やや粗	暗灰	
464	第3区－第8層	(26.4)	(24.2)	(1.5)	(5.1)	(2.3)	(2.3)	均整唐草文(三葉)	1.3	1.2	0.6	1.5	—	○	やや粗	灰	若江城と同笵



第59図　室町時代以前の平瓦（ＳＫ1209－465、集石遺構1201－466・467、ＳＤ1202－468）

4）金属製品

煙管＜吸口＞(469～472)

真鍮製の吸口が4点出土している。雁首は出土していない。各吸口の出土地点は、469はＳＥ1102、470はＳＫ1116、471は第2区の第4層、472は第2区の第5層である。いずれも表面に装飾が施されるものはない。471と472には円筒状に丸めた後の「継ぎ目」痕が明瞭に残る。また、471は「口付」部分にやや膨らみをもつ。法量は全長5.8～7.4cm、ラウ部径1cm前後、吸口径0.4～0.7cmを測る。

庖丁(473)

ＳＥ3101から鉄製の庖丁が1点出土した。全体的に腐食が著しく、先端部は欠失する。法量は、刃部残存長15.7cm・厚さ0.5cm前後、中茎(柄)部残存長7.8cm・厚さ0.3cm前後を測る。形状から食品切裁用の「菜切り庖丁」と思われる。

匙(474)

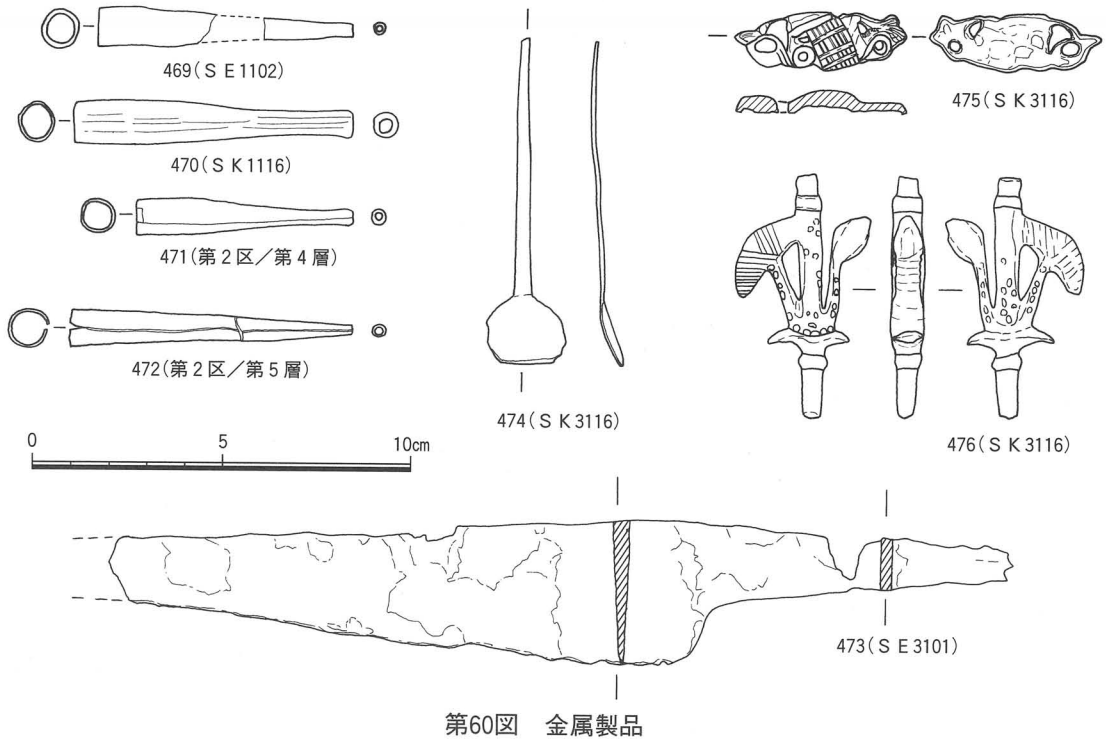
ＳＫ3116から出土した。銅製のもので、皿部と柄の一端は欠損しているが全体の厚さがほぼ均一である。法量は、残存長8.7cm・厚さ0.1cm前後を測る。

目貫(475)

ＳＫ3116から出土した。刀身と柄を固定する刀装具で、銅製である。一方が残存する片目貫で、抜け穴は4箇所認められる。法量は、長さ4.5cm・最大幅1.5cm・厚さ0.2～0.4cmを測る。彫られた図柄の意匠は不明である。

用途不明金属製品(476)

ＳＫ3116から出土した。軸となる両先端部には削り込みが施され、別のものへ挿入装着されていたことが推測される。また、モチーフが蓮の葉と見られることから仏具の一種であることが想定される。



第60図　金属製品

銭貨(477～496)

室町～江戸時代にかけての遺構および地層内から30点を数える銭貨を検出したが、本書ではそのうち銭名が明らかなもの477～496の20点を掲載した。出土地点で見ると、477の皇宋通寶のみが室町時代末期にあたる**集石遺構1201**出土で、それ以外は全て江戸時代の遺構および地層内からの出土である。また、宋銭のなかで公鋳銭(本銭)は、479－天聖元寶、482・486－紹聖元寶、492－祥符元寶の４枚のみで、他はすべて鋳写した薄く鋳上がりの悪い模鋳銭(註４)と呼ばれるものである。各銭貨の種類、法量等については表10に掲載した。

表10　出土銭貨(477～496)一覧表　※本銭－中国公鋳銭、模鋳銭－本銭を鋳写したもの

NO.	出土地点	銭種	初鋳年（西暦）	直径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
477	集石遺構1201	皇宋通寶	寶元元年(北宋、1038年)	23.8	1.0	3.2	模鋳銭
478	集石遺構1201	聖宋元寶	建中靖国元年(北宋、1078年)	24.9	1.0	3.3	模鋳銭
479	SE1103	天聖元寶	天聖元年(北宋、1023年)	24.9	1.0	3.5	本銭
480	SE1103	元豊通寶	元豊元年(北宋、1078年)	24.1	1.1	2.6	模鋳銭
481	SE1103	元豊通寶	元豊元年(北宋、1078年)	23.9	1.5	3.1	模鋳銭
482	SK1101	紹聖元寶	紹聖元年(北宋、1094年)	23.6	0.7	2.8	本銭
483	SK1101	聖宋元寶	建中靖国元年(北宋、1078年)	23.8	0.9	2.9	模鋳銭
484	SK1101	太平通寶？ 治平通寶？	太平興国元年(北宋、976年) 治平元年(北宋、976年)	不明	不明	－	模鋳銭
485	SK1101	元豊通寶	元豊元年(北宋、1078年)	24.0	1.4	2.5	模鋳銭
486	SK1101	紹聖元寶	紹聖元年(北宋、1094年)	23.7	1.2	3.7	本銭
487	SK1116	寛永通寶	寛永13年(日本、1636年)	23.8	1.3	3.3	1期＝古寛永
488	第2区／第V層	天禧通寶	天禧元年(北宋、1017年)	24.9	1.0	3.5	模鋳銭
489	第2区／第V層	皇宋通寶	寶元元年(北宋、1038年)	24.7	1.0	2.9	模鋳銭
490	第2区／第V層	皇宋通寶	寶元元年(北宋、1038年)	24.1	1.1	2.9	模鋳銭
491	第2区／第V層	元豊通寶	元豊元年(北宋、1078年)	24.0	1.3	2.9	模鋳銭
492	第2区／第V層	祥符元寶	大中鄧符元年(北宋、1009年)	23.7	1.0	3.4	本銭
493	SK3102	寛永通寶	寛永13年(日本、1636年)	24.6	1.3	3.5	1期＝古寛永
494	SK3104	寛永通寶	寛永13年(日本、1636年)	24.0	1.2	2.8	1期＝古寛永
495	SK3110	太平通寶	太平興国元年(北宋、976年)	24.1	1.3	2.7	模鋳銭
496	SK3110	祥符元寶	大中鄧符元年(北宋、1009年)	23.5	1.0	2.9	模鋳銭

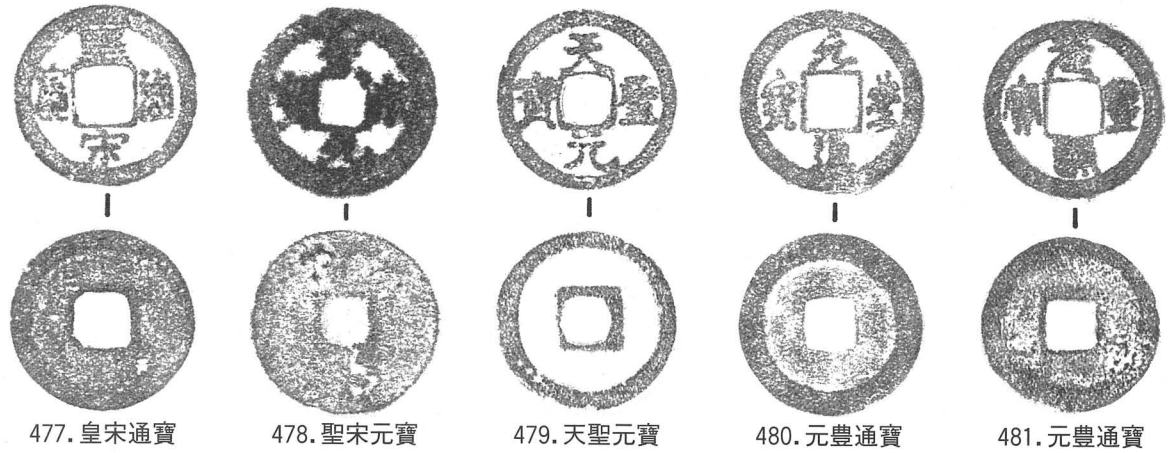
５）石製品

硯(497～506)

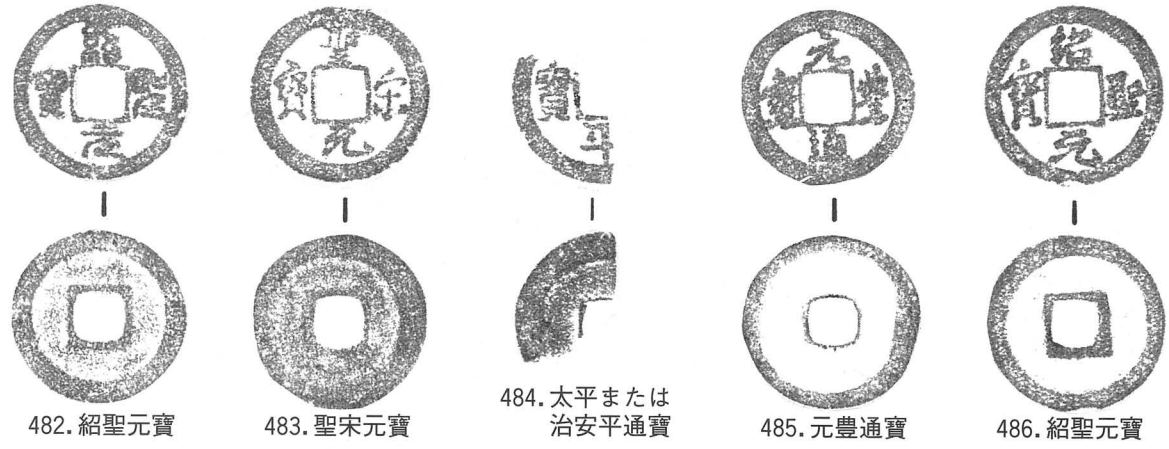
江戸時代の遺構内から10点を検出した。497・498はＳＥ1105で、499～506は第３区の井戸および土坑内からである。ほとんどは原形を留めない1/2以下のものである。498の側面と背面には人物および判読不明な線刻が見られる。503・505・506は他に比して小型軽量で全体的に薄く作られ、屋外での携帯用と考えられる。513は全体的に被熱により赤化している。各硯の法量・石材等については表11に掲載した。

砥石(507～512)

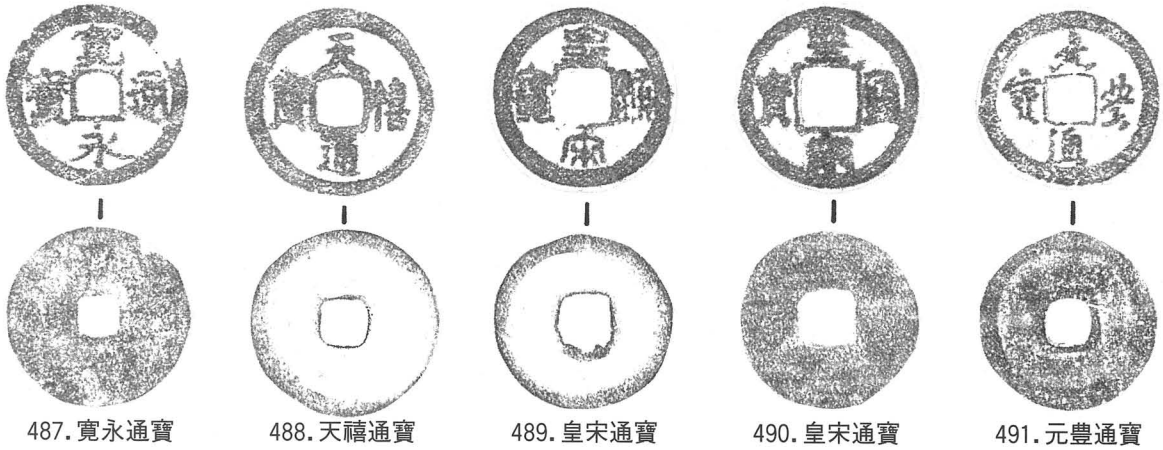
江戸時代の遺構および地層内から６点検出した。いずれも片手に収まるぐらいの小型品で、原形を留めているものはなく、破損したものをそのまま使用している様子が窺える。とくに出土品のなかでは507が最小型品である。508にみられる彎曲は、使用頻度の高さを示している。509は全体の形状から自然礫を転用した様子が窺える。510の表面には、針先を研いだような櫛状の条痕が見られる。511の上面右上には刃揃えと思われる傷が見られる。以上、510を除くとすべて刃物用と思われる。各砥石の法量・石材等については表12に掲載した。



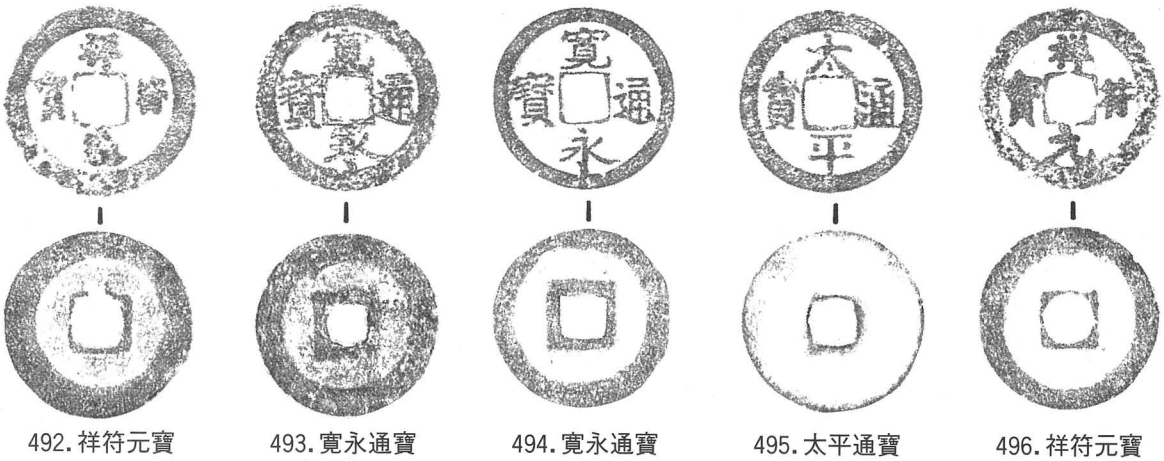
477. 皇宋通寶　478. 聖宋元寶　479. 天聖元寶　480. 元豊通寶　481. 元豊通寶



482. 紹聖元寶　483. 聖宋元寶　484. 太平または治安平通寶　485. 元豊通寶　486. 紹聖元寶

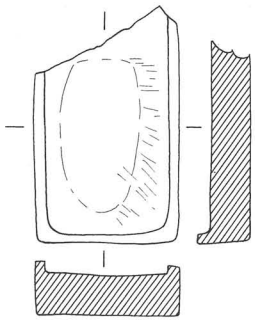


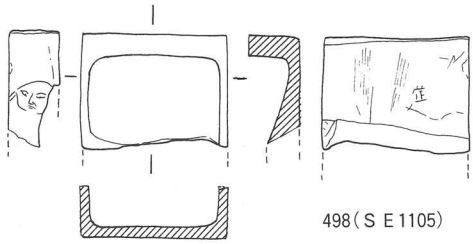
487. 寛永通寶　488. 天禧通寶　489. 皇宋通寶　490. 皇宋通寶　491. 元豊通寶

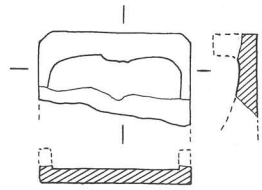


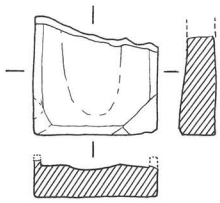
492. 祥符元寶　493. 寛永通寶　494. 寛永通寶　495. 太平通寶　496. 祥符元寶

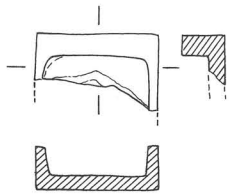
第61図　出土銭貨拓影（実大）

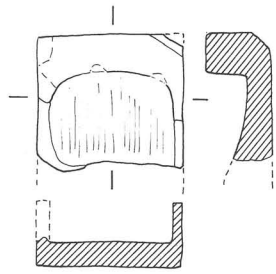

497(S E 1105)

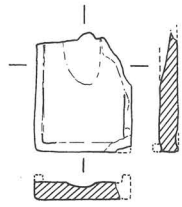

498(S E 1105)

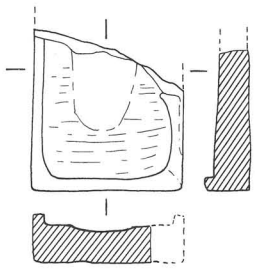

499(S E 3101)

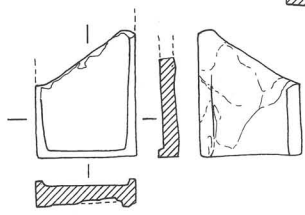

500(S K 3110)

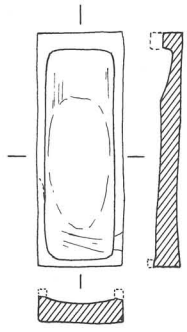

501(S K 3110)

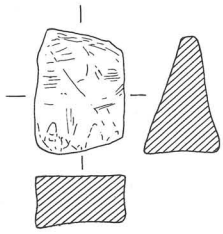

502(S K 3110)

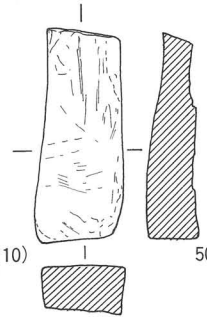

503(S K 3114)


504(S K 3115)

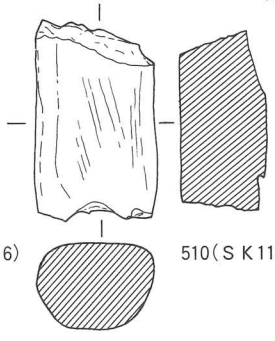

505(S K 3115)

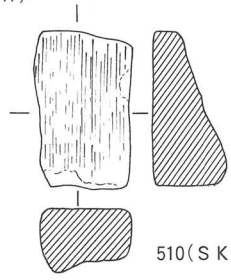

506(S K 3117)

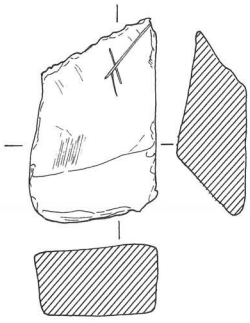

507(S E 3102)

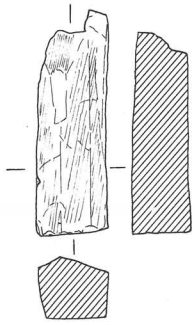

508(S K 3110)

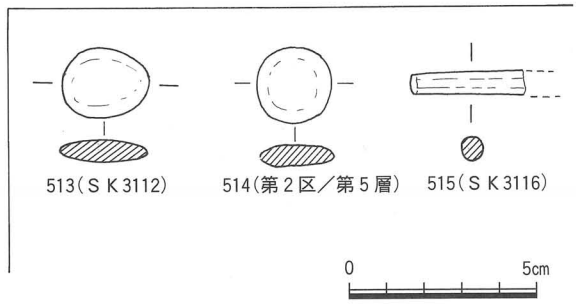
509(S K 3116)


510(S K 1103)


510(S K 1103)


511(第 2 区／第 2 ～ 3 層)


512(第 2 区／第 5 層)



第62図　石製品実測図Ⅰ（スケール：497～512－1/4、513～515－1/2）

表11　硯(497～506)一覧表　※(　　)は残存値

遺物番号	出土遺構	長さ(cm)	幅(cm)	器高(cm)	石材	色調	備考
497	SE1105	(12.6)	7.7	2.8	流紋岩	白色	
498	SE1105	(6.1)	7.8	2.6	頁岩	黒色	海部背面に判読不明文字
499	SE3101	(3.4)	8.0	(0.9)	頁岩	〃	
500	SK3110	(5.8)	6.5	(1.8)	泥質片岩	灰色	
501	SK3110	(4.1)	6.5	2.3	泥質片岩	〃	
502	SK3110	(6.8)	7.7	3.5	凝灰岩	白色	
503	SK3114	(6.3)	5.2	(1.0)	泥質片岩	灰色	
504	SK3115	(8.1)	8.0	2.6	流紋岩	灰褐色	
505	SK3115	(6.6)	5.3	1.4	頁岩	不明	被熱により赤化
506	SK3117	12.4	4.6	(1.3)	頁岩	黒色	

表12　砥石(507～512)一覧表　※(　　)は残存値

遺物番号	出土遺構	長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	色調	備考
507	SO1103	(8.2)	5.2	3.4	凝灰岩	灰色	
508	第2区 第2・3層	(9.8)	6.7	3.7	頁岩	灰色	砥面の一部に線刻
509	第2区 第2・3層	(11.8)	3.8	3.4	泥質片岩	灰色	周縁すべてに使用痕
510	SE3102	(6.7)	4.7	3.7	凝灰岩	灰色	
511	SK3110	(11.3)	4.7	2.6	頁岩	暗灰色	
512	SK3116	(9.4)	5.5	4.6	砂岩	灰赤色	自然礫転用

碁石(513・514)

513はＳＫ3112、514は第２区の第５層からそれぞれ出土した。513は両面とも研磨されるが、周縁の一部に傷が見られる。法量は長径2.3cm・短径1.9cm・最大厚0.6cmを測る。卵形の楕円形を呈していることや研磨が粗雑なことから、自作品の可能性がある。石材は頁岩製で、にぶい赤褐色を呈する。514は両面とも丁寧に研磨されている。直径2.0cm・最大厚0.6cmで、円形を呈する。石材は黒色珪質頁岩で「那智黒石」の可能性が高い。

用途不明石製品(515)

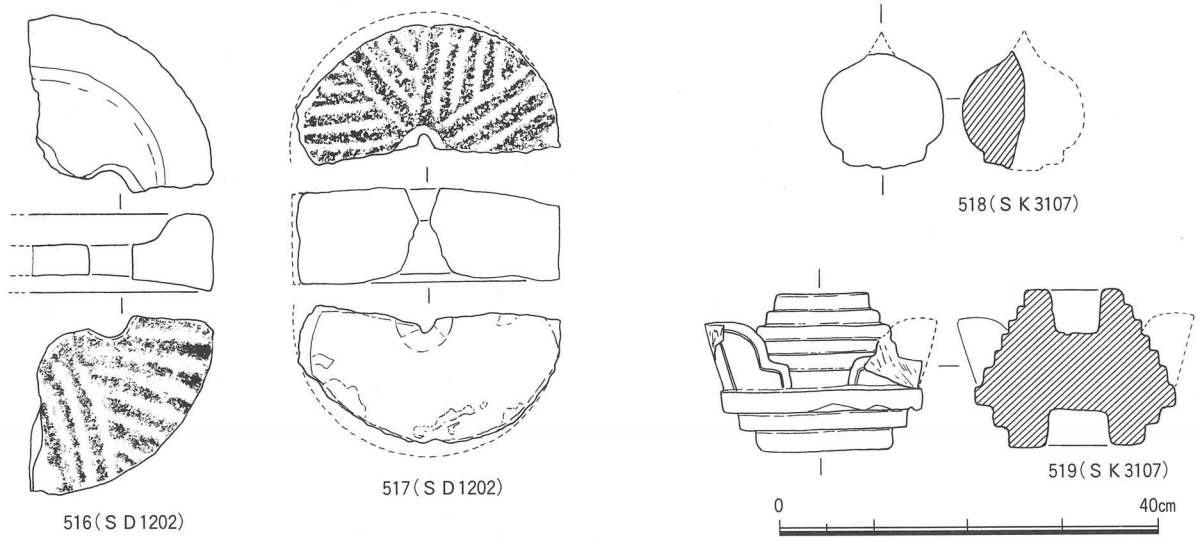
ＳＫ3116から出土した棒状の石製品である。白色の滑石製で、表面はよく研磨されており断面は円形を呈する。法量は残存長3.1cm・最大径0.6cmを測る。石箸にも見えるが詳細は不明である。

石臼(516・517)

いずれもＳＤ1202から出土した。516が上臼、517が下臼で石材はいずれも花崗岩である。法量は516が径(復原値)約32cm・高さ8.3cmで、供給口は径(復原値)約4.5cmを測る。一方、517は径(復原値)約28cm・高さ9.7cmを測る。分画および溝数について516は残存率が悪いため不明、517は８分画で５条を数える。廻転方向はいずれも「左廻し」である。

石塔(518・519)

ＳＫ3107から五輪塔の空・風輪部分(518)と宝篋印塔の笠部分(519)の２点が出土した。石材はいずれも和泉砂岩製である。518は1/2残存で、復原で最大径約13cmを測る。一方、519は組合せ式のもので、「隅飾突起」の２箇所が欠損している。残存部で縦横21cm前後のほぼ正方形、高さは16.5cmを測る。いずれも梵字等の文字は刻まれていない。



第63図　石製品Ⅱ

6）ミニチュア土製品(520～548)

第1区と第3区の江戸時代の遺構および地層内から29点(520～548)のミニチュア土製品が出土した。その多くは人や動物をモチーフに製作された土人形と呼ばれる素焼きのものである。これらの成形方法には、①型押し、②型合せ、③手づくね、④ロクロ、⑤焼き締めと5種類見られるが、大半は①の型押し成形である。型押し成形は、表裏2枚の凹型に粘土塊を当てて型をとり、それを合せたもの、②は表裏2枚の凹型に粘土板を当てて型を合わせたもので、断面は中空になる。人や動物以外には壷(521)・甕(528)・羽釜(522)・急須(535)といった「ままごと道具」や、「遊戯具」として円盤(525・526)・独楽(531)がある。また、素焼き以外では陶器製の人形(528)や磁器製の水滴(533)が出土している。540・541・543～545の神仏の表面には、「胡粉」と呼ばれる貝殻を焼いて作った白い塗料で彩色されている。なお、各土製品の出土地点、種類、成形法等については表13に掲載した。

表13　ミニチュア土製品(520～548)一覧表

遺物番号	調査区	遺構・層位	種別	モチーフ	成形技法	成形技法	備考
520	第1区	SE1106	土人形	狛犬	型押し	浅黄橙色	底部穿孔
521	第1区	SK1127	ミニチュア	壷	ロクロ	橙色	
522	第1区	SK1127	〃	羽釜	手づくね	淡橙色	
523	第1区	SK1127	土人形	女性と牛	型合わせ	浅黄橙色	
524	第1区	SK1127	土人形	土俵	型押し	浅黄橙色	四隅に穿孔
525	第1区	SK1127	円盤	—	—	灰色	瓦質製品転用
526	第1区	SD1101	円盤	—	—	暗灰色	須恵器製品転用
527	第1区	第2・3層	土人形	飾り馬	型合せ	黄橙色	
528	第1区	第2・3層	施釉陶製人形	女性立像	女性立像	彩色(緑・茶)	京・信楽系？
529	第1区	第5層	土人形	牛	型合せ	橙色	
530	第1区	第5層	ミニチュア	甕	ロクロ	淡橙色	
531	第3区	SK3106	独楽	—	型押し	浅黄橙色	底部穿孔
532	第3区	SK3110	鈴	—	手づくね	淡橙色	
533	第3区	SK3110	磁器水滴	鶏	鶏	染付	肥前系 底部穿孔

遺物番号	調査区	遺構・層位	種　別	モチーフ	成形技法	色　調	備　考
534	第3区	SK3113	土人形	力士	型押し	浅黄橙色	
535	第3区	SK3113	ミニチュア	急須蓋	型押し	外(彩色)／暗褐色 内／淡橙色	
536	第3区	SK3113	芥子(けし)面子	男性	型押し	橙色	
537	第3区	SK3113	芥子(けし)面子	女性	型押し	橙色	
538	第3区	SK3113	土人形	飾り馬	型押し	橙色	底部穿孔
539	第3区	埋め桶SK3113	土人形	首人形	型押し	橙色	底部穿孔
540	第3区	埋め桶SK3113	土人形	阿弥陀如来坐像	型押し	浅黄橙色	底部穿孔
541	第3区	埋め桶SK3113	土人形	恵比寿坐像	型押し	橙色	底部穿孔
542	第3区	第4層	土人形	力士	型押し	浅黄橙色	
543	第3区	第4層	土人形	観音坐像	型押し	黄橙色	
544	第3区	第4層	土人形	天神坐像	型押し	黄橙色	底部穿孔
545	第3区	第4層	土人形	大黒立像	型押し	黄橙色	底部穿孔
546	第3区	第4層	土人形	俵を持上げる男性	型押し	浅黄橙色	
547	第3区	SK3113	土人形	力士	型押し	淡橙色	
548	第3区	SK3113	陶器卸し器	－	焼き締め	橙色	底部穿孔

7）その他の遺物

フズリナ(549)

ＳＫ3107から出土した。古生代末(石炭紀中頃～ペルム紀末)に生存した原生動物有孔虫類で、化石は示準化石となる。別名として、形状が紡錘形を呈していることから紡錘虫とも呼ばれる。体長6.5cmを測る。

磚(550)

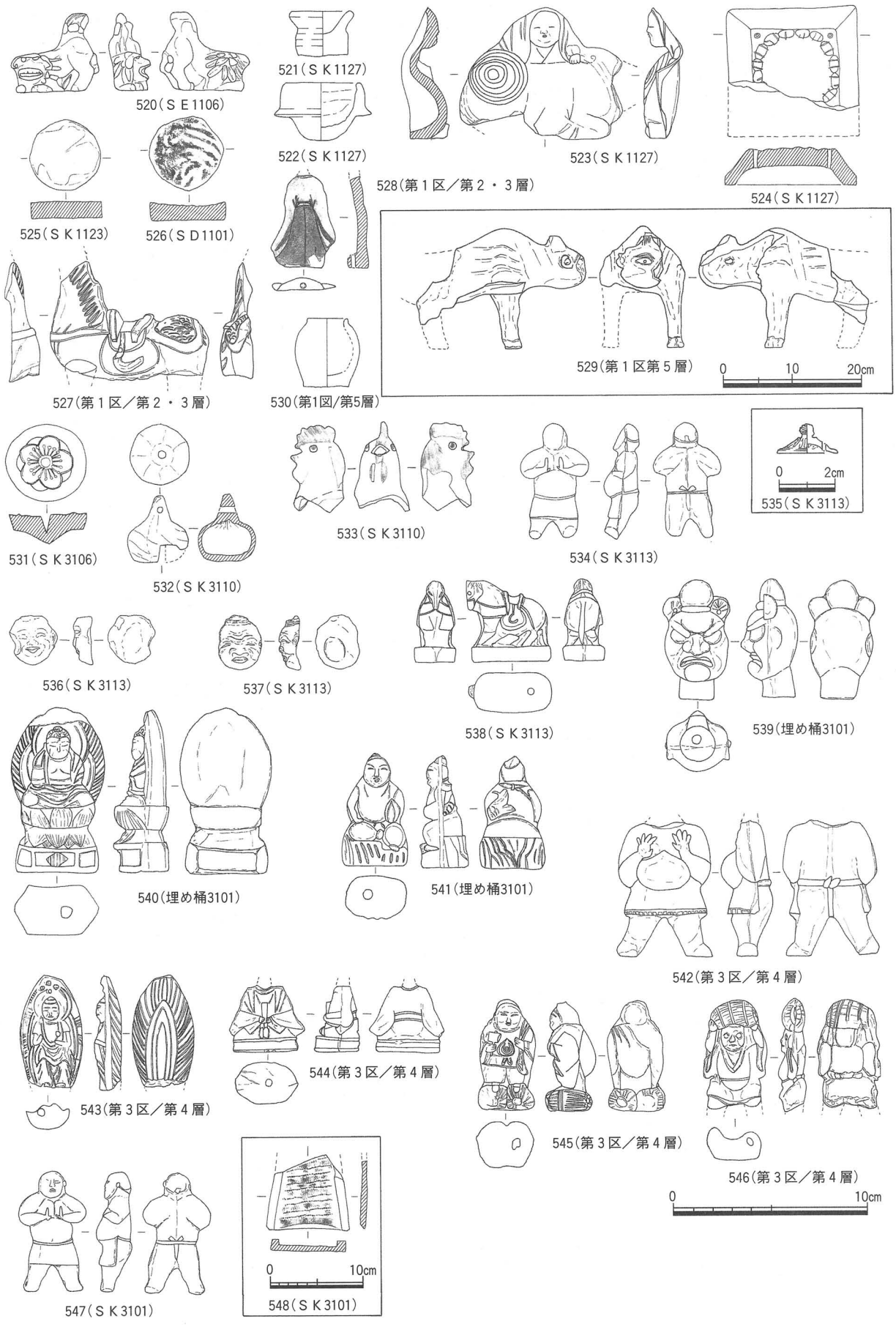
第３区の第２～３層内から、土蔵等の外壁に用いられる瓦質の塼の一片が出土した。１箇所に断面凸形を呈した焼成前の穿孔が認められる。穿孔部の最大径1.8cm・最小径0.3cmを測る。厚さ2.0cmで、方形の板状を呈するものと思われる。

継手(551)

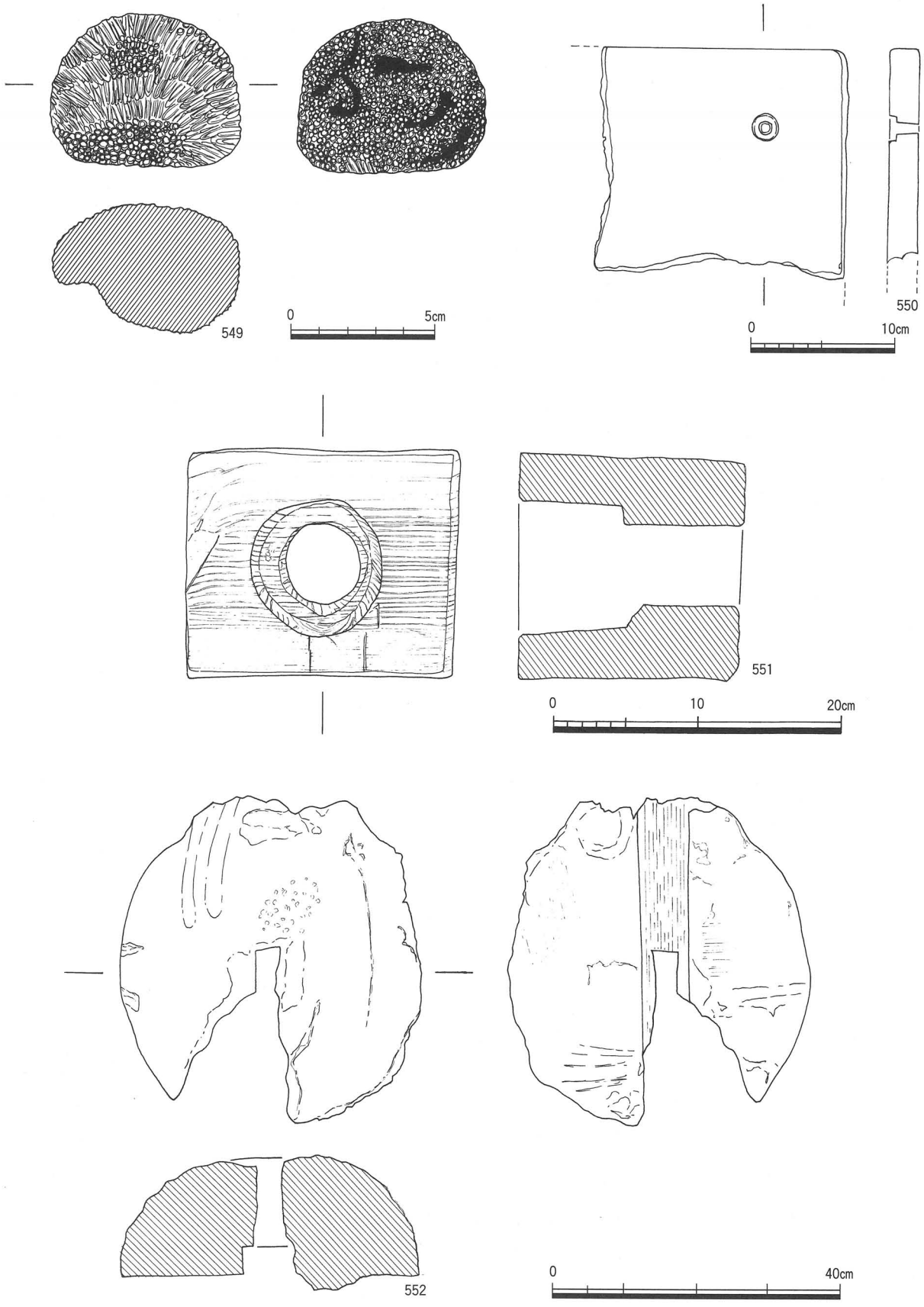
ＳＤ1101の竹樋に用いられた２本の竹管を繋ぐ接続品である。材質は木製で、法量はおおよそ縦16cm×横19cm×高さ16cmを測る。両面から竹管を嵌め込むための穴が開けられているが、一方は径約９cm、もう一方は径約６cmと大きさが異なる。

用途不明土製品(552)

ＳＫ3117から出土した半球形の土塊状のものである。全体が被熱により赤化している。最大径は約22cmを測る。中央には幅４cm程の角材が差し込まれていたような痕跡が認められる。鋳型のようにも見えるが、実態および用途は不明である。



第64図　ミニチュア土製品(スケール：529—1/8、535—1/2、548—1/6、他すべて1/4)



第65図　その他の遺物(549ーフズリナ＜ＳＫ3107＞、550ー磚＜第３区・第２・３層＞、551ー竹桶継手＜ＳＤ1101＞、552ー用途不明土製品＜ＳＫ3117＞

【用語解説と参考文献および註記】

＜用語解説＞

・(用語１)「**貫入(かんにゅう)**」—釉目絵に現れたひびのことで、素地と釉薬とでは焼成と冷却の間の膨張収縮の度合いが異なることで生じる。この釉ひびを一種の装飾と成し、これをはっきりさせるために黒色・赤褐色などを付けることがある。

・(用語２)「**白泥(はくでい)**」—白絵土(しらえつち)と呼ばれるカオリンの一種で、色が白く砂粒を含まず、可塑性の少ない粘土と水とを混合させた液状のもの。

・(用語３)「**しのぎ**」—篠鉋(ささがんな)とも呼ばれる技法で、器面を箆彫りで縦方向に細かく掻きとる事。

・(用語４)「**呉器手(ごきで)**」—高麗茶碗の一種である呉器に似ているものを指して呼ばれる。おおむね器高が高くて見込みが深く、高台は高くかつ開く。

・(用語５)「**金付(きんつけ)**」—金を装飾材料として通常は上絵付けに用いられる。一般に運筆を円滑にするために媒材と油類とによって液体と成した金泥を使用する。

・(用語６)「**ガラス焼継(やきつぎ)**」—破損した磁器を白玉と呼ぶ鉛ガラスを用いて低温で焼く接着法である。接合部には透明または白濁したガラス質の焼継剤が細く帯状に見られる。

・(用語７)「**碁笥底(ごけぞこ)**」—高台の造りの一種で、碁石を入れる碁笥の底に似て、底の中央部が球形に削られた形のもの。上げ底風で高台と呼べるものはついていない。

・(用語８)「**蛇の目釉剥ぎ(じゃのめゆうはぎ)**」—重ね焼の際、器物同士が熔着しないように高台を載せる見込みの釉を蛇の目形(ドーナツ形)に剥いだ痕跡を言う。

・(用語９)「**三日月形高台(みかづきこうだい)**」—片薄(かたうす)高台とも呼ばれる。高台を削り出す時に、轆轤の中心を外れて、一方が厚く一方が薄く高台輪が厚みの整わない新月状を呈しているもの。

・(用語10)「**兜巾高台(ときんこうだい)**」—高台削りの際に、自然に中央部に削り残りができ、突起しているもの。その形状が山伏が頭に付ける兜巾に似ているところから名付けられた。

・(用語11)「**目跡(胎土目・砂目)**」—重ね焼の際に、器物同士が熔着しないように耐火性粘土あるいは耐火砂を団子状に丸めたものを３個以上間に挟み、窯詰する。焼成後はハリ支え(用語17)と同様に取り落とされるが、その痕跡が器物に残っており、それを目跡と呼ぶ。窯詰で粘土は胎土目積、砂は砂目積と称する。慶長年間(1596～1614)以降は砂目が普及するようになるが、最近の調査研究によると胎土目も共存しているようである。

・(用語12)「**ひしゃく掛け(ひしゃくがけ)**」—器物全域に釉が掛からず、液垂れの状態になること。

・(用語13)「**蛇の目凹形高台**」—高台内の中央部を円く削りこみ、その周囲の釉を蛇の目形(ドーナツ形)に剥いだ痕跡を言う。焼成時にはその剥いだ部分に窯道具であるチャツやハマといった支脚を当て、窯詰めが行われる。

・(用語14)「**くらわんか手(くらわんかで)**」—厚手で重く、染付により簡略な絵付けを施した粗製品を指す。元禄(1688～1704)時代を中心に文化・文政(1804～1830)頃まで、摂津国(大阪府)枚方付近の淀川沿いの船に酒食を売る「くらわんか船」で用いられたものである。もとは肥前(佐賀県・長崎県)や伊予国(愛媛県)の砥部焼であったが、のちには摂津の古曾部焼も用いられた。

・(用語15)「**火燈(かとう)**」—照明具の一種で、明かり窓が付く把手付きの蓋と灯芯を載せる身から成り、蓋を回転させて光量を調整する。把手は皿状で、そこに灯火具を置くこともできる。器質は土師質と瓦質の２種類がある。

・(用語16)「**離れ砂(はなれずな)**」—砂または砂高台とも呼ばれ、重ね焼の際に器物同士が熔着するのを防ぐために蒔かれた耐火砂で、焼成後もその砂粒が高台に残っている。

・(用語17)「**ハリ支え痕(はりささえこん)**」—焼成時の器物同士の熔着を防ぐ窯道具の一種で、小円錐状の支えである。通常は磁器の胎土と同じ土で作られる。出荷する前に取り落とされるが、熔着痕が残る。中国製品には見られない。

・(用語18)「**印判(いんばん)**」—同じ文様の品を大量に製造するための染付の絵付け技法である。初期の伊万里では文様の版を、直接器物に圧し付けたと言われる。五弁花文では手描きに対し、いわゆるコンニャク印判と呼ばれる印刷装飾が18世紀前半に流行したが、施文方法の詳細は不明である。

・(用語19)「**渦福(うずふく)**」—染付銘の「福」の字を崩したもので、全体的に渦状を呈しているところから、そう呼ばれる。

・(用語20)「**片切彫り(かたきりぼり)**」—片刃彫りとも言われ、篦を用いて表面に文様の輪郭を刻んでから周りを斜めに削るもので、浮き彫りに近い削り技法である。
・(用語21)「**皮鯨手(かわくじらで)**」—唐津焼にみられるもので、皿や碗の口縁端部にだけ鉄釉を掛けて装飾したものを言う。その様子が鯨の皮身のところに似ているところから名付けられた。なお、この呼び方は九州地方にだけ用いられるもので、その他の地方では口紅と称している。
・(用語22)「**輪花風(りんかふう)**」—皿・鉢などの口縁部が一定の規律で出入している形状を言う。
・(用語23)「**型紙絵付け(かたがみえつけ)**」—文様を切り抜いた型紙を器にあて、上から絵の具を筆または刷毛に含ませて擦り付け、絵柄を表す方法で染付けに主に使われた。江戸時代中期に現れた手法である。
・(用語24)「**飛鉋(とびかんな)**」—躍り篦(おどりべら)とも呼ばれる。轆轤の上で回転させながら器面に篦を当て、連続的に削り目を入れたものである。篦の当たる角度が大きいと轆轤の回転にはねあげられて、削り目がつく。
・(用語25)「**三島手(みしまで)**」—技法的には高麗象嵌陶器である三島を摸倣したものである。器面に沈刻や押印の文様をつけて、そこに素地とは異色の泥を塗りうずめた装飾技法の一種である。文様は多種あるが、縦の波形を無数に押したもの、縦の波形つなぎ、輪つなぎが多い。名称の由来には諸説があるが、一般には器物の内外面に施された文様が昔、静岡県の三島大社で販布していた暦に似ているところから名付けられたとされている。
・(用語26)「**青海波文(せいかいはもん)**」—舞楽青海波の舞人の服に波の紋を染めているところからきたものである。同心円を彫刻した木製の当て具を器物の内側に入れ、外から叩き板で器体を叩いて成形する。この工程で当て具の同心円が器体の内壁に不規則にいくつも重なって押捺されてできる。これが一見波の文様のように見える。
・(用語27)「**口錆(くちさび)**」—器物の口縁部に施す装飾方で、酸化鉄を主体にした鉄釉が塗られる。口錆は口縁を硬化すると同時に、器物の内外の文様の境界としての役割りも有する。
・(用語28)「**薄手酒杯(うすでしゅはい)**」—19世紀前半頃から出現する極めて薄い器壁の磁器の酒盃で、見込みには草花・風景画・人物画以外に、各地の名所や酒銘柄といった多様なものが染付されている。鈴木裕子氏の研究(下記文献)によると、最初に薄手酒杯の呼称が使われたのは新宿区内「藤町遺跡」(新宿区内藤町遺跡調査会1992)の調査からということである。そして、徳島市内の「南前川町1丁目遺跡」で出土した薄手酒杯と江戸市中で出土する薄手酒杯に共通する文様が認められることから、「元来江戸では陶磁器は焼かれておらず(土器は生産されるが)、市中に運び込まれるものであったが、薄手酒杯は江戸から絵付けを施されて、再び外へ向けて運び出された稀有な例ということになろう。」と論じられている。さらに鈴木氏は「南前川町1丁目遺跡」出土品を形態・文様・胎土からⅠ～Ⅴ群に分類し、江戸市中出土品との比較検討を行った上で、他地域での出土例も含め生産・消費地間の流通について論究されている。
・(用語29)「**練上手(ねりあげで)**」—鶉手(うずらで)とも言う。二色以上の粘土(板)を重ね練り合わせて縞文様を表した素地の装飾技法である。
・(用語30)「**虫喰い(むしくい)**」—化粧掛けの一部が釉と共に胎土から剥離し、所々虫に喰われたようにみえること。焼損じの一種であるが、その侘びた容姿が茶人たちに賞美され、のちに故意に調合して作られるようになる。
・(用語31)「**青花(せいか)**」—日本のいわゆる染付に対する中国語で、白地に青の文様がある。
・(用語32)「**ピンホール**」—釉の表面に針のような細かい穴ができたものを言う。胎土に細かい気泡が入っているとき、胎土中にある原料の分解ガスや胎土表面に埃が溜まったままで施釉した時などに生じる。
・(用語33)「**型押し**」—型作り成形とも呼ばれるもので、文様が彫られた木製の内型や外型に粘土板を圧しつけて形作られる。
・(用語34)「**輪トチン**」—窯道具の一種として用いられる馬爪状の支脚台である。焼成の際に、匣鉢(こうばち)と呼ばれる器物を入れる耐火粘土製の容器とともに器物の間に置かれる。これも「砂」と同じで、器物同士の熔着を防ぐ機能をもち、高台内に痕跡を残す。

<参考文献>

◎鈴木裕子　2002「Ⅵ　考察　2　出土遺物の問題　（2）南前川町１丁目遺跡出土の薄手酒杯」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第36集　南前川町１丁目遺跡　－鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会　財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

◎森島康雄　1995「Ⅲ　土器・陶磁器　6.瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世時研究会編　真陽社

◎藤澤良祐　2001「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念　「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会　戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　－東アジア的視野から－　資料集』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター

◎難波洋三　1992「第Ⅴ章　第６節　徳川氏大阪城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』財団法人　大阪市文化財協会

◎白神典之　・1988「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ79）　発掘調査報告』堺市教育委員会

・1993「堺擂鉢考」『東洋陶磁第19号』東洋陶磁学会

◎積山　洋　・1995「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要３　－設立10周年記念論集－』財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

・1999「大坂の土師質土器　3.焼塩壷」『関西近世考古学研究Ⅶ　特集　上方と江戸　－近世考古学から見た東西文化の差異－』関西近世考古学研究会

◎才原金弘　1988『若江遺跡第27次発掘調査報告』財団法人　東大阪市文化財協会

◎森田克行　1984「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会

◎加藤唐九郎　1972『原色陶器大辞典』株式会社　淡交社

◎佐々木達夫　1991『日本史小百科　29　陶磁』近藤出版社

◎光芸出版編　1976『やきもの辞典』株式会社　光芸出版

<註>

（1）「京・信楽系」に類似する陶器類であるが、明確に産地特定できないものを「関西系」とした。

（2）「第４回　土器談話会」（平成13年６月　明石市立博物館）で、村上泰樹氏（兵庫県教育委員会）と稲原昭嘉氏（明石市立博物館）の両氏に実見して頂き、ご教示を賜った。

（3）勝田邦夫氏、福永信雄氏（東大阪市教育委員会）の両氏に実見して頂き、ご教示を賜った。

（4）嶋谷和彦氏（堺市立埋蔵文化財センター）に鑑定して頂いた。

第Ⅳ章　まとめ

冒頭でも記述したように久宝寺寺内町遺跡では今回の調査が実施されるまでは、小規模な遺構確認調査のみで、近世についても断片的な地層の確認しか把握されておらず、考古学的には不明なところの多い遺跡とされていた。したがって、本寺内町を究明する手段としては、古絵図ならびに文献をもって行われることが主であった。ところが、今回、初の本格的な調査によって江戸時代の町屋遺構の下層から室町時代末期に比定される焼土、さらにその焼土下層には江戸時代の絵図とは様相の異なる遺構を検出するに至り、本寺内町形成解明に一石を投じることとなった。

また、近世以前の様相については第１区の下層調査において平安～室町時代、さらには弥生時代後期末～古墳時代初頭にまで遡る耕作地を示唆する地層を確認することができた。以下、市教委による遺構確認調査を含む本寺内近隣における調査成果と照合し、各時代別に今回の調査成果をまとめる。なお、本文中の調査地点（アルファベット）については、本書の第４図を参照されたい。

【弥生時代後期末～古墳時代初頭】

当該期について既往の調査では、Ｇ地点（渋1999）を除く６地点で検出されている。そのなかでも顕著な遺構を挙げると、Ｂ地点の古墳時代前期の木棺・土器棺を伴う方形周溝墓（西村1989）、Ｃ地点の古墳時代初頭の竪穴住居など、居住域に関連すると見られる土坑や多くのピット群（坪田1997）、そしてＤ地点では古墳時代前期の紡織部材など多数の木製品が廃棄された大型土坑（岡田1997）がそれぞれ検出されている。今回の調査では、先述の３地点で確認されているような墓域や居住域の検出は見られないが、畦畔状の起伏や踏み込み痕といった水田を示唆する地層から、当地点が当該期において生産域としての役割りを担っていたことが推察される。

【奈良時代】

今回の調査では遺構は見つかっていないが、第１区北西部にあたる**集石遺構1201**から当該期に比定される瓦が数点出土している。周辺の調査ではＥ地点（渋1997）で検出された河川内から、同時期の土師器杯・須恵器杯身・丸瓦が見つかっている。これらの遺物に関しては当地点あるいは近隣に古代寺院存在の可能性をもつが、今回の調査においては、外部から客土として搬入されたことも考慮しなければならず、今後周辺における調査の累積を要する。

【平安～室町時代】

当該期については、第１区の下層調査において地層断面観察の結果、耕作に関わる水田面と自然河川を確認した。地層断面からは洪水による河川の氾濫が繰り返されていたこと、同一面上の南端部で検出した自然河川の状況などから勘案して、当地はかなり不安定な土地条件であったと考えられる。

ここで周辺の調査成果を見ると、Ｂ地点で平安時代の水田と自然河川、Ｃ地点で中世～近世の生産域に伴う井戸、Ｄ地点で鎌倉時代の灌漑用井戸、Ｅ地点で中世の水田面（渋1997）、Ｆ地点で平安時代後期～中世の居住域に伴うと思われる井戸（藤井1999）、Ｇ地点で鎌倉～室町時代にかけての居住域に伴う土坑・溝・ピットがそれぞれ検出されている。この成果から窺えることは、Ｂ・Ｄ・Ｅの３地点については今回の調査成果と時期・遺構の性格ともに並行関係にあるが、Ｆ・Ｇの２地点については様相が異なる。Ｆ・Ｇの２地点は本寺内町環濠外南側一帯に位置する

「出屋敷」あるいは「地下垣内」と呼ばれるところである。絵図および史料の研究(註１)によると「地下垣内」という言葉は中世後期によくみられることから、本寺内町建設期には既に存在していた地域とされている。

以上のことと今回の第１区下層調査で確認した成果を照合すると、第１区下層地点が生産域であった中世には、本寺内町南西部にあたるところにすでに寺内町初現、あるいはそれ以前に先行する居住域が形成されていたことになる。しかし、現段階では調査事例および調査面積が稀少なことから根拠に乏しく、あくまで推測の域を出るものではないので、今後の調査の累積を要する。

【室町時代末期(第２面)】

当該期については、調査期間の諸事情から第Ⅲ章でも既述したように天正五年(1577)の「石山合戦」に伴うと考えられる焼土層を境とする合戦前後の遺構を、焼土層を排除した同一面で捉えた。両時期ともに各遺構は江戸時代以降の町屋形成の改変によって撹乱されている部分が多く、全容については不明なところが多いが、全体像からは再三記述しているように江戸時代の絵図とはかなり様相の異なっていることがわかる。

第１区の礎石建物ＳＢ1201・掘立柱建物ＳＢ1202、第３区の**石組み溝3201**については、絵図および現代の町割りと方位がやや異なっていることがわかった。礎石建物ＳＢ1201・掘立柱建物ＳＢ1202は東端部しか検出できず西側部分については不明であるが、いずれも柱間規模から「納屋」あるいは「離れ」といった建物が想定される。また、屋根については周辺に瓦が出土していないことから板葺きであったと思われる。

集石遺構1201については、その床面で礎石や礎石抜き取り穴を確認しているのと、自然石とともに火災によって被熱した多量の瓦が出土していることから瓦葺の礎石建物が存在していたことが推測される。また、同遺構内からは瓦以外に特筆できる遺物として、多量の土師器皿と数点の中国製の青花皿や青磁碗が出土している。土師器皿については本書で図化した以外に破片だけでコンテナ１箱分を量る。これらの土師器皿の一部には灯明皿として使用されたものが含まれるが、そのほとんどは酒器と考えられるもので、一箇所に折り重なって出土している状況から饗宴後に一括投棄された様子が窺える。

第２区では焼土層に覆われた庭園の一郭を示す**池状遺構2201**と、その南側で東西に延びる２条の溝(ＳＤ2201・2202)を検出した。なお、同一面で検出している土坑２基(ＳＫ2201・2202)については、焼土層上面からの切込みで、「合戦後」にあたる遺構となる。池状遺構を考えるにあたっては、本調査区の直ぐ東隣で実施された市教委による遺構確認調査成果（渋1998）がある。それをみると、焼土層を排除したところで土坑を３基検出しているが、ここでは**池状遺構2201**のように周縁に配された石列は見られない。このことから、今回の第２区調査区内に収まる**池状遺構2201**は、比較的小規模なものだったと思われる。また、この遺構確認調査では先述の遺構面のさらに下の遺構面で検出した土坑内から屋根の棟の最上部にのせる「雁振り瓦」が１点出土しており、調査担当者は「大きな建物、つまり寺院等の施設があったことが考えられる。」と指摘している。

第３区の**石組み溝3201**については排水用のみならず、屋敷間の境界を区画する役目をもつ溝と考える。本溝の南側は平面および地層断面の観察から、北側より20cm前後高く盛土された状況が確認でき、本溝を境に南北に高低差があったことがわかった。本溝を含む第３区全域を見ると江戸時代の町屋形成に伴う整地の際に、先述の**石組み溝3201**北側の低い部分を南側と同レベルにな

るよう焼土層の上面に盛土されていることが確認できた。また、本溝の付近では焼土層内から、「若江城」堀内出土の軒平瓦と同笵(註２)のものが１点出土しており、年代および若江城との有機的関係に興味がもたれる。

【江戸時代】

17～19世紀の全時期を通して、盛土・整地といった改変に伴う明確な堆積層が認められたのは「石山合戦」に伴うと推定される焼土層上面に構築された層厚0.1～0.2mを測る17世紀初頭の整地層のみである。それ以後、言い換えると17世紀中頃～19世紀に至るまでは、前時代の礎石抜き取り穴や土坑、また井戸を埋め戻した上に後世の遺構が切り込み、さらにその上に次の時代の遺構が構築されるといった様相である。今回の調査では、統一政権による街区の改変や大規模な火災等の自然災害の後に町が復興されるといった状況を示す堆積層は確認できなかった。

当該期の検出した遺構のなかで多くを占めるのは土坑いわゆる廃棄坑である。第３区のＳＫ3107からは17世紀後半の肥前系染付磁器製品とともに被熱した16世紀末頃の中国製磁器片や瓦質火鉢片、そして特異なものに五輪塔(空・風輪)と宝篋印塔が出土しており、これらは江戸時代に入っての整地第２面(室町時代末期)の攪拌遺物の可能性がある。

次に検出の多い遺構は、生活に不可欠な水を得るための井戸である。第１区では井戸側に竹樋を挿入し、そこから分水する現在の上水道にあたる施設が２箇所検出できた。

先述の土坑と井戸の設置場所について、大坂や堺の町屋の調査例（堺市博物館1993、松尾2001・2003、續2003）を見ると屋敷地の奥に展開するのがほとんどであるが、今回の調査ではそういった空間構造を解明するまでには至らなかった。その理由に、屋敷を復原できる礎石が後世の改変によって遊離し原位置を保っているものが少なく、また、礎石抜き取り穴についても規則性を見出すものがみられないことが挙げられる。しかし、そのなかにあって唯一第３区で検出した「Ｌ」字状の溝ＳＤ3101が、屋敷の輪郭を示唆する「雨落ち溝」となる可能性をもつ。

屋敷地の規模・構造は不明であったが、町屋住人の生業が垣間見れる遺構として第１区の**埋め甕群1101**と第２区の**埋め甕2101～2106**がある。双方とも備前焼大甕を埋設した「地下式倉庫」と思われるが、掘り込みにあたる上層部分が現代の撹乱によって破壊されており、全体像は掴めない。これらの大甕の内容物を考えるにあたって当時の職種を示す屋号を見ると、そのなかに「紺屋」・「みそ屋」・「油屋」といった大甕を用いる生業が確認できる。因みに第２区の埋め甕遺構の調査中にたまたま現地の古老の方が見学に来られ、「このあたり(本調査地点)には、江戸時代に油屋さんが代々つづいていたことを子供の頃から親に聞かされていた。」という談話を聞いた。科学的根拠には欠けるが、現段階では灯明用油を生業とする「油商家」の貯蔵倉ではないかと考える。

全体の調査終了後に実施した絵図に見る東西に伸びる「背割り排水溝」の確認調査では、本溝は江戸時代に入って構築されたものであることがわかった。それは言い換えると、絵図および現在見られる本寺内町の町割りに関して、文献史料の研究から通説となっている天文十年(1541)まで遡らないということになる。また、その背割り排水溝の下層に天正五年(1577)の「石山合戦」に伴うと推定される焼土層、さらにその下層で今回の第２面(室町時代末期)として検出した第３区の「木樋」遺構のつづきが確認でき、時代別に層位関係が明らかとなった。

以上、時代別に今回の調査成果を簡潔に述べてきたが、そのなかで本調査の最大の成果は再三記述してきたように、①天正五年(1577)の「石山合戦」に伴うと推定される焼土層、②現存する江

戸時代の久宝寺寺内町絵図とは様相の異なる遺構面の２点に絞られるであろう。①の年代については、本調査の出土遺物が天正八年(1580)の「若江城」廃絶時の堀内一括遺物に並行するものである。しかし、史料「安井家文書」にみる天正五年(1577)の「石山合戦」については史実として扱うべきか否か、その信憑性について文献史の研究者間で論議が醸し出されている。②については、それまでの絵図イコール寺内町像を再検討する意味で大きな役割を果たしたと言える。集石遺構・庭園・石組み溝といった遺構や中国製磁器・石塔類・瓦類、そして本調査に先立つ遺構確認調査で出土している雁振り瓦等からは一般の町屋とは考え難いものがあり、大型居館が想定される。遺構確認調査の時点で担当者は遺構・遺物の年代と文献史料から「第３遺構(雁振り瓦が出土した)面は天文九年(1540)頃に当てることができ、天文十四年(1545)に再興される以前の顕証寺の寺域であったことが推察される。」と報告している。

今回の調査は、調査期間および工事が及ばない故の部分発掘といった制約下で実施したが、当初の予想をはるかに越える多大な成果が得られた。しかし、天正五年(1577)の焼土層に関しては、今後久宝寺寺内町遺跡で実施される調査の指針となる反面、調査次数の累積とともに再検討が要される。考古学的に今回の調査は緒に就いたばかりで、絵図にみる町割りをはじめ現在も寺内町周囲に部分的に残る環濠および土塁といった遺構の核心部分が未解明である。今後これらの調査成果の累積と、さらには、畿内における他の寺内町とも考古学のみならず他の学問分野と学際的に比較・検討を行い、久宝寺寺内町の最大の論点である形成期と町割り構造の実態解明が望まれる。

【註】

（１）◎櫻井敏夫・大草一憲　1988『寺内町の基本計画に関する研究　―久宝寺寺内と八尾寺内を中心として―』八尾市教育委員会

◎内田九州男　1986『八尾市史紀要　第九号　久宝寺寺内町の町割りについて』八尾市教育委員会

（２）勝田邦夫氏、福永信雄氏（東大阪市教育委員会）の両氏よりご教示を賜った。

【引用・参考文献】

◎Ｂ地点―西村公助　1989「６．久宝寺遺跡（第３次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』(財）八尾市文化財調査研究会報告25

◎Ｃ地点―坪田真一　1997「Ⅰ　久宝寺遺跡（第８次調査）」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』財団法人八尾市文化財調査研究会

◎Ｄ地点―岡田清一　1997「Ⅱ　久宝寺遺跡（第17次調査）」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』財団法人八尾市文化財調査研究会

◎Ｅ地点―滝　斎　1997「５．久宝寺遺跡（95－719）の調査」『八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業　八尾市内遺跡　平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会

◎Ｆ地点―藤井淳弘　1999「５－１．久宝寺遺跡（97－694）の調査」『八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市内遺跡　平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会

◎Ｇ地点―滝　斎　1999「５－１．久宝寺遺跡（97－720）の調査」『八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市内遺跡　平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会

◎滝　斎　1998「２．久宝寺寺内町遺跡（97－129）の調査」『八尾市文化財調査報告39　平成９年度公共事業　八尾市内遺跡　平成９年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会

◎堺市博物館　1993『博多と堺』

◎松尾信裕　2001「第１章　近世大坂の町屋―発掘調査の事例から」『近世大坂の都市空間と社会構造　塚田孝・吉田信之＝編』株式会社　山川出版社

◎松尾信裕　2003「戦国時代の大坂　―寺内町から城下町へ―」『萩原三雄・小野正敏編　戦国時代の考古学』高志書院

◎續　伸一郎　2003「戦国時代の大坂　堺　―発掘調査から見た堺―」『萩原三雄・小野正敏編　戦国時代の考古学』
高志書院

あ と が き

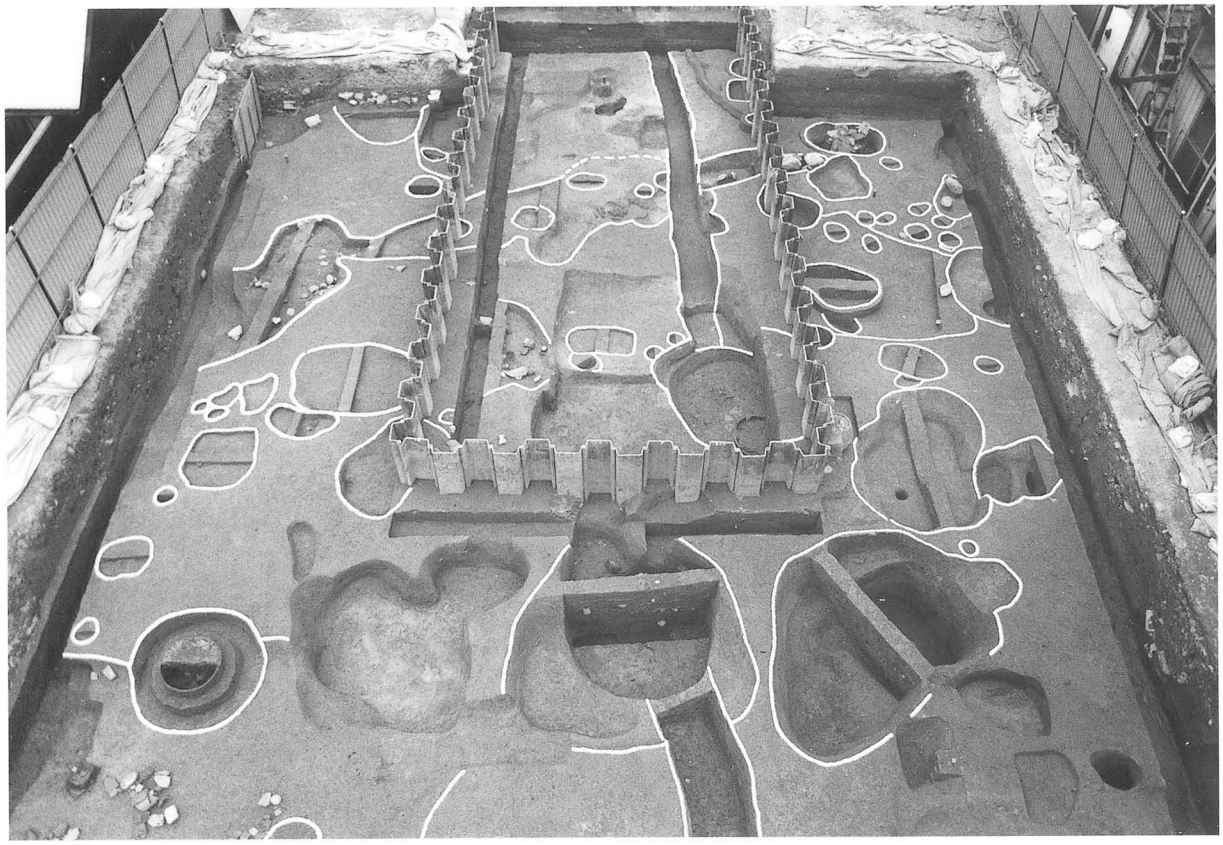
今回の久宝寺寺内町遺跡内ではじめて実施された本格的な発掘調査によって、予想だにしていなかった室町時代末期に比定される焼土層と遺構面を検出した。これは今まで絵図でしか窺い知ることができなかった久宝寺寺内町に、新たな見解を加える結果となった。しかし、発掘現場の時間的制約にくわえて調査担当者の認識・力量不足から、地層と遺構の捉え方について十分に検討できていないところが少なくない。とくに天正五年(1577)の焼土層については、今後の新たな調査成果の積み重ねによってその歴史的意義を明らかにしていきたい。

最後に、今回この多大な成果を得たにもかかわらず5年もの長きに亘り報告書が刊行されなかったことは、すべて調査担当者の責任であり、市民はもとより学識経験者の多くの方々にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。この件に関しまして「調査成果を迅速に社会に伝えていくという義務」を再認識するとともに、数々の反省点を今後の調査に生かす所存であります。

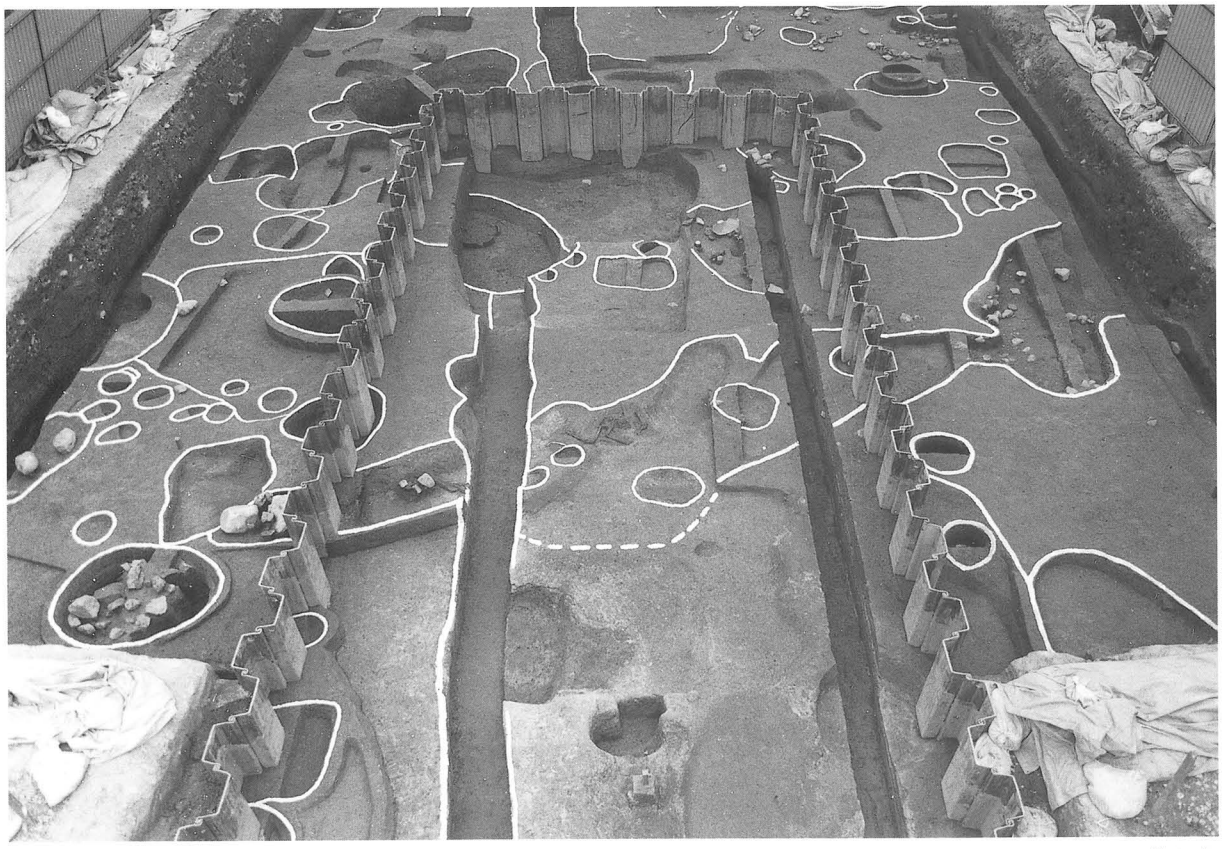
(岡田清一)

図　　版

図版一　第1区　第1面（江戸時代）遺構面全景



南から



北から

図版二　第1区　第1面（江戸時代）検出遺構

ＳＥ1105断ち割り（南から）

ＳＤ1101内竹桶と継手（北から）

重機掘削中に検出した
埋め甕ａ＜便槽＞（東から）

図版三　第2区　第1面（江戸時代）遺構面全景

南から

埋め甕掘方断ち割り状況（南から）

図版四　第3区　第1面（江戸時代）遺構面全景・検出遺構

南から

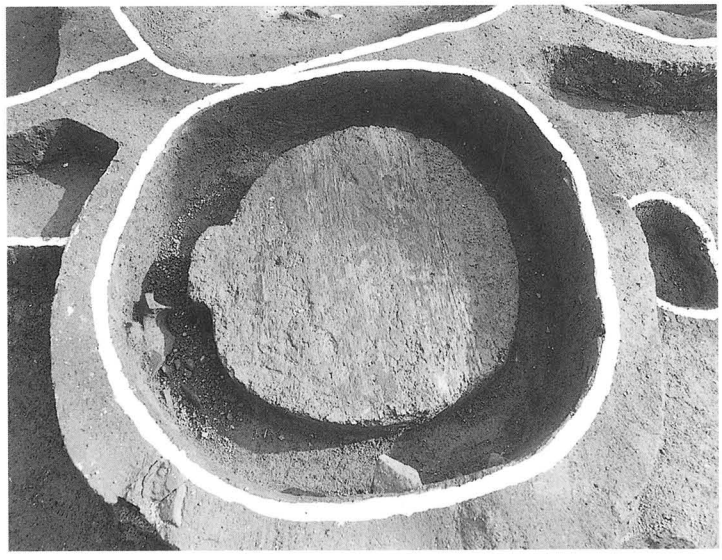
ＳＫ3110＜左＞・ＳＫ3113＜右＞（西から）

図版五　第3区　第1面（江戸時代）検出遺構

ＳＫ3110（北から）

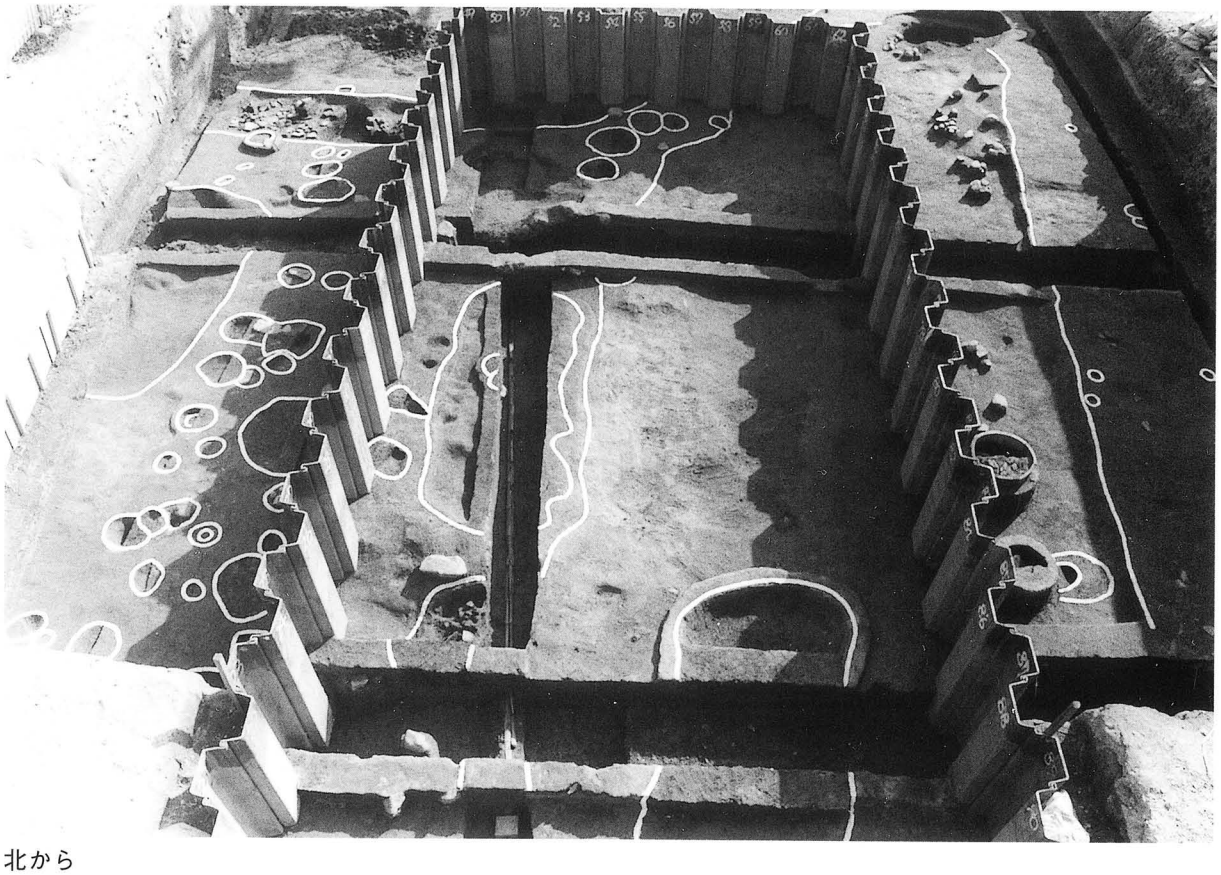
北部（西から）

埋め桶3101（西から）



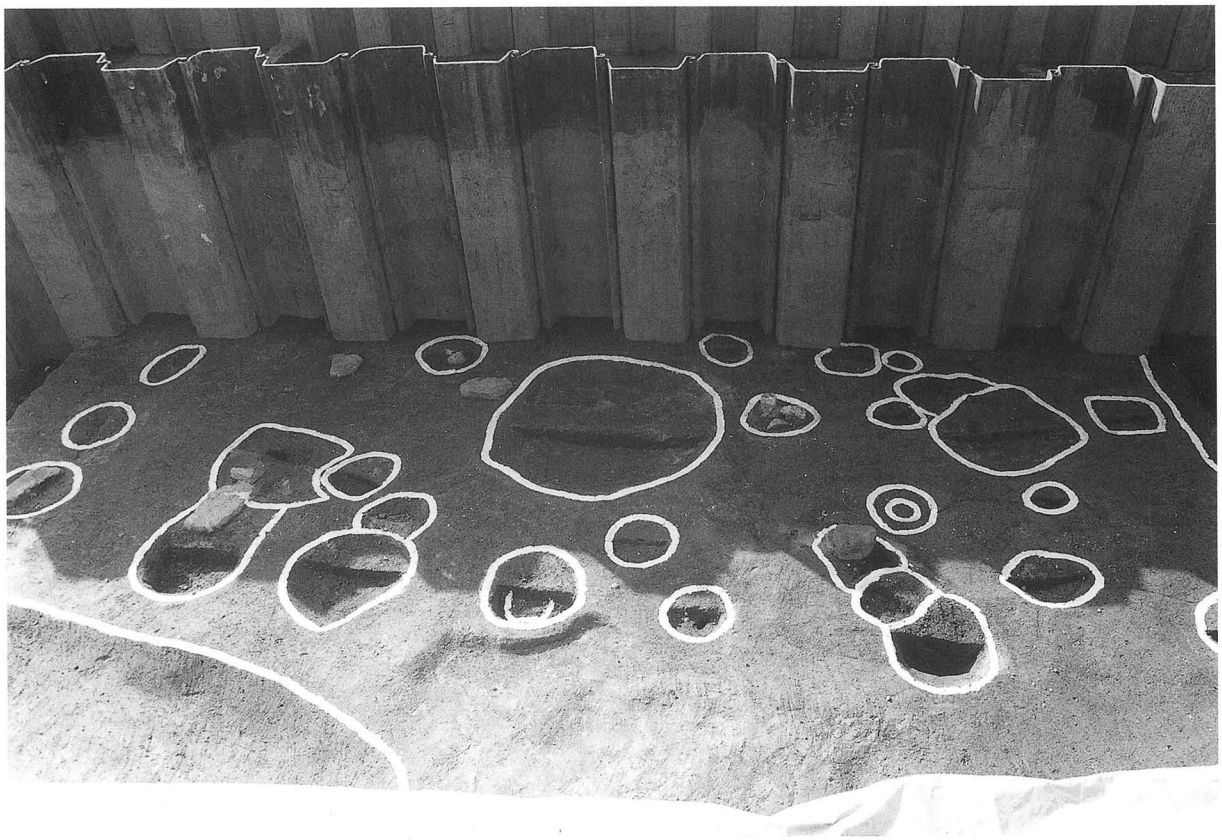
図版六　第1区　第2面（室町時代末期）遺構面全景

南から



北から

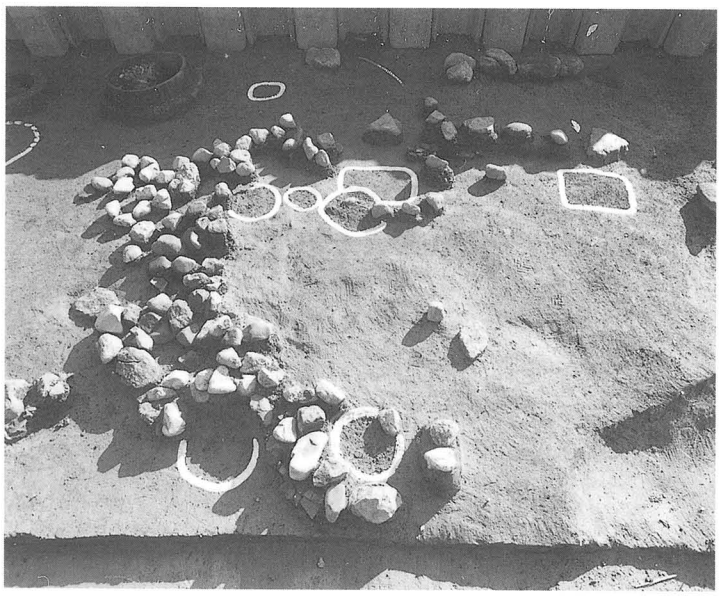
図版七　第1区　第2面（室町時代末期）検出遺構



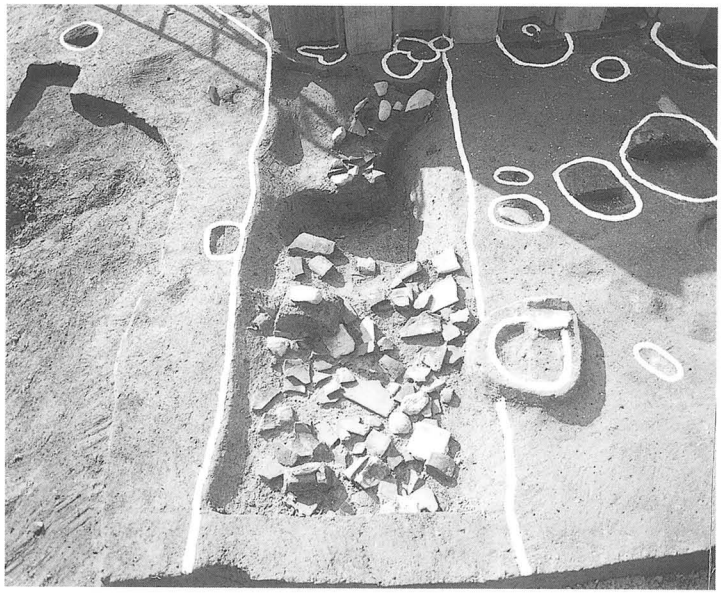
建物跡＜ＳＢ1201・ＳＢ1202＞（東から）

集石遺構1201（北から）

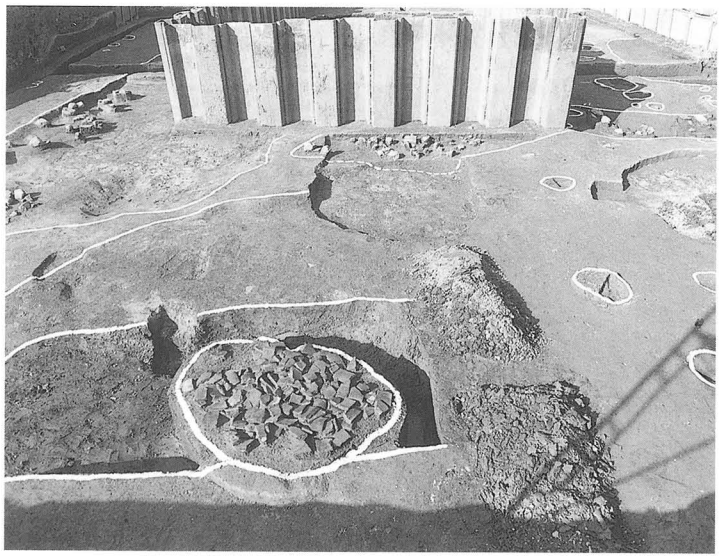
図版八　第1区　第2面（室町時代末期）検出遺構



集石遺構1201＜中央部＞（西から）

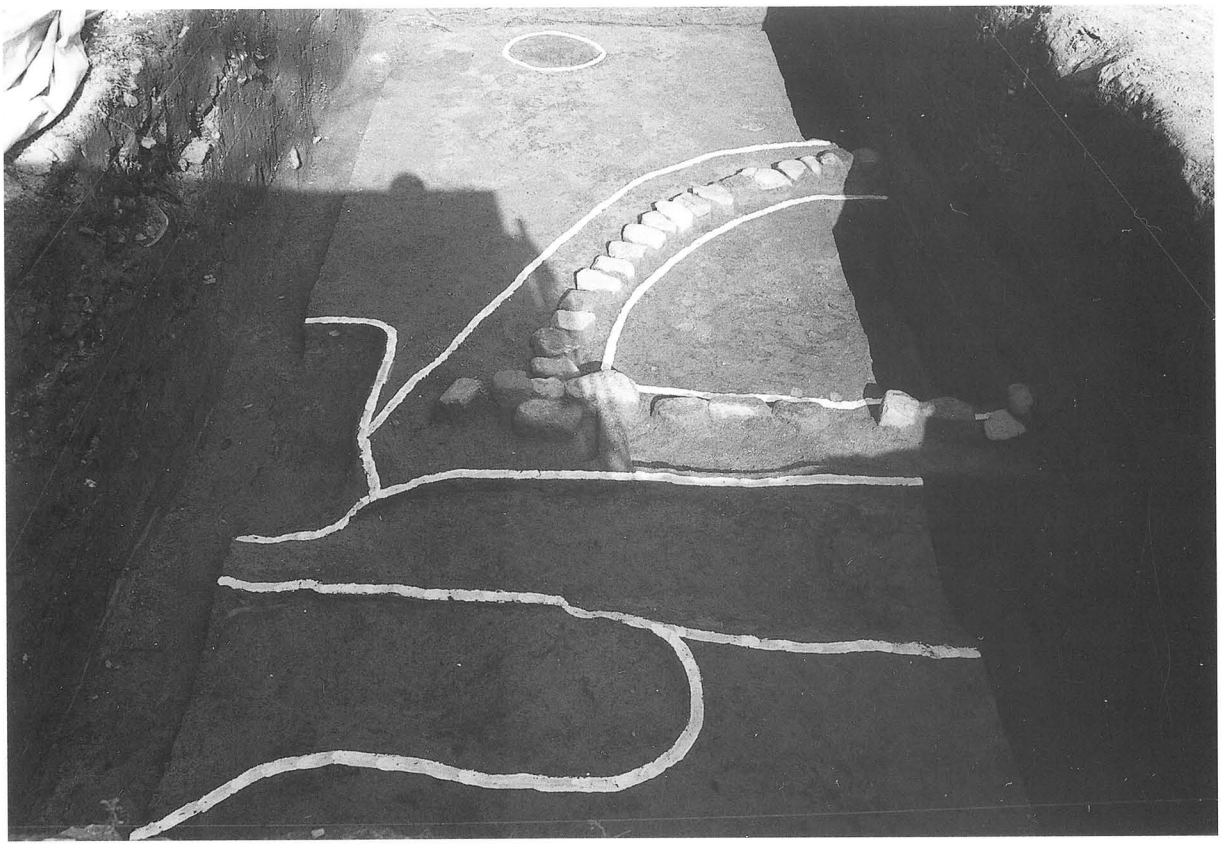


ＳＤ1202（東から）

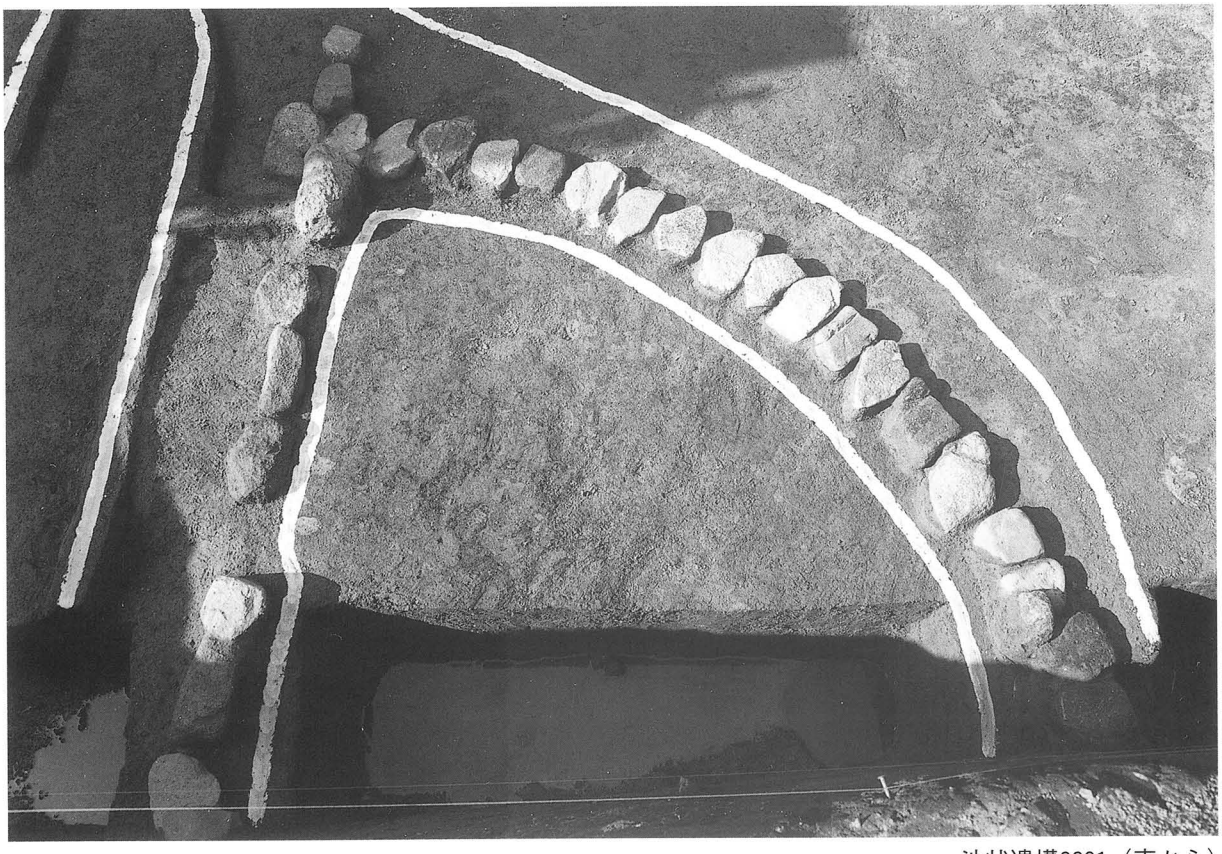


南部（南から）

図版九　第2区　第2面（室町時代末期）遺構面全景・検出遺構

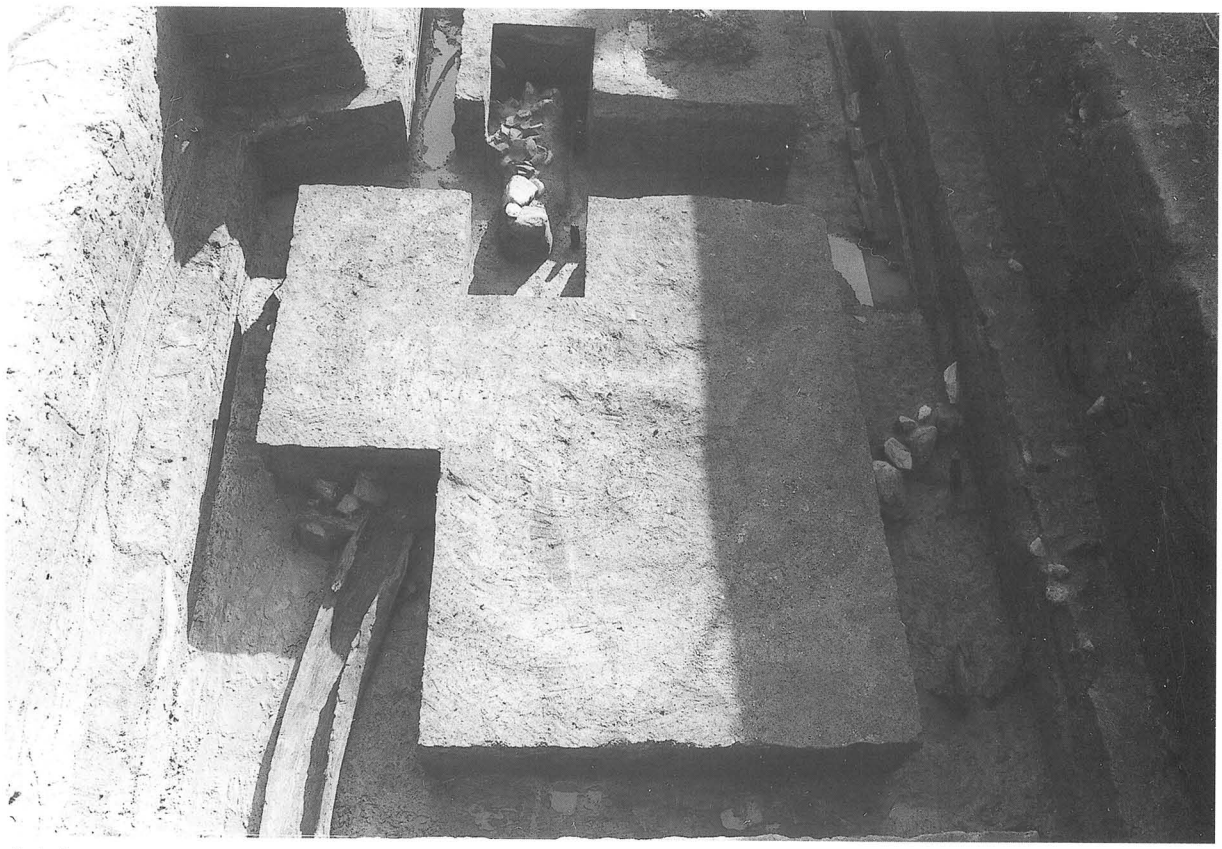


南から



池状遺構2201（東から）

図版一〇　第3区　第2面（室町時代末期）北部・遺構検出状況



北から

木樋3201（北から）

図版一一　第3区　第2面（室町時代末期）検出遺構

石組み溝3201（西から）

石組み溝3201（東から）

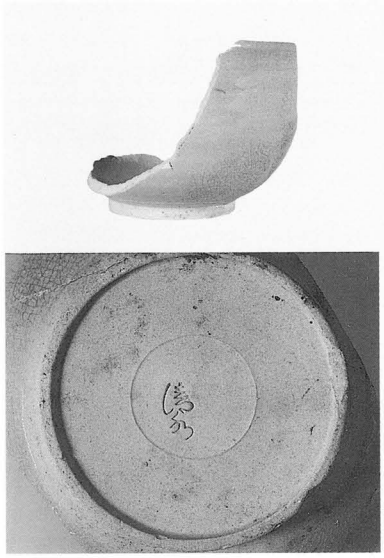
図版一二　第1区　下層調査

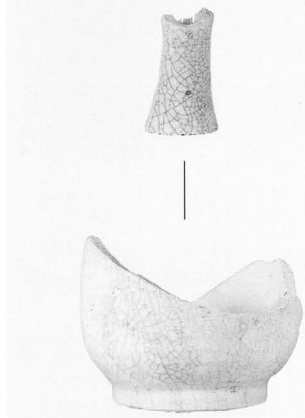
T.P.＋6.5m付近（北から）

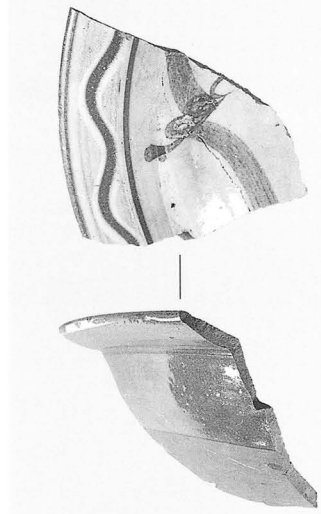
同上　東壁断面（北東から）

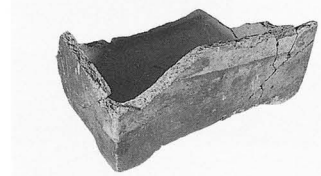
東壁断面T.P.＋5.5m付近（南西から）

図版一三　江戸時代の土器・陶磁器


1

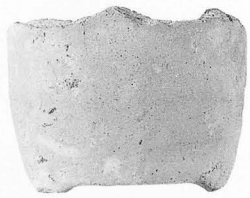

2


3


4

6

7


8

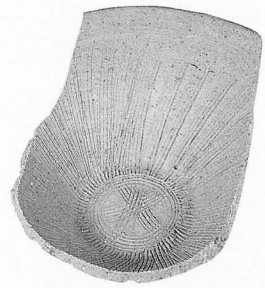
9

11

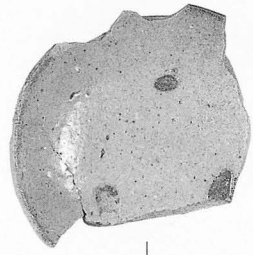
13

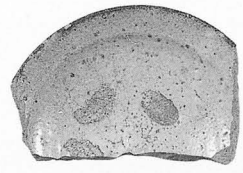
14

15


16

17

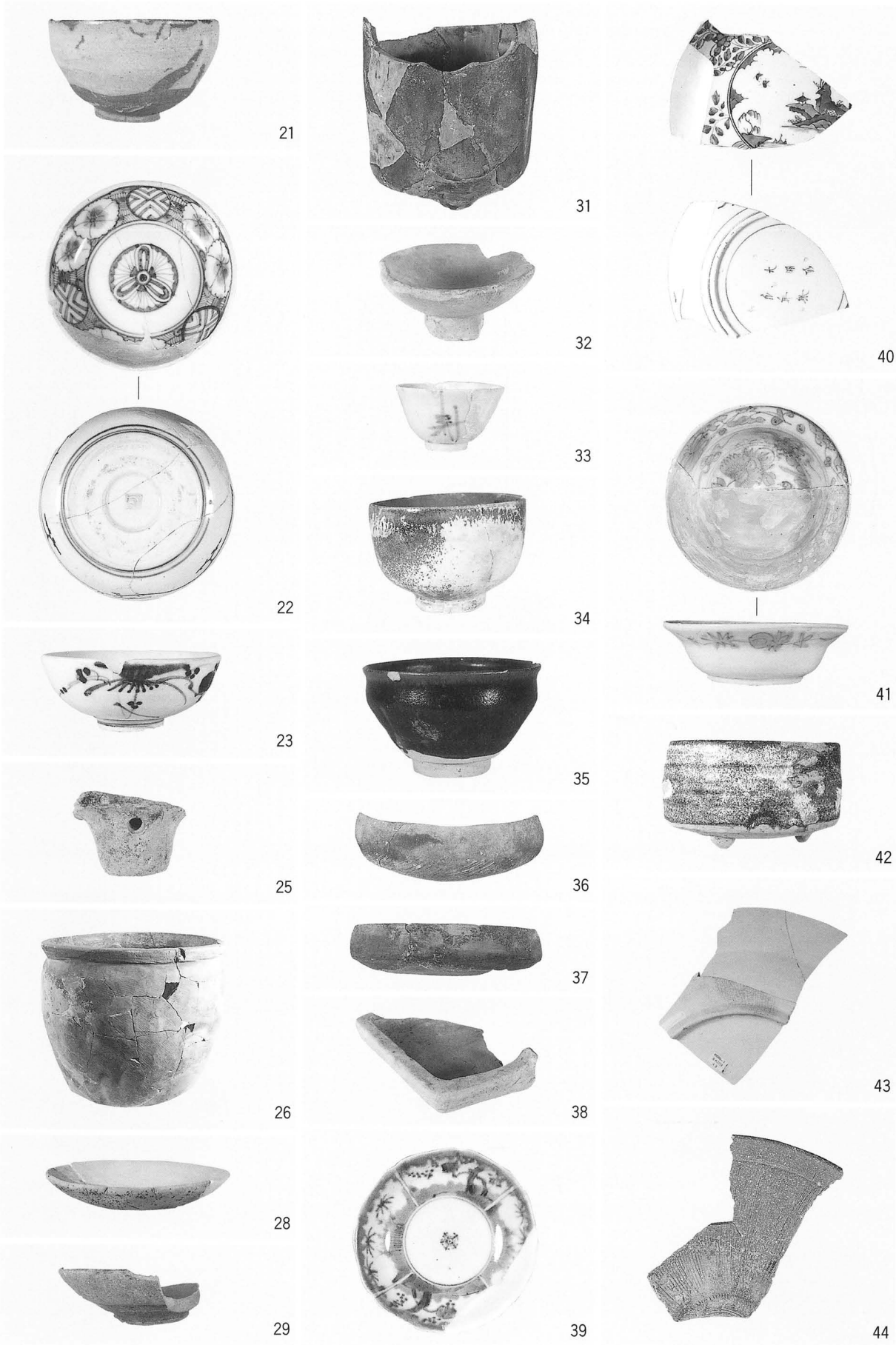

18


19

20

ＳＥ1101（1）、ＳＥ1103（2～4）、ＳＥ1105（6～9）、ＳＥ1107（11・13）、ＳＥ1108（14～16）、ＳＫ1101（17）、ＳＫ1102（18～20）

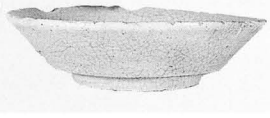
図版一四　江戸時代の土器・陶磁器



ＳＫ1102（21）、ＳＫ1105（22・23）、ＳＫ1109（25・26）、ＳＫ1110（28）、ＳＫ1111（29・31）、ＳＫ1115（32）、ＳＫ1116（33～38）、ＳＫ1117（39～41）、ＳＫ1118（42～44）

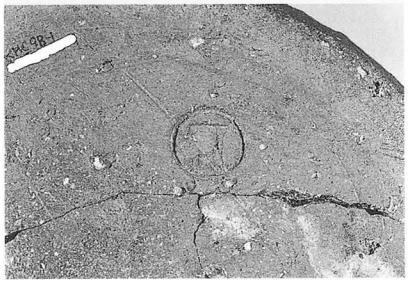
図版一五　江戸時代の土器・陶磁器

45

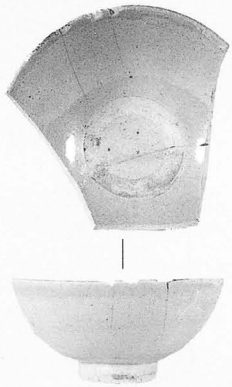

47

48

49



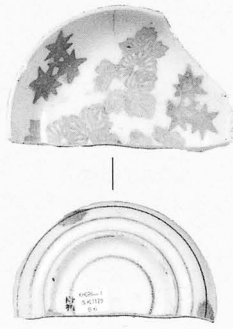
51


52

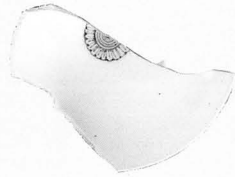
53

54

55


56

57



58

60

61

62

63

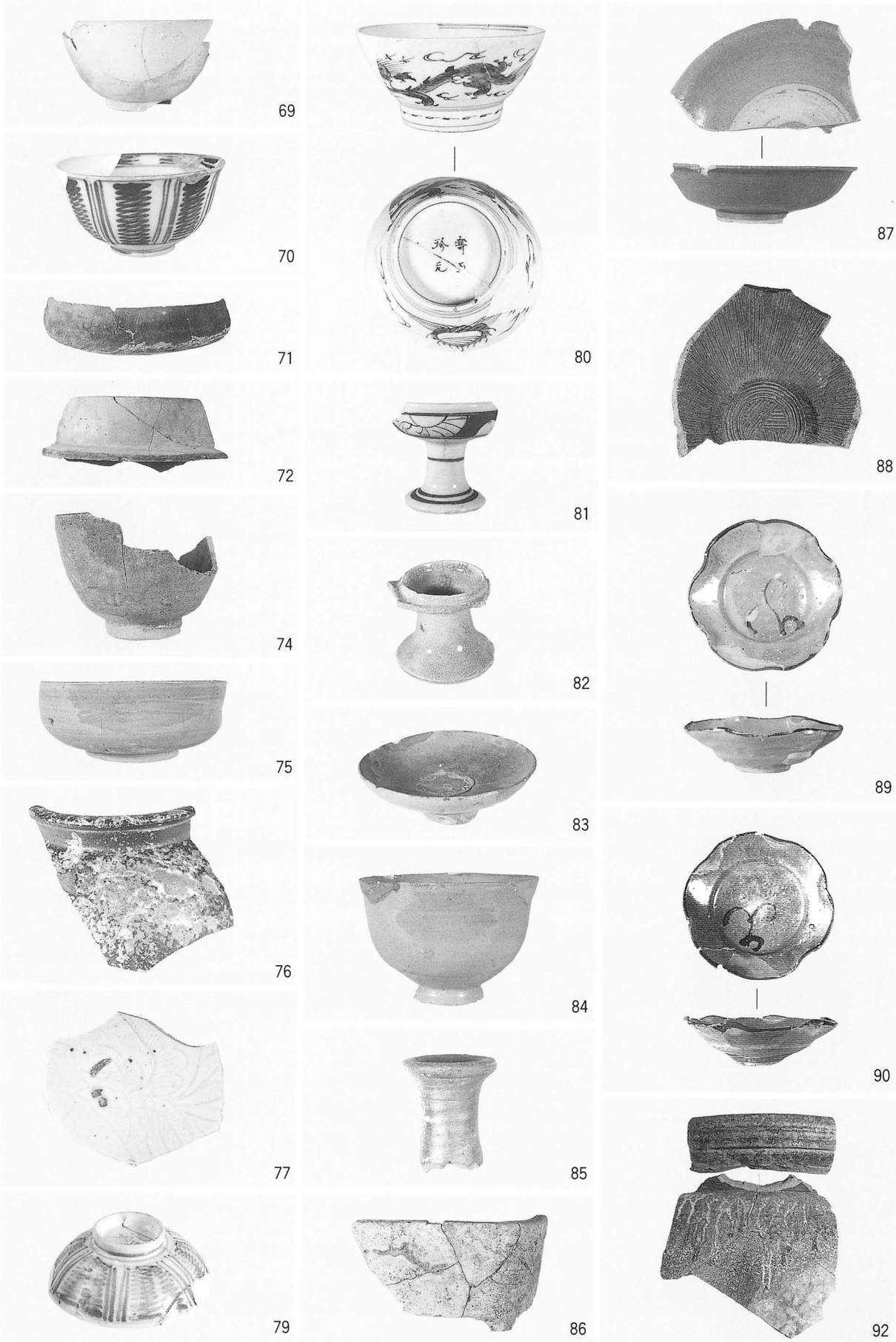
64

66

68

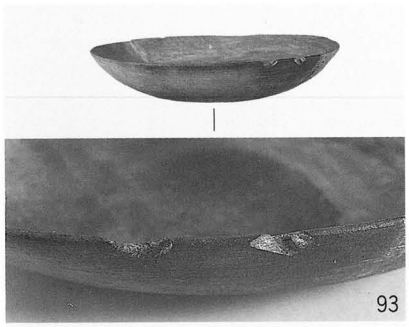
S K 1119（45）、S K 1123（47～50）、S K 1124（51・52）、S K 1125（53）、S K 1126（54・55）、S K 1129（56～58・60・61）、S K 1131（62～64・66）、S K 1132（68）

図版一六　江戸時代の土器・陶磁器



ＳＫ1132（69）、ＳＤ1101（70～72）、ＳＤ1102（74～77）、ＳＤ1103（79～82）、ＳＯ1101（83～86）、ＳＫ2101（87）、ＳＫ2102（88）、ＳＫ2103（89・90）、ＳＫ2104（92）

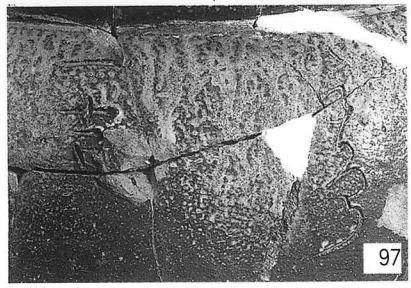
図版一七　江戸時代の土器・陶磁器

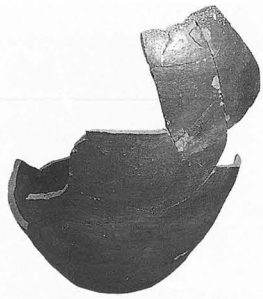

93

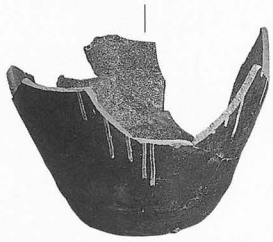
94

95

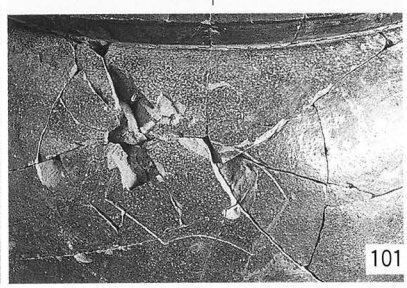
96


97


98

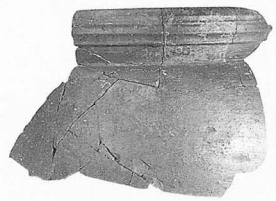


99


101

100

102



103

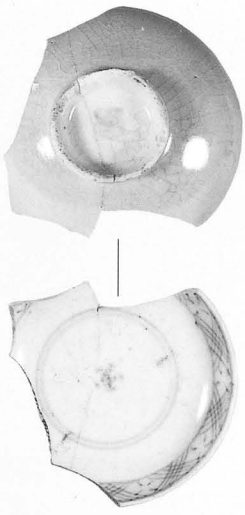
104

105

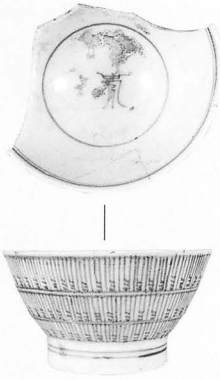
106

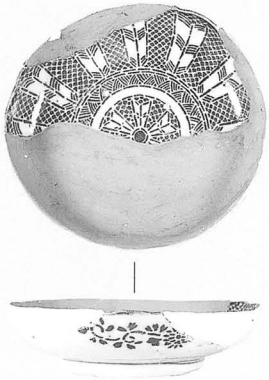
埋め甕2101（93～96）、埋め甕2102（97）、埋め甕2103（98）、埋め甕2104（99）、埋め甕2105（100・101）、埋め甕2106（102・103）、ＳＥ3101（104～106）

図版一八　江戸時代の土器・陶磁器


107

109


110


111

112

113

114

115

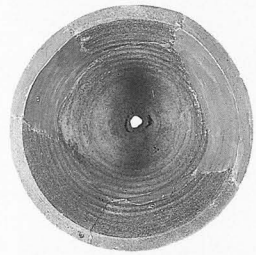
116

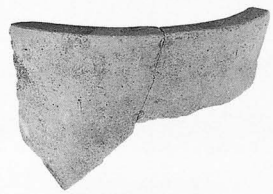
117

118

120

119

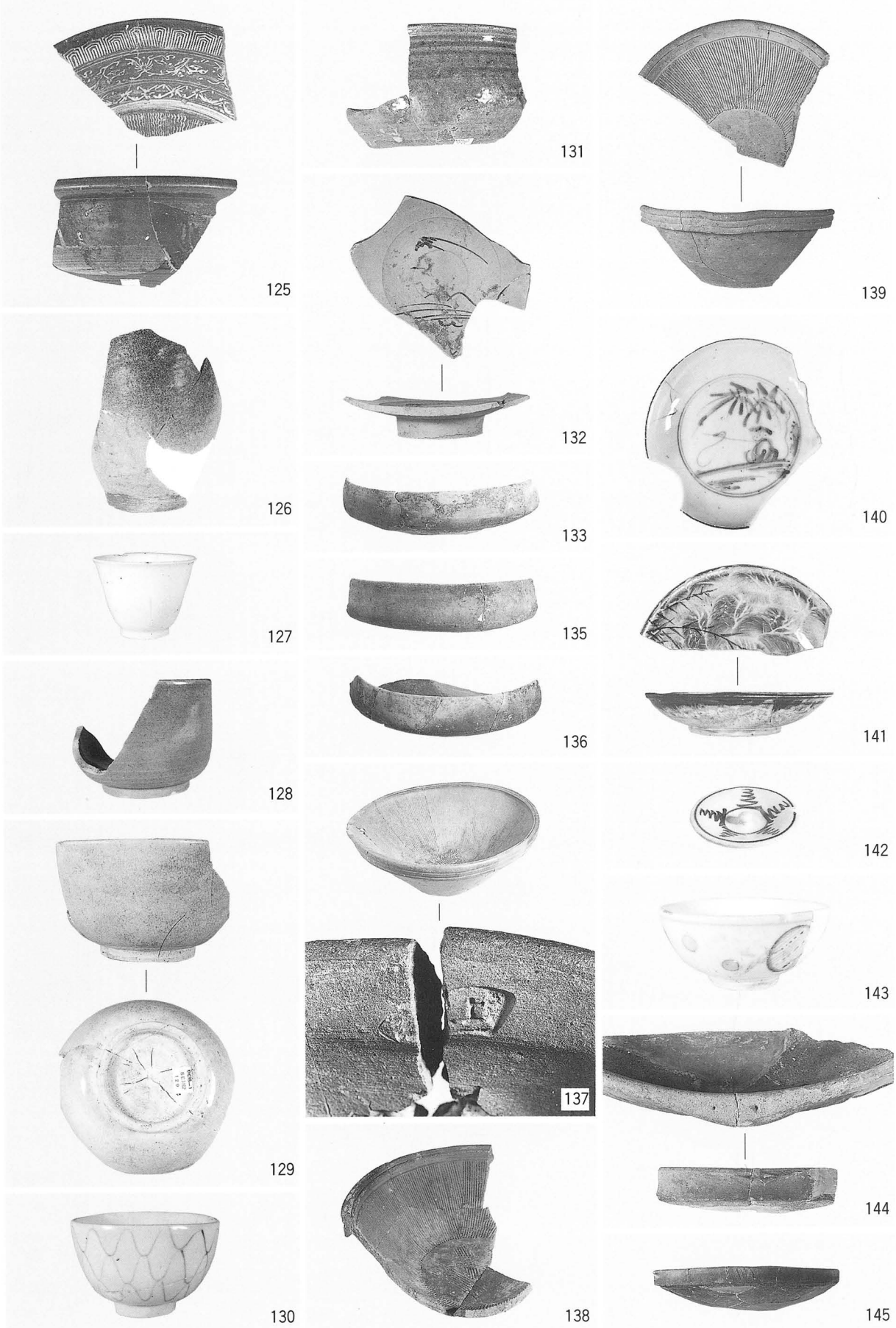

121


122

123

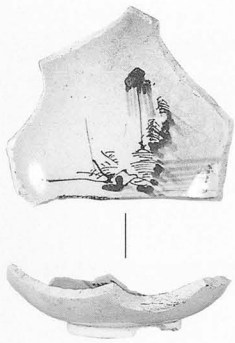
124

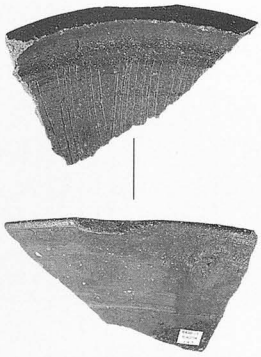
図版一九　江戸時代の土器・陶磁器



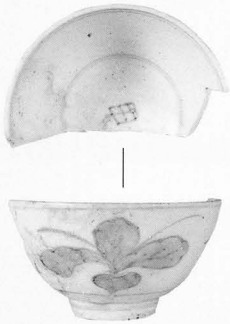
ＳＥ3101（125・126）、ＳＥ3102（127～136）、ＳＫ3101（137～139）、ＳＫ3102（140・141）、ＳＫ3103（142～145）

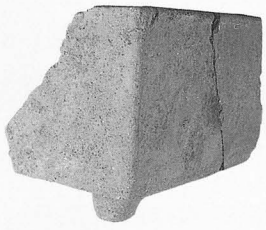
図版二〇　江戸時代の土器・陶磁器


146


147

148


149


150

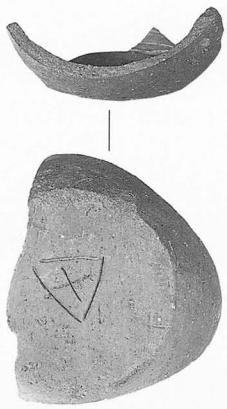
151

152

153

154

155


156

157

158

159

160

161

162

163

165

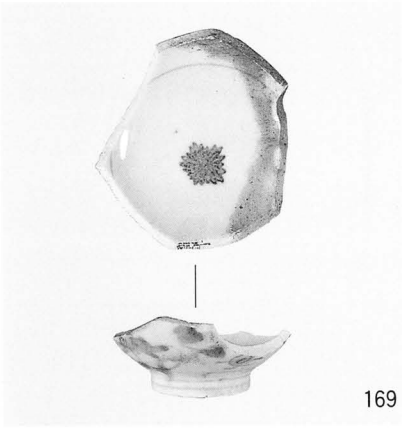
166

167

SK3104（146・147）、SK3105（148～150）、SK3106（151～158）、SK3107（159～167）

図版二一　江戸時代の土器・陶磁器

168

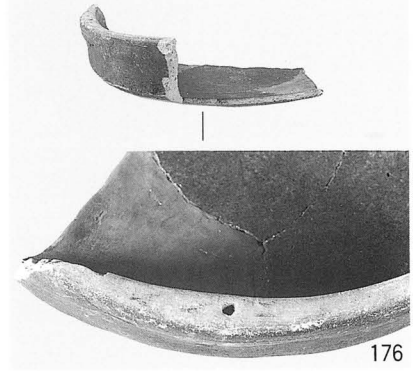

169

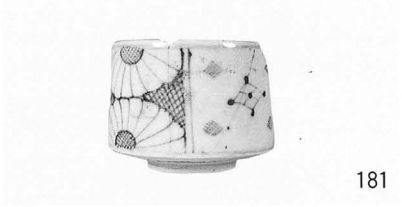
170

171

173

175


176


181

182

183

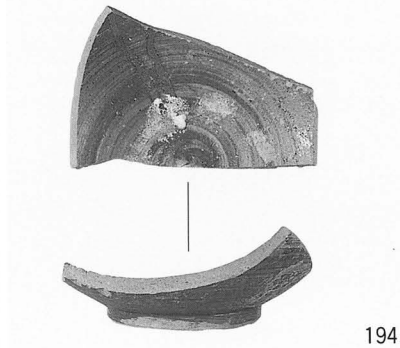
184

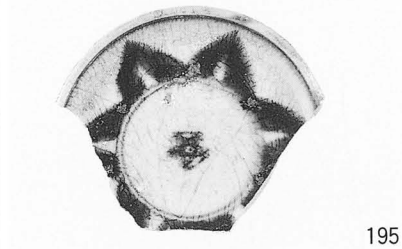
189

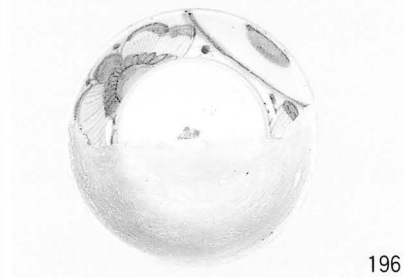
190

191

193


194


195


196

197

198

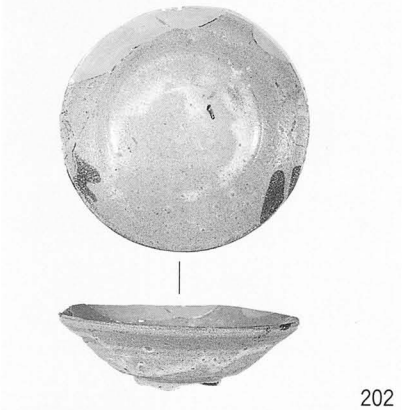
199

ＳＫ3107（168～171・173・175・176）、ＳＫ3108（181～184・189）、ＳＫ3109（190）、ＳＫ3110（191）、ＳＫ3111（193・194）、ＳＫ3112（195～199）

図版二二　江戸時代の土器・陶磁器

200

201


202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

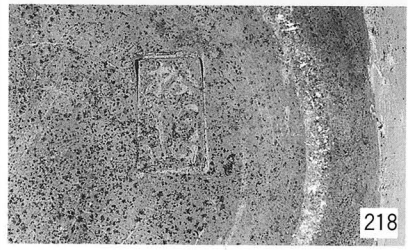
213

214

215

216

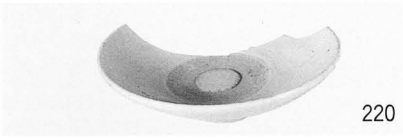
217

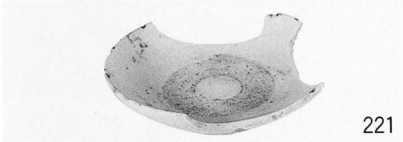

218

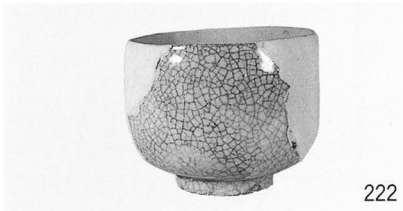
219

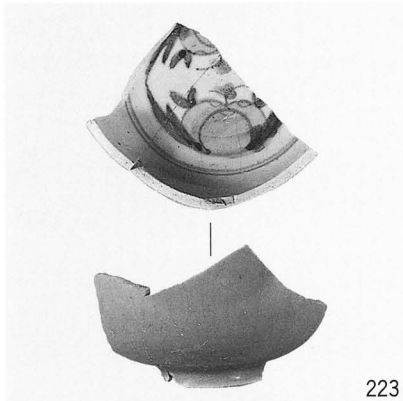
SK3112（200・201）、SK3113（202～204）、SK3114（205～207）、SK3115（208～219）

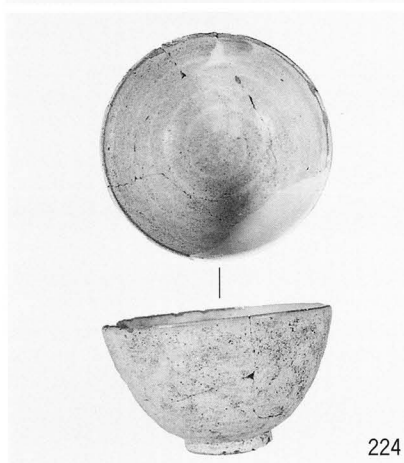
図版二三　江戸時代の土器・陶磁器


220


221


222

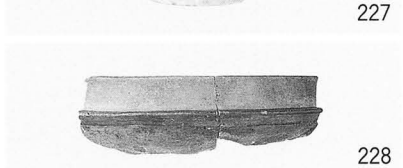

223

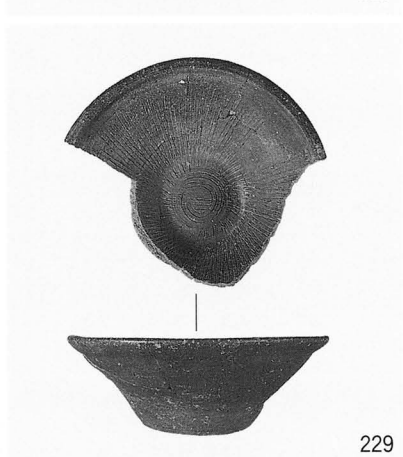

224

225

226

227

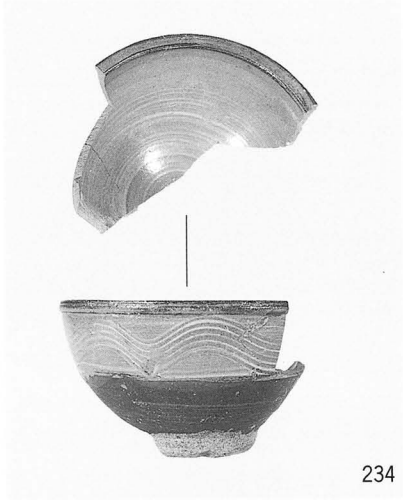

228

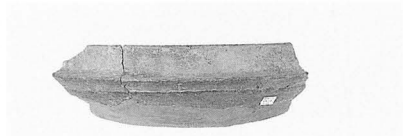

229

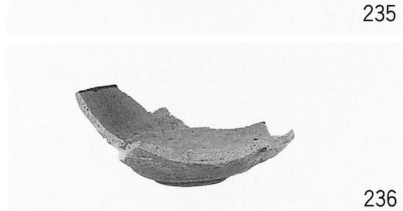
231

232

233

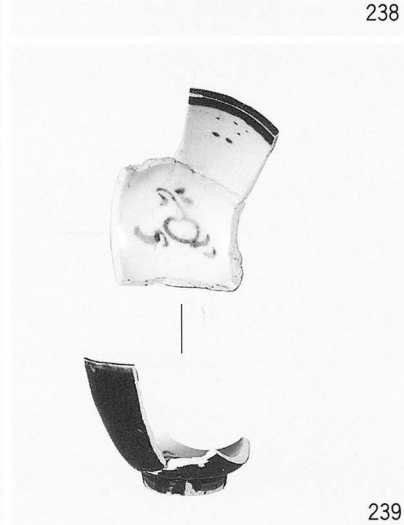

234


235


236

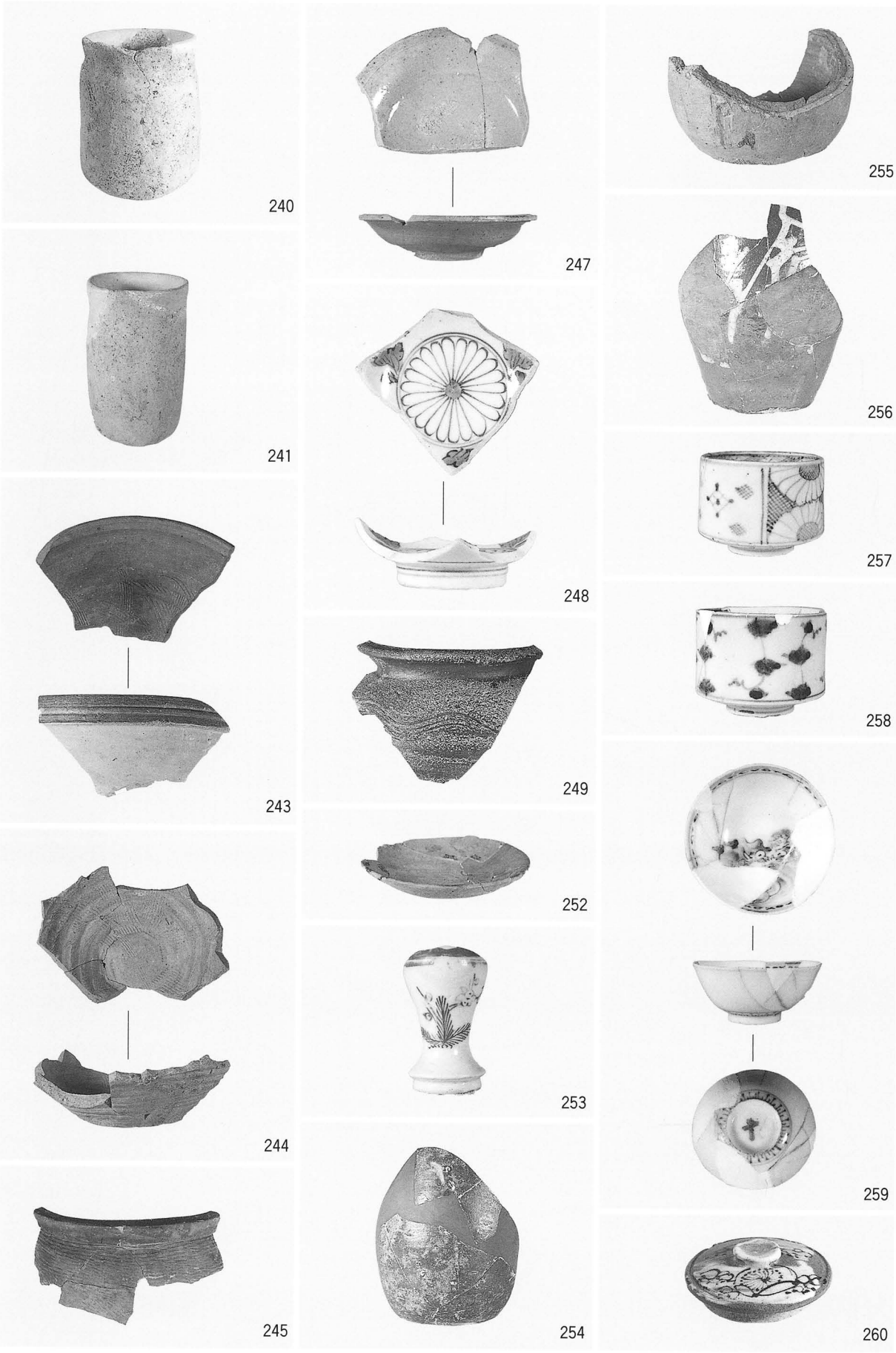
237

238


239

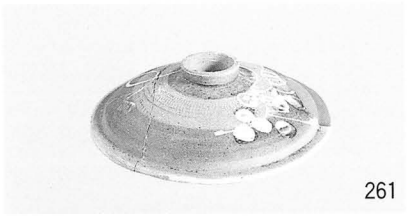
S K 3116（220～223）、S K 3117（224～229）、S K 3118（231～235）、S K 3119（236～239）

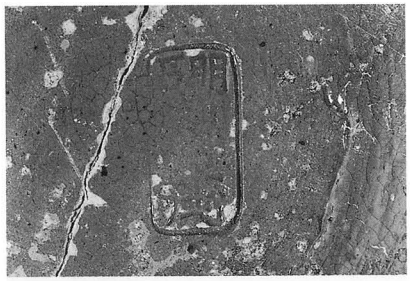
図版二四　江戸時代の土器・陶磁器



ＳＫ3119（240・241・243～245）、ＳＫ3120（247～249）、埋め桶3101（252～256）、ＳＤ3101（257・258）、ＳＤ3102（259・260）

図版二五　江戸時代の土器・陶磁器


261


262

263

264

265

266

267

268

269

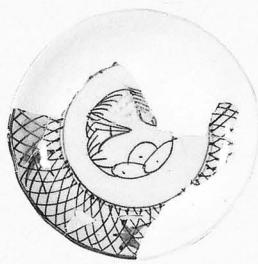
270

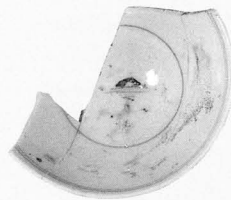
271

272

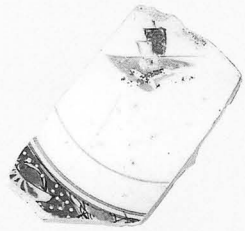
273

274


276


275

277


278

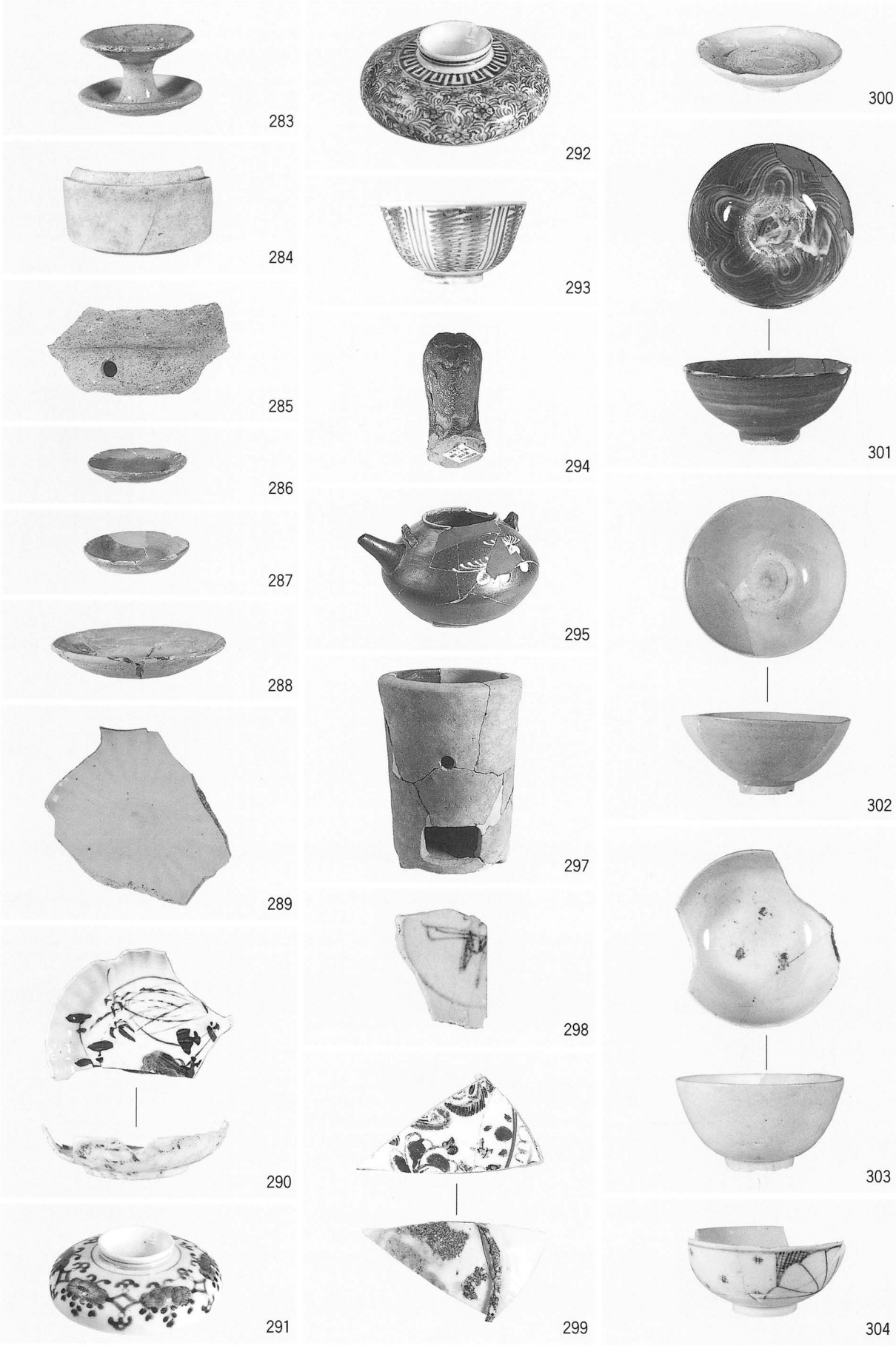
280

281

282

ＳＤ3102（261）、第１層（第１区―262～269、第２区―270～273、第３区―274～277）、第２・３層（第２区―278・280～282）

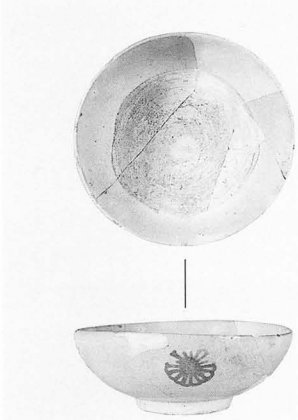
図版二六　江戸時代の土器・陶磁器



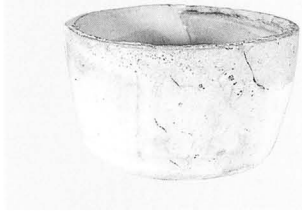
第２・３層（第２区―283～285、第３区―286～295・297）、第４層（298～304）

図版二七　江戸時代の土器・陶磁器

305

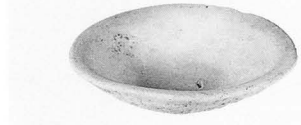

306

308

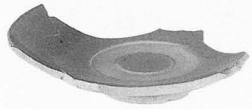

309

310

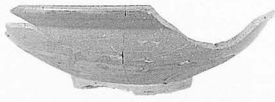
312


313

314


315

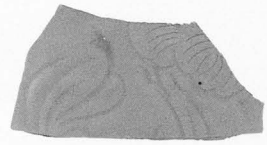
316

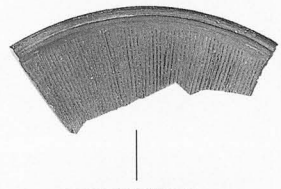
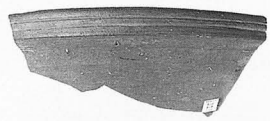

317

318

319

320


321



322

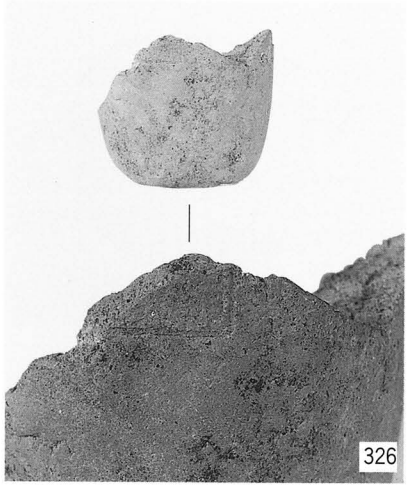
323

324

325

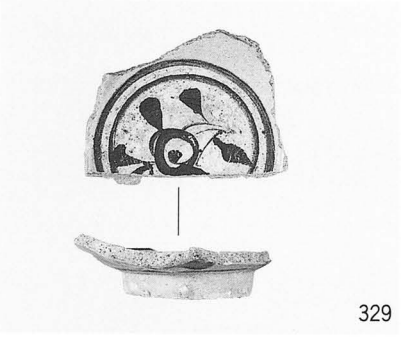
第４層（第１区―305・306・308～312、第２区―313～323、第３区―324・325）

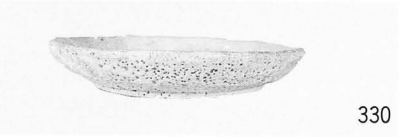
図版二八　江戸時代の土器・陶磁器／室町時代の土器・陶磁器

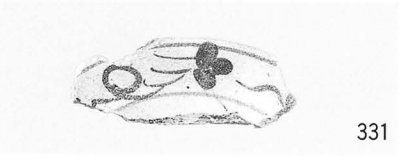

326

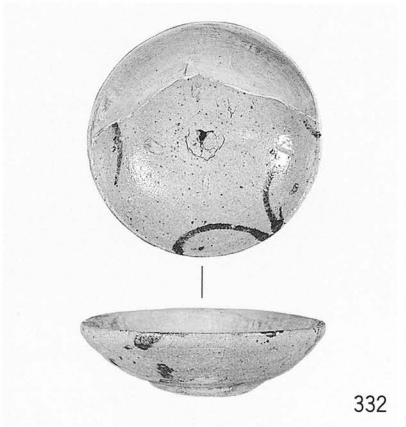
327

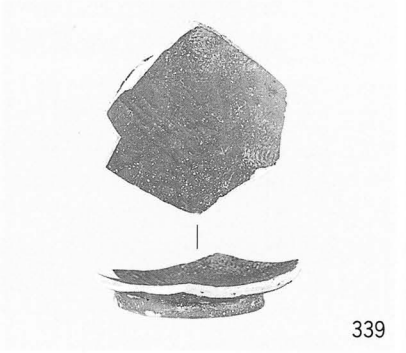
328

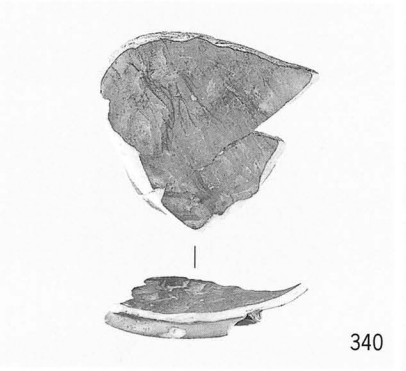

329


330

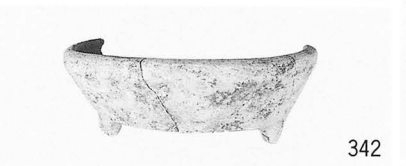

331

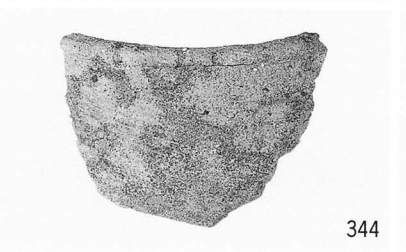

332


339

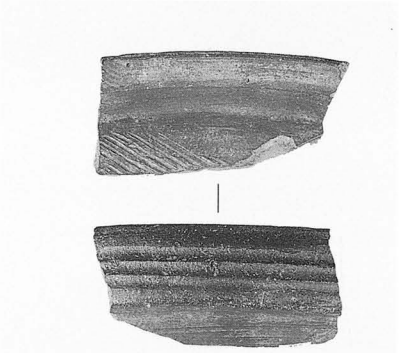

340

341

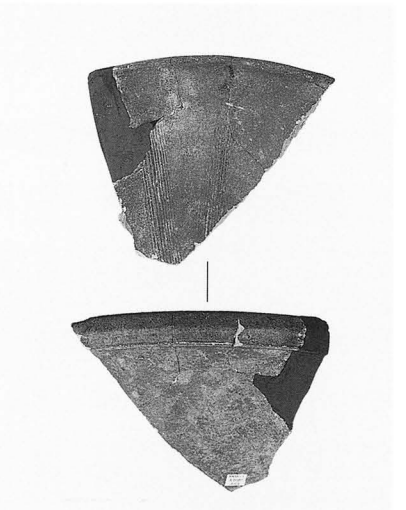

342

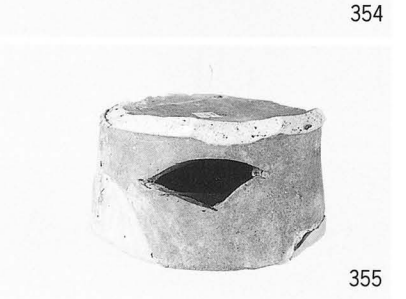

344

345


352

353


354


355

第４層（第３区－326・327）、第５層（第３区－328～332）、ＳＫ1201（339～341）、ＳＫ1203（342）、ＳＫ1208（344）、ＳＫ1215（345）

図版二九　室町時代の土器・陶磁器

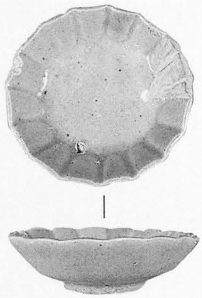
356

362

363

364

365


370

371

372

373

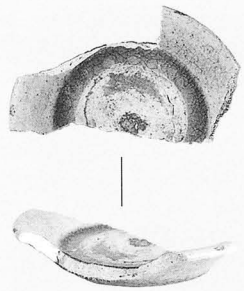
375

376

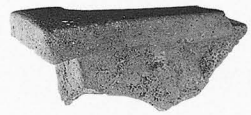
378

380

381


382

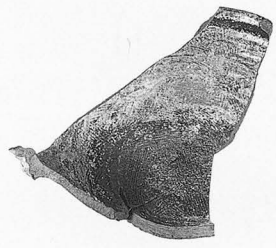
383


388

390

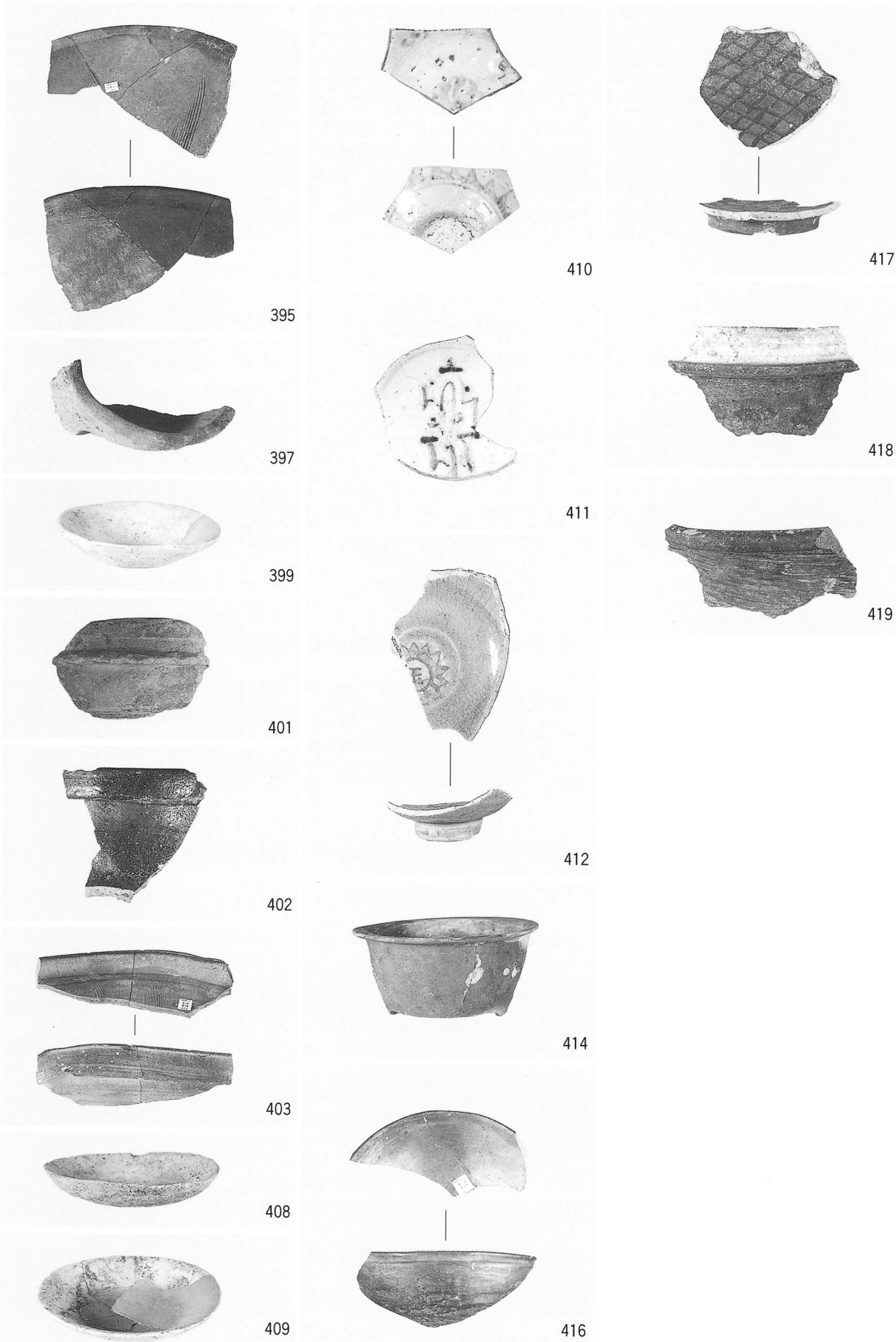
392

393


394

S D1202（356）、集石遺構1201（362～365・370～373・375・376・378）、S K2201（380・381）、木樋3201（382・383）、杭列3201（388）、石列3202（390・392）、石組み溝3201（393・394）

図版三〇　室町時代の土器・陶磁器



石組み溝3201（395・397）、第7層（第1区―399～403、第3区―408～412・414）、第8層（第1区―416、第3区―417～419）

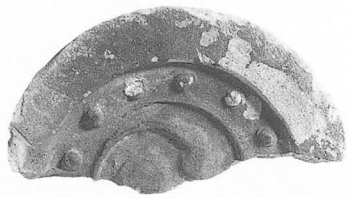
図版三一　軒丸瓦

420

425

430

421



426

431

422

427

432

423

428

433

424

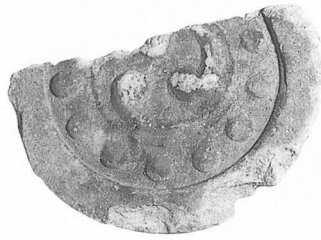
429

434

SE1108（420）、SK1114（421）、SK1116（422）、SK1117（423）、SK1129（424）、SO1101（425・426）、SK3101（427）、SK3103（428・429）、SK3105（430）、SK3107（431）、SK3112（432）、SK3117（433）、第1区／第4層（434）

図版三二　軒丸瓦

435


440

451

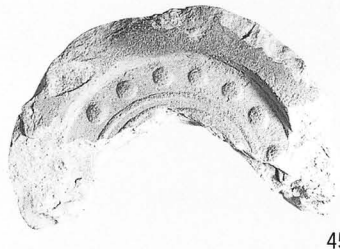
436

447

452

437

448


453

438

449

439

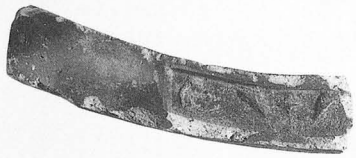
450

第１区／第５層（435）、第２区／第２・３層（436）・第４層（437・438）・第５層（439）、第３区／第５層（440）、集石遺構1201（447）、ＳＤ1201（448～451）、石組み溝3201（452）、第３区／第８層（453）

図版三三　軒平瓦・平瓦

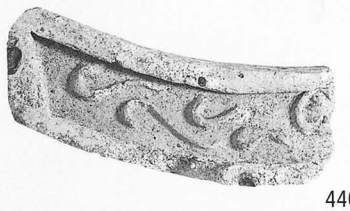
441

442


443

444

445


446

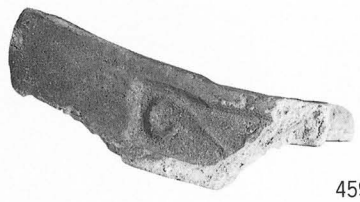
454

455

456

457

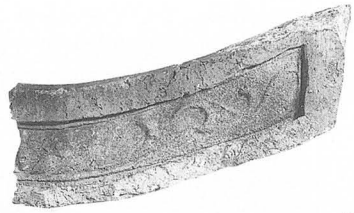
458


459

460

461

462

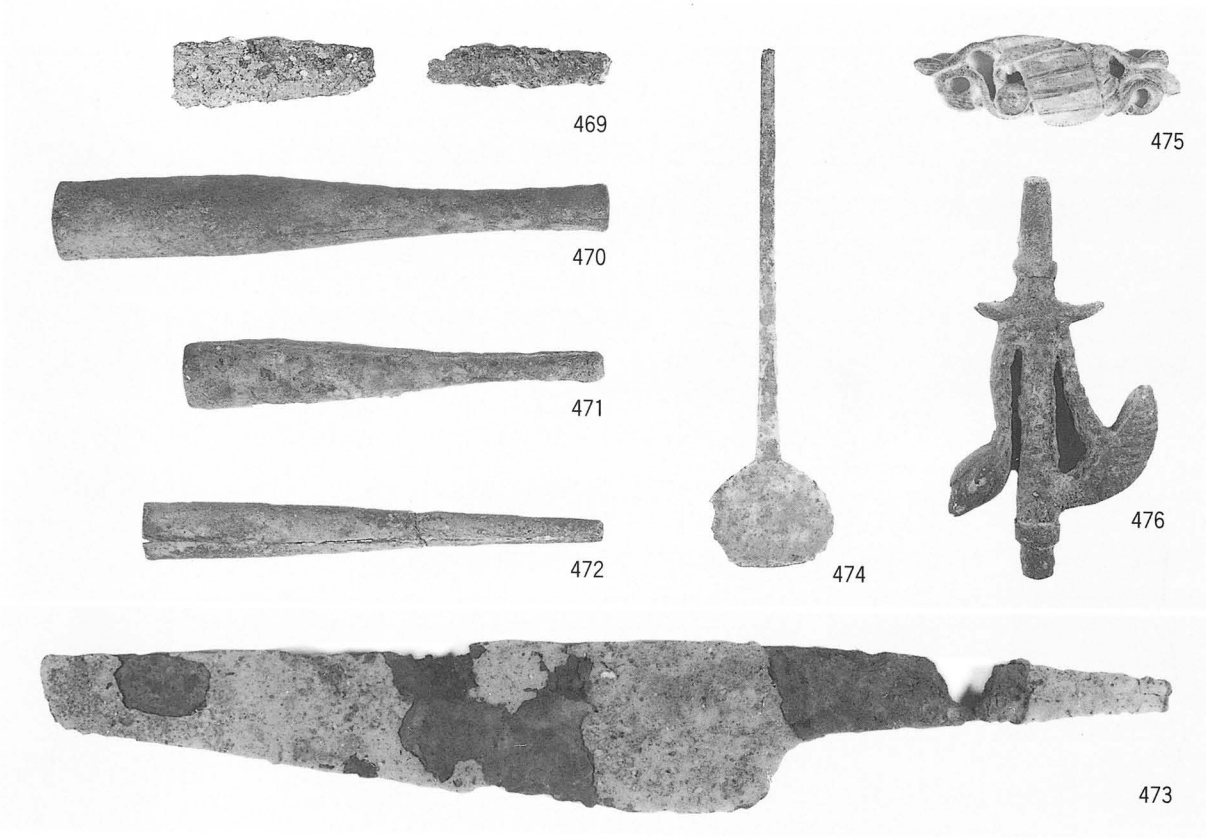

463

464

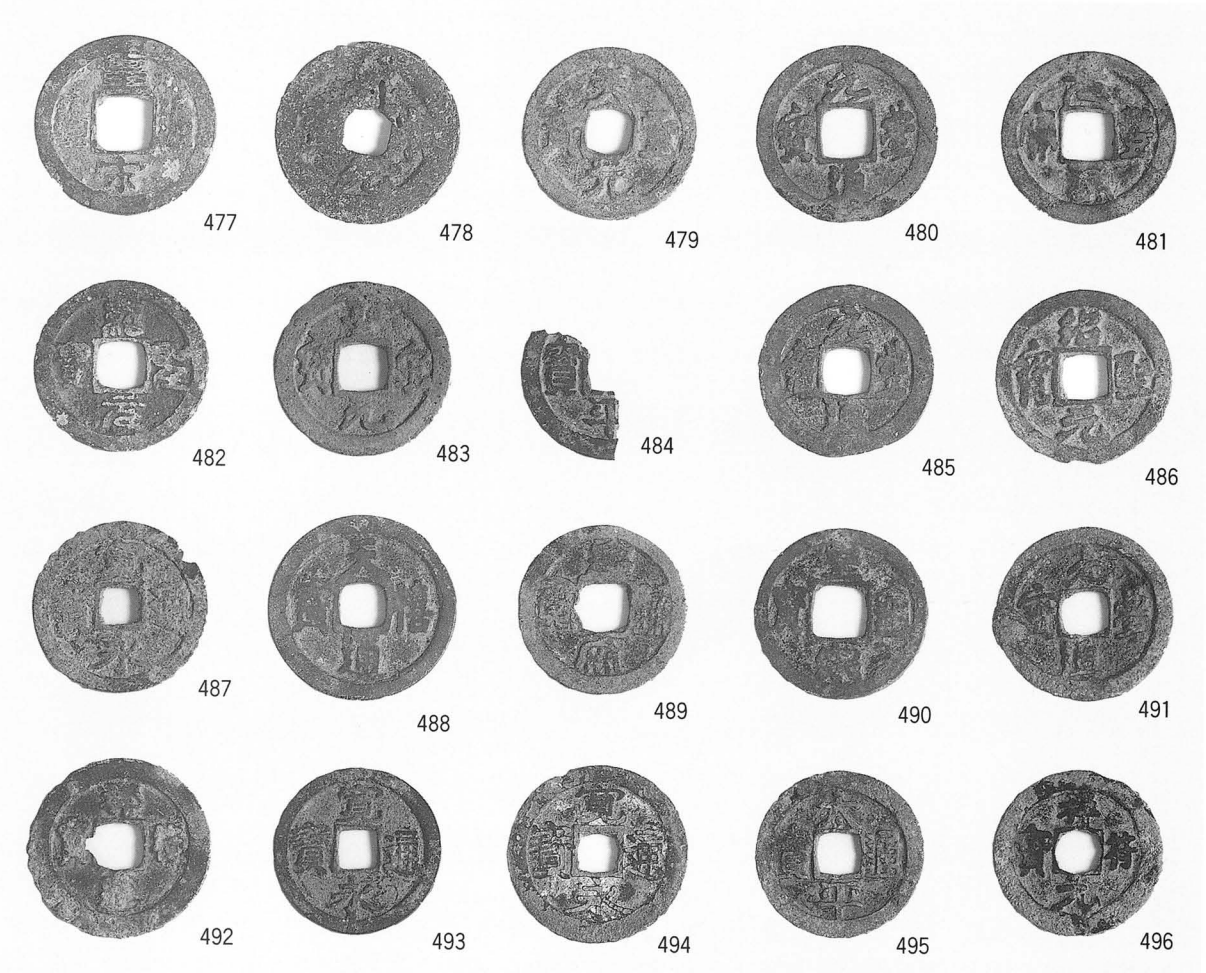
465

軒平瓦ＳＫ3107（441・442）、ＳＫ3108（443）、ＳＫ3112（444）、ＳＯ1101（455）、第２区／第５層（446）、ＳＫ1209（454・455）、瓦溜め1201（456）、集積遺構1201（457・458）、第３区／第６層（459・460）・第７層（461・462）・第８層（463・464）、平瓦：ＳＫ1209（465）

図版三四　金属製品・銭貨

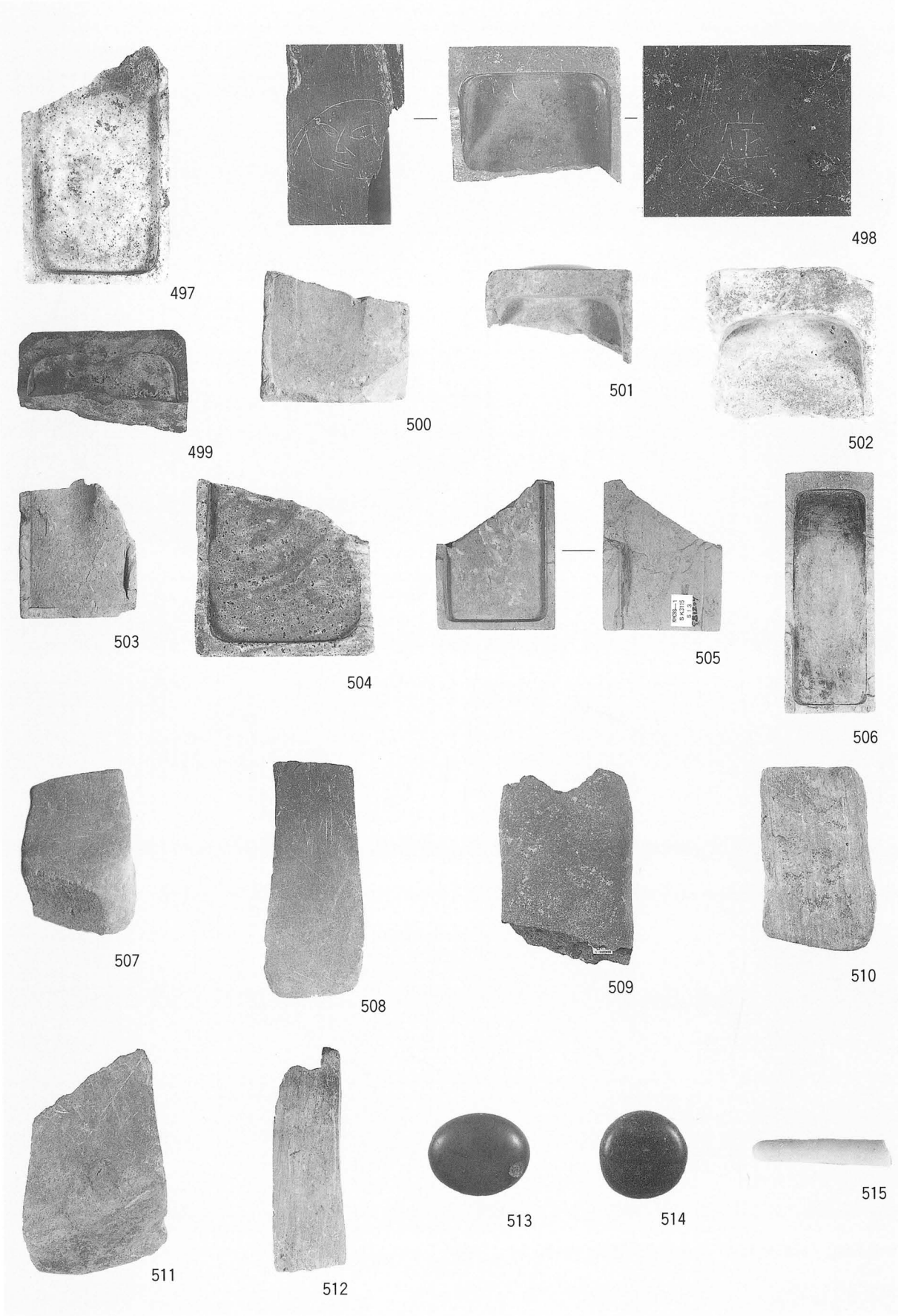


ＳＥ1102（469）、ＳＫ1116（470）、第２区／第４層（471）、第２区／第５層（472）、ＳＥ3101（473）、ＳＫ3116（474）、集積遺構1201（475・476）



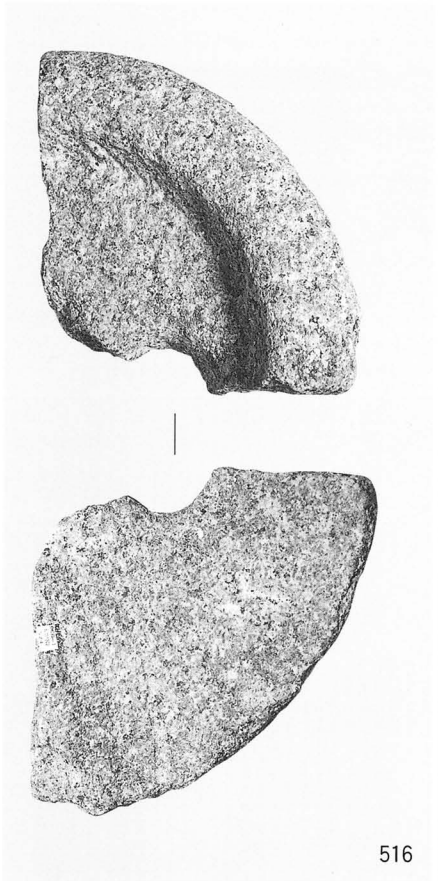
集積遺構1201（477・478）、ＳＥ1103（479～481）、ＳＫ1101（482～486）、ＳＫ1116（487）、第２区／第５層（488～492）、ＳＫ3102（493）、ＳＫ3104（494）、ＳＫ3110（495・496）

図版三五　硯・砥石

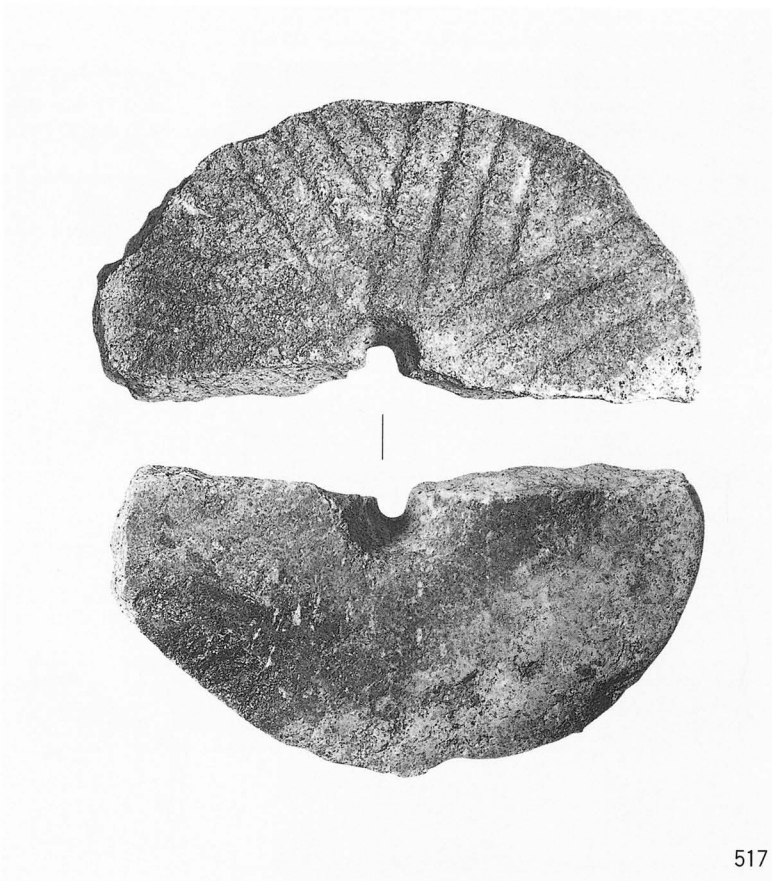


ＳＥ1105（497・498）、ＳＥ3101（499）、ＳＫ3110（500～502）、ＳＫ3114（503）、ＳＫ3115（504・505）、ＳＫ3117（506）、ＳＥ3102（507）、ＳＫ3110（508）、ＳＫ3116（509）、ＳＯ1103（510）、第２区／第２・３層（511）、第２区／第５層（512）、ＳＫ3112（513）、第２区／第５層（514）、ＳＫ3116（515）

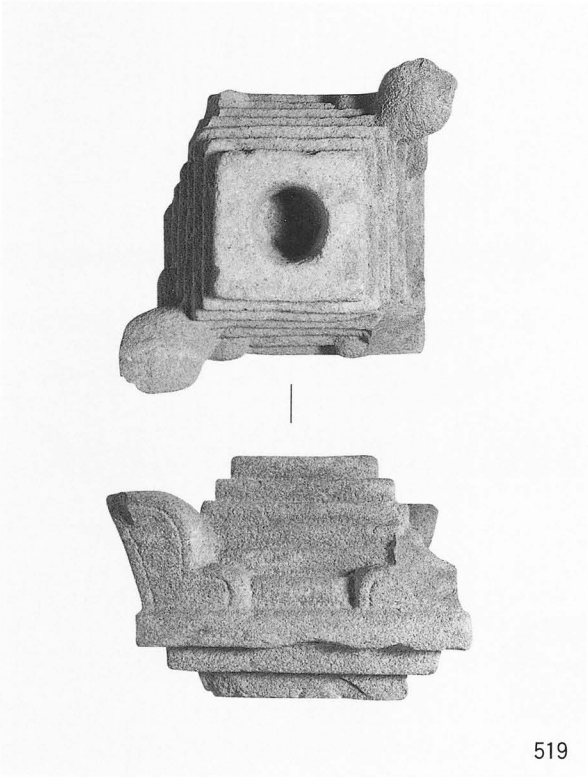
図版三六　石臼・石塔



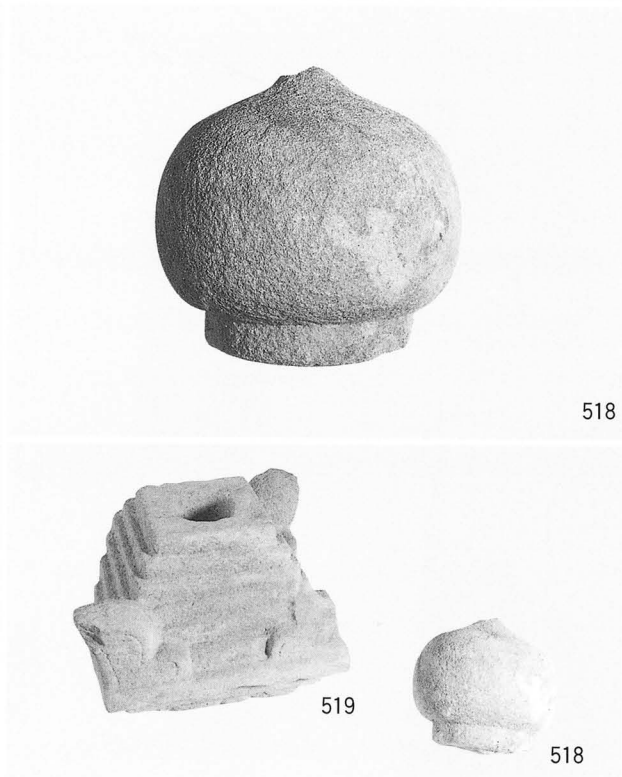
516



517



519



519

518

SD1202（516・517）、SK3107（518・519）

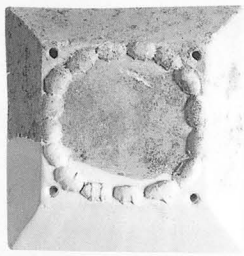
図版三七　ミニチュア土製品

520

521

522

523


524

525

526

527

528

530

531

532

533

534

535

536

537

538

539

540

541

542

543

544

545

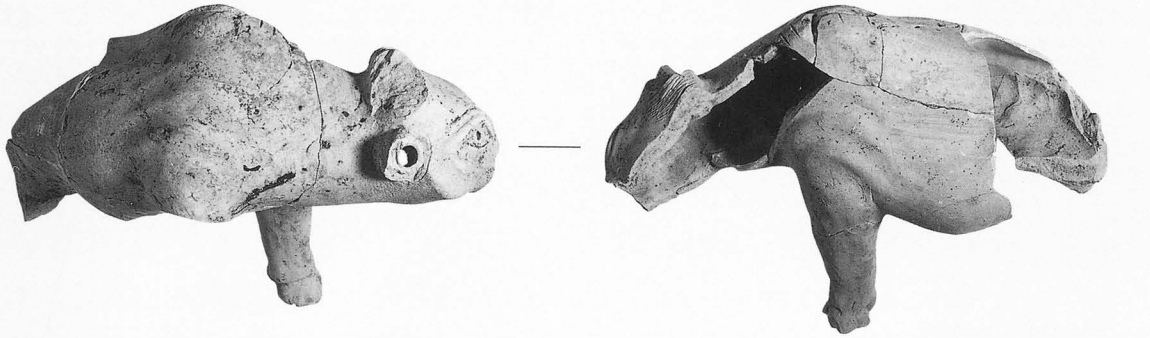
546

547

548

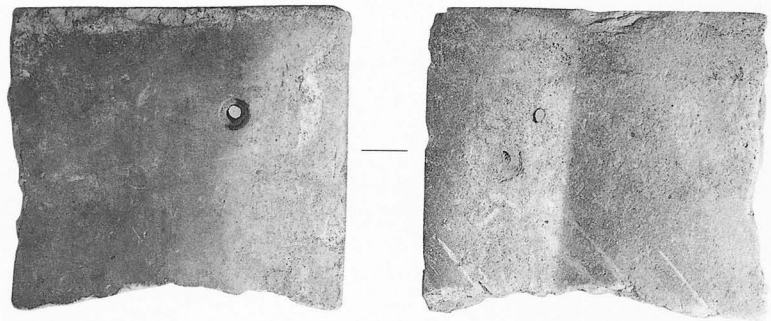
S E 1106（520）、S K 1127（521～525）、S D 1101（526）、第１区／第２・３層（527・528）、第１区／第５層（530）、S K 3106（531）、S K 3110（532・533）、S K 3113（534～538）、埋め桶3101（539～541）、第３区／第４層（542～546）、S K 3101（547・548）

図版三八　ミニチュア土製品・その他

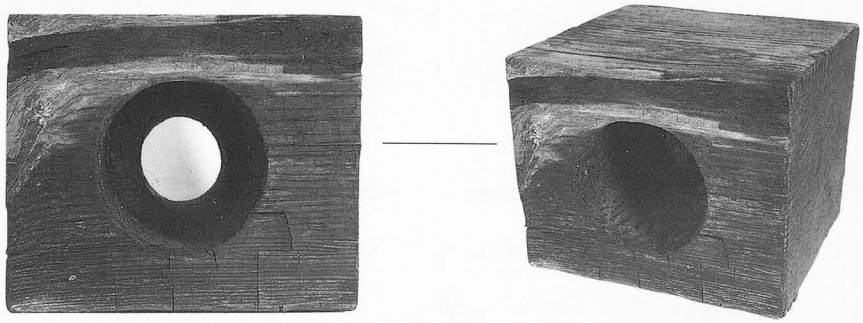


529　ミニチュア土製品（牛）

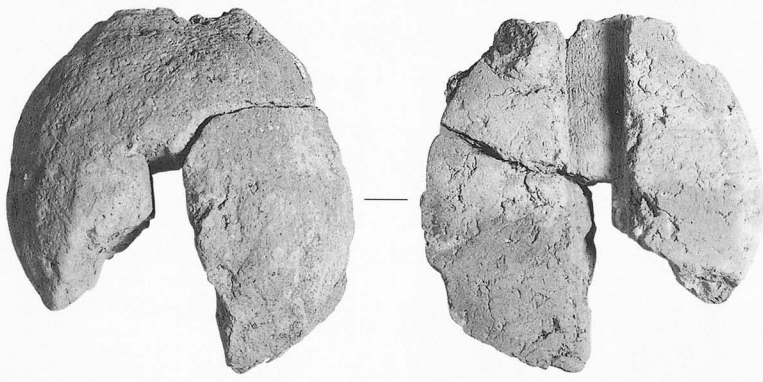
549　フズリナ



550　磚



551　木製継手



552　用途不明土製品

第１区／第５層（529）、ＳＫ3107（549）、第３区／第２・３層（550）、ＳＤ1101（551）、ＳＫ3117（552）

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告80
副書名	「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	80
編著者名	岡田清一
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　TEL･FAX　0729－94－4700
発行年月日	西暦2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
きゅうほうじじないまち 久宝寺寺内町 遺跡(第１次)	大阪府八尾市久宝寺３丁目	27212	79	34度 37分 27秒	135度 35分 26秒	19981126 ～ 19990220	460	公共施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺寺内町 遺跡(第１次)	集落	弥生時代後期～ 古墳時代初頭	水田	古式土師器－壷・甕	
		平安時代後期～ 鎌倉時代	水田	土師器皿・黒色土器椀・瓦器椀	
		室町時代末期	掘立柱建物・池状遺構・木樋・石組み溝	土器・陶磁器・瓦・銭貨	石山合戦（1577）に伴なうと推定される焼土層を検出
		江戸時代	井戸・土坑・溝・埋め甕・柱穴	土器・陶磁器・瓦・銭貨・ミニチュア土製品	

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告80

久宝寺寺内町遺跡第１次調査

－「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書－

発　行　　平成17年３月31日
編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX（0729）94－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　書籍Ｌ　　＜ 70Kg＞
図　版　　マットアート　＜135Kg＞